

ペルソナ THE PHANTOM
ELEVENS ～心の怪盗団
と革命の風～

ヒビキ7991

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

稲妻町に住む一人のサッカー少年、松風天馬。過去と未来にタイムスリップ、宇宙に飛び立ち異星人との交流と、常人には理解出来ない様々な体験をした彼は、三年間の中学校生活を終え東京蒼山にある「私立秀尽学園高校」に進学する事が決まった。天馬は進学を期に稲妻町を離れ、四軒茶屋に住む秋の知人「佐倉 惣治郎」が経営する喫茶店「ルブラン」に居候する事となる。

だが進学早々待ち受けていたのは、世にも奇妙な事ばかり・・・。

都内のアチコチで起こる謎の精神暴走事故。とある事件によって前歴のレットルを貼られ、地元から秀尽学園高校に転入して来た二年生のルームメイト「雨宮 蓮」。学校

内で飛び交う身に覚えのない自分達への悪評。いつの間にかスマホにインスタストーリーされていた謎アプリ「イセカイナビ」と、ナビの力によって迷い込んだ異世界「パレス」。「モルガナ」を名乗る猫らしき謎の生物と、意思を持つ謎の飛行機型メカ「グッドストライカー」。そして夢の中に現れた「イゴール」を名乗る謎の男。

天馬と蓮は様々な理由により社会から抑圧・爪はじきにされた少年少女たちと共に、封じ込めていた怒りと己の心に秘めたもう一人の自分「ペルソナ」を解放し、歪んだ欲望を持つ悪人の心を「盗む」ことで「改心」させる正義の義賊、心の怪盗団「ザ・ファントム」として活動する事となった。

目次

A c t. 00 / 高校生 松風天馬

1

A c t. 01 / サッカー部入部拒絶!?! 新
たなルームメイト雨宮 蓮

15

A c t. 02 / ようこそ、私のベルベツ
トルームへ

39

A c t. 03 / 謎の古城 モルガナと
グッドストライカー

61

A c t. 04 / 赤い蝙蝠と謎の銃

110

A c t. 05 / 古城再び! 轟け、俺のペ

ルソナ! 《前編》

145

A c t. 05 / 古城再び! 轟け、俺のペ
ルソナ! 《後編》

180

A c t. 06 / 証人探し! 体罰の真実を
暴け!

228

A c t. 07 / 志帆の悲劇 踊れ、私の
ペルソナ! 《前編》

286

A c t. 07 / 志帆の悲劇 踊れ、私の
ペルソナ! 《後編》

316

A c t. 08 / 猫と医者と武器屋とマス
ターと

361

A c t. 09 / 再潜入、鴨志田パレス《前
編》

388

A c t. 09 / 再潜入、鴨志田パレス《後

A c t. 10 / 俺はもつと強くなる

417

A c t. 15 / 無限の泉

669

436

A c t. 11 / 天馬覚醒！いくぜ、怪盗

A c t. 17 / 怒りの祐介 来たれよ、

ガツタイム！

465

俺のペルソナ！ 《前編》

737

A c t. 12 / 古城崩落！結成、心の怪

A c t. 17 / 怒りの祐介 来たれよ、

盗団ザ・ファントム！

525

俺のペルソナ！ 《後編》

774

A c t. 13 / 潜入メモメントス！これが

A c t. 18 / 再潜入、斑目大画伯美術

私の恩返しよ！ 《前編》

563

館

806

A c t. 13 / 潜入メモメントス！これが

私の恩返しよ！ 《後編》

597

A c t. 14 / メメントスと謎の美少年

633

Act. 00 / 高校生 松風天馬

ガタンゴトン・・・ガタンゴトン・・・

『本日もご利用下さいまして、ありがとうございます。この電車は各駅停車、中央林間行きです。』

20XX年4月2日、土曜日。ある一人の少年が電車で揺られ移動していた。

天馬

「明後日から遂に高校生かあ。何だか楽しみななあ。」

少年の名は「松風天馬」。中学一年で雷門中サッカー部キャプテンを勤め、チームをホーリロード優勝へと導いた。更に過去と未来にタイムスリップ、宇宙に飛び立ち異星人との交流と、常人には理解出来ない様々な体験をした男である。そんな彼も三年間の中学校生活を終え、晴れて明後日から高校生としてのスタートを切る事となった。

『次は、四軒茶屋。四軒茶屋です。』

天馬

「そろそろ降りる準備しなきゃ。」

キキイイイ！ プシユー

電車は目的の駅「四軒茶屋駅」に到着し、ドアが開いた。天馬は網棚に載せていた荷物を取り、電車を降りた。

――――
く 四軒茶屋 路地く

電車を降りた天馬は駅を出て、地図を頼りに路地を歩いていた。

天馬

「え〜っと、ルブランルブラン……あ、あった！」

到着したのは、裏路地にヒツソリと佇むレトロ感漂う小さな喫茶店《ルブラン》。

カランカラン

天馬はドアを開け店内に入る。店内ではエプロンと眼鏡をしたマスターとおぼしき中年の男が居た。

天馬

「あー、すみません……」

マスター

「……………」

マスターは天馬に気付かず、新聞を睨んでいる。天馬がソツと近づき何を見ているのかと顔を覗かすと、マスターが見ていたのはクロスワードパズルだった。

マスター

「え〜つと、二文字でヒントが『防御する物』か…」

天馬

「『盾』じゃないですか？」

マスター

「いや横だよ……お？」

天馬が答えを言った事で、マスターは初めて天馬に気づいた。

マスター

「お前、もしかして天馬か？」

天馬

「はい。じゃあ、貴方が秋姐の話してくれた佐倉さんですか？」

マスター

「おう。」

惣治郎は天馬をルブランの屋根裏部屋に案内した。

惣治郎

「悪いんだが、お前に貸せる部屋は此処しか無くてな……………」

天馬

「はぁ……………」

部屋には使わなくなった様々な道具等が置かれており、部屋と言うより物置きと言った方が正しい状態だ。

惣治郎

「それから……………これは急に決まった事なんだが、来週にもう一人居候に来ることになった。」

天馬

「もう一人？」

惣治郎

「要するに相部屋になるって事だよ。ホンと急で決まった事で悪いんだが、大丈夫か？」

天馬

「構いません。むしろそっちの方が楽しそうです。」

惣治郎

「あまり期待するなよ？地元でヤラかして前科が付いて、退学食らったガキらしいからな。」

と、惣治郎は天馬に鍵を渡した。

惣治郎

「この店の鍵だ。夜は店閉めて引き上げる。くれぐれも面倒な事は起こさないでくれよ？」

天馬

「分かりました。」

惣治郎

「届いた荷物はそこに置いてある。後は自分で片付けな。」

そう言うと、惣治郎は屋根裏部屋から去っていった。

天馬

「さてと、それじゃ……………」

天馬は荷物を下ろし、早速屋根裏部屋を片付け始めた。棚に無造作に積まれていた古本を箱に詰め、部屋の一角に纏められていた道具等を移動させ、部屋中に積もっていた埃を綺麗に落とし、床を箒とモップで綺麗にした。そして夜……………

天馬

「ふう、取り合えずコレで良いかな？」

屋根裏部屋は綺麗に片付き、部屋の片隅には偶然見つけた綺麗な古いタンス、窓際にはビールケースとベニヤ板で作った簡易ベッドまで置かれていた。その後天馬は届いた荷物を箱から出し、衣類はタンスの中に納め、棚には自身の思い出の品を置いた。初めて参加したホーリーロード全国大会優勝記念で撮った雷門中サッカー部の集合写真と、イナズマジヤパン兼アースイレブンの集合写真。サッカー部時代に愛用していたス

バイク。自分がサッカーをするキツカケとなった思い出のサッカーボール。そして壁にはサッカー部時代に使っていたユニフォームと、イナズマジャパン時代に使っていたユニフォームが架けられていた。

天馬

「そうだ、秋姐に連絡入れないと。」

天馬はスマホを取り出し、画面を立ち上げる。

天馬

「……ん？」

すると、ホーム画面に見慣れないアプリが入っていた。赤い目玉の不気味なアプリだ。

天馬

「何だろう？こんなアプリ入れた覚え無いけど……」

天馬はアプリを起動しようとするが、肝心のアプリは全く起動しない。天馬は仕方なくアプリを消去し、秋に電話を入れた。



ルブラン 店内

二日後、4月4日、月曜日の朝。ルブランの店内では惣治郎が朝のニュースを見ながら開店の準備をしていた。そこへ……

天馬

「おはようございますー！」

屋根裏部屋から新しい高校の制服姿の天馬がやって来た。制服は黒と赤のチエツク柄のズボンと白いYシャツと黒いブレザーで構成されており、ジャケットには赤いボタンが目立ち、左胸に学校の校章ワッペンと学年章ピンズがしてあった。

惣治郎

「おはよう。お？随分と様になつてゐるんじゃないか？」

惣治郎は笑顔でそう言うと、カウンタ―に焼きたてのトーストと淹れるたてのコーヒ―を置いた。天馬はカウンタ―に座り、朝食を食べ始める。

惣治郎

「今日から晴れて高校生だな。どうだ？不安か？」

天馬

「いえ、むしろ楽しみです！新しい学校で、新しい友達作つて、それからサッカー部に入つて全国高校サッカー大会に出て、それで……！！」

惣治郎

「へへっ、色々目標を立てるのも良いが、あまり無茶するなよ？」

惣治郎は笑いながら自身も天馬の隣に腰を下ろした。

『次のニュースです。先日、東京新宿区内で発生したコンビニ爆発事故を受けて、警察は今日現場検証を行うことを発表しました。』

惣治郎

「最近、物騒な事故が多いなあ。」

天馬

「最近聞く《精神暴走事故》ってやつの類いでしょうか？」

惣治郎

「さあな？そこまでは分からねえよ。」

実は天馬がルブランに来る数ヶ月前から、都内では交通事故や爆発事故が立て続けに発生していた。加害者たちは突如豹変したかのように事件を起こすが、事後には「なぜそんなことをしたのかわからない」と語るらしい。世間ではこれを《精神暴走事件》と呼ばれ恐れられているらしい。

惣治郎

「お前も巻き込まれない様に気を付けるんだぞ？」

天馬

「分かりました。」

天馬は朝食を済ませると、ルブランを後にし四軒茶屋駅に向かう。そして四軒茶屋駅から田苑都市線で渋谷駅に向かい、渋谷駅から地下鉄銀坐線に乗り換え、学校の最寄駅である蒼山一丁目駅に向かった。

—————

〽私立秀尽学園高校 校門前〽

天馬は蒼山一丁目駅を降り、自身が今日から通う《私立秀尽学園高校》へとやって来た。

天馬

「今日からついに高校生……よし、気合い入れて行くぞ！」

天馬は気合いを入れ、元気よく校舎へと向かった。新しい学校での新しい物語が、始まったのだ。

Act. 01 / サッカー部入部拒絶!? 新たなルームメイト 雨宮 蓮

秀尽学園 校舎一階 正面玄関

校舎に入った天馬。彼の目に最初に飛び込んで来たのは、棚に飾られた大量の金メダルと金のトロフィーだった。

天馬

「うわあ、凄い数だ……サッカー部のはあるかな?」

天馬はサッカー大会のトロフィーが無いか探す。が、飾ってあるトロフィーは殆どがバレー大会のモノだった。

天馬

「どれもバレー大会の優勝トロフィーばかりだ。ひよつとして、この学校ってバレー部

が強いのかな？」

まじまじとトロフィーを眺める天馬。するとそこへ、一人の男性教師が声をかける。

男性教師

「キミ、ひよつとしてバレエ部に興味があるのかい？」

天馬

「ん？」

天馬は声に気付き振り向く。男性教師は背が高く筋肉質で、若干モジャツとした黒い髪をしている。

男性教師

「どうだい、ウチのバレエ部は凄いだぞ？何せ実力は全国大会クラスだからなあ！」

天馬

「あの、貴方は？」

男性教師

「おっとすまない、僕は《鴨志田 卓》。秀尽学園の体育教師でバレー部の顧問だ。あと自慢じゃないが、こう見えて僕は元オリンピックの金メダリストだね。」

天馬

「そうなんですか? 凄いですね!」

鴨志田

「だろ? とところで、キミは新入生だろ? 名前を聞いても良いかな?」

天馬

「松風天馬です!」

鴨志田

「松風君か。君もバレー部に入部しないかい? 一緒に全国優勝目指そうじゃないか!」

鴨志田は笑顔を見せ、天馬をバレー部に勧誘する。が、当然天馬は……

天馬

「ありがとうございます。でもすみません、俺サッカー部に入ろうと思ってるんです。」

鴨志田

「そうか、なら仕方ない。色々大変だと思いが、自分なりの高校生活を楽しみなさい。」

天馬

「はい！では、俺はこれで。」

天馬は鴨志田の勧誘を断り、礼をして指定されたクラスに向かった。だが、鴨志田は走り去る天馬を見て先程の笑顔から一変、何やら険しい表情を浮かべていた。

鴨志田

「松風天馬……………そうか思い出した、松風天馬と言えば中学サッカーの名門、雷門中サッカー部のキャプテンだった男じゃないか！まさか彼がこんな学校に進学するなんて……………流星に彼のような実力者がサッカー部に居るのは非常に厄介だな……………」



く体育館く

暫くして、体育館で入学式が行われた。

司会

『開式の辞。これより、秀尽学園高等学校の入学式を執り行います!』

『新入生、入場!』

入場の合図と共に、新入生がクラス別にゾロゾロと入ってきた。保護者席に座る保護者の中には、惣治郎の姿もある。

天馬

(今日から遂に高校生! 楽しみだなあ!)



〈校舎三階 1ーA〉

入学式が終わった後、天馬は他の生徒と共に自身がお世話になる《1年A組》に移動した。ホームルームが始まり、天馬達は担任の指示で一人ずつ、軽く自己紹介を始める。

天馬

「松風天馬です！中学時代は雷門中に通っていて、サッカー部に所属してました！ポジションはミッドフィールダーです！ヨロシクお願いします！」

天馬は自己紹介を終え、教卓の前から自分の席に戻った。

「雷門中の松風って、アレだよな？」

「中学1年で1軍キャプテンの座に就いて、雷門中を3年連続ホーリーロード優勝に導いたって言われてる、あの松風天馬か？」

「何で彼が秀尽学園に？もつと良い高校あったと思うけど？」

教室中から天馬に対するヒソヒソ話が聞こえてくる。次に前に出たのは、鮮やかな赤いローファーと赤い瞳、ウェーブがかつた赤毛を真つ赤なりボンで結ったポニーテールの可愛い少女。

少女

「《芳澤かすみ》です！新体操をやってます！ヨロシクお願い致します！」

かすみは自己紹介を終え、深く礼をする。が、その角度は有に90度を超えていた。

天馬

(うわあ、身体柔らかか………)

天馬以外にも同じ印象を持った生徒が居たに違いない。



く正門前く

ホームルームを終えて正午過ぎ、天馬は下校するため正門に向かった。

惣治郎

「よう。」

正門前では惣治郎が愛車の66年型ビートルと一緒に待っていた。

惣治郎

「乗れよ。ホントは男を乗せる席は用意してないんだが、今日は特別に乗せてやる。」

天馬

「ありがとうございます！」

天馬は助手席に乗り込み、惣治郎はビートルのエンジンを始動させ、2人を乗せたビートルは走り出した。

惣治郎

「どうだ？無事に高校生活送れそうか？」

天馬

「はい！」

惣治郎

「ソイツは結構。それより明日からは電車通学だな。朝の四茶からコッチは混むから気を付けろよ?」

天馬

「分かりました。」

惣治郎

「さて、そんじゃ今日は天馬の入学祝いだな。四茶に美味しいラーメン屋があるんだ。奢ってやる。」

天馬

「ホントですか!? ありがとうございます!!」

その後、天馬と惣治郎は昼食にラーメンを食べ、夕飯の買い出しをして夕方、ルブランに戻った。



〈職員室〉

次の日の放課後、天馬は早速サッカー部に入部するため、サッカー部顧問の先生に入部届を渡した。

サッカー部顧問

「雷門中での君の活躍は聞いてるよ。君みたいな実力者が来てくれるなんて実に光栄だ！早速明日の放課後、入部テストを行いたい。構わないかい？」

天馬

「はい！是非お願いします！」

サッカー部顧問

「いい返事だ。期待してるよ？」



〜ルブラン 店内〜

夜、天馬は惣治郎に明日入部テストを受けることを報告した。

惣治郎

「そうか、明日早速入部テストか。まあお前程の実力者なら、多分難なく入部出来るだろうな?」

天馬

「でも油断は出来ません。中学の頃とは訳が違うでしょうから、気を引き締めておかないと。」

惣治郎

「そうだな。入部テスト頑張れよ!」

天馬

「はい!」



〽 渋谷駅前広場〽

翌朝、天馬は御守り代わりに雷門サッカー部のユニフォームとスパイクを持って登校

した。四茶から渋谷に向かい、地下鉄銀坐線に乗り換えるため駅前広場を歩く。

ピコン

突然、天馬のスマホから通知音が鳴った。天馬がスマホを取り出し画面を立ち上げると、ホーム画面に以前削除した筈の謎アプリが入っていた。

天馬

(アレ?このアプリ、前に消した筈だけど………まあいつか。)

不思議に思う天馬だったが、特に気にせずそのまま置いておく事にした。スマホをポケットに仕舞い、銀坐線の改札へと向かう。すると………

ブブー!

突然、天馬の居る駅前広場に1台のトラックが突っ込んできた。

天馬

「うわあああああああ!？」

ドカーン!

トラックは減速すること無く、そのまま駅ビルに突っ込んだ。天馬は紙一重で何とか避けたため怪我は無かったが、事故現場からは幾多もの悲鳴や叫び声が聞こえてくる。

ウー!!

事故の通報を受けて、消防車・救急車・パトカーが大勢やって来た。

天馬

「あ……………あ……………」

天馬は突然目の前で起きた大惨事に言葉を失い、その場で立ち尽くしていた。



秀尽学園 職員室

その後、天馬は何とか遅刻せず登校する事が出来た。その日の授業を終え放課後、天馬はサッカー部への入部テストを受けるため職員室を訪れた。だが……

天馬

「えっ？テストは中止!？」

天馬は顧問から突然のテスト中止を言い渡された。

サッカー部顧問

「実は、部員達が急に君をサッカー部に入れたくないって言うんだ。昨日話した時は、みんな大いに喜んでくれてたのに……」

天馬

「どうして、急にそんな事に……」

サッカー部顧問

「何でも、君の悪い噂を何処かで聞いたらしいんだ。『自分が活躍するためなら味方を怪我させる事さえ平気でやる奴だ』とか、或いは『1年でキャプテンなんて絶対に裏がある』とか。もちろん、僕は君が噂通りの人間だとは微塵も思っていない。でも、部員達がこんな状態じゃとても……」

天馬

「そう、ですか……分かりました……」

天馬は礼をして職員室を後にし、渋々帰宅した。



ルブラン 店内

夕方、ルブランに戻った天馬を見て、惣治郎は少し驚いた。

惣治郎

「お帰り……………つて、どうしたんだ天馬？」

天馬はテストを受けられなかったショックが少し沈んでおり、手にはアルバイトの求人雑誌が握られていた。天馬は荷物を置き、カウンターに座る。

惣治郎

「どうした？学校で何かあったのか？」

天馬

「実は……………」

天馬は入部テストが突如中止になった事を惣治郎に話した。話を聞いた惣治郎は驚いた。

惣治郎

「急に入部テストが中止？しかも何やら身に覚えの無い噂まで言われてるってか？」

天馬

「顧問の先生の話じゃ、昨日の時点ではみんな俺がテストを受けるのを喜んでくれてた

らしいんです。でも、何故かみんな急に俺をサッカー部に入れたくないって……………」

惣治郎

「……………まあ、お前が悪いことする人間じゃないってのは明白だ。そんなでつち上げの噂なんて直ぐに消えるさ。」

天馬

「はあ……………」

『次です。今朝渋谷駅前で発生したトラックの暴走事故から10時間。事故現場では警察による現場検証が進められています。』

テレビでは今朝渋谷駅前で起きた事故がニュースに取り上げられていた。

天馬

「俺、今日この事故に巻き込まれそうになって……………」

惣治郎

「マジか!? よく無事だったな! 死者こそ出なかったものの、負傷者20人の大惨事だつ

たらしいぞ？……そう言えば、先月にも大きな交通事故があったな。その事故で亡くなった子、15歳だったけなあ……親御さんさぞかし……」

天馬

「15歳……俺と同じ年だ……」

惣治郎

「お前も気を付けろよ？万が一お前が大怪我でもしたら、秋ちゃんや両親に顔向け出来ねえ！」

天馬

「はい……」



く四軒茶屋 路地く

それから数日間、天馬は部活の代わりにアルバイトをしながら普通の高校生生活を送っていた。だが例の悪い噂はサッカー部に止まらず、遂には教室中でも噂が絶えなくなっていた。そして4月11日土曜日、この日は半ドンで午前中に授業が終わり、バイ

トの予定も無かったので天馬は早めに帰宅した。すると、ルブランの前に1人の少年の姿があった。同じ秀尽の制服姿で、黒髪のかせっ毛に黒縁眼鏡をしている。

天馬

(お客さんかな?)

天馬は少年に近づき声をかける。

天馬

「こんにちは。」

少年

「ん?。」

少年は天馬に気付き顔を向ける。

天馬

「もしかして、ルブランに用があるの?。」

少年

「ああ、今日からここで世話になる事になってるんだ。」

天馬

「えっ？じゃあ、惣治郎さんが前に言ってた居候って…」

少年

「多分俺の事だろう。」

天馬

「そうなんだ。俺も今年から此処でお世話になってるんだ。あ、俺は松風天馬。秀尽学園高校の1年生だよ。」

少年

「《雨宮 蓮》だ。今年から高2になる筈だった。」

天馬

「あ、俺より年上だったんだ……えっと……」

蓮

「蓮で良い。あと、呼び捨てで構わない。」

天馬

「……………じゃあ、ヨロシクね蓮！」

蓮

「ああ、よろしく。」

天馬と蓮は握手をし、2人はルブランに入った。店内では惣治郎が相変わらずクロスワードを解いていた。

惣治郎

「えっと……縦は『真珠の養殖に使う貝の名前』と……ん？」

惣治郎は天馬と蓮に気付き、新聞を畳んだ。

惣治郎

「よう天馬、帰ってたのか。」

と、惣治郎は蓮に目を向ける。

惣治郎

「お前が蓮だな？佐倉 惣治郎だ。1年間、お前を預かる事になってる、どんな悪ガキが来るかと思つたが、まさかお前がねえ。」

惣治郎は蓮を見て少しにやけた。その後、惣治郎は天馬と蓮を屋根裏部屋に連れていった。

惣治郎

「今日からここがお前達の部屋だ。夜はお前達だけになるが、くれぐれも悪さすんなよ？騒いだら2人とも容赦なく放り出すぞ！」

天馬

「は、ハイ！」

蓮

「分かった。」

惣治郎

「蓮、一応お前の事情は聞いてるよ。確か男に言い寄られてる女を庇ったら、男が怪我して訴えられただっけか？で、前歴が付いたお前は、晴れて地元の高校を退学処分。裁判所の指導で転校・転居を迫られ、両親もそれを承諾と。要は厄介払いされてここへ来

たつて訳だ。」

惣治郎の話聞いて、天馬は驚いた。

天馬

「そんな、女の人を助けたのに訴えられたなんて……」

惣治郎

「大人相手に余計なことするからだ。怪我させたのは事実なんだろう？」

惣治郎の問いに、蓮は無言で頷いた。

惣治郎

「余計なこととは言わないよ？これでも客商売だからな。向こう1年は大人しく暮らせ。何も起こさなきゃ観察は解ける。」

天馬

「観察？」

惣治郎

「ああ、コイツは来年の春まで保護観察期間なんだ。だから、ここに居るのは1年って事になってる。だが期間中に問題起こせば少年院送りって訳だ。それと蓮、明日は秀尽に行くぞ?」

蓮

「秀尽に? 日曜なのか?」

惣治郎

「ああ、先生方に挨拶参りさ。ったく、折角の日曜だつてのに……」

と、惣治郎は屋根裏部屋を後にした。

Act. 02 / ようこそ、私のベルベツトルームへ

蓮がルブランにやって来た日の夜、天馬と蓮は各々のベッドで横になっていた。

蓮

「なるほど、雷門中を出て秀尽学園に進学。進学を期にコツチに居候しに来たって訳か。」

天馬

「俺の親戚の姐さんと惣治郎さんが知り合いでさ、姐さんが惣治郎さんに頼んでくれたんだ。蓮は何でコツチに？」

蓮

「お前と似たような感じだ。俺の両親がこの店の客と知り合いだったらしくてな。」

天馬

「……………あのさ、詳しく聞いても良いかな？蓮が訴えられたって話。」

蓮

「……………聞いてどうする？」

天馬

「どうもしないよ。同じルームメイトなんだから、相手の事は知っておいた方が良いと思つて。それに、事情を知つてゐる方が万が一何かあつたとき、フォロー出来るでしょ？」

天馬は優しい笑みを蓮に見せる。それを見て蓮も何故かフツと微かに笑つた。

蓮

「お前は優しいんだな……分かつた、話すよ。」

蓮は身体を起こし話し始めた。

事の始まりは数カ月前、帰りが遅くなり夜道を歩いていると、遠くから男女が言い争う声が聞こえてきた。声を辿ると、酒に酔つた男が嫌がる女に付きまとつていた。

男

「いいから車に乗れ！」

女

「いや！離して！警察呼びますよ！」

男

「おう、呼んでみるよ？警察なんて俺の犬だ。言っても無駄だがな！」

女

「っ!? た、助けて!!」

蓮

「っ!!」

女は蓮に助けを求め、蓮は勇気を振り絞って男を女から引き剥がした。だが酷く酔っていた男は引き剥がされた拍子に転倒。額に怪我をしてしまった。

男

「くそっ、このガキ！訴えてやる！」

女

「これ以上するなら、あのお金のこと告発しますよ！いいんですか？」

男

「そんなの、『お前が勝手にやった』って言えば済む話だ！」

女

「えっ!? そ、そんな……………」

男

「俺を誰だと思ってる? お前らみたいな無能な連中は、黙って俺の舵取りに従ってればいいんだ! お前、警察には『ガキが俺に乱暴してきた』って証言しろ! 余計なこと言わないよ!」

蓮

「それからしばらくして警察がやって来た。女は男の言う通り警察に証言して、俺は傷害の罪で逮捕された。そこから先は、惣治郎さんの言った通りだ……………」

天馬

「そんな、酷すぎるよ……………相手は勝手に倒れて勝手に怪我したんでしょ? それなのに傷害なんて、どう考えても可笑しいよ……………それに、蓮に助けてもらった女の人だって……………」

蓮

「過ぎたことだ。今になって悔やんでもどうしようも無いさ。とにかく俺は、言われた

通り1年間は大人しく過ごす。それだけだ……」

蓮はそう言うのと、再びベッドに横になった。だが話をしてる時の蓮は、とても悲しそうだった。

天馬

「蓮……」

天馬は灯りを消し、2人は眠りに着いた。だが……

蓮

「ハッ!?!」

目が覚めると、蓮は何故か牢獄の中に居た。服は囚人服に代わり、手には両手を繋ぐ手錠。左足は鎖で鉄球に繋がっていた。

蓮

「これは……………?」

「気付いた様だな、囚人。」

檻の向こうから少女の声がする。蓮は立ち上がり、檻の前に立つ。檻の向こうには、片方は右目、もう片方は左目に眼帯をした、まるで鏡合わせの用な姿をした2人の少女と、円状に並ぶ同じ牢獄。そして、その中央には長い鼻とひよろつとした姿で、不気味な笑みを浮かべる男が居た。

長い鼻の男

「ようこそ、私の《ベルベットルーム》へ。」

蓮は状況が分からず言葉を失う。

「蓮?」

隣の牢から聞き覚えのある声がする。隣の牢には同じく囚人服姿の天馬が居た。

蓮

「天馬！」

少女L

「現実の貴方達は睡眠中。これは夢としての体験に過ぎません。」

少女R

「主の御前だ、姿勢を正せ！」

長い鼻の男

「御初に御目に掛かる。此処は夢と現実、精神と物質の狭間にある場所。何かの形で契約を結んだ者のみが訪れる部屋。私は主を務めている《イゴール》。覚えてくれたまえ。」

蓮

「イゴール？」

天馬

「あの、ベルベツトルームでしたっけ？俺達は何故ここに？」

イゴール

「お前達を呼び出したのは他でもない。お前達の命にも関わる、大切な話をするためだ。だがその前に……」

イゴールはベルベットルームをマジマジと見回す。

イゴール

「しかし、これは驚いた。この部屋の有り様は蓮、お前自身の心の有り様。よもや牢獄が立ちほだかるとは……お前は正しく運命の『囚われ』。近い将来、その身に破滅が待ち受けているに相違ない。」

蓮

「破滅？ どういう事だ？」

イゴール

「文字通り、『全ての終わり』の事だ。」

イゴールの言葉を聞いて、天馬と蓮は目を見開き耳を疑った。

イゴール

「案ずるな。抗う術が無い訳では無い。自由への『更正』、それがお前が破滅を回避する唯一の道。」

天馬

「それって、蓮の前歴が消えるかもって事？」

イゴール

「場合によつてはそうなるかも知れん。そして……………」

イゴールは天馬に目を向ける。

イゴール

「お前は、その更正を後押しする風。どのような逆境に立たされようと、常に勝利へと民を導く、正に『革命』と言う名の風だ。」

天馬

「革命……………」

イゴール

「……………世界の歪みに、挑む覚悟はあるかね？」

イゴールの言い放った世界の歪み、この時の2人は、その意味を理解して居なかっただろう。だが2人の答えは決まっていた。

蓮

「……………もちろんだ、破滅するのは御免だからな。」

天馬

「俺も、絶対に蓮を破滅させたりなんかしない！」

イゴール

「ククツ、お前達の更正の軌跡、拝見させて貰うとしよう。それと紹介が遅れてしまったが、右が《カロリーヌ》、左が《ジュステイーヌ》。共に看守を務めている。」

カロリーヌとジュステイーヌは、天馬と蓮に身体を向けた。

カロリーヌ

「ふんつ、精々足掻くがいい囚人！」

ジュステイーヌ

「看守とは元来、囚人を守る職務。私達もまた協力者です。ただし、貴方達が従順ならで

すが……………」

チツチツチツ……………」

イゴール

「さて、そろそろ夜も更けてきた。此処の事は、少しずつ理解してくれば良い。」

と、イゴールは手に持っていた懐中時計を机の引き出しに仕舞う。

ジリリリリリリ……………!!

突然、ベルベットルームに警報が鳴り出した。

カロリーヌ

「さあ時間だ。大人しく眠りに付くがいい！」

カロリーヌがそう言い放った途端、2人の視界が急に暗くなり、2人は意識を失った。

そして再び目を覚ますと、そこはルブランの屋根裏部屋だった。

天馬

「うくん……………」

蓮

「うう……………」

天馬と蓮はゆっくりと身体を起こす。時刻は朝9時を少し回ったところだ。

天馬

「おはよう、蓮……………」

蓮

「おはよう。何だか変な夢を見た気がする……………」

天馬

「俺も……………蓮と俺が何故か牢獄の中に居た……………」

蓮

「お前もか、天馬……………俺も同じ夢を見たよ……………」

天馬

「蓮も?」

蓮

「ああ。更正だとか破滅だとか、内容は詳しく覚えてないがな。」



「渋谷駅 田苑都市線ホーム」

しばらくして、蓮は惣治郎と共に秀尽学園に挨拶参り。天馬は一旦稲妻町に戻る事になり、四茶から田苑都市線で渋谷駅に来ていた。

プシュー

上り電車のドアが開き、天馬は電車を降りる。だがその時だ。

『下り線、車両異常を確認中です。』

ギギギギギー!!ドーン!!

天馬

「うわあああああ!?!」

突然、物凄い金属音と共に中央林間行きの下り電車が反対側のホームに猛スピードで突っ込んで来た。電車は先頭車がホームの端を削りながら脱線し停止。中間車は横転、乗り上げ等、大惨事と化した。

天馬

「あ……あ……」

天馬は又しても目の前で大惨事が起きたことに言葉を失った。



く
ルブラン 店内く

その日の夜、蓮と惣治郎がルブランに帰ってきた。

惣治郎

「やれやれ、あんな渋滞するとはなあ……店、どうすつかね？」

天馬

「あ、お帰りなさい。」

天馬はカウンターに座りテレビを見ていた。

天馬

「遅かったですね？」

惣治郎

「ああ、地下鉄事故のせいで酷く渋滞しててな……」

惣治郎と蓮は秀尽学園に挨拶に行った帰り、天馬が遭遇した地下鉄事故によってダイ

ヤが乱れ、それに伴う渋谷駅周辺の交通規制発生により発生した渋滞に巻き込まれ、帰りが遅くなってしまうらしい。

惣治郎

「そうだ蓮、お前に預けておくモンがある。」

惣治郎は蓮に1冊のノートを渡した。

蓮

「これは？」

惣治郎

「日記帳だ。保護観察中と言っても、法律守れてこと以外は別に行動に特別な制限がある訳じゃない。ただ俺には報告の義務がある。日々の記録だけはつけてもらおうぞ？」

蓮

「分かった。」

ブルブルル

突然、惣治郎のケータイが鳴り出した。

惣治郎

「悪い、電話だ。」

惣治郎は電話に出る。

惣治郎

「よう、どうした？……ああ、今から出るよ。大丈夫だって、すぐ行くから。じゃあ後でな。」

ピッ

惣治郎

「じゃあ帰るわ。店閉めとくから、後はお前達の好きにしろ。ただし、店の中荒らすんじゃねえぞ?。」

惣治郎はそう言うと、ルブランを後にした。蓮は天馬の隣に座り、共にテレビを見る。

『これは、事故直後の映像です。警察によると、運転手は負傷していたものの命に別状は無く、調べに対し『何故過剰にスピードを出したのか、自分でも分からない』と答えており、詳しい動機の説明が急がれます。』

テレビでは、例の地下鉄脱線事故がニュースに取り上げられていた。

蓮

「酷い事故だな。80人も巻き込んだのか……………」

天馬

「この間はトラックが広場に突っ込んで、その前は確か女の子が亡くなったって。何だか最近多いね、事故……………」

蓮

「明日は我が身、何て事もあるかもな。」

天馬

「物騒な事言わないでよ……………」

プルルルル……………

天馬・蓮

「ん？」

突然、カウンターに置かれた黄色い公衆電話が鳴り出した。

ガチャ

天馬は受話器を取り電話に出る。

天馬

「もしもし？」

『おう、俺だよ俺！』

声の主は惣治郎だった。

天馬

「惣治郎さん？」

惣治郎

『そうだ。実は扉の表札を裏返すの忘れてな……まあ『OPEN』になっても誰も来ないと思うが、戻るのも面倒なんで代わりにやっといてくれないか？』

天馬

「構いませんけど、何で公衆電話に？」

惣治郎

『俺は男の番号は登録しない主義なんだ。まあでも、ちゃんとコツチに出てくれて助かったよ。それじゃ表札の件、頼んだぞ？』

プチッ

惣治郎は電話を切り、天馬は受話器を戻した。

蓮

「惣治郎さんか？」

天馬

「うん。表の表札、裏返しといってくれだって。俺行ってくるよ。」

天馬は店の外に出て表札を裏返し、そして店内へと戻った。



く都内某所く

その頃、都内某所のとある施設に、黒いスーツ姿の女性が1人居た。

「呼びました？」

女性が歩く先には、銀のアタッシユケースを持ったイケメン少年が1人。

少年

「事件ですか？」

スーツ姿の女性

「まだよ、意見を聞きたいだけ。」

少年

「まあ、貴方の見立ては大抵当たりでしょうけど。話、寿司屋にしませんか？夜遅くに子供をコキ使ってる訳だし。」

スーツ姿の女性

「いいわよ。ただし、回るヤツね。」

少年

「ええ………」

回るヤツ、それを聞いた少年は少しガツカリした様だった。

Act. 03 / 謎の古城 モルガナとグッドストライカー

翌朝、4月11日 月曜日。

天馬と蓮は各々登校の準備を終え、ルブラン店内に居た。

惣治郎

「ほら、朝メシだ。」

惣治郎は2人の目の前に各々カレーとコーヒーを置いた。

天馬

「カレーだ！」

蓮

「朝からか？」

惣治郎

「つべこべ言わずに食べ！さっさと食わないと遅刻だぞ？」

天馬と蓮はスプーンを手に取りカレーを食べる。

天馬

「美味しい！」

蓮

「ああ、強い辛みの中に深く複雑なコクを感じる。しかもコーヒーとの相性が抜群だ。」

惣治郎

「へへっ、そりやどうも。」

カレーが好評だったのが嬉しかったのか、惣治郎は少し微笑んだ。

天馬

「ご馳走さまでした！」

蓮

「ご馳走さま、美味かった。」

惣治郎

「あいよ、気を付けろよお前達。昨日の事故のせいで未だに電車遅れてるみたいだからな。」

2人はカレーを食べ終わると、ルブランを出て急いで四軒茶屋駅に向かった。

惣治郎

「あ、表札『OPEN』にしといてもらつときやよかつたなあ……………まあ開店までまだ時間あるし、別にいつか。」

惣治郎はリモコンを手に取りテレビを点ける。点けると丁度天気予報が始まった。

『続いて、今日の天気です。今朝の東京は全体的に雲に覆われ、雨が降るでしょう。ですが午後までには止み、晴れる見込みです。』

惣治郎

「今日の午前中は雨か……………そういやアイツら、傘持ってたのか？」



く蒼山一丁目駅 出入口付近く

天馬と蓮は無事、蒼山一丁目駅に到着したが、外は天気予報通り雨。2人は近くの洋服店の軒先で雨宿りをしていた。

天馬

「まさか雨なんて……傘持ってきてくればよかったなあ……」

蓮

「仕方ないさ。まだ時間あるし、止むまで少し待とう。」

蓮はスマホを手に取る。

蓮

「ん?」

すると、スマホの中に見覚えの無いアプリが入っていた。赤い目玉の不気味なデザイン……そう、以前天馬のスマホにも入っていた謎アプリである。

「ああもう、最悪！」

と、今度は2人の隣にフードを被った1人の少女が雨宿りしに来た。少女は同じ秀尽のブレザーの下に白パーカーを着ており、ミニスカートに赤タイツとブーツで、服の上からでも分かるくらいスタイル抜群。

バサツ

そしてフードを取ると、美しい金髪のツートールと美しい碧眼の美少女が姿を見せた。

天馬・蓮

「あ……………」

天馬と蓮はその美しさに見とれ、言葉を失った。

金髪の美少女

「……………ん？どうしたの？」

少女が2人の視線に気付き振り向く。

天馬

「あ、いえ……………」

蓮

「いやその、すまない……………」

天馬と蓮は慌てて視線を反らした。少女は微笑みながら「変なの」と呟いた。と、そこへやって来た1台の白い車。

鴨志田

「おはよう！乗せてあげようか？遅刻するぞ。」

運転席には鴨志田が乗っていた。鴨志田は窓を開け少女に声を掛ける。少女は「ありがとうございます」と言つて助手席に乗った。が、その表情は暗く悲しそうだった。

天馬

「鴨志田先生！おはようございます！」

鴨志田

「ああ、君たちか。君たちも早く行かないと、遅刻するぞ？」

鴨志田は蓮と天馬にそう言うと、窓を閉め車を走らせた。と、今度はその車を追うように1人の少年が2人の目の前に現れた。短い金髪でブレザーの下は普通のTシャツと、見るからにチャライ不良といった格好をしたガラの悪い少年だ。

ガラの悪い少年

「くそつ、変態教師が！」

天馬・蓮

「ヘンタイキョウシ？」

ガラの悪い少年

「あつ？」

少年は2人に気付いき、メンチを切るかの様にズケズケと近づく。

ガラの悪い少年

「んだよ？鴨志田にチクる気か？」

蓮

「カモシダ？」

天馬

「あの、いったい何の事ですか？」

天馬と蓮は状況が分からず少し混乱していた。

ガラの悪い少年

「あ？今の車、鴨志田だったろ？好き放題しやがって、お城の王様かよ……………お前らもそ

う思うだろ?」

天馬

「お城の……?」

蓮

「王様?」

ガラの悪い少年

「いや、だから……」

少年も話が思うように通じず少し困り始めた。

ガラの悪い少年

「……つーかよ、鴨志田知らねえとかマジで言ってるか? お前ら秀尽だよな?」

天馬

「は、はい……」

蓮

「そうだが……」

と、少年は2人の学年章ピンズに目を向ける。

ガラの悪い少年

「1年……なるほど、新入生か。新入生なら鴨志田の事知らなくても仕方ねえな。で、お前は……2年？つて事はダメ。もしかして転校生か？」

少年の質問に、蓮は「ああ」と答えた。

ガラの悪い少年

「なるほど、なら知らねえわけだ……」

少年は納得したのか、何処と無く落ち着いた表情になった。

ガラの悪い少年

「大した雨じゃねえだろ？遅刻すんぞ。」

と、少年が歩き始めた瞬間……

「っ!？」

突然、激しい頭痛と目眩が3人を襲った。

ガラの悪い少年

「ううう、頭いてえ……」

が、直ぐに頭痛と目眩は治まり、3人は学校に向けて歩き出した。大通りから狭い路地に入り、3人は学校の正面に……

ガラの悪い少年

「なっ!？」

天馬

「ええっ!？」

蓮

「っ!？」

だがたどり着くと、学校は何故か西洋風の巨大な古城と化していた。

ガラの悪い少年

「何だコレ……………道、間違えてないよな？」

城の門には「私立秀尽学園高等学校」と書かれた銘板がある。

ガラの悪い少年

「やっぱ合ってるよな……………どうなってんだ？」

蓮

「……………気は進まないが、中に入って聞くしか無いだろう。」

天馬

「そうだね、行こう。」

3人は恐る恐る、城の中へと入っていった。

「謎の古城 エントランス」

最初に3人がやって来たのは城のエントランス。が、3人とも状況が理解出来ずに混乱していた。

ガラの悪い少年

「お、おつかしいな……学校が……」

蓮

「……が学校？どう見ても城の様だが……」

天馬

「多分学校の筈……だよ。看板にちゃんと、『私立秀尽学園高等学校』って書いてあったし……」

ガラの悪い少年

「ケータイも圏外……マジで何処来ちまったんだ、俺達？」

ガシャン…ガシャン…

突然、エントランスに妙な金属音が聞こえてきた。音のする方向を見ると、そこには
剣と盾を持った鎧の兵士が居た。

蓮

「何だ?」

天馬

「鎧?」

ガラが悪い少年

「んだよ、ビビらせんよ……………」

どうやら少年はコスプレか何かかと思っている様だ。

ガラの悪い少年

「誰だよお前、生徒なのか?つか、スゲエ格好だな……………鎧、ホンモノか?」

少年の問いに兵士は何も答えない。

ガシヤン…ガシヤン…

すると、同じ格好の兵士が次から次へと集まってきた。

ガラの悪い少年

「お、おい、何だよ……………」

蓮

「ドツキリ……………と言う訳じゃ無いらしいな……………」

天馬

「何かマズイ気がする……………ここは逃げよう！」

天馬の掛け声で、3人はその場から走り出す。だが時既に遅し。3人は他の兵士達に包囲されていた。

ガラの悪い少年

「くそっ、何なんだよコレ!？」

ドカツ!

ガラの悪い少年

「ごはっ!？」

ドカツ!

蓮

「くっ!？」

ドカツ!

天馬

「ぐあっ!？」

3人は兵士達に突き倒され、倒れた拍子に気を失った。

「……………おい……………おい、起きろ！」

天馬・蓮

「っ!？」

天馬と蓮は、少年の呼び声で目を覚ました。

ガラの悪い少年

「大丈夫か？」

天馬

「え、ええ……………」

蓮

「すまない、大丈夫だ……………」

天馬と蓮はゆつくりと身体を起こし辺りを見る。どうやら3人は、古城の牢屋らしき部屋に閉じ込められた様だ。

天馬

「……は、牢屋？」

ガラの悪い少年

「ああ、どうやら夢って訳じゃねえみてえだ……………学校の代わり様といい、あの鎧の兵士といい、いったい何がどうなつて……………」

『うわあああああああ!!』

突然、何処からか男の叫び声が聞こえてきた。

蓮

「今のは何だ!?!」

例の叫び声は牢の向こうから聞こえてくる。それも1人ではなく複数、そして聞こえていたのは叫び声ではなく悲鳴だった。

ガラの悪い少年

「おい……おい……おい……これ、絶対ヤバくねえか?」

少年は怯えた声で天馬と蓮に問いかける。2人とも声には出さなかったが、心の内では恐怖していた。すると……………

ガシャン…ガシャン…

檻の向こうに、先程エントランスで遭遇した兵士達が現れた。

兵士

「喜べ、貴様らの処刑が決まった。罪状は『不法侵入』。よって、死刑に処す。」

兵士が突然言い放った言葉に、3人は驚いた。

「当然だ。俺様の城で、勝手は許されない。」

そこへ、聞き覚えのある声と共に見覚えのある人物が現れた。

天馬

「鴨志田先生!?!」

ガラの悪い少年

「えっ? 鴨志田……なのか?」

3人の前に現れたのは鴨志田だった。だが鴨志田は何故か金の王冠を被り、ハート柄のマントの下は下着のみのほぼ全裸と、まるで「裸の王様」と言った感じだった。

鴨志田？

「ただのゴソ泥と思つたら貴様だつたとはな、《坂本》。貴様また俺に逆らうつもりか？
ちつとも反省してないな？え？」

鴨志田は天馬と蓮を見る。

鴨志田？

「一人じゃどうにもならんと、今度は仲間を引き連れてきたのか？」

坂本

「お前、ふざけんなよ！さつきからナニ訳の分かんねえ事言つてやがる!？」

坂本は鴨志田に向けて怒鳴る。すると、鴨志田は坂本を睨んだ。

鴨志田？

「王に向かつてその口の利き方は何だ？貴様、自分の立場が分かつていない様だな。我が城に忍び込んだ挙句、王である俺様に悪態をついた罪、貴様の死を以て償ってもらう

としよう！」

鴨志田は牢の扉を開け、兵士達と共に牢の中へと入る。

坂本

「付き合ってられつかよ！このっ！」

ドンッ！

坂本は目の前の兵士を突き倒す。

ドカッ！

坂本

「いっはっ！」

だが側に居た別の兵士が坂本を殴り倒した。

坂本

「くっ、お前らは逃げろ！コイツらマジだぞ！」

坂本は天馬と蓮に逃げるよう訴えるが、2人は立ち竦んでその場から動けない。

鴨志田？

「ほう、貴様ら逃げるのか？随分と薄情な仲間だな……」

坂本

「仲間じゃねえ……ほら、俺に構わず早く行け！」

鴨志田？

「ふん、まあいい……ソイツらを抑えてろ。俺はコイツの処刑に集中するでしょう。」

兵士達は蓮と天馬を壁に拘束し、鴨志田は坂本に殴る蹴る等の暴行を与え続ける。

天馬

「坂本さん！」

蓮

「くっ……………！」

その時だ

『どうした、見ているだけか？』

突然、蓮の頭の中に、誰かが語り掛けて来た。

『このままでは奴もお前達も死ぬぞ？それとも、アレは間違っていたのか？』

蓮の脳裏に、以前女を助けた日の光景が過った。

蓮

「いや、間違ってる……………間違ってる筈がない！」

『……………よかろう、覚悟聞き届けたり。』

ドクンツ！

蓮

「ぐあつ?!」

突然、激しい頭痛が蓮を襲った。

天馬

「蓮!?!」

蓮は激しい痛み、苦しみに苦しめ、躓き始める。

『契約だ！我は汝、汝は我、己が信じた正義の為に、あまねく冒瀆を省みぬ者よ、その怒り、我が名と共に解き放て！たとえ地獄に繋がれようと全てを己で見定める、強き意思の力を!!』

そして痛みと苦しみから解放された瞬間、蓮は怒りに燃える鋭い眼をしていた。

ドーン！

次の瞬間、蓮は辺りに衝撃波を放ち、自分達を拘束していた兵士を吹き飛ばした。

鴨志田？

「な、ナニ？」

天馬

「蓮……………？」

天馬、坂本、そして鴨志田と吹き飛ばされた兵士達は一斉に蓮へと目を向ける。蓮はいつの間にか眼鏡から白黒のドミノマスクを付けていた。

蓮

「うおおあああああ!!」

蓮は叫びながら流血と共にマスクを引き剥がす。マスクを引き剥がした次の瞬間、蓮の身体が青白い炎に包まれた。

『フハハハハハッ!!』

炎が消えると、不気味な笑い声と共に仮面のような不気味な顔とシルクハット、大きな黒い翼を持つ赤い怪人。そしてタキシード風の黒いロングコートと深紅の手袋を身に付けた蓮が現れた。

坂本

「な、ななな何だ!？」

天馬

「化身? いや違う!」

怪人

『我が名は逢魔の略奪者《アルセーヌ》! 我は汝に宿る反逆者の魂。お前が望むなら、難局を打ち破る力を与えてやってもいい。』

アルセーヌは蓮に問いかける。

蓮

「アルセーヌ……頼む、力を貸してくれ！」

アルセーヌ

『フツ、良かろう……』

鴨志田？

「ええい……衛兵ども、ソイツから殺つてしまえ！」

兵士達は次々と己の仮面を剥がし、カボチャのお化けへと姿を変える。

天馬・坂本

「姿が変わった!？」

蓮

「アルセーヌ！」

アルセーヌ

『フッ!』

ドーン!

アルセーヌは赤黒い衝撃波を放ち、カボチャのお化け達を一掃した。

鴨志田?

「ナニツ!?!」

シユウウ……

アルセーヌは蓮が最初に付けていたドミノマスクに姿を変え、蓮の顔に戻った。

坂本

「何だ、今の?」

突然起きた現象に、その場に居た全員が動揺していた。

鴨志田？

「おのれえ………！」

天馬

「ツ!!今だ!」

天馬は隙を見て即座に、鴨志田に向けて駆け出し、走りながら左手を胸に当てる。そこから鼓動のような電波が現れ、右手を左から右へと大きく降る。

天馬

「《アグレッシブビート》改!」

暗転し、電波の光が鴨志田を通り抜けた直後、天馬は光の道筋に合わせてウィルスを抜いており、そこから一気に走ると、起動を描いた電波が弦のように弾かれ、鴨志田を弾き飛ばした。

ドサツ！

鴨志田？

「いんげん!?!」

鴨志田は弾き飛ばされた直後に落下し背中を強打。その隙に坂本が床に落ちていた鍵を拾い、3人は牢屋から脱出。

ガシヤン！

そして即座に扉を閉め鍵を掛けた。

坂本

「よし、今のうちに逃げるぞ！」

3人は急いでその場から走り去る。

鴨志田

「くそつ、賊めが……俺様にこんな事して、タダで済むと思うなよ!!」

鴨志田は檻を掴みながら叫んだ。一方牢屋を離れた3人は、物陰に隠れ休んでいた。

坂本

「ハア、助かったぜ……」

3人とも全力で走ったために息が上がっていた。

天馬

「蓮、今の何なの？それに君の格好……」

蓮

「それが、俺にも何が何だか全然……」

シュン!

突然、蓮は黒いタキシードから元の制服姿に戻った。

坂本

「うおっ、戻った!?!」

天馬

「ツ!?!ねえ、あれ!」

天馬は何かを発見し指差す。指差す先には川の上に吊られた檻と、その中に閉じ込められた秀尽の生徒の姿があった。

坂本

「やっぱ捕まってるのは俺らだけじゃねえみたいだな……………」

「おい、そのクセツ毛と金髪とクルクルパーマ!」

突然、何処からか少年の様な声がする。声のする方を見ると、牢屋の中に閉じ込められた黒いマスクと黄色いターバン姿の猫っぽい二頭身の謎の小さな生き物の姿があつ

た。

坂本

「何だコイツ!？」

坂本は驚愕のあまり叫び、天馬と蓮は目を見開いた。

天馬

「猫?！」

謎の生き物

「猫じゃねえ!次言ったら許さんぞ!つか、お前ら城の兵士じゃねえな?頼む、こっから出してくれ!」

坂本

「な、何モンだよお前!?!つか、どう見ても敵だろ!？」

謎の生き物

「捕まってるのに敵なわけ無いだろ!?!そうだ、お前ら出口が知りたいんだろ?出してくれれば案内するぞ?！」

天馬

「えっ？本当!？」

蓮

「嘘じゃないだろうな？」

謎の生き物

「嘘じゃない！本当だ！」

坂本

「どうも調子良いな、コイツ…」

謎の生き物の言葉を全く信用出来ない坂本。

天馬

「でも、どのみち俺達だけじゃ出れそうに無いよ。ここは彼の言う通りにしよう。」

蓮

「だな、それがいい。」

坂本

「チツ、分かったよ……………」

ガチャツ

坂本は扉の鍵を開け、謎の生き物を牢屋から解放した。謎の生き物は牢屋から出ると、グーツと伸びをした。

謎の生き物

「ンンン〜ツハア〜、やっぱシャバの空気は美味いぜ！」

坂本

「で、出口は何処なんだ化け猫！」

謎の生き物

「だから猫って言うな！我輩は《モルガナ》だ！とにかくついて来い！」

モルガナは3人を連れて走り出す。

???

「おいモルガナ！大丈夫か!？」

すると、3人の前方から何かが飛んできた。黒と白のボディに銀のダイヤルと赤い翼、そして胴体にオレンジのシャークマウス風のノーズアートの描かれた小さな戦闘機らしきメカだ。

モルガナ

『グッドストライカー』！お前も無事だったんだな！』

モルガナとグッドストライカーなる謎メカは再会を喜んだ。

天馬

「君は？」

グッドストライカー

「オイラの名前はグッドストライカー！気安く『グッデイ』とでも呼んでくれ！」

蓮

「グッドストライカー？」

グッドストライカー

「悪いが今は説明してる場合じゃないぜ！今はとにかく此処から抜け出すぞ！」

グッドストライカーを加えた一同は、再びモルガナを先頭に出口を目指す。だが途中、見回りの兵士に見つかってしまった。

坂本

「うわあ!?!ヤベ、来たあ!?!」

兵士は牢屋で遭遇したカボチャのお化けに、蓮も先程の黒いタキシード風ロングコート姿に変身した。

モルガナ

「チツ、素人は下がってな！」

モルガナは蓮の隣に立ち、共に敵と対峙する。

モルガナ

「来い、《ゾロ》！」

モルガナの呼び声と共に地面から青白い光の柱が現れ、巨大な胸板と腕を持つ黒い仮面の紳士が現れた。

坂本

「お、お前もソレ出るのかよ!？」

モルガナ

「すみやかに黙らせてやるぜ！」

蓮とモルガナはカボチャお化けとの戦闘に入る。だが……………

ガシャン…ガシャン…

一同の後方から別の兵士達が現れた。

グッドストライカー

「おい！後ろからも来たぞ！」

坂本

「おいおいマジかよ！挟み撃ちじゃねえか！」

後方から来た兵士達は紫色の悪魔へと姿を変える。

天馬

「……は俺に任せて！」

天馬は荷物を坂本に預け、悪魔達と対峙する。

天馬

「……はあああああああつ！」

天馬は両手を広げて叫ぶ。すると彼の背中から深い藍色のオーラが出現した。オーラは翼を形成するかのようになり、オーラが消えると、背中から真っ白な翼を生やし、強固な肉体とポリユームのある長い赤髪を持ち、頭にペガサスを模した装飾

を着けた巨人が雄叫びを上げながら現れた。

天馬

「魔神pegasusアーク！」

pegasusアーク

『オオオオオオオオオオ!!』

坂本

「お、お前も出るのか!?!何がどうなってんだよ!?!」

ビューー!

pegasusアークは翼を羽ばたかせ突風を放つ。悪魔達は吹き飛ばされて壁や樽に激突し消滅した。

モルガナ

「何だ、あの力は？」

蓮

「モルガナ？」

モルガナ

「えっ？ ああ、分かってる！」

蓮も仮面を外しアルセーヌを召還。アルセーヌとゾロのダブルアタックでカボチャお化けを撃退した。

モルガナ

「よっしやー！」

戦闘が終了するとゾロはその場から消え、アルセーヌは元のマスクとなって蓮の顔に戻り、ペガサスアークは紫のオーラとなって天馬の身体に戻った。

モルガナ

「お前からやるじゃねえか！ お前の《ペルソナ》の力も中々のモンだ！」

坂本

「ペルソナ？さつきブワーって出てきたヤツの事か？」

モルガナ

「呼び出すとき、クセツ毛のコイツが仮面を剥がすのを見たろ？人は誰でも心に仮面を被ってる。それを自覚し自ら剥がす事で……」

シユウウ………

と、モルガナが説明してる途中、又しても蓮の姿が元の制服姿に戻った。

天馬

「また戻った。」

モルガナ

「まだ力の扱いが完全じゃないんだな。コレだけ騒がれて、変身が解ける筈がない。」

坂本

「あー、もういい！さつきからワケ分かんねえし！」

グッドストライカー

「てかモルガナ、今は悠長に講義してる場合じゃないぜ？」

モルガナ

「おっと、そうだった！出口はもうすぐだ、行くぞ！」

モルガナの指示で一同は再び移動を開始する。

坂本

「ちよつと待ってくれ！」

と、坂本が突然何かを発見し呼び止めた。坂本が見る方向には、何やら赤いユニフォームを着た男子生徒が牢屋の中に閉じ込められていた。

天馬

「坂本さん？」

坂本

「コイツの格好、どっかで見た気がするんだ……くそ、頭がパニックって出て来ねえ！」

モルガナ

「おい！早くしろ！」

坂本

「待てて！コイツこのままじゃ……………」

モルガナ

「お前、何も分かってないんだな……………いや、説明してる時間は無いか。今は脱出に専念しろ！命が惜しくなければ別だがな？」

坂本

「チツ、分かったよ！」

坂本は牢屋の前から離れ、一同は再び移動を始める。そして最初にやって来た正面ホールを抜けて、たどり着いたのはホール横の物置らしき部屋。

蓮

「行き止まりだぞ？」

モルガナ

「あそこだ。」

モルガナはある場所を指差す。網が填まった換気用の穴だ。

天馬

「なるほど、換気口から脱出するって訳だ！」

モルガナ

「その通り！基本中の基本だけ？」

ガシヤン

天馬は柵の上に登り、換気口の網を外した。

坂本

「よっしゃ！やつと外に出れるぜ！」

モルガナ

「喜ぶのは無事に出てからにきな。さあ、お前達は早く行けよ。」

天馬

「君は？」

グッドストライカー

「オイラ達はまだやることがあるからな、ここで御別れさ。」

蓮

「そうか……助かったよ、ありがとうな。」

モルガナ

「礼はいいから、さっさと行きな。」

モルガナに急かされ、天馬・蓮・坂本は換気口から城の外に出た。

グッドストライカー

「……なあ、アイツらどう思う？」

モルガナ

「率直に言つて、使えそうだ。特にあのクセツ毛のヤツは。あとはあのパーマ野郎が出した力が気になるな。」

グッドストライカー

「なるほどな。オイラも何だかグツと来たぜ？アイツらと一緒になら、何でオイラがコッ
チに来たのか、分かる気がするんだ。」

薄暗い物置で、モルガナとグッドストライカーはニヤリと笑った。

Act. 04 / 赤い蝙蝠と謎の銃

換気口から古城の外へと抜け出した天馬達。だが、気が付けば天馬は1人、真つ暗闇の何もない空間に居た。

天馬

「此処は…何処だ？俺、蓮と坂本さんと一緒に城から脱出した筈じゃ……………」

『聞こえるか？異世界の少年よ…』

突然、謎の男の声と共に天馬の目の前に赤く輝く一匹の蝙蝠が現れた。

天馬

「だ、誰!？」

『君は今、とあるゲームに巻き込まれている。勝機はほぼ無いに等しい、極めて理不尽な

ゲームだ。』

天馬

「理不尽な……ゲーム？」

『心して聞くがいい少年よ。ゲームは既に始まっている。このままでは君達の世界は、近いうちに終焉を迎えるだろう。だが僅かだが、逆転の可能性もある。その鍵を握るのは、君とあの少年だ。』

キラキラキラ……

蝙蝠はキラキラと輝く赤い粒子を放ちながら飛び回り、天馬の手の上に止まる。すると蝙蝠は後部に黒いグリップを持つ白い銃型のアイテムへと姿を変えた。

天馬

「コレは、銃？」

『その力と仲間達との絆を武器に、ゲームに打ち勝ち、世界を救うのだ。君がゲームを進める度に、また新たな力を授けに私は現れる。さあ行け!』

キイイイイン!!

辺りが目映い光に包まれ、天馬は眩しさのあまり目を瞑る。そして再び目を開くと、天馬は蓮・坂本と共に3人が最初に出会った蒼山一丁目駅の出入口付近に居た。

坂本

「ハア…ハア…俺ら、どうなった?」

蓮と坂本は辺りを見回し、現在地を確認する。

蓮

「見たところ、蒼山一丁目駅の近くみたいだ。」

『…に帰還しました。お疲れ様でした。』

突然、天馬と蓮のスマホから聞き慣れないナビの音声が届いてきた。

坂本

「あ？帰還しました？って事は、戻れたって事か？つか、いったい何だったんだ!?城とか、鴨志田とか、妙な猫と妙なメカとか、もう何がどうなってるんだよ!?!」

「騒がしいぞ！お前達、秀尽の生徒か？」

そこへ、気の強そうな警官と気の弱そうな警官がやって来た。

強気な巡査

「こんなところで何してる？もしかしてサボりか？」

坂本

「はあ!?違うって！学校行こうとしたら、変な城で……」

強気な巡査

「城?……お前ら、ひよつとしてヤバいモン持ってないよな?」

坂本

「いや何でそうなんだよ!？」

思わず坂本が突っ込みを入れた。

弱気な巡査

「えっと、君達は友達かい？」

弱気な警官が天馬と蓮に問い掛ける。天馬は「はい」、蓮は「そんなところだ」と答えた。

弱気な巡査

「なら、彼を連れて学校に行きたまえ。」

強気な巡査

「秀尽の前ならさつき通ったが、別に可笑しなところは無かったぞ？これ以上デタラメ言うなら、学校に連絡するぞ？」

坂本

「ああもう！お前らも何か言えよ！」

天馬

「今は大人しく学校に行こう。」

蓮

「だな、遅刻したくない。」

坂本

「いやそうじゃねえだろ……………」

天馬と蓮の返答に突っ込む坂本であった。

気弱な巡査

「遅刻したくないって、もうとつくに昼休みの時間帯じゃないのかい？」

気弱な巡査の言葉に驚く3人。慌てて時計を見ると、時刻は正午を回ったところだった。

坂本

「マジかよ！どうなってんだ!？」

天馬

「と、とにかく行くこう!」

3人は急いで学校に向かった。

—————

く秀尽学園高校 正門く

3人は城に迷い込んだルートで学校に着いた。が、そこにあつたのは至って普通の秀尽学園高校だった。

坂本

「……………同じ道、通ったよな?どうなってんだ?」

「ソレはコッチの台詞だ、坂本!」

正門では生活指導の教員がイライラしながら待っていた。

指導教員

「補導の連絡があつたと思えば、やっぱりお前だったか。しかも、お前が1人じゃないとは珍しいな……こんな時間まで3人仲良く、何処ほつき歩いてた？」

坂本

「えつと……城？」

坂本は蓮と天馬に助けを求めるかのように目を向ける。蓮と天馬は共に首を縦に振った。

「『城』がどうしたって？」

と、そこへ鴨志田が現れた。だが3人の前に現れた鴨志田は、無地のTシャツにジャージのズボンと至って普通の格好だった。

坂本

「鴨志田！」

鴨志田

「呑気だな坂本、陸上の朝練やってた頃とは大違いだ。」

坂本

「うるせえ！テメエが……！」

指導教員

「なっ!? 鴨志田先生になんて口きいてんだ坂本!……お前な、もう後無いんだぞ?」

坂本

「向こうが煽って来たんだろうが!!」

指導教員

「本当に退学になりたいのか!？」

鴨志田

「まあまあ落ち着いて。私も配慮が足りませんでしたし、ここは両成敗って事で。」

ヒートアップする坂本と指導教員を見て、鴨志田は指導教員を宥める様に声を掛けた。

指導教員

「え？いや、まあ、鴨志田先生が仰るなら……とにかく坂本、大遅刻は事実だ。事情聞くから来なさい。」

坂本

「……………わあつたよ。」

坂本は渋々、指導教員に付いていった。途中、笑顔を見せる鴨志田を鋭く睨み付けながら。

鴨志田

「と……ろで……」

鴨志田は坂本が校舎に入っていくのを確認すると、蓮に目を向けた。

鴨志田

「例の転校生、雨宮 蓮ってのはお前だな………何処かで会ったか？」

蓮

「今朝、駅前で女子を車に乗せてただろ？パーカーを着た金髪ツインの。」

鴨志田

「ああ、思い出したぞ……まあいい、今回は大目に見てやる。校長から聞いて思うが、問題を起こしたら退学だからな？分かったら二人とも、早く職員室に行け。」

新しい学校生活、せいぜい楽しめよ。」

鴨志田はそう言って去っていった。



く1年A組く

天馬と蓮はその後職員室で各々の担任に事情を話し、昼休みが終わり五時限目、天馬と蓮は各々体調不良という理由で出席した。

「大遅刻ってマジ？」

「そういえば、二年の噂の転校生と一緒に登校してたらしいよ？」

「やっぱ、シツカリ者に見えて実はヤバい奴なんじゃ……」

大遅刻の影響もあってか、天馬の悪い噂は酷くなっていた。

かすみ

「松風君、大丈夫？」

隣からかすみ優しく声をかける。天馬は「大丈夫」と返した。



〈校舎2階 廊下〉

先日の地下鉄事故の影響で、今日の授業は5時限目までで終わった。授業が終わり放課後、天馬は帰り支度を終え教室を出ると、最寄りの階段から2階へと下りる。

蓮

「よう。」

天馬

「あ、蓮！」

階段を下りて直ぐ、天馬は蓮と会った。どうやら天馬のクラスA組は、蓮のクラスD組の真上に位置している様だ。

蓮・天馬

「……………ん？」

突然、2人の居る廊下が一瞬、今朝迷い込んだ古城の廊下に見えた。

「ん?どうしたの?」

そこへ、D組から担任と思われる、ぼさぼさの髪をして終始眠そうな顔の女性教員がやって来た。

蓮

「……………ここは、学校か?」

女性教員

「はあ……………ちよつと君、大丈夫?」

女性教員は呆れた感じで蓮を見る。と、女性教員は今度は天馬に目を向けた。

女性教員

「えつと、確か1年の松風 天馬君よね? 雨宮君のルームメイトの。」

天馬

「えっ?は、はい……………」

女性教員

「雨宮君のクラスの担任をしてる、《川上貞代》です。今後雨宮君の事で何かあったら、君に声をかける場合があるかもだから、覚えておいて。」

………とところで、2人とももう噂になつてゐるみたいだけど、言つたの私じゃないからね。」

天馬

「噂？」

実は天馬に続き転校初日の蓮も、何故か既に学校中で悪い噂が立っていたのだ。

川上

「2人とも、今日は寄り道しないで真つ直ぐ帰りなさい。佐倉さん怒つてたわよ。あと坂本君、あの子とは………」

と、そこへ噂をすれば何とやら。例の坂本がやって来た。

川上

「噂をすれば………何の用？今日、補導されたんですって？」

坂本

「うるせえな……何でもねえよ……」

と、坂本は天馬と蓮の肩を無理やり組み、2人の耳元に小声で「屋上で待ってる」と
 呟き、そしてその場を離れた。川上も「見たでしよ、関わらないですよ？」と2人に釘を
 刺し、その場を離れた。すると……

「何であんな生徒を編入させたんです？」

今度は1階から鴨志田と太った教員がやって来た。太った教員はどうやら校長の様
 だ。

鴨志田

「早速、坂本や1年の松風とつるんでましたよ。前歴のある生徒と、前の中学でやりたい
 放題してた問題児、そして暴力事件の張本人………これじゃいくら私が学園に貢献して
 も意味がないというものですよ。」

校長

「まあまあ、そう仰らずに……この学園は鴨志田君頼み。貴方はウチの華ですよ。ですがその華の裏で、地道な積み上げも必要なんですよ……」

鴨志田

「校長も苦勞が絶えませんな……そういうことでしたら結構。これからも御期待に込めてみますよ！」

鴨志田と校長は真後ろに居た蓮と天馬に全く気づく事無く、その場を後にした。

—————

く屋上 出口く

2人は坂本に呼び出された通り、屋上にやって来た。が、肝心の屋上に出る扉には「立入禁止」の貼り紙がしてある。

ガチャ

扉を明け外に出ると、坂本が無造作に置かれた机に座って待っていた。

坂本

「…よう、来たな。」

2人は坂本の近くに腰を下ろした。

坂本

「急に呼び出して悪かったな。どうせ川上に言われてんだろ？俺に関わるな、とかさ。」

坂本の言葉に2人は驚いた。

坂本

「やっぱりな……………」

と、坂本は蓮に目を向ける。

坂本

「雨宮 蓮だっけか？聞いたぜ、前歴あんだって？学校中で噂になってるよ。」

蓮

「そうか…」

坂本

「あとお前、松風 天馬だろ？元雷門中サッカー部キャプテンの。」

天馬は自己紹介もしていないのに名前と出身校を当てられ驚いた。

坂本

「やっぱりな。最初会った時から、どっかで見た顔だなって思ってたんだよ。」

天馬

「何で、分かったんですか？」

坂本

「だってお前、俺世代のサッカー野郎の間じゃ有名人なんだぜ？『サッカー管理組織ファイブセクター』を打ち倒し、少年サッカー界に光をもたらした革命のヒーロー」、『1年で

一軍キャプテンに就任し、以後雷門中を3年連続全国大会優勝に導いた伝説の男』つてな。」

蓮

「お前、そんな凄い人間だったのか……」

驚きと感心が隠せない蓮と、自分が有名人扱いされてると知り照れる天馬であった。

坂本

「けど、そんなお前が何で秀尽に？お前くらいの腕前なら、もつと良いところ通えただろ？」

天馬

「それは、その……俺、勉強苦手で……」

坂本

「ああ、なるほど……でも、お前も蓮程じゃねえけど、噂立ってるらしいな？まあ噂してるのはきつと、お前の実力を知らない連中だろう。気にする事ねえよ。」

坂本はそう言うが、天馬は納得出来なかった。確かに坂本の言う通り、噂してる大半

はサッカーについて知識が薄い生徒達だろう。だが天馬が最初に自分の悪い噂を知ったのは、サッカー部顧問から聞いた自分の事がある程度知っているであろうサッカー部の情報だったからだ。

坂本

「……今朝のあれ、何だったんだろうな？ほら、城で殺されそうになったやつ。」

天馬

「夢って訳じゃ無かったよね？」

坂本

「……………そう言や、助けてもらった御礼まだだったな？ありがとうな、蓮。」

坂本は蓮に礼を言い、蓮は「別にいい」と笑顔で返した。

坂本

「……………お前らに話しておきたい事があるんだ。お前らは知らないだろうが、鴨志田のヤロウには噂があんだよ。」

蓮

「鴨志田……………今朝、校門で会った男か。」

坂本

「本名《鴨志田 卓》。バレー部の顧問なんだが元オリンピックピックのメダリストで、部も全国行つてつから誰も文句言えねえんだ。あの城の『鴨志田が王様』とか、そこが妙にリアルつつか……あの城、また行けんのかな？」

と、坂本はふと空を見上げ、立ち上がった。

坂本

「下らねえお喋りに付き合わせて悪かったな、話は終わりだ。……………けどさ、俺ら合い合
いそうじゃね？」

天馬

「問題児の集まりだからって事ですか？」

蓮

「なるほど、悪くないな。」

蓮はフツと笑いながら言った。

坂本

「俺、《坂本 竜司》！敬語とか堅苦しいの無しで、竜司ってタメで呼んでくれ！あと見かけたら声かけっから、お前らシカトすんなよ？」

そう言うと、竜司は「じゃあな！」と言って先に屋上を後にした。

蓮

「……………天馬、お前はアイツをどう思う？」

天馬

「川上先生が関わるなって言うから、ホントはかなり怖い人なのかなって思ったけど、全然そんな感じじゃなかったよね？」

蓮

「きつとアイツも、何か事情があるんだろう。鴨志田先生のことも、随分と嫌っていたみたいだしな。それに、例の噂とやらも気になる。」



くルブラン 店内く

夜、天馬と蓮がルブランに戻ると、惣治郎がイライラしながら待っていた。

惣治郎

「おいお前ら、学校から連絡あったぞ！ 2人揃って半日もサボったって？」

天馬

「すみません……………」

蓮

「悪かった……………」

2人は深く反省し謝った。

惣治郎

「まったく、朝ちゃんと起きたと思つたらコレかよ。しかも天馬まで一緒とはなあ……………蓮、念を押して言っておくが、何かあったらお前の人生終わりなんだぞ？ 保護観

察って意味、分かってるか？」

蓮

「ああ、分かってる。」

惣治郎

「ならいい。」

プルルルルル……

突然、惣治郎のケータイが鳴り出し、惣治郎は電話に出た。

惣治郎

「おう、どうした？……ああ、店閉めたとこだ。大丈夫、ちゃんと30分で行くつてば。」

と、惣治郎はケータイのマイクを手で押さえ、蓮と天馬に目を向ける。

惣治郎

「ところで、お前ら晩飯はどうしたんだ？」

天馬

「今日は帰る途中に2人で食べてきました。」

惣治郎

「そっか。じゃあ俺は店閉めつから、戸締まりと電気頼んだぞ。あと、早く寝ろよ?」

そう言うと、惣治郎は電話に戻る。

惣治郎

「もしもし?……ああ、今から出るよ。……違うって、男だよ。バイト雇っただけだつて。」

惣治郎は電話をしながらプランを離れ、天馬と蓮は鍵を閉め店の明かりを消し、そして共に眠りについた。

ガンツ！ガンツ！

突然、2人は何やら物凄い金属音で目が覚めた。

天馬

「う……………なに……………？」

蓮

「安眠妨害だ……………」

「さっさと起きろ囚人ども!!」

と、突然聞こえてくる少女の怒鳴り声。慌てて身体を起こすと、そこは見覚えのある牢獄。檻の向こうには激しく檻を蹴るカロリーヌと、その隣で大人しく待つジユステイーヌ、そしてイゴールの姿があった。

蓮

「……は……………」

天馬

「ベルベットルーム……………」

カロリーヌ

「つたく、やっと気付いたか……………」

カロリーヌは呆れた様な物言いで蹴るのを止めた。

ジュステイーヌ

「主より御言葉を賜ります。心して聞いた方が、自分の為です。」

天馬と蓮は檻の前に立ち、イゴールと顔を合わせる。

イゴール

「ごきげんよう、まずは再会を喜ぶとしよう。……蓮、どうやらお前は覚醒を果たした様だな。それも特別な『力』の様だ。これでようやく、更生を進められる。」

天馬

「特別な力？」

蓮

「……………イゴール、いったい何が始まるんだ？」

イゴール

「今はまだ多くを理解しなくても良い。目覚めたペルソナの力、お前にはソレを鍛えて

もらう。ペルソナとは外の事物と向き合う時に現れ出て心を鎧う、言わば『仮面』だ。
蓮、お前には期待しているのだよ？」

蓮

「期待？何の事だ？」

イゴール

「なに、心配しなくていい。時が来れば知る事になる。

………ところで、イセカイナビは気に入って頂けたかね？」

天馬

「イセカイナビ？」

蓮

「………あの妙な目玉のアプリの事か？」

イゴール

「イセカイナビを使えば、現実とパレスとを自由に行き来する事が出来る。蓮、お前を立派な『賊』に仕立てる為に、私がお前達2人に授けたのだ。しかしイセカイナビを活用するのに、お前達2人だけでは心細かろう。お前達にとって有益な者ならば、その者にもイセカイナビをくれてやる。全てはお前がより優れた、賊に育つため………」

蓮

「賊？ いったい何を……………」

ジリリリリリ……………!!

突然、ベルベットルーム内に警報が鳴り響いた。

カロリーヌ

「……………時間だ。せいぜい戻って休憩時間を楽しむがいい。」

カロリーヌがそう告げると、2人の視界が急に暗くなり、2人は意識を失った。

ザザザザザ………

そして再び目を覚ますと、そこはルブランの屋根裏部屋。時刻は4月12日 火曜日の午前7時。外は昨日に続き雨が降っていた。

蓮

「うう………」

天馬

「うくん………」

天馬と蓮は身体を起こし、共にベッドから降りた。

天馬

「おはよう、蓮。」

蓮

「おはよう……………また変な夢を見た……………」

天馬

「蓮も？俺も見たよ。蓮と一緒に牢屋に閉じ込められて、イセカイナビとかパレスとか、よく分からない事ばかり聞かされた……………」

蓮

「俺も同じような感じだ……………まさか、2度も2人揃って同じ夢を……………ん？」

蓮はスマホを見るなり動きを止め、天馬も学校に行く準備をしようと自分の鞆に手を入れた瞬間、動きを止めた。

蓮

「……………もしかして、コレが例のイセカイナビって……………天馬？」

蓮は天馬が固まっている事に気付き声をかける。と、天馬は鞆から何かを取り出し蓮に見せた。取り出したのは、天馬が古城から脱け出した後に迷い込んだ空間で手に入れた、謎の白い銃だった。

蓮

「それは？」

天馬

「城から逃げた後に、妙な蝙蝠が俺に預けたんだ。あのあとルブランに帰るまで鞆の中には入ってなかったのに、今さっき鞆の中を触ったら入ってた。しかもこれ……」

天馬は謎の銃の銃口を、目の前にある古い空き瓶に合わせ引き金を引いた。

バキューン！バリーン！

引き金を引いた瞬間、銃口から白いビームが放たれ、ビームは空き瓶を粉々に砕いた。

蓮

「なっ!?!」

突然目の前で起きた現象に、蓮は仰天し言葉を失った。

天馬

「俺も最初オモチヤかと思っただけだ、触って直ぐに分かった。コレはオモチヤなんかじゃなくて、本物の銃なんだって。」

蓮

「……………しかし、いったい誰がそんな物を？」

天馬

「分からない。でも、蝙蝠は言ってたんだ。このままじゃ俺達の世界は、近いうちに終焉を迎えるって……………蓮、昨日の城の事とさっきの夢の話、もしかしたら何か関係あるかも知れないよ。」

蓮

「関係……………」

Act. 05 / 古城再び!轟け、俺のペルソナ! 《前編》

↓地下鉄銀坐線渋谷駅 ホーム↓

天馬と蓮は部屋中に散らばった瓶の欠片を集めてゴミ箱に捨て、天馬は謎の銃を鞆に戻した。その後共に制服に着替え支度をし、学校に向かうため四軒茶屋駅から電車に乗り、そして渋谷駅で銀坐線に乗るため銀坐線のホームで電車を待っていた。

天馬

「今日は遅刻せずに行けそうだね?」

蓮

「ああ、どうやらダイヤの乱れも解消された様だな。」

「あれ、松風君?」

そこへ、一人の少女が天馬に声をかけてきた。振り向くと、そこにはかすみの姿が。

天馬

「芳澤さん？」

かすみ

「やっぱり！おはよう。」

天馬

「おはよう。もしかして、芳澤さんもこっち側の電車だったの？」

かすみ

「そうだよ。」

天馬の問いにかすみは笑顔で答えた。

蓮

「友達か？」

天馬

「えっ？ああ、同じクラスの芳澤かすみさん。隣の席なんだ。」

かすみ

「初めまして、1年の芳澤かすみです!」

蓮

「俺は2年の雨宮 蓮。天馬のルームメイトだ。」

かすみ

「ルームメイト?」

天馬

「俺と蓮は、四軒茶屋のルブランって喫茶店に居候させてもらってるんだ。」

かすみ

「そうなんだ、何だか楽しそうですね。」

『まもなく電車が参ります。黄色い線の内側に御下がり下さい。』

そこへ蒼山方面へ向かう電車がやって来た。扉が開き、天馬達は他の乗客と共にゾロゾロと電車に乗り込む。

かすみ

「あ、ラッキー!」

運良くかすみは偶然空いていた席に座ることが出来た。と、かすみの目の前には荷物を持ったお婆ちゃんが立っていた。

かすみ

「どうぞ。すぐ降りますから。」

お婆ちゃん

「そう？じゃあ……………」

かすみは席を立ち、お婆ちゃんに席を譲る。

スタツ

天馬・蓮

「あつ……………」

が、お婆ちゃんの隣にいたサラリーマンが席を横取りした。

かすみ

「なんという、身のこなし……じゃなくて。すみません、その席はこちらの……」

Z…z…z…

座つて早々、サラリーマンは寝てしまった。蓮はかすみに「起こそうか?」と訪ねる。
かすみ

「大丈夫です、気持ちは分かりますし。すみません、上手くやれなくて……荷物お持ち
します。」

お婆ちゃん

「ありがとうね、お嬢ちゃん。」

かすみはお婆ちゃんの荷物を預かり、お婆ちゃんは笑顔でかすみに御礼を言った。



く蒼山一丁目駅く

偶然にも天馬達3人とお婆ちゃんの行き先は同じだった様で、一同は蒼山一丁目駅で下車し、かすみはお婆ちゃんに荷物を渡し、天馬と蓮は先に改札の外へ出た。

かすみ

「雨宮先輩！」

と、そこへかすみが2人を追うようにやって来た。

かすみ

「その、さつきは有難うございました！」

蓮

「ヤッキッ！」

かすみ

「電車での事です。気を使って頂いたのに御礼を言わなかったので、先輩に失礼はマズいと思ひまして。」

蓮

「そうか。こちらこそ、態々ありがとう。」

かすみ

「はい!では、失礼します。」

かすみは礼をすると、駆け足で学校に向かった。

天馬

「俺達も行こう。」

蓮

「ああ。」

天馬と蓮も学校に向けて歩き出した。



↳校舎2階 廊下↳

学校には無事遅刻せずに到着し、相変わらず変な噂を耳にしながらも、2人は無事にその日の授業を終えた。そして放課後……

天馬

「あ、蓮！」

3階から降りてきた天馬が2階で蓮を見つけた。が、蓮は何やら遠目で廊下の向こうを見ていた。天馬は蓮の見る方向に目をやると、目線の先には先日蒼山一丁目駅入り口で会った金髪ツインの美少女がいた。

天馬

「あの人、確か昨日の。」

蓮

「アイツは《高巻 杏》。俺と同じクラスの生徒だ。」

蓮の発言に天馬は驚いた。

「よう、高巻じゃないか!」

と、そこへ一階から鴨志田がやって来た。鴨志田は杏を見るなり笑顔を見せるが、杏は何やら嫌そうな暗い顔をしていた。

鴨志田

「帰り乗っていくか?近頃、事件だ何だで物騒だしな。」

杏

「いえ、今日はバイトで用事が。夏の特集号で外せなくて……………」

鴨志田

「おいおい、モデル業も良いが程々にな?体調が悪いと言ってたじゃないか。盲腸の疑いだったかな?」

杏

「仕事が忙しくて、中々病院に行けなくて…」

鴨志田

「親友は練習ばかりで寂しいだろ?悪いと思って誘ったんだが……………ああそうそう例の

転校生、気を付けた方がいいぞ。前歴のある奴なんだから、お前にもしもの事があつたら………」

杏

「ありがとうございます……失礼します………」

杏はその場を離れた。鴨志田は杏の姿が見えなくなると、イラついた顔で「チッ！」舌打ちをし、又しても後ろの天馬と蓮に気付かぬまま3階へと上がっていった。

—————

く正門前く

2人が正門に來ると、竜司が門の側で2人を待っていた。

竜司

「よう、待ってたぜ。」

天馬

「竜司!」

蓮

「どうしたんだ?」

竜司

「昨日の城の事なんだけどさ、あれから何度も夢だつて言い聞かせようとしたけど、やっぱり無理だわ。鴨志田と何か関係あるかもって思ったら、無かった事になんか出来ねえ……こんな話、お前らにしか相談出来ねーしよ、付き合つてくんねえか? あそこが一体何なのか、どうしても確かめてえんだ。」

蓮

「構わないが、どうやって確かめる?」

竜司

「そこなんだよ……まあ確認つたつて、昨日の朝の道順を歩き直してみるくらいだけだな。ただ、ケータイでこの辺調べてみても、ソレっぽい建物の情報無かつたんだよなあ……」

天馬

「ん?……ケータイ?」

その時、天馬はある事を思い出した。夢の中でイゴールが言っていた『イセカイナビ』だ。

天馬

「ひよっとして……………」

天馬はスマホを取り出し画面を立ち上げる。ホーム画面には相変わらず、不気味な目玉のアプリがあった。

天馬

「ねえ、コレ使ってみようよ！」

天馬は蓮と竜にスマホを見せる。

竜司

「なんだ、その目ん玉の…？」

蓮

「ああ、俺と天馬のスマホにいつの間にか入ってたんだ。しかも消しても消えない。」

竜司

「何だそれ? 変なアプリだな……………」

天馬

「俺もよく分からないんだけど、《イセカイナビ》って言うみたい。」

天馬はイセカイナビを立ち上げ履歴を見る。履歴には4つのキーワードが残っていた。

天馬

「鴨志田…秀尽学園…変態…城。間違いない、コレを使えば昨日の城に行けるかも!」

蓮

「竜司、どうする?」

竜司

「こうなったら一か八かだ。天馬、頼む!」

天馬

「分かった。イセカイナビ、起動!」

天馬は前回の履歴を選択し、イセカイナビを起動した。

イセカイナビ

『ナビを開始します。』

ブォーン……………

ナビを起動した途端、辺りの空間が歪み始め、気付けば学校は以前迷い込んだ古城に姿を変えていた。

竜司

「昨日の城だ！ホントに来れちゃった……………って事は昨日のもマジ……………って、蓮お前！」

蓮

「ん？……………なっ!？」

蓮もいつの間にか、秀尽の制服から以前の黒いロングコート姿に変わっていた。

天馬

「また姿が変わってる!？」

竜司

「おい、どうなってんだよ!？」

蓮

「分からない。が……………」

蓮は自分の姿をマジマジと見る。

蓮

「……………なるほど、悪くない。」

竜司

「いや気に入ってんのかい!!」

竜司は思わず蓮に突っ込んだ。

「おいー！」

と、今度は物影からモルガナとグッドストライカーが現れた。

天馬

「モルガナ！グツデイー！」

グッドストライカー

「お前ら騒いでんじゃねえよ！敵に見つかっちゃうだろ？」

モルガナ

「シャドウが急に騒ぎ始めて、もしやと思つて来てみれば……………せつかく逃げのびたのに、また正面から来るとはな……………」

竜司

「なあ、ここつて何なんだよ？どう見ても城だけど、やっぱり学校なのか？」

モルガナ

「ああ、そうだよ。この城は『この城の主』にとつての学校なんだ。」

蓮

「この城の主?」

天馬

「もしかして、鴨志田先生の事?」

モルガナ

「そう、ソイツが歪んだ心の目で見ている学校が、この城って訳さ。」

『うわあああああああ!!』

突然、城の中から叫び声が聞こえてきた。

天馬

「今の、もしかして……………!」

モルガナ

「ああ、捕まってる奴隷だろう。」

竜司

「昨日、俺ら以外にも捕まってるのを見た……………多分ウチの生徒だ。」

グッドストライカー

「大方、城主カモシダの命令だろうよ。ここじや毎日こうさ。いい加減ウンザリするぜ……………」

モルガナ

「ましてや昨日、お前らに逃げられたからな。さぞ荒れてんだらうぜ？」

竜司

「あのヤロウ……………!!」

ドンツ！

竜司は怒り、城の大扉にタツクルした。

竜司

「ぎげんなよ鴨志田ア!!」

モルガナ

「バカ、そんなんで開くかよ……………」

グッドストライカー

「けど、どうやら訳有りっぽいな。」

竜司

「…なあ、お前らならこの声の連中のとこ、分かるか?」

グッドストライカー

「それってつまり、連れて行けって事か?」

モルガナ

「そうだなあ………コイツらも一緒なら、案内してやらんでもない。どうする?」

モルガナは天馬と蓮を見てそう言う。天馬は迷わず「行こう」と言い、蓮も首を縦に降った。

モルガナ

「よし、いいだろう!我輩について来い!」

モルガナはそう言うと、蓮達を以前脱出で使った換気口の真下に案内した。

天馬

「……って、確か前に脱出で使った。」

グッドストライカー

「ああ、換気口だ。正面から入らないのは、怪盗の基本だぜ？」

蓮

「カイトウ？何の事だ？」

モルガナ

「まあ、我輩がすっかり仕込んでやる。それじゃ行くぞ！」

一同は辺りに落ちていた樽を足場にし、換気口から古城の物置に侵入した。

竜司

「相変わらず不気味なトコだぜ……………」

モルガナ

「いいか？我輩達の案内通りにするんだぞ？」

一同はモルガナを先頭に、城内の潜入を始めた。

竜司

「あのさ……………」

移動中、竜司は蓮と天馬に話し掛ける。

竜司

「悪いな、結局巻き込んでしまったさ……………けど、鴨志田の野郎が好き勝手しやがるの、どうしても許せねえんだ!ありがとな、付き合ってくれて。恩に切るぜ!」

—————

↓古城1F 中央ホール↓

少しして、一同は中央ホールにやって来た。

竜司

「えっと、ここは確か最初に正面から入った……………」

ズオン……………

突然、景色が歪み学校の風景が一瞬だけ見えた。

天馬

「えっ?」

蓮

「今、一瞬だが学校の風景が……………」

モルガナ

「だから言ってるだろ?ここは『お前らの学校』なんだよ。まあでも、長話してる余裕はないぜ?早く来い!」

一同は中央ホールを抜け、地下に続く階段を下り地下監獄に向かった。だが着いて早々一同は気づいた。昨日まで居た囚人の姿が何処にも無かったのである。

竜司

「どういう事だよ!?!何で誰も居ないんだよ!!」

モルガナ

「うーん、こりや移送された可能性があるな。」

ガシヤツ……………ガシヤツ……………

遠くから複数の足音が近づいてくる。

蓮

「足音が近づいてくるぞ。かなりの数だな……………」

グッドストライカー

「今見つかると面倒だぜ?どうする、モルガナ?」

モルガナは辺りを見回す。すると、前方に妙な扉を見つけた。

モルガナ

「一先ずあの部屋に入ってやり過ぎそう。」

モルガナの指示で一同は謎の部屋に入った。部屋の中は松明の灯りで照らされ、木製のテーブルと椅子が置かれていた。

モルガナ

「よし、此処ならシャドーも来ないだろう。」

天馬

「何で分かるの？」

モルガナ

「ここだけ歪みが少ない。つまり、主の支配が弱い場所って事さ。」

ズオン……………

突然、一瞬だけ部屋が学校の教室の教室へと姿を変えた。

蓮

「……、もしかして教室か？」

モルガナ

「これで分かったら?ここは、主の心が写し出した『もう一つの現実』なのさ。歪んだ欲望が具現化した異世界、我輩は《パレス》って呼んでる。」

竜司

「パレス?」

蓮

「その言葉、何処かで……………」

グッドストライカー

「要するに学校を『自分の城』だと思ってるから、こっちでは学校が城になってるって訳さ。」

竜司

「何だよそれ?思っただけで、城になったってのか?」

ドンツ!

竜司

「あのヤロウ……………ざけんな!!」

竜司は地面を強く踏みつけ叫んだ。

グッドストライカー

「その様子、お前よっぽどカモシダつてのに恨みがあんだな？」

モルガナ

「何があつたか知らんが、情で突つ走るのは止めておけ？そこらじゅう手下だらけだ。」

天馬

「……………ねえ、蓮のこの格好も、このパレスって世界と関係あるの？」

天馬は蓮の格好を見ながらモルガナに訪ねる。

モルガナ

「ああ、パレスでは何でも主の思い通りに歪んでしまう。それを防ぐには、強い『叛逆の意志』を持つ必要があるんだ。今の姿はその表れ、ソイツ自身が持つ『叛逆のイメージ』だ。」

竜司

「またムズい事言いやがる……………」

難しい話にウンザリする竜司。

竜司

「つーか、蓮の服よりお前らの方が気になるわ!何なんだお前ら!」

グッドストライカー

「オイラは生まれた時からこの姿だけ。モルガナはどうか知らねえけど。」

モルガナ

「もちろん我輩は人間だ!正真正銘、人間様だ!」

竜司

「いや、どつちかつつーと猫だろ?」

竜司はそう言い、蓮と天馬は「うん」と頷いた。

モルガナ

「これは、その…本当の姿を失くしたからだ。多分な…」

天馬

「多分って……」

モルガナ

「だが元に戻る方法は分かってる。ここへ忍び込んだのも下調べのためだ。それに我輩だって、捕まってカモシダに拷問されたんだ！絶対にお礼してやる！」

グッドストライカー

「マンガかよ！マジでイカれてんな……………」

と、モルガナは天馬に目を向ける。

モルガナ

「ところでお前、天馬だっけか？一個聞きたい事があるんだ。」

天馬

「俺に？」

モルガナ

「昨日お前が出したあのチカラ、あれは一体何なんだ？」

蓮

「俺やモルガナと同じペルソナのカじゃないのか？」

モルガナ

「いや、似てはいるがアレは別物だ。」

竜司

「……………そうだ思い出した!雷門中の松風天馬と言やあ、《化身》の使い手じゃねえか!」
竜司が思い出したかのように叫んだ。

蓮

「化身?」

天馬

「昨日俺が出した巨人の事だよ。人の心の強さが気の塊として形になったもので、化身が出せる人は《化身使い》って呼ばれてて、凄いパワーを発揮できるんだ。」

モルガナ

「なるほど、だからか……………化身が人の心の強さが形になったものなら、ペルソナも叛逆の意志という強い心から生まれた存在。つまり、互いに似て非なるモノって訳だ。だからペルソナ使いじゃない天馬がシャドーに対抗できたのも、これで納得がいく。」

そう言うと、モルガナは再び蓮と天馬に目を向ける。

モルガナ

「今後はお前達のチカラをアテにさせて貰うぜ？」

竜司

「なーに、お前らにだけ苦勞はさせねえよ！」

と、竜司はポケットからあるモノを取り出し蓮に見せた。

天馬

「えっ!？」

蓮

「これは!？」

取り出したのは銀色のハンドガン………を精巧に模したモデルガンだった。

竜司

「一応持ってきたんだ。つつても、音しか出ないモデルガンだけだな。」

モルガナ

「オモチャじゃねえか!」

天馬

「でも、凄く本物っぽいよ!脅しくらいには使えるんじゃないかな?」

竜司

「だろ?あと傷薬も幾つか持ってきた。『備えあれば…』ってヤツだ。」

蓮

「ありがとう、使わせてもらおうよ。」

蓮は竜司からハンドガンと傷薬を受け取った。

竜司

「あと悪い。これしか持ってねえから、天馬の分ねえんだわ…」

天馬

「大丈夫。俺も銃持つてるよ。」

と、天馬は鞆から例の謎の銃を取り出した。

竜司

「何だ、そのヘンテコな銃は？」

モルガナ

「コッチは完璧オモチャだな……………」

グッドストライカー

「……………んんっ!？」

突然、謎の銃を見たグッドストライカーが驚いたかのように目を見開いた。

グッドストライカー

「おい天馬！その銃、いったい何処で手に入れたんだ!？」

天馬

「えっ?」

蓮

「もしかして、この銃について知ってるのか？」

グッドストライカー

「ああ、ソイツは《VSチェンジャー》。オイラの世界に存在する不思議な宝物、《ルパンコレクション》の1つだ!」

竜司

「オイラの世界? どういう事だよ?」

グッドストライカー

「オイラは、お前達の住む世界とは別の世界の存在なんだ。だがある日どういう訳かオイラは何故か、気が付けばコッチの世界に来ていたんだ。」

モルガナ

「で、宛もなくさ迷っていたところで我輩と出会い、コッチに来た理由を探る次いでに我輩の調査に協力してもらってたんだ。」

竜司

「別の世界から来たって……いや、そもそも喋る猫やメカが居る方がありえねえか……」

竜司が呟き、モルガナとグッドストライカーは「喧嘩売ってんのか!？」と突っ込んだ。

蓮

「そのルパンコレクションって言うのは、いったい何なんだ？」

グッドストライカー

「ルパンコレクションってのは、オイラの世界の大快盗《アルセーヌ・ルパン》が集めていた不思議な力を持った宝物の事だ。扱い方によっては世界を滅ぼすことも出来るが、人間が扱う事は出来ない代物でもある。で、オイラとそのVSチェンジャーは、アルセーヌがルパンコレクションを人間でも扱えるように改造したモノなのさ。」

天馬

「そうなんだ。」

グッドストライカー

「でだ、お前いったい何処でソイツを手に入れたんだ？」

天馬

「昨日、城から抜け出した後に、変な蝙蝠から預かったんだ。で、元の現実に戻った時は無かったんだけど、今朝鞆の中を見たら入ってて……………」

モルガナ

「変な蝙蝠？」

天馬

「何か、『君は今、とあるゲームに巻き込まれている。ゲームに打ち勝ち、世界を救うのだ。』って言ってた。」

グッドストライカー

「ひよつとすると、オイラがコツチに来たことと、天馬にVSチェンジャーを預けた変な蝙蝠つてのには、繋がりがあつぽいな。」

竜司

「……………ああもう、めんどくせえ!難しい話は止めて、さつさと先行こうぜ!」

モルガナ

「そうだな、今は潜入を再開するのが先だ。準備を済ませたら先に進もう。」

Act. 05 / 古城再び！轟け、俺のペルソナ！《後編》

秀尽学園 中庭

天馬達が鴨志田のパレスに居る頃、秀尽学園の中庭には2人の生徒が居た。1人は先ほど鴨志田の誘いを断った高巻 杏。もう1人は焦げ茶色の瞳と黒髪ポニーテールの少女。女子バレー部員の1人であり、杏の中学時代からの親友《鈴井 志帆》。

志帆

「……………」

志帆は何故か暗い表情を浮かべていた。

志帆

「上手く眠れなくて……………目をつぶると色々考えちゃうんだ……………」

杏

「志帆……………」

志帆の表情を見て、心配する杏。

志帆

「全国大会近いから、考えちゃうんだ。私なんかが、スタメンなんて……………」

杏

「実力が認められてるんだよ!志帆、誰よりも練習頑張ってたじゃん!大丈夫、自信持つて!」

志帆

「……………ありがとう。私、バレーしか出来ないから……………」

杏

「それよりさ、ケガ、大丈夫?けっこう腫れてたけど……………」

志帆

「大丈夫だよ、このくらい。大会前だし……………」

と、そこへ一人の男子生徒がやって来た。男子生徒は藍色の髪に茶色の瞳、そして顔

中には多くの傷があった。

男子生徒

「鈴木、その…話し中に悪い。鴨志田先生が、呼んでる……………」

志帆

「えっ?」

志帆は何やら驚いた様な表情を見せる。

志帆

「……………何の、用?」

男子生徒

「さあ……………」

杏

「き、きつとスタメンのミーティングとかじゃない?大丈夫だって!」

志帆

「……………そうだよな?じゃあ、私行くね?」

志帆は立ち上がり、男子生徒と共にその場を後にし、杏は志帆を見送った。

杏

「頑張れ、志帆!」



くカモシダ・パレス 古城 セーフルームく

その頃、パレス内の天馬達は先ほど見つけた部屋《セーフルーム》で、外から聞こえる番兵の会話を盗み聞きしていた。

『奴隷どもはどうした?』

『全員《修練場》だ。今ごろ、盛大に悲鳴を上げてるだろうぜ?』

『侵入者が居るといふ話もある。油断するなよ?』

ガシヤツガシヤツガシヤツ……

番兵達はその場を去つた様だ。

モルガナ

「おい、今の聞いたか?」

竜司

「ああ、修練場つて言つてたな?」

グッドストライカー

「それならオイラに心当たりがあるぜ?今から行くか?」

モルガナ

「よし、じゃあ外に出る前に戦闘の基礎を教えておこう。原則、いつでも不意打ちを狙う。可能な限り背後から狙え。パレスの敵は、主の歪みによって支配されている。その象徴である《仮面》を剥ぎ取るんだ。成功すればどんな敵でも、必ず前後不覚になる。そこを先制攻撃だ。」

天馬

「後ろから不意打ちして、仮面を盗って先制攻撃だね?」

竜司

「……………うし、分かった!じゃあ行こうぜ!」

モルガナ

「竜司、お前は外で見学だ。ペルソナも化身も使えないんだからな。」

—————

く古城B1F 地下牢獄く

一同はセーフルームを出て、グッドストライカーの案内である檻の近くに来た。鉄柵の前には見張りの番兵が立っている。

グッドストライカー

「あそこだぜ。」

蓮

「あの檻の奥が例の修練場って事か。」

モルガナ

「練習相手に丁度良いぜ。行くぞ！」

蓮達は番兵に向かって走り、蓮はジャンプして背後から番兵に跳びついた。

番兵

「な、何者だ!？」

蓮

「正体を見せろ！」

ベリツ！

蓮は番兵の仮面を引き剥がす。すると、番兵は頭に大きな赤い花がある人面花のシャドウ《マンドレイク》へと姿を変えた。

マンドレイク

「アンタたち誰よ!？」

モルガナ

「名乗る必要はない。つてか？」

蓮

「行くぞー！」

ザシユツ！

蓮は右手にナイフを、モルガナはサーベルを装備し、二人同時にマンドレイクを切り裂く。

天馬

「俺も！」

バキユーン！

天馬もVSチェンジャーを構え発砲。放たれたビームはマンドレイクに命中し、マン

ドレイクは消滅した。

天馬

「よっしゃー！」

竜司

「スゲエな、その銃！」

モルガナ

「よし、それじゃ行くぞー！」

蓮は扉を開け、一同は不気味な地下通路を下って行く。すると……

「おい、侵入者らしき者は居たか？」

「いや、まだ見当たらない。」

曲がり角の向こうから、兵士達の話し声が聞こえてきた。物陰から角の向こうを覗くと、二人の兵士が話し合っていた。

モルガナ

「チツ、やっぱ敵が多いな……………あれじゃ、かわすのも無理か……………」

蓮

「どうする?また倒すか?」

モルガナ

「簡単に言うなよ、まだ先は長いんだ。スタミナは温存しておきたいだろ?」

竜司

「くそつ、俺にも戦う力がありや、少しは手伝えんのかなあ……………天馬みたいに化身とか武器とか持つてねえし、持つてるのはオモチャだけだし……………」

モルガナ

「オモチャ?さっきの銃か?」

竜司

「の、オモチャだ。見た目ソレっぽいだけで弾も出ねえ……………」

モルガナ

「ソレっぽい……………そうか、その手だ!!」

モルガナは何か思い付いたのか、咄嗟に曲がり角の先へ向かう。

蓮

「おいモルガナ!？」

蓮達もモルガナを追うが、向かう先には兵士達が。

「ムッ? 誰だ!？」

モルガナ

「天馬、そのVSチェンジャーで奴らの仮面を撃てるか?」

天馬

「やってみるよ。」

天馬はVSチェンジャーを構え、兵士達の仮面に向けて発砲。

バキューン! バリーン!

放たれたビームは見事仮面に命中し、仮面は粉々に砕け、兵士達はカボチャお化けのシャドウ《ジャックランタン》へと姿を変えた。

天馬

「やった!」

モルガナ

「蓮、さっきの銃ちゃんと持ってるか?ソイツを敵に向けて撃ってみろ!」

蓮

「これをか?しかし、弾も出ないと……」

モルガナ

「いいから騙されたと思って撃て!我輩の狙いが正しければ、きっと大丈夫だ!」

蓮は先ほど竜司から受け取ったモデルガンを右手に持ち、ジャックランタンに銃口を向け引き金を引いた。

バキューン!

すると、銃声と共にモデルガンから銃弾が放たれジャックランタン一体に命中。そしてジャックランタンは消滅した。

蓮

「ナニツ!？」

モルガナ

「思った通りだ！よし、じゃあ我輩も！」

パチン！

そう言うと、モルガナは何処から出したのかパチンコを左手に持ち、もう一体のジャックランタンに向けて弾を放つ。弾はジャックランタンの頭部に命中し、ジャックランタンは消滅した。

モルガナ

「よし、決まった！」

竜司

「い、今確かに弾出たよな? いったいどうなってやがんだよ!」

竜司は混乱していた。先ほど蓮が使っていたのはモデルガン。なのにいざ使えば何故か銃弾が放たれたからだ。

モルガナ

「さっきも言ったが、ここは認知の世界だ。相手が対象を本物と認知する限り、それは本物になるって事さ。」

天馬

「……………つまり、敵はそのモデルガンを本物と思い込んでるから、銃弾が出たって事?」

モルガナ

「そう言う事だ。幸い、見た目だけはリアルだからな。」

竜司

「……………よくわかんねえけど、つまり俺のモデルガンが役に立ったって事だよな?」

竜司の問いに、蓮は笑顔で頷いた。

モルガナ

「ああ、お陰で戦術の幅が一気に広がった。偶然だろうが、よくやったぜ！」

竜司

「お前、何で上からなんだよ……………」

—————

く修練場前く

一同は更に奥へと進み、修練場の入口と思われる扉の前についた。

蓮

「ここが修練場か。」

扉の上にはピンクで“鴨志田愛の修練場”と大きく書かれた横断幕が架けられていた。

竜司

「愛の修練場だあ?ふざけやがって…!」

天馬

「とにかく、入ってみよう。」

一同は扉を開け修練場内に侵入。すると入って早々、何やら叩くような音と叫び声と呻き声が聞こえてきた。

グッドストライカー

「おい、奥から何か聞こえるぜ?」

蓮

「行ってみよう。」

一同は慎重に修練場の奥へと進む。すると、前方に大きな檻を発見した。恐る恐る檻の中を覗くと……………

天馬

「ええっ!？」

蓮

「っ!？」

竜司

「な、何じゃこりゃ!？」

檻の中では、全員同じユニフォームを着た奴隷達が番兵から酷い拷問を受けていた。

天馬

「これが、修練場……？」

グッドストライカー

「あり得ねえ……どう見ても拷問場じゃねえか！」

蓮

「酷いな……」

竜司

「あのヤロウ……くそ過ぎんだろ!？」

「や、やめろ……………」

突然、一同の前に傷だらけの奴隸二人が現れた。奴隸は酷く怯えている様だ。

奴隸1

「放つといってくれよ……………逆らったって無駄なんだし……………」

奴隸2

「大人しくしてれば、お前らみたいに処刑される事は無いんだ。だから頼むよ……………」

奴隸二人はそう言うのと静かに去っていき、二人の話を聞いた一同は驚いた。特に竜司は。

竜司

「なあ、今のどういう意味だよ?好きでそこに居るつてのかわよ!」

天馬

「このままに出来ないよ!何処か出入口が無いか探そう!」

天馬の言葉に、蓮、竜司、グッドストライカーは頷いた。だが直ぐ、モルガナが待ったをかけた。

モルガナ

「止めておけ。助けたい気持ちは分かるが、ソイツら助けても意味無いぞ?」

蓮

「どういう事だ?」

モルガナ

「ソイツらはこのパレスの主、つまりカモシダが認知してるだけの人間。簡単に言うなら、現実に居る本物とソツクリの人形ってトコだ。お前らと違って、現実から入り込んだ訳じゃない。」

天馬

「そ、そうなんだ……………」

竜司

「つたく、ややこし過ぎるつつの!」

モルガナの説明で納得した一同は、再び檻の中に目を向ける。

モルガナ

「しっかし、こりゃ酷いなあ……現実でも奴隷扱いつて事だろ?」

竜司

「現実でも?」

その時、竜司は思い出した。奴隷達が着ているユニフォームの正体を。

竜司

「こいつら、全員バレエ部だ!鴨志田が顧問の!」

天馬

「ひよっとして、現実でもバレエ部は鴨志田先生から暴力を受けてるって事?」

モルガナ

「そうなんじゃね?だってこれ、カモシダが奴隷だつて思ってる事だろ?」

竜司

「あり得ねえ話じゃねえ。あくまで噂だが、鴨志田には体罰の噂があるんだ。」

グッドストライカー

「マジかよ!?!もし本当なら、普通に警察沙汰だぞ!?!」

竜司

「……………よし、コイツら写真にして証拠にしてやる!」

竜司はそう言つてスマホを取り出し、カメラアプリを起動しようとする。だが、何故かカメラが起動しない。

竜司

「あれ、動かねえ?」

天馬と蓮もスマホを取り出しカメラアプリを起動しようとするが、やはり何故かカメラが起動しない。いや、カメラどころかイセカイナビ以外のアプリ全てが動かなくなっていた。

蓮

「俺のもダメだ。」

天馬

「俺も。ナビは動くみたいだけど、他は全部ダメみたい。」

モルガナ

「ナビ?」

蓮

「ああ、俺達はナビでこっちに來たんだ。」

竜司

「仕方ねえ、こうなったら此処にいる全員の顔覚えて帰つてやる!」

こうして、一同は竜司に奴隷達の顔を覚えさせるために修練場内を走り回った。修練場内では他にも、水を与えずロードランナーの上を延々と走らされてる者達や、宙吊りにされて大砲から発射されるバレーボールを何度もぶつけられる者も居た。

竜司

「……………OK、連中の顔全部覚えてたぜ!」

モルガナ

「急いでズラかるぞ!」

一同は急いで修練場を離れ、城から脱出するため地上へと走る。

—————

く古城 中央ホールく

何とか中央ホールへ戻ってきた一同だが、中央ホールにはパレスの主《シャドウ鴨志田》と、黄金の鎧を纏った番兵の隊長らしきシャドウが待っていた。

シャドウ鴨志田

「また貴様らか……過ちを二度も繰り返すとは、救い難いな!」

天馬

「鴨志田先生……いや、先生のシャドウ!」

竜司

「鴨志田、学校はテメエの城なんかじゃねえ!」

蓮

「悪いが修練場の光景は拝見させてもらった。」

竜司

「アイツらの顔も、全員バツチリ覚えてたぜ。観念すんだな!」

強気に言う竜司に対し、シャドウ鴨志田は落ち着いていた。いや、それどころか怪しい笑みすら浮かべていた。

シャドウ鴨志田

「負け犬ほどよく吠えるとは心理らしいな。陸上部のエースも落ちたモノだ………暴力騒ぎを起こし、仲間の夢を潰した『裏切りのエース』君。貴様の自分勝手の巻き添えになつた連中が、いやはや……可哀想で仕方ない。」

シャドウ鴨志田の放つた言葉に、竜司は少し動揺した。

天馬

「裏切りのエース?」

蓮

「どういう事だ？」

シャドウ鴨志田

「ほう、これは驚いた。知らずに付き合わされてたのか？こんな愚物に付き合わされて死ぬ羽目になるとは、運が無いな。」

ガシヤン！ガシヤン！

番兵隊長は番兵シャドウを召集し、番兵達は一瞬で蓮達の前に立ちはだかる。

番兵

「殺す！鴨志田様の命令で殺す！」

蓮

「仕方ない、やるぞ！」

蓮はナイフ、モルガナはサーベル、天馬はVSチェンジャーを装備し構える。

ドカツ！

だが背後から別のシャドウが現れ、盾で三人を突き飛ばした。

竜司

「っ!?!」

三人は床にうつ伏せに倒れ、番兵達が起き上がれないように上から踏みつける。

グッドストライカー

「お前ら!?!」

シャドウ鴨志田

「どうせ、貴様の思い付きでこうなっちまったんだろ?この俺様に手を上げやがって………臨時とはいえ、陸上部の練習をみてやった恩を忘れたか?」

竜司

「あんなの練習じゃねえ……体罰だ!単にお前が、陸上部が気に食わねえから!!」

シャドウ鴨志田

「目障りなんだよ!実績を上げるのは俺様だけでいい。クビになったあの救えないバカ

監督も、正論言って楯突かなきゃ、エースの脚を潰すだけで済んだものを……もう一本の脚もやってやるか？ どうせ、学校が正当防衛にしてくれるしな。」

シャドウ鴨志田は不気味な笑みで竜司を見る。竜司はその場で膝を付き絶望していた。

竜司

「……………俺、また負けるのかよ……………こんなクズ野郎のせいで走れなくなって……………陸上部も無くなって……………」

蓮

「言われっぱなしか？」

竜司

「っ!？」

突然、蓮が口を開いた。

蓮

「許せないんだろ? 悔しいんだろ?」

竜司

「蓮……………」

シャドウ鴨志田

「そこで黙って見ている。クズを庇って犬死する、救えないクズどもをな。」

グギギ……………」

竜司

「クズはお前だよ……………」

竜司は拳を強く握り、ゆっくりと立ち上がりシャドウ鴨志田を睨んだ。

竜司

「さつきからニヤニヤとムカつく顔しやがって……………確かに俺は救えないクズ野郎だ。でもな鴨志田、人を利用することしか見てないお前の方が、もつとクズだ!!」

竜司はシャドウ鴨志田を指差し、大声で怒鳴る。その時……

『随分と待たされたモノよ……』

ドクンツッ！

竜司

「ツ!?!」

突然、激しい頭痛が竜司を襲い、竜司の頭の中に誰かが語り掛けて来た。

竜司

「ガッ!?!アアアアア!?!」

竜司は激しい頭痛にもがき苦しむ、その場でのたうちまわる。

グッドストライカー

「おい、竜司!？」

モルガナ

「これはまさか!？」

『力が要るんだろう? ならば契約だ。どうせ消しえぬ汚名なら、旗に掲げてひと暴れ。お前の中のもう一人のお前が、そう望んでいる……………』

竜司

「グッ!クツ……………!」

竜司は痛みに耐えながら、ゆっくりと立ち上がる。

シヤキツ!

顔を上げた次の瞬間、竜司の顔にガンメタのドクロマスクが現れた。

『我は汝、汝は我……………覚悟して背負え! これからは、反逆のドクロが貴様の旗だ!』

竜司

「うおおおおおおお!!」

竜司は叫びながら流血と共にマスクを引き剥がす。マスクを引き剥がした次の瞬間、竜司の身体が青白い炎に包まれた。炎が消えると、竜司は赤いマフラーをした暴走族風の黒いライダースーツ姿に変身し、背後には黒い小舟を乗りこなし、髑髏のような顔、右手には大砲を装備した海賊の姿をしたペルソナがいた。

シャドウ鴨志田

「こ、コイツもだと!」

天馬

「あれって!」

蓮

「ペルソナか!」

グッドストライカー

「スッゲー!!」

モルガナ

「こりや驚いた……竜司にも素養があつたとは!」

その場に居た一同は、突然起きた現象に驚き目を見開く。竜司は新しい自分の姿と、自分のペルソナをマジマジと見ていた。

竜司

「コレが俺のペルソナ……コイツはいい!この力がありや、借りが返せる!」

竜司のペルソナは右腕の大砲を蓮達を踏みつける番兵達に向ける。

竜司

「ブツ放せ、《キャプテン・キッド》!!」

竜司のペルソナ、キャプテン・キッドは大砲から雷撃を放ち、番兵達を攻撃。番兵は雷撃を受け消滅。解放された蓮達は急いで竜司のところに集まった。

蓮

「竜司！」

竜司

「おうよ、待たせちまったな。行くぜ！」

「おう!!」

一同は気合いを入れ、シャドウ鴨志田と対峙する。

番兵隊長

「鴨志田様の手を煩わす問題児が！」

番兵隊長は剣を振り下ろし、馬に乗った赤銅の騎士のシャドウ《エリゴール》へ。手下の番兵は黒い二角獣のシャドウ《バイコーン》へと姿を変えた。

竜司

「どうせ鴨志田の認知ってのは変わんねえんだろ？だったら、問題児らしく振る舞って

やるよー!」

エリゴール

「調子に乗るなガキが!!」

エリゴールは槍を構え、バイコーンと共に蓮達に向けて正面から突進してくる。

天馬

「魔神ペガサスアーク!」

ペガサスアーク

『オオオオオオオオオ!!』

天馬はペガサスアークを召喚。ペガサスアークは翼を羽ばたかせ突風を放ち、バイコーンを吹き飛ばした。

蓮

「アルセーヌ!」

さらに蓮が仮面を取り、アルセーナを召喚。

ガンツ！

ペガサスアークとアルセーナは翼でエリゴールの突進を防ぐ。

モルガナ

「意を示せ、ゾロ！」

ドカンツ！

さらに咄嗟にモルガナがゾロを召喚。ゾロはエリゴールを殴り跳ばし、エリゴールは先ほど吹き飛ばされたバイコーン集団のところまで跳ばされた。

ドーン！

さらにキャプテン・キッドが雷撃を放ち追い打ち。雷撃を受けたバイコーン達は消滅

し、エリゴールにも絶大なダメージを与えた。

竜司

「ヨツシヤ!!」

グッドストライカー

「いいじゃんお前ら!よし、フィニッシュはオイラに任せな!」

グッドストライカーはそう言うのと自身の機首と翼を畳み、飛行機から自動車形態へと変形し天馬の手元へ落ちた。

グッドストライカー

「オイラをVSチェンジャーにセットしろ!そうすれば必殺技が撃てるぜ!」

天馬

「ホント?よし、分かった!」

天馬はペガサスアークを自身の身体に戻し、VSチェンジャーを左手に持ち、グッドストライカーを銃身にセット。

『グッドストライカー!』

グッドストライカー

「突撃よーい!」

更に黒いグリップを握り、銃身を左へ90度回す。

『一致団結!』

天馬はVSチェンジャーを両手で握り、照準をエリゴールに合わせる。銃口にエネルギーが充填され、エネルギー弾が形成され始めた。

エリゴール

「おのれ……………」

エリゴールはゆっくりと立ち上がり、再び攻撃の準備に入る。

蓮

「させるか!」

竜司

「いくぜ!」

ドカツ!バキツ!ドンツ!

だが蓮・竜司・モルガナが咄嗟に走り出し、蓮はナイフ、竜司は鉄パイプ、モルガナはサーベルでエリゴールに総攻撃。

天馬

「いつけえええ!」

『イチゲキ!ストライク!』

ズドーン!

そしてエリゴールがダウンした隙に天馬が巨大なエネルギー弾を発射。エネルギー弾はエリゴールに命中し、エリゴールを巨大な球体に閉じ込めた。

エリゴール

「な、何故だ？ 鴨志田様の臣下であるこの私が、何故敗北を!？」

竜司

「んなの、鴨志田が大したことないからに決まってるだろ？」

エリゴール

「おのれ……………鴨志田様、申し訳ございません!」

ドカーン!

巨大な球体と共にエリゴールは爆発し消滅した。

竜司

「はあ……………はあ……………よっしや!」

蓮達はペルソナを仮面に戻し、天馬はグッドストライカーとVSチェンジャーを分離させ、一同はシャドウ鴨志田を見る。シャドウ鴨志田は相変わらずニヤついた顔をして余裕を見せていた。

竜司

「どうだ!今さら謝つても許さねえからな?」

シャドウ鴨志田

「俺様が謝るだど?何を馬鹿な事を……………」

「鴨志田様あゝ♥」

と、そこへ甘い声と共に一人の少女がやってきた。

天馬

「えっ?あの人は!?!」

蓮・竜司

「高巻?!」

モルガナ・グッドストライカー

「うおお!!」

現れたのは、猫耳にビキニ姿の杏だった。天馬・蓮・竜司は驚き、モルガナとグッドストライカーは驚きと共に興奮していた。

モルガナ

「ニヤンて、ニヤンて綺麗な女の子なんだ!!」

グッドストライカー

「しかもあの身体、正にセクシィ・ダイナマイト・ボディだぜ!!」

竜司

「んな事言ってる場合かよ!何で高巻が此処に!?!」

シャドウ鴨志田はまるで猫を撫でるかの様に、杏の顎を撫で始める。

シャドウ鴨志田

「ここは俺様の城。俺様が何をしても許され、誰もが俺様に気に入られたいと願う場所。お前らの様な、頭の悪い賊以外はな!」

蓮

「……………何か様子がおかしい。」

モルガナ

「おそらくあの子も、奴隷と同じく鴨志田の認知上の存在だろう。本人じゃない。」

シヤドウ鴨志田

「羨ましいか? まあ、お前らの様な問題だらけの不良には女は依って来ないだろうがな。」

ガシヤン! ガシヤン! ガシヤン!

と、突撃何処から途もなく番兵達がウジャウジャと現れ始めた。

天馬

「マズイ、ここままじゃ囲まれるよ!?!」

モルガナ

「仕方ない……………ここは一旦撤退だ！急げ！！」

竜司

「くそっ……………いつか絶対、その化けの皮剥いでやる！首洗って待つてろ！」

ズドーン！ガシャーン！

竜司は散弾銃を装備し、天井に向けて発砲。シャンデリアを吊るすロープが切れ、シャンデリアは番兵達に落下し煙を上げる。そして煙が消えると、天馬達は姿を消していた。

シヤドウ鴨志田

「逃げたか……………いいだろう、丁度此処の連中はいたぶり飽きてたところだ。いつでもかかって来い！命が惜しくないならな！！」

—————

く古城 正門前く

一方、姿を消した天馬達は正門前に居た。

グッドストライカー

「OK、上手くまいたみたいだぜ。」

竜司

「……………つか、何なんだよこの格好!着替えた覚えねえぞ!」

竜司は自分の姿に混乱していた。

天馬

「中々似合ってるよ?」

蓮

「賊というより、族ツポイな。その格好といい鉄パイプといい。」

竜司

「うるせえ!つか、マジで何なんだコレ?このマスク、ドクロか?」

モルガナ

「前に言っただろ？パレスの主に敵視されると、ペルソナ使いはそうなるんだよ。具体的な格好は、お前の内面の現れだ。お前に眠る反逆者の……って、言っても分かんねえか？」

竜司

「すまん、分かんねえ……」

モルガナ

「ならイチイチ聞かずに、自分の身に起きた事は受け入れとけ！」

天馬

「……ねえ、俺達こつちで色々やってるけど、まさか現実で鴨志田先生にいたぶられたりとかって……」

モルガナ

「それなら大丈夫だ。現実の鴨志田は、こつちの世界の事は知り得ない。シャドウってのは元々、抑圧されていた本性。人が日ごろ目を背けてる人格だからな。」

グッドストライカー

「昨日の処刑の話も、本人は覚えてなかった筈だぜ？」

竜司

「そうか、なるほどな！じゃあ、後やることは……」

モルガナ

「待て。約束通り道案内してやったんだ。今度は我輩に協力してもらおうぞ?そのために色々クソ丁寧教えてやったんだからな。」

蓮

「協力?」

モルガナ

「言わなかったか?我輩は元々、調査のために此処へ来たんだ。この身が受けた歪みを消し去り、真の姿を……………」

竜司

「何勝手に話進めてんだ?付き合うなんて一言も言つてねえぞ?」

モルガナ

「えっ?」

竜司が突撃眩いた事に、モルガナはキョトンとした。

モルガナ

「……………まさか、タダで世話になろうつてんじゃないよな!?特にお前とお前、もう既に我

輩のプランの一部なのだが!？」

モルガナは蓮と天馬を見て訴える。

竜司

「コッチは忙しいんだよ!」

と、竜司はしゃがんでモルガナの頭を撫でる。

竜司

「世話になったな。お前、中々ガッツのある猫だったぜ。またどつかでな!」

そう言うと、竜司は走り去った。

天馬

「ちよ、ちよつと竜司!？」

蓮

「その、何だ……お前のプランに乗るかどうかは考えておく!じゃあな!」

天馬と蓮も慌てて竜司を追い掛けた。

グッドストライカー

「あーら、行っちゃまった……」

モルガナ

「ちよ、ねーわ!マジねーわ!何イイ話風に纏めてんだコラ!」

パレス中にモルガナの叫び声が響いた。

モルガナ

「ねーわ!!ねーわ!!ぬえええーわあああーツ!!」

Act. 06 / 証人探し！体罰の真実を暴け！

秀尽学園 正門前

モルガナと別れパレスから脱出した3人は、気付けば秀尽学園の正門前路地に居た。

天馬

「よかった、戻ってこれた！」

竜司

「その、悪かったな二人とも。今日は振り回しちまったみたいで……………」

竜司は今回の件を謝罪し、蓮は「気にするな。」と笑顔で言った。

竜司

「ふう……………てか、マジ疲れたわ……………お前ら平気なわけ？」

天馬

「いや、俺もかなり……………」

蓮

「俺もだ……………」

と言つて肩を落とす3人。だが顔に疲れが見える天馬と竜司に対し、蓮は全く疲れた顔をしていない。

天馬

「蓮つて、顔に出ないタイプなんだね？」

竜司

「それよりさ、マジだったらおもしろえ事になるぜ？ 鴨志田が奴隷扱いしてる奴らの顔、俺バツチり覚えたから。ソイツら探して体罰の事吐かせりや、鴨志田も終わりだろう。体罰の証人探し、手伝ってくれるよな？」

竜司は蓮と天馬に協力を仰ぐ。

天馬

「俺は構いませんけど……………」

蓮

「中々骨が折れそうだな……………」

竜司

「今までのバケモノに比べりゃチヨロいもんだろ？……………あと蓮、協力してくれるかどうかは別で、これだけは聞いてくれ。」

と、竜司は突然先程とはうって変わって真剣な目を向ける。

竜司

「前歴あるから大人しくしとけって言われてんだらうけど、意味ないぜ？もう学校中に知れ渡って、変な噂やレッテル貼られ放題だからな。」

天馬

「確かに、今日も蓮の噂話してるところ見たよ……………」

蓮

「一体、何故そんなことに？」

竜司

「鴨志田がバラしやがったんだ……………!」

竜司の発言に、二人は驚いた。

蓮

「まさか、教師がやったって言うのか!？」

竜司

「即バレなんて、教師以外にありえねーだろ? 野郎は気に入らない奴が居れば、生徒でも部でも教師でも平気で潰しやがるんだ。俺の時みたいに……………」

天馬

「そんな……………」

竜司

「あと天馬、お前の噂の原因も恐らく鴨志田だ。」

竜司の言葉に二人は又しても驚いた。

竜司

「お前、サッカー部が急な掌返しして入部取り消されたんだろ？恐らく、お前がサッカー部に入るのを阻止するために、鴨志田がデタラメな噂を学校中にばら蒔いたんだ。」

天馬

「そんな……………」

竜司

「……………俺の言うことなんか、誰も真面に取り合ってくれねえ。でも、体罰の噂は本当かも知れねえ。それに実際、鴨志田の歪んだ心つての見たら、それこそ放っておけねえだろ!？」

蓮

「確かにその通りだ……………よし分かった、体罰の証人探し付き合ってやる。」

天馬

「俺も手伝うよ、竜司!」

竜司

「おうよ!頼りにしてるぜ、蓮!天馬!」

二人が協力してくれる事になり、竜司は大いに喜んだ。

グウウウウ

と、三人の腹の虫が同時に鳴いた。辺りは薄暗く、夕暮れ時を迎えていた。

天馬

「そういえば、もう夕飯の時間だね……………」

竜司

「ここで解散つてのも何だし、3人で何か食いに行こうぜ?つかぶっちゃけ、お前らの昔話とか聞きたいし。」



く 渋谷セントラル街 牛丼屋く

二人は竜司に誘われ、渋谷セントラル街にある牛丼屋で牛丼を食べた。牛丼を食べながら、蓮は以前天馬に話した自分が秀尽に来るまでの経緯を竜司に話した。

竜司

「はあ!?! なんだよそれ、ソイツくそ過ぎんだろ!?!」

蓮

「落ち着け竜司。」

竜司は怒りの声をあげては拳を握りカウンターを強く打つ。蓮は竜司をあだめ、竜司は少し落ち着いた。

竜司

「聞いているだけで腹立ってくるぜ……………ほんで、地元からこっちに居候して、天馬と相部屋って訳だ。」

竜司は牛丼を平らげ、満腹になりようやく落ち着いた。

竜司

「……………何だろう、俺らって性根が似てんのかな?」

蓮

「そっちは何を?」

竜司

「流石にお前みてえに前はねえよ……つか、そこじゃねえよ。」

蓮の質問に竜司は突っ込んだ。

竜司

「周りから厄介モン扱いされて、居場所無いところ? 俺もよ、前に学校でヤラかしちまってな……」

蓮

「竜司……」

竜司は何処と無く悲しい表情を浮かべていた。

竜司

「お前ら、確か四茶から来てんだっけ? 地下鉄は丁度これからラッシュで混むから、時間ずらした方が良いぜ?」

と、竜司は突然天馬と蓮の牛丼に紅しようがを入れ始めた。

竜司

「明日、奴隷にされてた奴ら探して話聞こうぜ。」

天馬

「確か、明日は球技大会だったよね？」

竜司

「ああ、鴨志田推薦のバレー大会とか胸クソ悪いけどな……でもお陰で午後から授業ねえから、みんな浮かれてる。ウロついてても気付かれにくい筈だぜ？」

蓮

「取り敢えず、詳しい話は明日にしよう。」

竜司

「……………そうだ、せっかくだし連絡先交換しようぜ？あと、チャットのIDも。」

3人は各々スマホを手に取り、竜司と連絡先を交換した。

竜司

「じゃ改めて、明日から頼むぜ? 二人とも!」

と、竜司は二人の牛丼に紅しようがを入れ続ける。

蓮

「ところで、さつきから何してる?」

竜司

「気にすんなよ、協力の礼だ! 明日に備えてガンガン食って、体力付けようぜ!」

天馬

「あー、でも………」

竜司

「まあまあ遠慮すんなよ! ショウガなら沢山あるからよ!」

「ショウガはタダだから意味ないぞ」と言いたかったが、せっかくの好意を無にする訳にもいかず二人はそつと堪えた。



ベルベットルーム

夜、ルブランに戻り眠りに着いた天馬と蓮は、夢の中でベルベットルームに呼び出されていた。

イゴール

「今宵はいつぞやの話の続きをと思つてな、呼び出させてもらった。どうだ二人とも、この場所には慣れてきたかね？」

天馬

「正直、まだ少し慣れませんね……」

蓮

「俺もだ。」

イゴール

「うかれた日常からここへ戻る事には、中々抵抗があるだろう。だが、慣れてもらわねばならぬ。」

蓮

「それで、話の続きとは何だ？」

イゴール

「うむ……今日、お前達は同じペルソナの力に目覚めた隣人と、協力の約束をしたな？」

蓮

「隣人……竜司の事か？」

イゴール

「他者と関わろうとする事は、更正にとって重要な足がかり。大いに結構だ。だが勘違いするな、馴れ合って友になれと勧めているのでは無い。」

天馬

「どういう事ですか？」

イゴール

「生半な友情ではない、美学や信条によってお前達に力を貸さんとする者達の輪……：……：言うなれば居場所を奪われた者共との絆だ。その広がり、ひいてはお前達自身を育むことになろう。」

ジュステイーヌ

「ペルソナは心の力……貴方達を取り囲む絆が強くなれば、それだけペルソナも力を得るでしょう。」

カロリーヌ

「街には非力なお前達には無い才覚を持った者が数多く居る。せいぜい知恵を絞って味方に付けるがいい。その者達とお前達との絆を、我々が力に変えてやる。」

イゴール

「無論、この私ですら利用する心構えで無ければ、お前達の大義は果たされん。どうする？」

イゴールは蓮と天馬に問う。2人は黙ったまま答えなかつたが、イゴールは2人の表情から答えを察した。

イゴール

「フフツ、契約成立だな。今はまだ完全に理解出来ないだろうが、まあ案ずるな。時が経てば、自ずと飲み込めよう。引き続き更正に励むがいい……」



秀尽学園 体育館

翌日、4月13日 水曜日の午後。

秀尽学園の体育館では、鴨志田推薦のバレーボール大会が行われていた。現在は鴨志田率いる先生チームと学生チームによる試合の真っ最中。生徒達は全員、赤いジャージを身に付けている。

鴨志田

「ソイヤー!」

バンツ!

男子

「グハッ!」

だが突然、鴨志田の放ったサーブが学生チームの男子生徒の顔面を直撃。男子生徒は倒れ気絶してしまった。

鴨志田

「すまん！大丈夫か？」

鴨志田は直ぐ男子生徒のところへ向かい、保健委員を呼んだ。

蓮・竜司・天馬

「……………」

他の生徒達と鴨志田が男子生徒を心配する傍ら、試合を見物していた天馬達3人は感付いていた。あのサーブは偶然ではなく故意……………つまり、鴨志田はワザと男子生徒にボールをぶつけたのだと……………

竜司

「……………おこい。」

竜司が蓮と天馬に静かに声をかける。蓮と天馬は静かに首を縦に振り、3人は静かに体育館から外に出た。

~~~~~

〜中庭 休憩スペース〜

球技大会を抜け出した3人は、中庭の休憩スペースに居た。

竜司

「あの野郎、現実でも王様気取りつて訳か……何が親睦だあ? テメエが目立つためのワンマンショーじゃねえか! 三島のこと心配するフリしやがって、体罰上等のクソ教師が……」

ついてから小声でブツブツと呟く竜司。

竜司

「……………まあいい。今のうちに、昨日奴隷になってた奴ら探しに行こう。今日はバレエ部、全員来てる筈だ。」

天馬

「それで、何処から探す？」

竜司

「パツと思いついたのは2年D組、蓮のクラスの奴だ。だからD組から行こう。」

蓮

「すんなり聞き出せるといいが……………」

竜司

「そこなんだよなあ、問題は……………」

—————

く2年D組く

2年D組に到着して早々、3人は顔中に傷を負ったバレエ部員を見つけた。

竜司

「アイツだ。」

天馬

「酷い怪我……サッカーの練習でも、あそこまで酷い怪我は滅多にしない筈だけど……」

蓮

「ただの練習の怪我とは思えないな……よし、早速聞いてみよう。」

3人は教室に入ると、蓮がバレー部員に声をかけた。

バレー部員

「何だよ……つか、球技大会サボり? 流石、噂の転校生だな……俺に何か用か?」  
蓮

「随分と酷い怪我だが、何かあったのか?」

蓮が怪我について伺うと、バレー部員は動揺し始めた。

バレー部員

「ぶ、部活でだよ！関係無くね？」

竜司

「鴨志田のせいじゃねえのか？」

竜司の一言に、バレー部員は反応した。

竜司

「なあ、証人になってくれよ。鴨志田の体罰のさ。」

バレー部員

「い、意味分かんないんだけど……………」

竜司

「隠すなつて。別にチクつたりしねえから……………」

バレー部員

「わけ分かんね……………つか、もう放つといってくれよ！」

結果、1人目は頑なに拒否され終わった。

-----

く教室棟 廊下く

3人は一旦教室を離れ、廊下の端に集まった。

竜司

「あの怪我、どう見ても普通じゃねえだろ!?!それでも認めねえつてか!?!」

天馬

「参ったなあ、この調子じゃ球技大会が終わっちゃうよ……」

蓮

「仕方ない、ここからは3人で手分けしよう。」

蓮の提案に2人は賛成し、竜司は実習棟、蓮は3年生、天馬は1年生と手分けして証人探しに向かった。が、何れも不発に終わった。



く中庭 休憩スペース

球技大会が終わり放課後、天馬と蓮は竜司と合流するため中庭で待っていた。

「ねえ、ちよつといい?」

そこへ、一人の女子生徒が現れた。

蓮

「お前、確か高巻だったか?」

杏

「そうだよ。君は蓮だったよね?」雨宮 蓮。

杏の質問に、蓮は「ああ」と答えた。

杏

「で、君が松風 天馬君だっけ？」

天馬

「えっ？あ、はい……………」

天馬は少し驚いた。同じクラスの蓮ならともかく、面識があるとは言え話した事は無く、ましてや学年もクラスも違う自分の事を彼女は知らないと思っていたからだ。

蓮

「それで、何の用だ？」

杏

「あんたらさ、一体何なの？この間の遅刻、あれ噂だよな？オマケに2人とも、妙な噂あるし……………」

竜司

「ソイツらに何か用か？」

と、そこへ竜司が合流した。

杏

「そつちこそ何？クラス違くない？」

竜司

「偶々知り合っただけだよ……………」

杏

「鴨志田先生に何するつもり？」

杏の放った言葉に、3人は驚いた。杏は竜司を睨み、竜司は杏を睨んだ。

竜司

「……………なるほど、そういう事か。お前、鴨志田と仲良いもんな？」

杏

「坂本には関係無くない？」

竜司

「野郎が裏で何やってつか知ったら、お前ゼツテ別れたくなるから。」



杏

「裏……………」

竜司の言葉に、杏は何か疑問を持った様だ。

杏

「……………まあいいわ。何しようとしてるか知らないけど、誰もアンタらに協力なんてしてくれない。それだけ、一応忠告しといたから……………」

杏はそう言うと、スタスタと中庭を離れた。

竜司

「相変わらず気の強え女だぜ……………」

天馬

「もしかして、知り合い?」

竜司

「中学が一緒だったただけだ。それより、俺の方はダメだった……………蓮は?」

蓮

「俺もだ。天馬はどうだ？」

天馬

「2年の《三島》って人が鴨志田先生から特別な指導をされてるらしんだけど、それ以上は聞き出せなかった……」

竜司

「特別な指導ねえ……確かに、アイツいつも痣だらけだしなあ……よし、三島に直接聞いてみようぜ！」

く正面玄関く

3人は三島と言う生徒を探して正面玄関へとやって来た。玄関には丁度学校を出ようとする、藍色の髪に茶色の瞳をした全身傷と痣だらけの男子生徒が居た。

竜司

「アイツが三島、バレー部2年の《三島 由輝》だ。」

天馬

「あれ?あの人って……………」

天馬は三島の顔に見覚えがあった。それは彼が先程、球技大会中に鴨志田のサーブを受けて保健室送りになった生徒だからだ。

竜司

「おう三島、ちよつといいか?」

竜司は三島を呼び止め、三島は3人に気づいた。

三島

「坂本?それに雨宮まで……………俺に、何か用か?」

竜司

「話するだけだよ……………風の噂で聞いたんだけど、鴨志田から指導されてんだって?体罰じゃなくてか?」

三島

「ち、違いますよ！」

三島は体罰を否定したが、明らかに動揺している様だ。

竜司

「何で敬語だよ……ま、いいけど。」

蓮

「お前、今日球技大会でボールぶつけられてなかったか？」

三島

「アレは、俺が下手なだけで……」

竜司

「いや、にしたって痣多すぎねえか？」

三島

「練習なんだよ！」

頑なに否定を続ける三島。するとここで、天馬が思いきつて出た。

天馬

「三島さん、もしかして鴨志田先生から口止めされてるんですか?」

三島

「ツ!!そ、それは……………」

天馬の質問に、三島は狼狽えた表情を見せる。

「何をしてる?」

するとそこへ、1人の教師が現れた。鴨志田だ。

鴨志田

「三島、部活の時間だぞ?」

三島

「今日はその、ちよつと具合が悪くて……………」

鴨志田

「だったら辞めるか？練習以外じゃ、下手くそは治らないぞ？」

あからさまに偉そうな態度を見せる鴨志田。

竜司

「デメエ！」

竜司の怒りがヒートアップし、竜司は鴨志田を睨む。すると、天馬が鴨志田の前に立った。

天馬

「御言葉ですが、体調が万全でない人に練習を強行させるのは、部を預かる者として如何なモノかと。」

天馬がそう言うと、鴨志田は天馬を睨み付けた。天馬も負けじと、鴨志田に対し鋭い眼を向ける。

鴨志田

「君か……部外者は黙ってろ!バレーの事、何一つ分からない癖に!」

天馬

「確かに俺はバレーについては無知です。ですが俺も以前はサッカー部に所属し、キャプテンを努めていた身です。体調が万全でない彼に練習を強行させるのは、反って重大な怪我に繋がり兼ねません。大事な試合だつて近いんでしょう?練習を行うのはもちろん大事ですが、部員の体調が悪いならしつかりと休ませる。これも立派な練習の内だと俺は思います?」

鴨志田

「っ!?!」

天馬の意見に鴨志田は少し怯んだ。天馬の意見も一理あると思つたからだ。

鴨志田

「そ……そうだな、確かに君の言う通りだ……三島、前言撤回だ。今日は帰つてゆっくり休め。」

そう言うと、鴨志田は去っていった。蓮・竜司・三島は天馬が鴨志田に意見し説得させた事に驚いている。

三島

「君は、いったい……………」

天馬

「すみません三島さん。俺は1年の松風 天馬。雷門中でサッカー部キャプテンをしていた者です。」

三島

「1年の松風……………雷門中……………そうか、ありがとう……………」

三島は天馬に礼を言うと、竜司に目を向けた。

三島

「坂本、これだけは言っとく。体罰の証明なんて、意味無いよ。」

竜司

「は？…どういう事だよ？」



三島

「みんな知ってるのさ。校長も、親も、知ってて黙認してるんだ……………」

三島の放った言葉に、3人は驚愕した。

三島

「正直迷惑だ、こつちの気も知らないで……………」

三島はそう言うと、1人学校を出て行った。

竜司

「三島……………」

蓮

「これからどうする?…」

坂本

「……………明日、他の奴らを説得してみる。それしか手がねえ。……………つか、可笑しくねえか?アイツの言った事がマジなら、校長も親も体罰のこと知ってたぞ?何で誰も何も

「言わねえんだよ?」

天馬

「……………多分、鴨志田先生が怖いんだと思う。」

蓮

「怖い?」

天馬

「ほら、昨日パレスで鴨志田先生のシャドウが言つてたじゃん。『ここは俺様の城。俺様が何をしても許され、誰もが俺様に気に入られたいと願う場所。』つて。確かバレー部つて、鴨志田先生が顧問をしてるから有名になれたんだよね?」

竜司

「だからアイツには逆らえない。アイツに気に入られていれば安全。だから誰も口出しせず黙つてるつて訳か……………だからつて、何しても許されるなんて可笑しいだろ!?生徒は体罰受けてるのに、我慢するしかねえんだぞ!?クソツ、何も知らねえ取り巻きは呑気だなあ……………!」

蓮

「取り巻き?」

竜司

「高巻だよ。さつき中庭で……そうだ!!」

竜司は何か思い付いた様だ。

竜司

「蓮、天馬、明日高巻から話聞いてみてくれないか?」

天馬

「高巻さんから?」

蓮

「どういう事だ?」

竜司

「高巻はバレエ部の鈴井ってヤツと親友なんだ。もしバレエ部の連中から聞き出せなかったとしても、バレエ部の知り合いからなら話聞けるかもじゃん? まあ本人はあんな感じだし、協力は期待できねえけど……」

蓮

「……まあ、聞くだけ聞いてみる。」

竜司

「ああ、そつちは頼んだぜ！俺も俺で、頑張るからよ！」



↳教室棟 渡り廊下出口↳

翌日、4月14日 木曜日の放課後。

蓮と天馬は竜司と会うため、中庭に向かっていた。

志帆

「……………」

道中、渡り廊下出口付近でスマホを見る志帆を見つけた。

志帆

「……………あ、ごめんなさい。邪魔だよね……………」

志帆は2人の気配に気付き、慌てて扉の前から退いた。すると、2人は彼女の顔に酷い痣がある事に気付いた。

天馬

「その顔……………」

蓮

「もしかして、怪我してるのか?」

志帆

「えっ?う、うん……………ちよつとね……………」

と、志帆は蓮の顔を見る。

志帆

「見ない顔だね。もしかして、D組の転校生?」

蓮

「ああ、雨宮 蓮だ。こっちは俺の友人、1年の松風 天馬。」

志帆

「私は鈴井 志帆。あの、余計なお世話かも知れないけど、噂……気にしない方がいいよ？……私の親友もね、見た目だけで色々誤解されてる子で……」

天馬・蓮

「……………」

志帆

「……………ごめんね、勝手にベラベラと……………私、もうすぐ部活だから行かなきゃ……………またね。」

志帆はそう言うと、その場から去っていった。

—————

く中庭 休憩スペースく

中庭に到着するや否や、竜司がイライラしながら自販機に当たっていた。

竜司

「どうなってやがんだ!?どいつもコイツも三島みてえな事言いやがって……………ゼツテー  
鴨志田に何か言われてんだ!!こうなりや、野郎に直談判するしかねえのかなあ……………  
?」

蓮

「あの教師がその程度で口を開くとは、到底思えん。」

竜司

「だよな……………闇討ちは……………バレたら即終わりだし、警察に通報しようにも城の事な  
んかゼツテー信じてもらえねえし……………」

頭を悩ます竜司と蓮。すると、天馬が何かを思い付いた。

天馬

「……………ねえ、鴨志田先生じゃなくて先生のシャドウを何とか出来ないかな?」

竜司

「鴨志田のシャドウって、あっちの鴨志田か?それ意味あん……………」

「やっと見つけたぞ!」

突然、何処から途もなく誰かの声がした。

竜司

「何か言ったか？」

竜司の問いに、天馬と蓮は首を横に振る。すると、3人の目の前に見覚えのあるメカが現れた。

グッドストライカー

「ようお前ら！元氣してたか？」

天馬

「グツデイ!?何で此処に？」

パレスで別れた筈のグッドストライカーの突然の登場に驚く3人。すると、今度はテーブルの上に1匹の黒猫が現れた。



黒猫

「我輩に仕事させておいて、タダで逃げようなんて思うなよ? この間は勝手に帰りやがって……」

ナゼか普通に喋りだす黒猫。だが3人とも黒猫の声に聞き覚え、色合いに見覚えがあつた。

蓮

「その声……まさか、モルガナか?」

そう、黒猫の正体はモルガナだった。だがそれ以上に驚くのは……

天馬

「猫が喋ってる!?!」

モルガナ

「猫じゃねえ! こつちに來たらこうなつたんだ!」

竜司

「ちよつと待て！お前、こつち来れんのかよ!?まさかスマホ持ち!」  
モルガナ

「我輩くらいになると自力さ！抜け道、かなり迷ったけどな……………」  
グッドストライカー

「それより、何で猫が喋るんだ？」

モルガナ

「知るか！そういうお前は姿変わってねえじゃんか！」

グッドストライカー

「だから前に言っただろ？オイラは生まれた時からこの姿だつて。」

モルガナ

「……………まあそれより、お前から手こずってるみたいだな？証人がどうとかってヤツ。鴨志田を何とかする方法、無い事も無いぞ？」

竜司

「えっ？マジ!?!」

「この忙しい時に猫探しとはなあ……………」

「今、この辺で鳴き声しませんでしたか?」

と、丁度近くの渡り廊下を風紀委員の生徒と教師が歩いていった。

蓮

「鳴き声?俺達以外には言葉に聞こえてないのか?」

天馬

「どうなってるの……?」

困惑する天馬と蓮であった。

竜司

「それより、さっき言った事詳しく聞かせろ。」

モルガナ

「いいだろう。でも此処じゃ不味い。何処か人気の無い場所に連れて行け。」

竜司

「よし、じゃあ屋上に行こうぜ。」

く屋上く

一同は屋上に場所を移し、モルガナから話を聞くことにした。

竜司

「それで、鴨志田を何とか出来る方法って何なんだ？」

モルガナ

「さつき天馬が言った通りさ。こつち側からじゃなくて、城の方から攻めるのさ。あの城は鴨志田が見てるこの学校だ。城の事に本人は気付いちやいないが、心の奥ではちゃんと繋がってるのさ。だから仮に城が消えちまえば、当然鴨志田本人にも影響が出る。」

グッドストライカー

「あの城、つまりパレスは歪んだ欲望その物だ。ソイツが消えるって事はつまり……………」

蓮

「歪んだ欲望が消えて……………」

天馬

「鴨志田先生が真面になるって事?」

竜司

「マジか?! いやでも、それって追い詰める事になるのか?」

モルガナ

「パレスを消すつてことは、要は『改心』させるつて事だ。でも歪んだ欲望が消えたからつて、犯した罪は無くならない。それに耐えきれなくなつて、鴨志田は自分から罪を告白しちまう筈だ!」

モルガナの発言に3人は驚いた。

モルガナ

「しかもパレスが消える以上、そこで我輩らがした事も忘れちまう。足も付かず、鴨志田を自滅させられるつて寸法だ。」

竜司

「スゲー! で、どうやったら出来るんだ!?!」

モルガナ

「パレスの《オタカラ》を盗む。」

天馬

「盗む？」

モルガナ

「こつから先はやると決まってるからだ。何しろ取って置き秘策だからな。こつちの手伝いもするなら教えてやる。どうする？」

天馬

「ここはモルガナの言う通りにするしか無いんじゃないかな？ 証人探しも詰みだし……」

天馬の意見に、蓮は「そうだな。」、竜司は「ああ」と答えた。

モルガナ

「それと、これは注意事項だ。よく聞いとけ。パレスを消せば、歪んだ欲望は間違いなく消えるだろう。でも欲望その物は、生きる上で必要なものだ。もしも歪んだ欲望だけじゃなく、欲望全部が消えちゃったら、そりゃ廃人と一緒だ。保護でもされなきゃ、死んでしまう事になる。」

モルガナの話聞き、3人は耳を疑い驚愕した。

天馬

「し、死ぬ!?!」

竜司

「それ、俺達のせいになるって事か?」

モルガナ

「それくらいの覚悟は出来てんだろ? ま、別にバレる事はねえから安心しろ。」

竜司

「そういう問題じゃねえ! バレなきゃ何してもいいってんなら、鴨志田がやってる事と同じだろ!?!」

モルガナ

「だが、他に方法は無いんじゃないか? ……また来るぜ。」

そう言うと、モルガナは去っていった。

グッドストライカー

「……………なあ、お前ら大丈夫か？」

竜司

「……………俺、他に方法無いか考えてみる！じゃあな！」

竜司はそう言うと、一目散に屋上を離れた。

天馬

「竜司……………」

グッドストライカー

「その、悪かったな……………モルガナも悪気があつてあんな事言ったんじゃ……………」

グッドストライカーはモルガナの事を謝罪した。

蓮

「気にするな。お前もモルガナも、何も悪くない。」

グッドストライカー



「オイラも、もう行くよ。じゃあまたな!」

そう言うと、グッドストライカーは空の彼方へと飛んでいった。天馬と蓮も屋上を離れ、下校し家路についた。

—————

↳ 渋谷駅 駅前広場↳

天馬と蓮は銀坐線に乗り、渋谷駅で降りた。改札を抜け、駅前広場から田苑都市線ホームへ向かう途中……………

杏

「いい加減にしてもえませんか!?! 本当に体調が悪いつて……………」

偶然、電話中の杏を見つけた。だが、何やら揉めている様だ。

杏

「えっ？ちよつと先生、話が違う！」

天馬・蓮

(先生？)

杏

「志帆の事と、話別じゃ……………あつ」

どうやら電話は途中で切れた様だ。杏は電話が切れるなり、その場にしゃがみ込んでしまった。

杏

「志帆の、スタメン……………」

天馬と蓮は互いにアイコンタクトし頷くと、そつと杏に近づいた。杏は2人の気配に気付き顔を上げ、立ち上がった。

杏

「雨宮……………それに松風君……………もしかして、聞いてた?」

天馬

「いやその、わざとじゃないんです。偶々通り掛かったら声が聞こえて、それで……………」

蓮

「揉めていた様だが、何かあったのか?」

杏

「べ、別に何でも無いから! 何でも……………」

杏はそう言うと、その場から駆け出し地下街へ続く階段を下りていった。

蓮

「様子が変だ。」

天馬

「追いかけてよう!」

蓮と天馬も地下街へと下り、杏を追いかける。

天馬

「高卷さん！」

蓮

「おい、ちよつと待ってくれ！」

そして田苑都市線の改札付近で蓮が杏の右腕を掴んだ。

杏

「放して！放つといてよ！」

杏は足を止め、蓮の腕を振り払った。

ドサツ

だが振り払った拍子に足を滑らせ、バランスを崩し尻餅をついた。

杏

「いったあ……………」

天馬

「大丈夫ですか!？」

杏

「何で……………アンタ達に心配されなきゃいけないの……………うう……………」

杏はその場で膝を抱え、泣き出してしまった。

蓮

「……………落ち着けるところへ行こう。」

蓮はそう言って、杏に手を差し伸べる。杏は蓮の手を取り立ち上がった。

—————

↓ 渋谷セントラル街 ビッグバン・バーガー ↓

3人はセントラル街にあるバーガー店《ビッグバン・バーガー》に場所を移し、店の目立たない席に座った。

杏

「話すことなんて無いんだけど。ただ、ちよつと揉めてるだけだし……………」

蓮

「……………相手は、鴨志田か？」

杏

「……………」

杏は俯き、黙り込む。彼女は相当に思い詰めてる様だと、2人は察していた。

杏

「……………噂くらい知ってるよね？鴨志田先生と……………その……………出来てるってヤツ

……………」

天馬

「昨日、竜司が言ってた事ですか？」

杏

「うん。でも、あんな奴とそんな訳……! さっき、鴨志田から電話掛かってきたの。番号教えろって誤魔化してきたのに、これから鴨志田の部屋に來いって……」

蓮

「それは、まさか……」

杏

「うん、そういう事……断つたら私の友達を……志帆をレギュラーから外すって脅されて……志帆のためだって自分に言い聞かせてきたけど、もうこれ以上は……あんな奴の言いなりになるなんて、もう無理だよ! でも、志帆の……私のたった一人の友達のためだもの……私には志帆しか居ないから……」

杏は泣きながら話し続け、天馬と蓮は拳を握りながら真剣に聞き続け、そして感じた。彼女も鴨志田に居場所を奪われ、言いなりにされた、被害者の一人なのだ。

杏

「………何言ってるだろう、私。貴方達と、ほとんど話した事無いのに……」

天馬

「……………だからこそ、話せたんじゃないですか？」

蓮

「かもな……………俺もそう思う。」

杏

「……………変な人だね。みんな、私なんかほとんどシカトなのに……………貴方達って、ホントに悪い人？噂の通りとは思えないんだけど……………」

天馬

「どんな噂なんです？」

杏

「雨宮君なら、ナイフ持ち歩いてるとか、怒らせたなら襲ってくるとか、学校内で麻薬密売とか…松風君なら、前の中学でやりたい放題してたとか、1年でキャプテンとか絶対裏があるとか…ホントは薄々気付いてたんだ。噂、大袈裟過ぎるって。何処と無く寂しそうつて言うか、居場所無いって感じ？私と同じだから、こういうこと話せたのかも。」

杏の顔に、少しだけ笑顔が戻った。

杏



「私じゃ、志帆の力になれないのかな……アイツの気が変わってくれないかな……私の記憶とか、気持ちとか、全部無くならないかな……」

杏の話聞いて、2人はモルガナの話思い出した。鴨志田から歪んだ欲望を消し去り、改心させるあの方法を。

杏

「そんな都合の良いこと、起こる訳無いよね……」

天馬

「……いや、起こるかも知れませんよ?」

蓮

「ああ、もしかすると……」

杏

「ちよつとちよつと、2人同時にマジレスやめてよ!」

2人は真剣に答えたつもりだろうが、杏には冗談に聞こえた様だ。だがこの時だけ、杏は2人に初めて本当の笑顔を見せた。

杏

「……………ありがとう、話聞いてくれて。ちょっとスッキリしたわ。」

蓮

「こちらこそ、話してくれてありがとう。」

杏

「今の話、誰にも言わないですよ？鴨志田を説得する方法、考えてみる。じゃあ、また明日……………」

杏はそう言うと席を立ち、店を後にした。

天馬

「蓮……………」

蓮

「ああ……………」

2人は互いに真剣な眼でアイコンタクトし、共に頷く。そして会計を済ませ、静かに

店を後にした。

Act. 07 / 志帆の悲劇 踊れ、私のペルソナ! 《前編》

教室棟 1年A組

証人探しの翌日、4月15日 金曜日の午前。

天馬は自分の教室で授業を受けていた。

天馬

「……………」

無言で授業に集中する天馬。すると……………

「おい、あれ見ろ!!」

突然、廊下側の男子生徒が立ち上がり、窓の外を指差した。

「あれって、バレエ部の鈴木先輩じゃない？」

天馬

「えっ？鈴木さん？」

天馬は席を立ち、廊下に出て外を見る。そして自身の目を疑った。実習棟の屋上を囲うフェンスの外に、志帆が立っていたのだ。

天馬

「鈴木さん!?何であんな所に!？」

1年に限らず、教室棟で授業を受けていた全クラスの生徒達が何事かと廊下の窓際に集まる。すると次の瞬間、志帆は屋上から1歩前へと歩み始める。

天馬

「マズイ!!」

天馬は廊下の窓を開け、窓枠の上に乗る。

ドンツ！

そして志帆が飛び下りたと同時に、窓枠を蹴り大きくジャンプ。

ガシツ！ ドシーン!!

2階付近で志帆を受け止め、そして中庭に勢いよく着地。その衝撃で中庭の地面が着地地点を中心に大きく窪んだ。

天馬

「グッ……………！鈴木さん!!」

志帆

「松風……………君……………？」

天馬は志帆の無事を確認し、一安心した。

天馬

「よかった………鈴木さん、何で………」

「おい、何だよ今の!?!」

「コラ! 授業に戻らんか!」

すると、気が付けば中庭は生徒達の野次馬と教職員達で溢れかえっていた。そこへ、蓮・竜司・杏が野次馬を掻き分けやって来た。

蓮

「天馬!!」

天馬

「蓮! 竜司! 高卷さん!」

竜司

「おい、いったい何があった!？」

杏

「志帆!!」

杏は大慌てで志帆に語りかける。

志帆

「杏……………私、もう無理……………」

志帆はそう呟くと、気を失った。

杏

「志帆!? しっかりして志帆!!」

天馬

「大丈夫、気を失っただけです。」

天馬は志帆を抱いたまま立ち上がる。すると、飛び下り自殺の一部始終を見ていたで



あろう三島が、怯えながら教室棟へ逃げていく姿が見えた。

天馬

「……………蓮、竜司、俺は鈴井さんを病院に連れていく。2人は三島さんに、もう一度話しをしてみてくださいないかい？」

蓮と竜司は無言のまま頷き、天馬は2人に「頼んだよ」と言うと、志帆を抱いて病院へと向かった。

杏

「志帆……………何で……………」

杏も天馬の後を追いかけて、蓮と竜司は三島の後を追った。



山皇病院 病室

天馬は志帆を蒼山一丁目駅の南にある《山皇病院》に運んだ。幸い無傷で命に別状は無く、天馬と杏は一安心。そして午後、志帆は病室のベッドで目を覚ました。

杏

「志帆！」

ギョツ

杏は志帆を抱き締め、泣き出した。

杏

「よかった、志帆が無事で……………！」

志帆

「杏、ごめんね……………」

天馬

「無事でよかったです、鈴井さん。」

志帆

「松風君……………」

天馬

「……………いったい、何があつたんですか？」

志帆

「……………私、鴨志田先生にずっと、殴られてたの……………」

志帆は自分が知る全てを話した。

話によると、志帆や三島を始めとする秀尽学園バレー部は、鴨志田から特別指導という名の体罰を受けていた。鴨志田は部員を指名しては体育教官室に呼び出し、自身のストレス発散を目的に暴行を与え続けていたらしい。そして志帆は先日、急に鴨志田に呼び出されてはいつも以上に酷い暴行を受け、そして遂に耐えきれなくなり自殺を図ったという。

杏

「そんな……………」

天馬

「体罰の噂は、本当だったんだ……………」

天馬は驚愕し、杏は絶望した。志帆の飛び降りの原因は、昨日自分が鴨志田の誘いを断った腹癒せにされたからだと思っただからだ。

ブー……………ブー……………

突然、天馬のスマホが竜司からの電話を受信した。天馬は咄嗟に電話に出て竜司と話す。どうやら三島から同様の情報を得ることが出来たらしい。そして竜司の話によると、蓮と天馬の噂の原因は、鴨志田から命令されて仕方なくネットへの書き込みを行った三島の犯行。さらに次の理事会で、蓮・竜司・天馬・三島の4人を吊し上げ退学処分にすると言われたらしい。

天馬

「……………竜司、放課後中庭に集まろう。モルガナとグツデイも一緒に……………うん、分かった。」

天馬は電話を切り、スマホをポケットに仕舞う。彼の心は今、怒りの炎がメラメラと燃えていた。

天馬

「……………高卷さん、鈴井さんの事、頼みます!」

杏

「えっ?」

志帆

「松風君?」

天馬

「鴨志田先生は、俺達が何とかします!」

天馬はそう言うと、杏と志帆を残し病室を後にした。



く中庭 休憩スペースく

放課後、天馬・蓮・竜司の3人は中庭に集まった。そこにはモルガナとグッドストライカーの姿もある。

竜司

「モタモタしてらんねえぞ！さっさとあつちの世界行つて、あの野郎をぶっ飛ばさねえと！」

モルガナ

「覚悟は出来たって事でいいんだな？例の廃人になるかもつてヤツ。」

竜司

「あの野郎のせいで人が死にかけたんだ！もうどうなるうが、知ったこつちやねえ!!」

蓮

「ああ、覚悟は出来てる。」

天馬

「俺も、覚悟決めてきたよ。」

モルガナは3人の眼を見る。そして確信した。3人の覚悟は本物だと。

モルガナ

「よし、ならいい。」

竜司

「ところで、パレスを消滅させるのって、やっぱり大変なのか？ 試した事あんだろ？」

モルガナ

「我輩がいつそんな事言った？」

モルガナの返答に、一同はキョトンとする。

グッドストライカー

「……………まさか、知ったかぶりってヤツ!？」

「……………ねえ、退学って本当？」

そこへ、病院から戻った杏が現れた。グッドストライカーは咄嗟に自販機の影に隠れる。

天馬

「高卷さん！つて、何で知ってるんです？」

杏

「噂になってる……………」

竜司

「またか……………鴨志田の野郎！」

杏

「……………ねえ、鴨志田やるなら私も交せてよ！志帆があんな目に会わされたのに、何も出来ないなんて嫌だよ！」

竜司

「お前には関係ねえ……………首突っ込むな。」

杏

「関係無くない！」

竜司

「とにかく邪魔すんな!!」



杏を拒絶し、追い払おうとする竜司。杏は黙り込み竜司を睨むと、その場から走り去った。

天馬

「竜司、いくら何でも……………」

竜司

「分かってる、言い過ぎたつて事も、アイツの気持ちも……………でも、高巻をあんな危ない場所に連れて行けねえよ……………」

蓮

「思い詰めなければいいが……………」

モルガナ

「だよな……………いざつて時の大胆さは、男より女の方が上らしいしな……………」

竜司

「さっさと鴨志田やりや済む話だ。今から行こうぜ！」

—————

く正門前 路地く

一同は正門から外に出て、正門前路地に移った。

モルガナ

「ここからは向こうに着いた途端に《怪盗》扱いだ。気合入れてけよ？」

竜司

「カイトウ？」

グッドストライカー

「密かに忍び込み、華麗にオタカラを盗み出す。正に怪盗だろ？」

天馬

「へえ………何かカッコいいね！」

蓮

「ああ、悪くない。」

竜司

「しかも、潜入道具はスマホのアプリか。しかし、いったいどんな仕組みなんだ？誰がこんなアプリ作ったんだ？」

モルガナ

「その件については今は置いておこう。」

蓮

「ああ、行こう！」

蓮はスマホを手に取り、イセカイナビを起動する。だが一同は、路地の外から物陰に隠れ見る杏に気付いていなかった。

杏

「やっぱり、何かする気だ………スマホが関係あんの？」

イセカイナビ

『ナビを開始します。』

ブォーン………

ナビを起動し、学校は古城に姿を変え、蓮・竜司・モルガナの姿も変わった。

杏

「ウソ………何これええ!？」

杏は突然起きた現象に驚き叫ぶ。すると、叫び声に気付いた天馬達が杏に気が付き驚いた。

竜司

「た、高巻!？」

杏

「その声、坂本?それに松風君に、雨宮まで!？」

天馬

「な、何で高巻さんが此処に!？」

杏

「知らないわよ!てか、此処どこ!?学校なんでしょ!？」

混乱する杏と天馬達。が、何故かモルガナは啞然としていた。そして、頭からピンク

のハートが1つ……

グッドストライカー

「おいモルガナ、どうした？」

モルガナ

「えっ？ あいや、何でもない……どうやら、ナビってやつに巻き込まれたんだろう。」

蓮

「1人が使えば一緒に入れるなら、使ったヤツの周りも巻き込むって事か。」

竜司

「とにかく高巻、お前は出てけ！」

杏

「鴨志田と関係あんでしょ？ だったら絶対に嫌だ！」

グッドストライカー

「お前ら少しは落ち着けよ……」

モルガナ

「あんまり騒ぐとシャドウに見つかるぜ？」

追い返そうとする竜司と、それを拒む杏。2人をあだめるモルガナとグッドストライカー。すると、杏は初めてモルガナとグッドストライカーの存在に気付いた。

杏

「えっ？何か喋った!?化け猫!?それに謎メカ!？」

ガーン

モルガナ

「化け……………」

グッドストライカー

「……………おい、大丈夫か？」

杏に化け猫扱いされ、ショックでフリーズするモルガナであった。

竜司

「こっぴごうなつたら仕方ねえ！お前ら手貸せ！」

竜司は天馬と蓮の手を借り、3人で杏を持ち上げる。

杏

「ちよ、何すんのよ!?!」

竜司

「終わったら全部話す!だから今は出てってくれ!!」

杏

「ちよっと待って!うわあああ!?!」

3人は杏を放り投げ、杏をパレスの外に追い出した。

竜司

「ふう………今度からナビ使う時は気を付けてねえと………」

モルガナ

「使う道具の事は確かめとけ!ってか何で見てた我輩の方が詳しいんだよ!?!」

竜司

「う、うっせえ！つてか、出鼻から高巻に知られちまったよ……さっさと鴨志田の野郎片付けねえと！」

モルガナ

「とにかく潜入開始だ。お前ら気合い入れてけよ？」

天馬

「ああ、気合い十分！何時でもいいよ！」

と、天馬はいつの間にか秀尽学園の制服から雷門サッカー部時代のユニフォームに着替え、これまたいつの間に用意してたのか、あの超有名な2人で1人の仮面シンガーを彷彿とさせる白いハーフマスクを顔に巻いていた。

竜司

「お前、いつの間に!?……………てか、何でサッカーのユニフォームなんだ？」

天馬

「こっちの方が気合いが入るんだ。それに制服より動きやすいし。」

竜司

「いや分かるけど、逆に目立たねえか？」



モルガナ

「……………まあいい。頼りにしてるぜ、《ジョーカー》!」

そうやって、モルガナは蓮を見る。

蓮

「ジョーカーって、俺の事か?」

モルガナ

「お前のコードネームだ。パレスで名前を大声で呼び合ったら、どんな影響が出るかも分からんからな、念のためだ。それに、本名で呼び合う怪盗なんて間抜けだろ? 我輩嫌だ。」

竜司

「でも、何でコイツがジョーカーなんだ?」

モルガナ

「戦力的に『切り札』だからさ。」

蓮

「なるほど……………悪くない。」

どうやら蓮は満更でも無い様子。

モルガナ

「次に竜司、お前は………《ヤンキー》だ！」

竜司

「喧嘩売ってんのか!？」

モルガナに真っ先に反論した竜司。

天馬

「じゃあ、そのドクロマスクに因んで《スカル》とかどう？」

竜司

「おっ、いいんじゃないね!ぶっちゃけこのマスク案外嫌いじゃねえし、貰った!」

どうやら竜司は気に入った様だ。

モルガナ

「じゃあ次は天馬。お前はペルソナが無いから、取り敢えず仮決めだ。」

竜司

「そういや、天馬も俺らみたいにペルソナ使えるようになったりするのか?」

モルガナ

「可能性は大いにある。だから、ペルソナ使いに目覚めるまでの間の仮のコードネームだ。でも仮とはいえ、カッコいいコードネームにしるよ?」

蓮

「その胸の稲妻に因んで、《ライトニング》とかどうだ?」

竜司

「カッケーけど、ちょっと安っぽくね? 《ライデン》とかどうよ?」

天馬

「おお、何か強そう!俺ライデンにする!」

グッドストライカー

「じゃあオイラは《グッデイ》だ。で、残すはモルガナだな。」

竜司

「《モナ》でどうよ?」

モルガナ

「まあ、ジョーカーがそれで呼びやすいなら構わんが……………」

蓮

「決まりだな。」

モルガナ

「よし、では我々はたった今から、ジョーカー、スカル、ライデン、グツデイ、モナだ。今後はコードネームを徹底するように！」

竜司

「んじゃ、とつとオタカラを盗りに行こうぜ？」

一同は城に向けて歩きだす。

キイイイイン!!

すると突然、蓮と竜司の手の中に光る玉が現れ、蓮の持つ光る玉は背中にダイヤルを持つ黒いジェット戦闘機、竜司の持つ光る玉は後方に引き金の付いた黒いモンスターラック型のアイテムに変化。さらにモルガナからも光る玉が出現し、モルガナの光る玉

は黒いボディに黄色いラインが入った新幹線型アイテムに変化した。

蓮

「これは？」

竜司

「うおっ!? 何だこれ、ミニカーか？」

モルガナ

「…………オモチャかと思ったが、どうやら違う様だ。」

3人は突然現れた謎アイテムに驚きと興味を示す。が、何故かグッドストライカーが一番驚いていた。

グッドストライカー

「おいお前ら、それ《VSビークル》じゃねーか!？」

天馬

「知ってるの? グッデイ。」

グッドストライカー

「ああ、オイラやVSチェンジャーと同じく、アルセーナがルパンコレクションを改造して作ったアイテムだ。背中にダイヤルが付いている飛行機っぽいのが《ダイヤルファイター》、後方に引き金が付いている自動車っぽいのが《トリガーマシン》、電車っぽいのが《エックストレイン》って呼んでる。ソイツをVSチェンジャーにセットする事で変身或いはパワーアップ、更に巨大化してビークル召喚が出来るんだ。」

竜司

「……………つまりこれは、お前の世界のアイテムになるのか？」

グッドストライカー

「本来はな。でも、何故かそのVSビークルはお前から出てきた。それに何れも初めて見るタイプだ。どうなってやがる……………？」

竜司

「グッデイでも分かんねえのか……………でもさ、コイツってVSチェンジャーで使うんだろ？なら俺らが持つても無用の長物じゃね？」

蓮

「確かに。ここはライデンに預かってもらった方が得策だ。」

と、蓮・竜司・モルガナは自分の持っていたVSビークルを天馬に預けた。

蓮

「ライデン、俺達のビークルを預かってくれ。」

天馬

「うん、分かった。」

と、天馬は3人から預かったVSビークルを見てふと思う。

天馬

「……………名前どうしようか？」

蓮

「名前？」

天馬

「VSビークルの名前だよ。」

竜司

「なら、持ってた奴の名前付けた方が分かりやすいんじゃないか？」

モルガナ

「確かにそうだな。となると我輩の持ってたビークルは電車だから………《エックスト  
レインモナ》だ。」

竜司

「俺のは車だから、《トリガーマシンスカル》だな。」

蓮

「俺は飛行機だから、《ジョーカーダイヤルファイター》と言ったところか？」

天馬

「うん、どれも良いと思う！」

グッドストライカー

「オイラもそう思うぜ！」

竜司

「んじや名前も決まったことだし、改めて！」

モルガナ

「ああ、潜入開始だ！」

天馬

「OK！」



天馬は3人から預かったV S ビーグルを仕舞い、一同は城への潜入を開始した。

Act. 07 / 志帆の悲劇 踊れ、私のペルソナ！ 《後編》

〔古城I F 中央ホール〕

鴨志田パレスに侵入した一同は、以前と同じく換気口から古城内に侵入。そして1階中央ホールの側まで来た。中央ホールでは丁度、シャドウ鴨志田が兵士達に演説を行っていた。

シャドウ鴨志田

「先日の侵入者の一件、実に面白い余興であった。だが、あんなクズどもに俺様の城を荒らされるのは我慢ならん！警備を強化しろ！見つけ次第殺せ！首を持ってきた者には褒美をくれてやろう！」

「ウオオオオオオオ！鴨志田様バンザーイ！」

シャドウ鴨志田の演説を聞いて、兵士達は歓声をあげる。

竜司

「なあモナ！アイツぶつ倒せば、それで終わりじゃねーのか？」

モルガナ

「バカ、あの兵士の数じゃ返り討ちにされるだけだ。前ので懲りただろ？それにお前達はアイツに罪を告白させたいんだろ？だったら倒しても無意味だ。倒すんじゃないくて、欲望のオタカラを盗むんだ。」

蓮

「で、そのオタカラは何処にある？」

モルガナ

「多分この城の奥だ。ヤツが外へ出て来て来る今のうちに、奥へ侵入するぞ！」

一同は一旦中央ホールを離れ、別ルートからの侵入を開始する。すると、しばらく進んで前方に巡回中の兵士を発見した。

天馬

「見張りが多いな……………」

モルガナ

「丁度良い。お前達にアレを教えるには良い機会だ。」

蓮

「アレ?」

モルガナ

「ああ、よく聞け? シャドウってのは、ペルソナと同じく人間の心から生まれた存在だ。当然言葉だって喋れるから、会話する事も可能。だから追い詰めてから話し掛ければ、命惜しさに自ら金品を差し出してきたりする。その方が、ただ倒すよりもイイ物が手に入る可能性が高い。」

竜司

「……………けどそれ、何か怪盗って言うより強盗っぽくね?」

グッドストライカー

「別にやったってバチ当たらねえよ。人じゃないんだから。」

モルガナ

「まあ物は試しだ。まずは敵を攻撃して、動けなくなつたところを取り囲め。」

蓮

「よし、分かった。」

蓮達は兵士に向かって走り、蓮はジャンプして背後から番兵に跳びついた。

兵士

「な、何者だ!?!」

蓮

「暴いてやる!」

ベリッ!

蓮は兵士の仮面を引き剥がす。すると、兵士は妖精の姿をした少女のシャドウ《ピクシー》へと姿を変えた。

ピクシー

「キャッ!だ、誰!?!」

天馬

「丁度良いや、早速試してみよう！」

天馬は蓮から預かったジョーカーダイヤルファイターを取り、VSチェンジャーにセット。

『ジョーカー！』

さらにダイヤルを回し、3桁の数字を入力。

『2・4・5！（キュピーン！）マスカレイズ！』

そして黒いグリップを握り、銃身を右へ90度回し、トリガーを引いた。

『ミラクルブースト！』

トリガーを引いた瞬間、ジョーカーダイヤルファイターは光の球となって放たれ天馬の左腕と合体。天馬は左腕に、アルセーヌの手を思わせる強靱な黒い爪を装備した。

天馬

「おお、カッコいい！名付けて《ジョーカークロー》だ！」

天馬はジョーカークローを振り上げ、闇のエネルギーの刃をピクシーに向けて放つ。

天馬

「セイヤー！なんてね。」

ドカーン！

ピクシー

「キヤッツ!？」

刃はピクシーに命中し、ピクシーは攻撃を受けた拍子にバランスを崩し地面に落ちた。

天馬

「やった！」

モルガナ

「ナイスだライデン！今のうちにヤツを包围だ！」

天馬は左腕を元に戻し、天馬・蓮・竜司・モルガナは各々銃撃武器を構えピクシーを包围する。

ピクシー

「もしかして、アンタ達が鴨志田様が言ってた侵入者!?!最悪……………アタシをどうするつもりなの!?!」

蓮

「お前が持っている何かをよこせ。そうすれば見逃してやる。」

ピクシー

「えっ?マジで?」

モルガナ

「ああマジさ。金なり道具なり差し出しな。」



モルガナはピクシーにそう言うが、ピクシーは何やらオドオドしていた。

ピクシー

「その………マジ突然だったから、今は何も持つてなくて………」

モルガナ

「あ、あれ?予想外の展開………」

予期せぬ事態に戸惑うモルガナ。

ピクシー

「い、いつもは違うんだよ!?!でも、今日は偶々手ぶらで………」

モルガナ

「………まあ、なら仕方ない。ジョーカー、もう逝っていいぜ?」

ピクシー

「えっ!?!ちよ、待ってってば!」

モルガナの発言にピクシーは慌てた。

蓮

「悪いが俺達は急いでるんだ。地獄で後悔するんだな。」

蓮はそう言うのと銃を構え直す。と……………

ピクシー

「アハハッ！何そのシユミ悪いセリフ！」

何故かピクシーは笑いだした。

ピクシー

「実はそーゆーのシユミ？なら、アタシ達気が合うかもね！」

キュピーン！

と、突然ピクシーの頭に謎の衝撃が走った。

ピクシー

「そうだ思い出した!アタシは鴨志田様だけのモノじゃない!人間達の心の海にたゆたう存在!」

ピクシーは飛び立ち、蓮に急接近する。

ピクシー

「アタシ、ピクシー!これからはアンタの中に居てあげる!」

ピクシーはそう言うと、蓮の仮面にそっと触れる。すると、ピクシーは蓮の仮面に吸収された。

モルガナ

「何だよ今の!?!何が起きた!?!」

竜司

「今、敵がジョーカーの仮面に吸い込まれたよな!？」

突然の出来事に慌てる一同。

蓮

「ひよっとして……………」

蓮は徐に仮面を外しペルソナを召喚する。すると、現れたのはアルサーヌではなくピクシーだった。

天馬

「それ、さっきのシャドウだよね? どうやったの?」

蓮

「分からない。頭の中でピクシーの事を考えながらペルソナを召喚しようとしたら、コイツが……………」

グッドストライカー

「まさか、さっきの戦闘でシャドウを取り込んで自分のペルソナにしちまったって事か

!？」

モルガナ

「敵の姿や力を仮面に封じ込めて、新たな自分のペルソナに……こんな芸当が出来るモンなのか!？我輩だって初めて見たぞ！」

蓮

「そんなに凄い事なのか？」

モルガナ

「当たり前だ！心は1人に1つしか無いんだから、ペルソナは1人1体だけだ！でもその力、今後の我々の戦いを有利にしてくれそうだな……よし、チャンスがあればドンドン試してみろ！スカルとライデンも協力しろよ！」

天馬・竜司

「おう！」

—————

〈西館1F〉

その後、一同は監視の目を掻い潜り、更に奥へと進む。すると、西館1階で見覚えのある妙な扉を見つけた。

天馬

「この扉、ひよつとしてセーフルーム？」

モルガナ

「丁度良いぜ。城の奥は我輩の知らない場所だらけだ。中で休憩がてら作戦会議という。」



く古城 正門く

その頃、古城正門には何故か追い返した筈の杏の姿があった。

杏

「いっ、いっ、さっさっきのトコだ！」



一方、西館のセーフルームに居る蓮達は……………

竜司

「なんか前よりシャドウ多くね？ここまで来るだけで一苦労だぜ……………」

竜司はセーフルーム内のソファーに座り、そして仰向けになった。

モルガナ

「お前らが鴨志田を挑発したせいだからな？にしても鴨志田のヤツ、随分と警戒してやがるな……………」

天馬

「ねえモナ、オタカラを盗むって具体的にどうすればいいの？」

モルガナ

「先ずは潜入ルート、つまりオタカラまでのルートの確保だ。でも、やり遂げるにはせねてもう一人戦力が欲しいな……………」

天馬



「高卷さんにも協力してもらおうとかどうかな? あの人と俺達の目的は一致してるし、それに本人だって……………」

竜司

「バカ! アイツの気持ちは分かるけど、アイツにこんな危ない事させれつかよ!」

起き上がってそう言う竜司。

モルガナ

「そう言えばあの子、高卷 杏って言うんだろ?」

竜司

「えっ? そうだけど……………」

モルガナ

「杏殿か……………」

何やらモジモジするモルガナ。

竜司

「…………お前、記憶ねえって割にはパレスとかシャドウとかの事詳しいよな？」

モルガナ

「えっ？」

竜司の質問にキョトンとするモルガナ。

竜司

「ジョーカー、コイツ本当に記憶喪失だと思うか？」

蓮

「確かに、そう思うと少し怪しいな。」

天馬・グッドストライカー

「うん。」

ガン

モルガナ

「そんな風に思ってたの!？」

『しかし、姫はどうしてあんな所に？侵入者の反応を追ってた筈なのだが……』

突然、ドアの向こうから兵士の声が聞こえてきた。

蓮・天馬・竜司

「姫？」

『何でもいい！とにかく姫を鴨志田様のところへ！』

グッドストライカー

「なあ、姫ってなんだ？」

モルガナ

「コイツは調べといた方がいいな。来いグッデイ！」

モルガナとグッドストライカーは扉を開け、セーフルームの外へと出た。

蓮

「逃げたな……………」

竜司

「……………ナビとかパレスとか、さっきのナントカビークルとかグツデイとかも謎だけど、ぶつちやけモナが一番謎じゃね？」

竜司の質問に2人は「うん」と頷く。

モルガナ

「おい！お前ら大変だ!!」

と、モルガナとグッドストライカーが大慌てで戻ってきた。

グッドストライカー

「杏が、お前らの知り合いの杏がシャドウに連れてかれてるぞ！」

グッドストライカーの放った言葉に、3人は驚いた。

竜司

「はあ!? いやでも、高巻ならさつき追い返したる?」

天馬

「高巻さんがナビを持ってたら、あり得ない話じゃないよ!」

蓮

「スカルの時みたいなのに、いつの間にか入っていたと言う可能性もある。」

竜司

「マジか!? くそつ、せつかく逃がしてやったのに……!」

天馬

「今すぐ助けに行こう! モナ、グツデイ、案内して!」

モルガナ・グッドストライカー

「任せろ!」

-----

く 西館 謎の部屋 く

3人はモルガナとグッドストライカーの案内で、謎の部屋にたどり着いた。

モルガナ

「( )だ！」

竜司

「待ってろよ高巻、今助けてやる！」

竜司は扉を開け、一同は謎の部屋に入る。

グッドストライカー

「な、何じゃこりゃ!？」

「鴨志田様♡」

「ああん♡」

部屋の中は全裸のバレエ部女子部員で埋め尽くされ、俗に言うハーレム部屋と言った感じだった。

天馬

「酷い……………」

蓮

「きつと女子部員の事も、こういう風にしか思っていないと言うことだろう。」

部屋の光景に唾然とする一同。すると、部屋の一角で壁に拘束される杏と、それを眺めるシャドウ鴨志田と数名の兵士。さらに鴨志田の認知上の杏こと《アン姫》の姿があった。

竜司

「高巻!」

シャドウ鴨志田

「また貴様らか……………これからお楽しみだつてのに、いったい何回来るんだよ?」

杏

「ねえ、コイツ何なの!?!それに何で私が!?!」

杏は状況が理解できず錯乱していた。

シヤドウ鴨志田

「どうせお前も、その賊どもと同じだろ?俺様に文句があつて来たんだよなあ?えつと………名前忘れたけど、アイツが飛び降りたの、お前のせいだからな?」

杏

「えっ?」

シヤドウ鴨志田

「お前が相手してくんないから、代わりにアイツに相手してもらったのさ。」

竜司

「てめえ………!」

シヤドウ鴨志田

「おっと、お前らそこから動くなよ?」

ガシヤ



兵士達は杏に剣先を向ける。

シャドウ鴨志田

「それ以上近づいてみる。即殺す! さあて、まずは服からバラそうかな?」

アン姫

「いや〜ん、鴨志田様ったらエツチイ♥」

シャドウ鴨志田は気持ち悪い顔で杏を見る。杏は完全に絶望し、脱力していた。

杏

「……………これさ、天罰なのかな? 志帆の……………はは……………」

竜司

「クソツ、どうすりやいいんだ!」

何も出来ず、指を加えて見ているだけしかない蓮達。だが、天馬は……………

天馬

「諦めるな！」

「っ!？」

天馬はトリガーマシンスカルを手に取り、VSチェンジャーにセット。

『スカル!』

さらにグリップを握り。

『パトライズ!』

銃身を左に90度回しトリガーを引いた。

『ミラクルブースト!』

トリガーを引いた瞬間、トリガーマシンスカルは光の球となって放たれ天馬の右腕と合体。天馬は右腕にキャプテン・キッドの船を思わせる、モンスターの顔が描かれた黒鉄の大砲を装備した。

天馬

「《スカルバスター》！」

ドカーン！

天馬はスカルバスターから雷撃を放ち兵士達を攻撃。兵士達は雷撃を浴びた途端にバラバラになった。

シャドウ鴨志田

「な、ナニッ!？」

予期せぬ事態に戸惑うシャドウ鴨志田と、驚く一同。

天馬

「諦めるな高卷さん！」

杏

「松風……………君？」

天馬

「このまま言われっぱなしで終わるの？ 友達を傷つけられたのに、その友達を傷付けた奴を許すの？」

杏

「えっ……………？」

蓮

「借りを返そう、志帆の分も。たった1人の、大切な友達なんだろう？」

杏

「……………そうだね、こんなクズの言いなりになるなんて、どうかしてた……………」

杏は感じていた。身体の中で今まで感じたことの無い怒りが、メラメラと炎のように燃えていることを。

杏

「もう無理……………マジでムカつき過ぎて、どうにかなっちゃいそうよ!!」

『まったく…出番が遅すぎるのよ。』

ドクンツ!

杏

「あッ……………!?!」

突然、激しい頭痛が杏を襲い、杏の頭の中に誰かが語り掛けて来た。

『お前が立ち向かわないで、誰が恨みを晴らしてくれるの?』

杏

「アッ!? アアアアア!」

杏は激しい頭痛にもがき苦しむ。

『許す気なんて、始めからなかった…』

お前の中のもう一人のお前が、そう叫んでいる…

我は汝、汝は我…

やっと契約、結べるね…』

杏

「聞こえるよ、カルメン………分かった、私もう我慢しない!」

シャキッ!

杏が顔を上げた次の瞬間、杏の顔に深紅のキャットマスクが現れた。

蓮

「これは!?!」

天馬

「もしかして!?!」

シャドウ鴨志田

「う、嘘だろ……………!?!」

『そうよ…我慢なんかしていても、何も解決出来ない。わかったのなら、力を貸してあげる。』

バキッ! バキンッ!

杏は意図も簡単に拘束具を破壊し、流血と共にマスクを引き剥がす。マスクを引き剥

がした次の瞬間、杏の身体が青白い炎に包まれた。炎が消えると、杏は尻尾の付いた赤いボディースーツ姿となり、背後には薔薇とフラメンコを思わせる豪華なドレスを身にまとった魅惑的な女性のペルソナがいた。

杏

「ッ！」

シャキン！

アン姫

「っ!？」

杏は足元に落ちていた兵士の剣を手に取り、アン姫を切り裂いた。アン姫は身体を真っ二つにされ消滅。そして杏は剣を投げ捨て、蓮達が彼女の元へ集まった。

シャドウ鴨志田

「コイツ!？」



杏

「私、アンタなんかが好きに出来るほど、御安い女じゃないから。志帆から全部奪って、踏みにじったアンタを絶対に許さない!アンタの全てを奪ってやる!!」

杏はシャドウ鴨志田を指差し宣言する。すると、番兵隊長が立ちほだかった。

番兵隊長

「これ以上好き勝手な真似はさせん!鴨志田様の愛情を理解できない小娘が………死んで詫びろ!!」

番兵隊長は他の兵士達と融合し、巨大な魔神のシャドウ《ベルフェゴール》へと変身した。

蓮

「愛だど?生徒を、いや………女をただの欲望の捌け口だとしか見ない男が何を言う?」

杏

「悪いけど、もう我慢しないから!いくよ、《カルメン》!」

ボウツ！

杏のペルソナ、カルメンは炎の球をベリフェゴールに放つ。炎の球はベリフェゴールに命中し黒煙を上げる。

蓮

「アルセーヌー！」

竜司

「キャプテン・キッド！」

モルガナ

「ゾロ！」

蓮達3人もペルソナを召喚し、ベリフェゴールを攻撃する。

天馬

「俺も！」

天馬も負けじと、今後はエックストレインモナをVSチェンジャーにセット。

『モナ!』

そしてグリップを握り、銃身を右へ90度回しトリガーを引いた。

『ミラクルブースト!』

トリガーを引いた瞬間、エックストレインモナは2つの光の球となって放たれ天馬の両手と合体。天馬は両手に、疾風を纏った白銀の短剣を装備した。

天馬

「《モナブレード》!行くぞ!」

天馬はモナブレードを振り、疾風の刃をベリフェゴールに向けて放つ。

ベリフエゴール

「小癩な！」

天馬

「まだまだ！うおおおおお！！」

ビュウウウウウ！！

更に今度は拘束回転し、巨大な竜巻を発生させる。

杏

「踊れカルメン！」

更にカルメンが炎の球を竜巻に向けて発射。竜巻は巨大な炎の渦へと姿を変え、ベリフエゴールは炎の渦に飲み込まれた。

ベリフエゴール

「まさか、この世に鴨志田様の思い通りにならん女が、居ようとは……………」

杏

「アンナの、学校の外じゃ普通に『イタイオツサン』だから!」

ドカーン!!

ベリフェゴールは大爆発を起こし消滅。戦闘が終わり、蓮達のペルソナは元の仮面へと戻った。

グッドストライカー

「サイコーにイカしてたぜ、お前ら!」

シャドウ鴨志田

「マジかよ……………」

シャドウ鴨志田は恐怖したのか、一目散にその場から逃げ出した。

杏

「待ってっ!」

杏は後を追おうとするが、覚醒した反動か思うように動けない。

モルガナ

「大丈夫か、杏殿？」

グッドストライカー

「大丈夫か、杏？」

杏を心配するモルガナとグッドストライカー。

杏

「杏殿？つていうか、これ何？生き物？メカ？」

杏はまだ混乱している様だ。

モルガナ

「お、落ち着け！大丈夫だ、心配ない！」

杏

「落ち着けるわけ無いでしょ!？」

杏はモルガナの頭につき立ち上がる。そして、初めて自分の姿が変わっている事に気が付いた。

杏

「あれ?私、いつの間にこんな格好してるの!？」

落ち着くどころか、ますます混乱する杏。

天馬

「不味いな……………仕方ない、ここは一旦撤退しよう!」

竜司

「くそつ、これからって時に邪魔しやがって……………」

一同は杏を連れて、大急ぎでパレスから撤退した。



く蒼山一丁目駅 ホームく

現実世界に帰還した一同は、蒼山一丁目駅ホームに場所を変え、杏が落ち着くのを待ち、説明をした。

モルガナ

「少しは落ち着いたか？杏殿。」

杏

「えっと、モルガナだっけ？私、猫と話して……あいや、猫じゃないんだよね？」

杏はまだ少し混乱している様だ。

グッドストライカー

「混乱して当然さ。いきなりあんな目に合って、すぐ理解しろって方が無理だ。」



杏

「正直、まだ信じらんない……それに、あの……ペルソナだっけ？」

蓮

「高巻の叛逆の意思だ。その力があれば、パレスでシャドウと戦える。」

杏

「あなた達の話が本当なら、鴨志田を改心させられるんだよね？アイツ自身から罪を告白なんて、本当に出来るの？」

天馬

「出来るかどうかと言うより、これしか方法が無いのが現状ですね……」

竜司

「被害にあってる当のバレー部員はダンマリで、教師も親も見てみぬフリだ。俺らみたいのが騒いだって、握り潰されるだけ……これに掛けるしかねえんだ。」

杏

「だったら私にもやらせて。志帆をあんな目にあわせて、ノウノウとしてるなんて絶対許せない！」

蓮

「もちろんだ。一緒に来てくれるなら心強い。」

モルガナ

「我輩も賛成だ。戦力敵にも心許なかったしな。」

竜司

「つたく、しょうがねえなあ……………どうせダメって言っても、1人で行くんだろ？」

蓮達は杏を仲間として受け入れた。

杏

「私は絶対、鴨志田に自分の罪を償わせる。志帆だけじゃない……………今までやってきたこと全部！もう誰1人、アイツのせいで泣かせない！」

この時、一同は感じた。杏の戦いへの強い覚悟を。

杏

「そうだ、連絡先とID交換しようよ！」

杏はそう言ってスマホを手取る。蓮達もスマホを手に取り、杏と連絡先を交換し

た。

天馬

「これからヨロシクお願いします、高卷さん。」

杏

「高卷さんじゃなくて、杏でいいよ。あと敬語も無しでダメでいいから。」

竜司

「てか、これからはこのメンツで直ぐに集まれた方が良いよな?」

蓮

「そうだな。何処か『秘密のアジト』が欲しいところだ。」

天馬

「学校の屋上はどうか? 普段は立ち入り禁止だから、基本的に誰も来ないだろうし。」

杏

「いいわね、賛成!」

竜司

「アジトか、悪くねえな!」

一同は賛成し、学校の屋上がアジトに決まった。

杏

「じゃあ私、そろそろ行くね？パレス行くときは連絡してね？」

杏はそう言うと、駆け足で去っていった。

モルガナ

「いい子だなあ、あの健気な心配り……しかも、願いのために危険を省みないいらしさ……友達思いでオマケに美人！我輩、すっかり心を奪われてしまったぜ！」

竜司・グッドストライカー

「おいおい……」

モルガナに呆れる竜司とグッドストライカーであった。

天馬

「ところで、モルガナとグツデイはこれからどうするの？」

モルガナ

「ああ、パレスの中じゃ連絡取れねえから、こっちに残る。て事で蓮、天馬、我輩のお世話を頼む。」

モルガナの依頼に蓮と天馬は「えっ!?!」となった。

モルガナ

「我輩直々のご指名だ! 光栄に思え!」

竜司

「任せる。俺んちゼツテ無理だから。」

グッドストライカー

「あ、次いでにオイラも連れてってくれよ。」

天馬

「まあ、グッデイならオモチャって言えば誤魔化せるし、いつか……………」

竜司

「んじや、明日早速アジトでな!」

そう言うと、竜司は去っていった。

モルガナ

「それじゃ、我輩の滞在場所を確認しに行こうか！」

やけに張り切るモルガナと、先行き不安しかない天馬と蓮。

グッドストライカー

「……………オイラ、やっぱり付いて行くの止めようか？ オイラ、元々ブラブラするのが好きな気まぐれなコレクションだし……………」

そして少しばかり罪悪感を抱いたグッドストライカーであった。

# Act. 08 / 猫と医者と武器屋とマスターと

ルブラン 店内

モルガナとグッドストライカーを連れて帰る事になり、天馬と蓮は夜ルブランに戻った。

蓮・天馬

「ただいま。」

惣治郎

「お帰り。あー、悪いが上に行つててくれ。まだ営業中だな。」

2人は惣治郎の言う通り階段へ向かう。店内には惣治郎の他にお客が1人居た。パシクな服装をした、赤い瞳のミステリアスな女性だ。

女性

「……………帰る。ご馳走さま。」

惣治郎

「またどうぞ。」

女性はコーヒーを飲み干し会計を済ませると、静かにルブランを後にした。

惣治郎

「さて、今日はこれで終わりだな。」

蓮

「今のは誰だ？」

惣治郎

「ん？ああ、近所にある診療所の医者だよ。」

天馬

「えっ？お医者さん？今の人が？」

天馬は先ほどの女性が医者だった事を少し意外だと思った。



惣治郎

「お前もそう思うか？何でも近所の間じや、適当な診察して聞いたこともねえ薬を処方するつて噂だ。つたく、関わり無いならソツとしとけばいいのによ……」

蓮・天馬

「へえ……」

惣治郎

「さて、そんじや帰つてメシの支度すつか。」

—————

く屋根裏部屋く

2人はそのまま屋根裏部屋に移動し、モルガナとグッドストライカーを学生鞆からベッドの上に出した。

モルガナ

「おい、何処だ此処？」

グッドストライカー

「此処がお前らの部屋か？」

グッドストライカーの質問に、天馬と蓮は「うん」と答える。

モルガナ

「此処がか？一瞬廃屋かと思ったぞ……………」

モルガナのコメントに少しイラツと来た2人。すると、惣治郎が屋根裏部屋に上がってきた。

惣治郎

「おい、ニヤーニヤーうるさいと思ったら猫拾って来たのか!？」

天馬

「えっ!?!いや、あの……………」

蓮

「すまない。道端で捨てられてて、かわいそうだったから、つい……………」

慌てる天馬と、惣治郎に落ち着いて嘘の説明をする蓮。

惣治郎

「そうか、そいつは気の毒だったな……………でもよ、ウチは飲食店だぞ？動物はねえだろ……………まあでも、世話する生き物がいれば少しは大人しくしてるかも知れんか……………しようがねえ。」

惣治郎は蓮達がモルガナを飼う事を認めた。

モルガナ

「飼うって、我輩はペットじゃねえ!!」

グッドストライカー

(誰に突っ込んでんだ……………?)

惣治郎

「ただし、俺は一切世話はしないぞ？開店中は騒がしたり、店の中うろつかせたりするなよ。」

蓮と天馬は了解し、惣治郎は屋根裏部屋を去っていった。

モルガナ

「こここの城主か？」

蓮

「城主？まあ、そんなところだな。」

モルガナ

「お前らを廃屋に押し込んでる割には、話の分かるオヤジだったな。と言っても普通の人間には猫の鳴き声にしか聞こえんみたいだが。」

惣治郎

「まったく、可愛い声で鳴きやがる……」

と、惣治郎が何やら皿を持って戻ってきた。皿には鳥の笹身が盛り付けられており、惣治郎はそれをモルガナの前に置いた。

惣治郎

「ほら、食いな。」

モルガナ

「ニヤツフー！」

モルガナは大喜びで笹身に飛び付いた。

惣治郎

「そういや、名前とか決まってるのか？」

蓮

「ああ、名前はモルガナだ。」

惣治郎

「ふーん、モルガナねえ……名前付けてやろうかと思ったんだが、まあいいんじゃないか？ 後で皿洗つとけよ。」

惣治郎はそう言うと、再び屋根裏部屋を離れた。

グッドストライカー

「御主人はお前らよりも、モルガナを気に入つたみたいだな。」

天馬

「かもね。」

と、モルガナが笹身を平らげ話し始めた。

モルガナ

「お前ら、前に聞いたよな？我輩が何者かって……正直に言うとき、生まれの事は何も覚えてないんだ。」

天馬

「覚えてない？じゃあ、記憶喪失って事？」

モルガナ

「ああ、異世界の歪みにやられて、本来の姿と一緒に失くしちゃったんだ……」

「じゃあ、やっぱり正体は人間なのか？」

モルガナ

「多分そうだ。そうじゃなきゃ、何で猫が普通に喋れるんだって話だろ？それに姿を取

り戻す方法だって大体分かつてる。城に潜入したのも調査のためさ。」

天馬

「そうなんだ。」

モルガナ

「それはさておき………実は我輩は色々器用でな、潜入道具を知ってるんだ。お前らが我輩のお世話をする見返りに、我輩はお前らに潜入道具の作り方をレクチャーしてやる。どうだ？」

蓮

「潜入道具か………なるほど、悪くない。」

モルガナ

「へへっ、取引成立だな！」

モルガナは取引が成立し嬉しそうだ。

モルガナ

「潜入道具については追々レクチャーしてやる。取り敢えず、今日は明日に備えて寝ようぜ。」

蓮は皿を片付け、一同は眠りについた。



秀尽学園 屋上

次の日、4月16日 土曜日の放課後。

天馬・蓮・モルガナ・グッドストライカー・竜司・杏が屋上のアジトに集まった。

竜司

「これで全員揃ったな？ んじゃ行くか！」

竜司が先陣をきるが、モルガナが待ったを出した。

モルガナ

「待て、パレスを甘く見るな。先ずは潜入する準備を整える必要がある。」



杏

「準備って、具体的には何をやるの？」

グッドストライカー

「まずは装備を整える。現状の装備じゃ少し心細いからな。次に薬の確保だ。パレス探索は体力を消耗する。」

竜司

「装備って武器の事か？なら武器は俺に任せろ。渋谷のセントラル街に売ってそうな店を知ってる。」

モルガナ

「分かった。薬については我輩に心当たりがある。蓮、天馬、我輩達は一旦四茶に向かうぞ。」

天馬

「えっ、四茶に？」

蓮

「どういう事だ？」

モルガナ

「いいから来い！今日はこれで解散だ！」

〱 四軒茶屋 武見内科医院 〱

蓮と天馬はモルガナに連れられ、ルブランの近くにある診療所《武見内科医院》にやつて来た。

天馬

「ここって、もしかして昨日惣治郎さんが言ってた診療所?」

蓮

「モルガナ、お前まさか……………」

モルガナ

「そのまさかさ。昨日ルブランで会った医者、御主人の言ってた噂でピンと来たんだ。そんな噂が立つ奴なら、相談に乗ってくれるかも知れん。」

蓮

「確かに。だが、どうやって薬を手に入れる?」

天馬

「適当に嘘ついて、処方してもらうしか無いか……………内科だけに。」

蓮

「……………行くぞ。」

天馬のギャグはスルーされ、一同は診療所に入った。受付には昨日ルブランで会った女医が居た。

女医

「どうも……………あら？貴方達は昨日の……………どうしたの？」

天馬

「実は、最近あまり寝付けなくて……………」

蓮

「俺も、何だか夢に魘されてる様な……………」

女医

「ふうん……………」

と、女医は何故か2人をじつと見る。

女医

「取り敢えず診察室に。面倒だから2人一緒に来て。」

3人は診察室に入り、女医は診察室の鍵を閉めた。

女医

「じゃあ診察を………すると思った？」

天馬

「えっ?」

天馬は少し驚き、女医は2人を睨み付ける。

女医

「アンタ達健康でしょ?それが見抜けない程、私はバカじゃないよ。ウチの噂聞いて、此処に来たんでしょ?」

「どうやら女医はお見通しだった様だ。」

蓮

「なら逆に聞くが、噂は本当か？」

女医

「さあね、オカゲで訳有り患者ばっか来るけど……OK、薬処方してあげる。」

女医はあつさりOKした。

天馬

「いいんですか？」

女医

「まあね、一応2人とも真面目そうだし。ただ処方するのは体調回復に効くやつに限るけどね。あと、薬は私のオリジナル。自由診療みたいなモノだから、体調を崩しても自己責任。それでも構わない？」

蓮

「ああ、それで構わない。」

天馬

「俺もです。」

女医

「OK、じゃあ少し待ってて。」

女医は薬を用意し、2人に処方した。そして2人が診察室を出ると、1人の中年男性が診察室に入った。

『いい加減にしたまえ!!』

蓮・天馬

「っ!?!」

男性の怒鳴り声が聞こえ、2人はそつとドアに耳を傾ける。

男性

『君しか居ないんだよ、あんな非常識な薬を作るのは!』

女医

『さあ、何の事でしょう?』

男性

『しらばつくれるな!アレを飲めば、間違いなく非常識な力が手に入ると、もつぱらの噂になつてる!新薬、生薬、漢方薬、見事に医学体系を無視した配合だ!スーパーマンでも作る気かね!』

女医

『私、ただのヤブ医者ですよ?』

男性

『また私の顔に泥を塗る気か?学会の恥なんだよ、貴様は!学会から逮捕者など出せん!今すぐ薬を廃棄し、医者から手を引け!』

天馬・蓮

「……………」

2人はソツと診療所を離れ、診療所入口で話し合う。

天馬

「何だか物騒な事聞いちゃったね……………」

蓮

「しかし、さっきの話にあつた薬というのは気になるな。」

モルガナ

「あのネーチャン、ひよつとするとともに強力な薬を持つてる可能性があるな。強力な薬なら、パレスでの戦闘に役立つかも知れん。」

蓮

「あの男が居ない時に、また来るとしよう。」



く 渋谷駅前広場く

次の日、4月17日 日曜日。

天馬と蓮は渋谷駅前広場で竜司と待ち合わせをしていた。杏は今回、志帆の見舞いに行くとの事で不在である。



竜司

「例の売ってそうな店は、セントラル街の中にある。行こうぜ？」

竜司の案内で2人はセントラル街を目指す。すると……

「皆さん、気付いて下さい！この国は歪んでいます！」

天馬・蓮

「ん？」

青ガエルの前で熱心に演説をする1人の中年男性の姿が目に入った。

演説する男

「一見豊かに見える日本社会。ですが仕事が無い、保障が無い、貯えが出来ない等……  
未来を担う沢山の若者は、その恩恵を受けていません！」

竜司

「演説なんて今時珍しくねえよ。それに政治なんか興味ねえだろ？それより早く行こうぜ。」

竜司に引つ張られ、天馬と蓮は若干強制的にその場を後にした。

—————

くセントラル街 アンタツチャブルく

3人はセントラル街の裏通りにあるミリタリーショップ、《アンタツチャブル》にやつて来た。

竜司

「此処だよ。」

蓮

「なるほど、ミリタリーショップか。」

天馬

「何、この店？」

竜司

「ミリタリーショップ、簡単に言えばモデルガンを売ってる店だよ。取り敢えず入ってみようぜ？」

蓮を先頭に、3人はミリタリーショップに入る。カウンターには無愛想な男性店員が居座っていた。

店員

「いらっしやい。」

3人は取り敢えず、店員にオススメの商品を訪ねてみるが……

店員

「オススメねえ……じゃあオートマチックとりボルバー、どっちが良い？」

竜司

「オートマ？おいオッサン、車の話じゃねえよ！」

竜司はどうやら意味が分かっていない様だ。

店員

「此処はマニアの来る店だ。ビギナーが来ると常連が嫌がる。」

天馬

「じゃあ、ワルサーP38かコンバットマグナムをお願いします。」

蓮

「俺は取り敢えず、リアルな奴を。」

店員

「ほう……………」

店員は天馬の蓮の要望を聞いて、何やら目の色を変えた。

店員

「茶髪坊主、お前も見える感じビギナーだが、かなり良い趣味してんな。でもって黒髪のお前は鑑賞派か……………そっちの金髪よりは話が通じるな。」

竜司

「う、うつせえ！」

店員

「買う前に一応、注意事項だ。人には絶対向けない事。運搬時は鞆に入れる事。あとサツの世話にはなるなよ。ミリ屋の偏見が高まるのは迷惑だ。」

蓮

「分かつてる。警察は嫌いだ。」

店員

「奇遇だな、俺もだよ。」

店員は蓮を見てニヤリと笑った。

店員

「まあよく見りやモデルガンと分かるんだが、本物は重厚感が違う。お前らにその気があるのなら、もつと良いモノを拝ませてやる。」



く喫茶ルブランく

その日の夜、ルブランに戻ると店内には惣治郎と、常連とおぼしき偉そうな男性客が居た。

男性客

「マスター、知ってるかい？先日の地下鉄事故も、車掌が異常な言動をしてたってね。」

惣治郎

「精神がどうのとか騒いでるヤツ？」

男性客

「何でも人格そのものが変わってしまったんだってさ。まるで心を盗まれた様だって……」

惣治郎

「そんなバカな話、有るわけ無いだろ？悪いがもう閉店だよ。」

惣治郎は男性客を睨んだ。

男性客

「そうやってゴアイサツだから、客が来ないんじゃないの？味は悪くないのに店がこれじゃ、せつかくの豆が泣くよ？」

男性客はそう言うのと、会計を済ませ出ていった。

惣治郎

「つたく、面倒くせえなあ……………」

天馬

「あんな接客で大丈夫なんですか？」

惣治郎

「良いんだよ、店さえ潰れなきやな。愛想笑いしてまでやる気なんざ無い。」

蓮

「ポリシーってヤツか？」

惣治郎

「そこまで大した事じゃねえよ。此処に居る限り、みんなが放っておいてくれる。煩わ

しい話も面倒くせえ繋がりも無い、隠れ家みたいなモンさ。だから無くなつちや困るのは事実だ。お前らも暇なら、皿洗うくらいはしろよ？」

天馬は「はい」、蓮は「分かった」と返事をし、惣治郎は片付けを済ませルブランを離れた。

—————

く屋根裏部屋く

その後、2人は屋根裏部屋でモルガナの指導の下、潜入道具の製作を始めた。

蓮

「よし、完成だ。」

天馬

「こつちも出来たよ。」



2人が作ったのは、怪盗には必要不可欠のアイテム。鍵開けに使うキーピックだった。

モルガナ

「これで取り敢えず準備は整った。明日からいよいよパレス攻略だ。しっかり休めよ。」

2人は頷き、一同は明日に備えて眠りに着いた。

## Act. 09 / 再潜入、鴨志田パレス 《前編》

く秀尽学園 生徒指導室く

翌日、4月18日 月曜日の朝。

ホームルームを終えた天馬と蓮は、川上に連れられ生徒指導室の前に来ていた。

天馬

「あの……俺達が呼ばれたのって……」

川上

「ちよつと二人に確認しておきたい事があるだけ。大丈夫、すぐ済むから。」

ガラガラガラ……

生徒指導室の扉が開き、中から鴨志田と生徒指導の教師、そして何故かかすみが出てきた。

鴨志田

「早速今朝の件を進めてくれてる様で、助かります川上先生。」

天馬

「芳澤さん？」

かすみ

「あ、松風君！それに雨宮先輩！おはようございます！」

かすみは元気に挨拶し、天馬と蓮は共に「おはよう」と挨拶をした。そのやり取りを見て、鴨志田は少し驚いた。

鴨志田

「何だ芳澤、お前知り合いだったのか？」

かすみ

「松風君とは同じクラスなんです。雨宮先輩には前に助けて貰った事がありました。」

蓮

（助けた？……ひよつとして、この間の電車での事か？）

笑顔で言うかすみに対し、鴨志田は何やら心配そうな表情を見せる。

鴨志田

「やめておいた方がいい、君の輝かしい未来に傷が付く。さつき話しただろ？この学校には、関わらない方がいい生徒が何人かいる。その筆頭が、その二人だ。」

鴨志田の言うことに、かすみは驚いた。

かすみ

「まさか、二年の前歴持ちの転校生って……………」

川上

「あの……………いいでしょうか？指導室、入らせて頂いても……………」

鴨志田

「おっと、すみません。」

鴨志田と指導教師はその場を離れ、かすみも「失礼します」と礼をしその場を離れた。

天馬・蓮・川上は生徒指導室に入り、川上が二人に話し始めた。

川上

「単刀直入に聞くけど、鴨志田先生と何かあったの？」

二人は一瞬動揺した。恐らく先日 of 退学の件だと思ったからだ。

天馬

「いえ、自分は特に何も……………」

蓮

「俺も特には。どうしてそんな事を？」

川上

「今朝、お小言貰っちゃったの。君達の名前出されて、監督不行き届きとか何とか……………あんまり詮索とかしたくないけど、面倒な事起こさないですよ？」

天馬

「わ、分かりました……………」

蓮

「はい……………」

川上

「それと、さっきの女子。ちよつかいとか出してない？」

川上がそう言うのと、天馬と蓮は全否定した。川上も「ならいいわ。」と答え、二人の指導は終わった。



く屋上く

放課後、天馬・蓮・竜司・杏・モルガナ・グッドストライカーが屋上に集まった。が、竜司は何やらイライラしていた。

竜司

「今朝鴨志田と校門で会ったんだけど、アイツ半笑いで俺の事見てきやがった！」

杏

「何それ？ スツゴい腹立つ………ヨユーぶってるつもり？」

竜司

「俺、むしろヤル気出てきた。作戦ゼツテ成功させようぜ！」

天馬

「確か、次の理事会って5月2日だよね？」

蓮

「その日が、俺達のタイムリミットって事か。」

杏

「それまでにあの城に行つて、お宝を盗めばいいんだよね？」

モルガナ

「パレスのお宝は主が持つ歪んだ欲望の象徴、言うなればパレスの核だ。盗つてしまえば、パレスは形を失い消滅する筈。だが鴨志田のお宝が何なのかは、我輩にも分からん。」

グッドストライカー

「多分隠し場所も、城の最深部だろうよ。後生大事に仕舞つてあるに違いねえ。」

モルガナ

「取り敢えず現状の目標は、パレスの何処かにあるお宝の場所を見つける事だ。不測の

事態を避けるためにも、出来るだけ余裕を持って行動しろ。お前らの活躍、期待してるぜ？」



↳ 鴨志田パレス 古城 正門↳

一同は屋上を離れ、学校前でナビを起動。怪盗姿となって鴨志田のパレスに侵入した。

竜司

「そう言や、高巻のコードネーム決めねえとな。」

杏

「コードネーム？」

蓮

「俺がジョーカーで、竜司がスカル、天馬がライデン、それからグツデイにモナだ。こっちで活動する時は、コードネームで呼び合う様になっているんだ。」



モルガナ

「杏殿の格好だと……………」

竜司

「尻尾といい仮面といい、この格好はもう……………」

蓮

「うむ……………《キャットガール》とかどうだ？」

杏

「待って、まさか今後ソレで呼ぶ気!?!絶対イヤだし!!」

蓮の考えたコードネームを全力拒否する杏。

天馬

「じゃあ、同じ猫科で《パンサー》とかどうかな？」

杏

「パンサー?……………ふうん、割と良いんじゃない？」

竜司

「どういう意味だ？」

蓮

「英語で《豹》という意味だ。」

グッドストライカー

「なるほど、正しく女豹だな！」

杏

「女豹言うな！」

※女豹とは、人間の女性の妖艶かつ野趣あふれる様子を形容する言い方として用いられる語である。

杏

「つて言うか、鴨志田！」

竜司

「おっとそうだ、行こうぜ！」

一同は城に向かって歩き出す。

キイイイイン!!

すると突然、杏の手の中に光る玉が現れ、光る玉は猫耳が付いた赤い新幹線型のアイテムに変化した。

杏

「何これ？新幹線？」

杏は不思議そうにアイテムを見る。

モルガナ

「おいそれ、VSビークルじゃねえのか!？」

グッドストライカー

「ああ、間違いねえ！ジョーカー達に続いて今度はパンサーから出てくるとか、どうなつてやがんだ？」

杏

「VSビークル？」

蓮

「パンサーが今持つてる電車の事だ。」

蓮は杏にVSビークルについて説明をした。

蓮

「そいつをライデンの持つてる銃に使えば、パワーアップしたり巨大化させて呼び出したり出来るらしい。」

竜司

「俺達もこの間忍び込んだ時に、何故か手の中に出てきてよ。で、俺達が持つても意味ねえからライデンに預かってもらってたんだ。」

杏

「そうなんだ。じゃあ、悪いんだけど預かってくれない？ライデン。」

天馬

「うん、分かった。」

杏は自身から出現したVSビークルを天馬に預けた。

天馬

「パンサーは電車だから、《エックストレインパンサー》だね。」

モルガナ

「それじゃ、改めて行くとするか。パレス攻略については、追々我輩が教えてやる。」

一同は、モルガナを先頭に古城へと向かう。

「そのこの囚人。」

天馬・蓮

「っ?！」

突然、聞き覚えのある少女の声が聞こえた。天馬と蓮が辺りを見ると、正門の影にジュステイーヌの姿があつた。

蓮

「お前は……確かジュステイナー！」

ジュステイナー

「主より御言葉です。参りなさい。」

ジュステイナーの横に青く光る鉄格子の扉が現れ、二人は扉の中へと入る。そして次の瞬間、二人はベルベツトルームの檻の中に居た。

蓮

「此処は、ベルベツトルーム！」

カロリーヌ

「囚人雨宮蓮及び松風天馬、戻りました。」

イゴール

「実に結構、私の言葉を覚えていた様だな。更生させる甲斐もあろうというものだ。」  
蓮

「イゴール、いい加減教えてくれないか？更生とは何なんだ？」

イゴール

「そう焦るな。別に勿体ぶつてる訳ではないのだよ蓮。お前が成すべき更生の何たるか

……お前達が美学を共有する仲間と出会い、現実自身に自身の居場所を見出だしたとき……その時に改めて話そう。蓮、今回はお前への支援について話させて頂きたい。」

蓮

「支援だど？」

イゴール

「お前は『ワイルド』と言う素養によって、多数のペルソナを扱うことが出来る。ワイルドは無限の可能性。その素養の育成を我々が支援しよう。そのために、お前のペルソナを処刑させてもらう。」

天馬・蓮

「処刑!？」

処刑と聞いて、二人は動揺した。

イゴール

「案ずる事は無い。ペルソナ、即ちお前に眠る内なる人格の幾つかを捨て、新たな人格に生まれ変わらせる事、それが処刑だ。言うなればペルソナ同士の合体……実際にやってみるかね？」

## 蓮

「なるほど……有り難いが、今は遠慮しよう。せつかく手に入れた俺のペルソナ、アルセーヌを失いたくない。」

## イゴール

「ほう、最初に手に入れたペルソナ故の愛着か……まあそれも良からう。今後お前は幾多の戦場へ行く事になる。ペルソナを集め、多くを此処で処刑し、より強いペルソナを生み出して行くのだ。力を養う事がお前の更生であり、やがて破滅に抗う重要な鍵ともなろう。」

## ジュステイーヌ

「更生が捗るよう、処刑の方法は幾つかの祭儀から選べるようにしてあります。」

## カロリーヌ

「しかも貴様らの励み方次第では、更に新たな祭儀の開発も考慮されるそうだ。ないて喜べ、囚人！」

## イゴール

「お前の心は着実に抗う力を付けている。更生は順調の様だ………実に喜ばしい。そこで、私からお前達に贈り物をする事にした。」



そう言うといゴールは、手から青い光の球を出現させる。光の球は蓮に近づくと、光の粒子となつて蓮の瞳に吸収された。

天馬

「何、今の………?」

蓮

「イゴール、今のは………」

イゴール

「《サードアイ》。心の眼を開き、闇に隠された獲物をも見透かす賊の技。今のお前なら使いこなせよう。より一層の更生に励むといい。」

イゴールがそう言うのと、二人の視界が真っ白になる。そして気が付くと、二人は古城の入口に居た。

天馬

「此処は?」

蓮

「どうやら戻ってこれたみたいだな。」

モルガナ

「おいジョーカー、ライデン、何ボーツと突っ立ってんだ？」

そこへモルガナが声をかける。どうやらモルガナ達には二人が突っ立っている様に見えたらしい。二人は急いでモルガナ達と合流し、一同は古城内部に侵入を開始した。

――

く古城 西館二階く

監視の目を掻い潜り、古城内部を進む一同。すると、道中に檻で囲まれた不思議な部屋を発見した。檻の中にはテーブルがあり、その上に何やら紙の様なモノが置いてある。

天馬

「ねえ、檻の中に何かあるよ？」

蓮

「あれは……紙か？」

モルガナ

「これだけ嚴重に守ってるって事は、何か重要な物に違いねえ。」

グッドストライカー

「よし、じゃあオイラが盗ってきてやるよ！」

グッドストライカーは鉄格子の隙間から檻の中に侵入し、テーブルに置いてある紙を取って戻ってきた。紙の正体は、どうやら城の見取り図の様だ。

杏

「これって、この城の見取り図？」

モルガナ

「こいつはラッキーだな！見取り図は、まだ行ったことの無い場所の情報を把握出来る。まさに怪盗の必需品だ。これでパレス攻略も楽になるぞ！」

天馬

「でもコレ、見た感じ途中までしか無いよ？」

竜司

「取り敢えず分かった範囲からあたってみようぜ？そうすりや残りも見つかんだろ？」

—————

↳東館二階 螺旋階段↳

一同は手に入れた見取り図を頼りに、西館から東館に移動。そして螺旋階段の前までやって来た。

モルガナ

「これは………」

だが肝心の階段は老朽化のせいか、下側が派手に崩れ落ちていた。（そもそもパレスの建物に老朽化という概念があるのだろうか？）

竜司

「こいつは、上るのムズくね？」

蓮

「別の道を探すか？」

モルガナ

「いや待て、あれを見ろ！」

モルガナが指差したのは、階段の装飾になっている指輪を啜えた羊の首。

杏

「あ、輪っか付いてる！あそこにロープをかけて上るのね？」

モルガナ

「半分正解・半分ハズレだ、杏殿。怪盗ってのはもっとスマートにやるもんだ！」

そう言うと、モルガナは蓮・天馬・竜司・杏の左腕に何かを装着した。

天馬

「これは？」

モルガナ

「我輩が密かに準備しておいたアイテム、《ワイヤーフック》だ！そいつを使って、遠くまで行けるぜ？」

蓮

「なるほど、ハッ！」

バシユツ！

蓮は早速ワイヤーフックを羊の首に向けて発射。フックは見事指輪に引っ掛かり、そしてワイヤーを巻き取り階段の上へと登った。

竜司

「スツゲー！よし、俺も！」

杏

「私も！」

天馬・竜司・杏も蓮を真似て、ワイヤーフックで上へと登った。

モルガナ

「お前から中々筋があるな！」

更にモルガナがグッドストライカーの背に乗って合流した。

—————

く 東館三階 廊下く

一同は更に奥へと進み、現在所持している見取り図の最深部、東館三階にやって来た。

天馬

「見取り図はこの階で終わってる。」

グッドストライカー

「何れにしても、これ以上進むのは無理だな。」

さらに奥へと続くであろう扉には鉄格子があり、その鉄格子の側には何やら怪しい丸い窪みがある。

蓮

「このフロアで先に進む方法を探そう。」

一同は先に進む手懸かりを求め、辺りの部屋を片っ端から調べて回る。そして最終的に、巨大な書庫にたどり着いた。

杏

「うわ、カビ臭い……」

グッドストライカー

「なるほど書庫か……城の書庫と言えば仕掛けが付きモンだ。ちよつと調べてみようぜっ。」

一同は手分けして書庫の中を調べる。



天馬

「この本棚の本、全部鴨志田先生の名前が書いてある。」

グッドストライカー

「『鴨志田の歴史』、『鴨志田の軌跡』、『鴨志田武勇伝』、『鴨志田の掟』……まだまだあるな。」

竜司

「こっちは男子生徒の名前が書いてあるぜ。」

モルガナ

「『卑しき猿・坂本竜司』。スカルの本もあるな？」

竜司

「アイツ………！」

杏

「こっちは女子生徒の名前ばかり。」

蓮

「『魅惑の人形・高卷杏』。パンサーのもあるぞ？」

杏

「………読んだら殺すからね？」

すると……………

天馬

「ん？コレだけ違うタイトルが書いてある。『王妃の書』？」

蓮

「こつちもあつたぞ。『奴隷の書』だ。」

竜司

「俺もだ。『王の書』だつてさ。」

モルガナ

「各々の本棚の中に、一冊だけ違う本が混じつてた……………ひよつとすると、コイツが仕掛けを動かす鍵かも知れないぞ？各々の本を本来の場所に戻してみようぜ？」

天馬

「この本も鴨志田先生の認知が関係してるとなると、王妃って女子生徒の事だよね？じゃあ此処かな？」

天馬は王妃の書を、女子生徒の本がある本棚に仕舞う。

蓮

「奴隸はおそらく、男子生徒の事だろう。此処だ。」

蓮は奴隸の書を男子生徒の本がある本棚に仕舞う。

竜司

「王つてのが鴨志田なら……此処か？」

竜司は王の書を鴨志田の本がある本棚に仕舞う。

カチツ　ゴゴゴゴゴ……

すると本棚の一部が動き出し、隠し部屋が姿を見せた。

モルガナ

「よっしゃ！思った通りだ！」

だが隠し部屋の中を見て、一同は唾然とした。部屋には拘束具の他に、志帆の写真が壁に何十枚と貼られていた。

天馬

「これ、もしかして全部鈴井さんの写真!?!」

杏

「……………」

あまりの光景に言葉も出ない杏。

蓮

「……………ケジメをつけさせよう、パンサー。」

杏

「……………うん、絶対に。なんか、闘志湧いてきた!」

一同は隠し部屋を散策する。すると、天馬が何かを見つけた。

天馬  
「何だコレ？メダル？」

天馬が手にしたのは、鴨志田の横顔が大きく刻印された金メダル。

竜司

「鴨志田のメダル？気味悪いな……」

杏

「待って！もしかしてそれ、さっきの檻を開ける鍵だったりしないかな？ほら、あの窪みに入りそうだし。」

モルガナ

「パンサーの言う通りだ。貰っておこうぜ。」

と、メダルの下には新たな見取り図が置いてあった。

天馬

「あつた！新しい見取り図だ！」

一同は早速、見取り図でお宝の場所を確認する。

グッドストライカー

「見取り図によると、お宝は塔の最上階。王の間の奥みたいだ。距離的には残り半分つてとこだな。」

蓮

「どうする？このまま先に進むか？」

竜司

「当たり前だろ！このまま行こうぜ！」

竜司の意見に、パンサーも同意の意思を見せる。一同はこのまま、更に奥へと進む事にした。

Act. 09 / 再潜入、鴨志田パレス 《後編》

↳ 東館別棟 礼拝堂

一同は手に入れたメダルで鉄格子を開き、東館別棟に移動。新たな見取り図を頼りに礼拝堂へとたどり着いた。

天馬

「此処は、礼拝堂かな？」

グッドストライカー

「誰も居ないぜ？こんな広い場所で見張り無しってのは奇妙だな。」

礼拝堂の奥には、巨大なシャドウ鴨志田の石像が置かれていた。すると突然、景色が歪み体育館の中が一瞬だけ見えた。

杏

「今の、体育館？」

蓮

「ヤツにとって体育館は聖なる場所。そして自分はその神という事か。」

『なるほど、書庫の部屋を荒らしたのは貴様らか。待っていた甲斐があったものだ。』

突然、礼拝堂内に誰かの声が響いた。

天馬

「誰だ!？」

『その者が言った通り、此処は鴨志田様の聖域だ。そこに土足で踏み込むとは、不届き千万………』

一同の前に、赤い翼を持つ天の刑罰官のシャドウ《アークエンジェル》が現れた。

アークエンジェル



「鴨志田様に逆らった愚かしさ、身をもって知るが良い!!」

アークエンジェルは右手に装備する剣を振り下ろし、天馬達は散開して剣を避けた。

モルガナ

「やっぱりこうなったか………迎え撃つぞ!」

蓮はナイフ、竜司は鉄パイプ、モルガナはサーベル、杏は鞭を装備し、アークエンジェルに攻撃を仕掛ける。

蓮・モルガナ

「ハッ!」

ガキンツ!

竜司

「オリヤ!」

杏

「食らえ！」

シュツ！

だがアークエンジェルは蓮とモルガナの攻撃を受け止め、竜司と杏の攻撃を華麗にかわした。

天馬

「試してみるか！」

天馬はエックストレインパンサーを手に取り、VSチェンジャーにセット。

『パンサー！』

グリップを握り、銃身を右に90度回しトリガーを引いた。

『ミラクルブースト!』

トリガーを引いた瞬間、エックスストレインパンサーは光の球となって放たれ天馬の左腕と合体。天馬は左手に、炎を纏った真紅の鞭を装備した。

天馬

「《パンサーウィップ》!」

天馬はパンサーウィップを振り回し、アークエンジェルを攻撃。

バンツ!

内一撃がアークエンジェルに命中し、アークエンジェルは体勢を崩した。

天馬

「ハアアアアアアアアアッ!!」

天馬は距離を取り、パンサーウィップを振り回す。周囲に赤い炎の輪を大量に描き出し、アークエンジェルに向けて飛ばした。

ドカーン！

炎の輪はアークエンジェルに命中するが、アークエンジェルはほとんどダメージを受けていなかった。

アークエンジェル

「無駄だ！この程度の攻撃では、私は倒せんぞ！」

竜司

「つ、強え……………」

モルガナ

「こいつ、中々手強い！」

アークエンジェルは剣を構え、天馬達に向けて突進。

天馬

「魔神ペガサスアーク！」

ペガサスアーク

『オオオオオオオオツ!!』

ガシンツ！

天馬はペガサスアークを召喚し、ペガサスアークはアークエンジェルの剣を白刃取りで受け止め、アークエンジェルを放り投げた。

天馬

「こうなったら全力だ！アームド！」

天馬が叫ぶと、ペガサスアークは雄叫びと共に藍色のオーラへと姿を変え、天馬の身体を包み込む。そしてオーラが消えると、天馬は白いペガサスの鎧を身に付けていた。

蓮・モルガナ

「化身が!？」

竜司・杏

「鎧になつた!？」

『ジョーカー!スカル!パンサー!モナ!ミラクルブースト!』

天馬は即座に蓮の左腕にジョーカークロウ、竜司の右腕にスカルバスター、杏の左手にパンサーウィップ、モルガナの両手にモナブレードを装備させる。

天馬

「一気に行くよ!グツデイ!」

グッドストライカー

「あいよ!」

グッドストライカーは自動車形態へと変形し、天馬がグッドストライカーを掴みVSチェンジャーにセット。

『グッドストライカー！』

グッドストライカー

「突撃よーい！」

更に黒いグリップを握り、銃身を左へ90度回す。

『一致団結！』

天馬はVSチェンジャーを両手で握り、照準をアークエンジェルに合わせる。鎧から銃口に向けてエネルギーが充填され、巨大な白いエネルギー弾が形成され始めた。

アークエンジェル

「させるか！」

アークエンジェルは再び剣を構え、天馬に向けて襲い掛かる。

モルガナ

「それは此方の台詞だ！」

モルガナはアークエンジェルに向けて疾風の刃、杏は赤い炎の輪、竜司は雷撃、蓮は闇の刃をアークエンジェルに向けて一斉に放つ。

ドカーン！

アークエンジェルは攻撃を受けて像の前まで吹き飛んだ。

天馬

「食らえ!!」

『イチゲキ！ストライク！』

ズドーン！



そしてアークエンジェルがダウンした隙に天馬がエネルギー弾を発射。エネルギー弾はアークエンジェルに命中し、アークエンジェルを巨大な球体に閉じ込めた。

アークエンジェル

「くっ、見事だ………！」

ドカーン！

巨大な球体と共にアークエンジェルは爆発し消滅した。戦闘が終わると、蓮達の装備は全てVSビークルに戻った。

天馬

「ふう、何とか勝てたね………」

モルガナ

「敵もそろそろ本気を出してきたな、お宝に近づいてる証拠だろう。」

ガシツガシツガシツ

そこへ、騒ぎに気付いたのか大勢の兵士が押し寄せてきた。

杏

「不味い、新手が来るよ！」

天馬

「ジョーカー、アルセーナを！」

蓮

「よしー！」

蓮はアルセーナを召喚し、天馬も鎧を戻しペガサスアークを召喚。

ブオン！ガシャーン！

そして蓮は杏とモルガナ、天馬は竜司と共に飛び上がり、ステンドグラスを破壊し外へと出た。

竜司

「ふう、間一髪だったぜ……………」

杏

「つて言うか天馬、貴方もペルソナ使えたの？」

天馬

「俺のはペルソナじゃなくて化身。ペルソナとは違う形で、心から生まれたモノだよ。」

竜司

「じゃあ、さっきの鎧みたいなのは何なんだ？アレも化身の力か？」

天馬

「アレは《化身アームド》。化身を鎧として身に纏い、身体能力を大幅に向上させる能力だよ。普通に化身を使うときよりもパワーを出せるけど、その分消耗が激しいから、あまり長くはアームド出来ないんだ。」

モルガナ

「正に奥の手って事か。」

グッドストライカー

「それより、これからどうする？」

天馬

「取り敢えず、位置を確認しよう。」

天馬は見取り図と辺りの風景を照らし合わせ、位置を探る。

天馬

「礼拝堂が此処だから、目的の塔はアツチだ。」

天馬の指差す方向には、城の中央に聳える塔があつた。

蓮

「どうする？このまま上まで行くか？」

モルガナ

「そうだな、行くとしよう。」

—————

く中央塔 最上階く

一同は最上階の窓から中央塔内部に侵入し、王の間の前にたどり着いた。

天馬

「見取り図によると、この大扉の向こうが王の間。その奥に宝物庫がある。」

蓮

「お宝は宝物庫の中か。どうやって侵入する?」

杏

「正面から入るのは危ないし、他に入り口は……」

辺りを見回すと、大扉の斜め上に窓があった。

モルガナ

「あそこに窓がある。あそこから入ろう。」

一同は装飾品を足掛かりに窓まで登り、王の間の内部にある上段通路に侵入。

シャドウ鴨志田

「侵入者はまだ捕まらんのか!？」

兵士

「ハッ！申し訳ありません！」

直ぐ下の王座にはシャドウ鴨志田と、数人の兵士が居た。一同は慎重に、奥の宝物庫へと向かう。そして宝物庫の扉を開け中に入ると、中には宝石や金貨等の財宝が大量に保管されていた。

竜司

「スッゲー!!お宝とかゼツテー此処だろ!？」

宝物庫の中央には、何やらユラユラと揺らめく光の塊が浮いていた。

モルガナ

「お宝だ！ついに見つけたぜ！」

天馬

「えっ？これが、鴨志田先生のお宝？」

蓮

「このモヤモヤがか？」

モルガナ

「まあ落ち着けよ、此処まで来れば話そうと思ってたんだ。」

グッドストライカー

「どういう事だ？」

モルガナ

「パレスのお宝つてのは、突き止めただけじゃ奪えない。元々、欲望に形なんて無いからな。だから自分の欲望が狙われてるお宝だつて事を、本人に自覚させるんだ。欲望を奪われると強く意識させて初めて、お宝は実体化する。」

杏

「でも、自覚させるつてどうやるの？」

モルガナ

「本人に予告してやるのさ。『お前の心を盗むぞ』つて。そうすればお宝は姿を見せる筈だ。」

竜司

「予告状か……正に怪盗じゃねえか！」

グッドストライカー

「後は現実に戻って予告状をぶちかまして、頂きに行くだけだな。」

モルガナ

「予告状を出したら、後戻りは出来ない。だから準備を整えて、その気になったら言ってくれ。アジトに戻って予告状を出してやろう！」

杏

「いよいよだね……」

蓮

「ああ……だが今の俺達なら、負ける気がしない。」

竜司

「たりめーだ！」

いよいよ本来の目的を実行できると知り、蓮達は気合いが入る。だが、天馬は一人浮かない顔をしていた。

天馬



「……………」

ギョツ

天馬は一人、自分の胸を強く掴んだ。

天馬

「……………強くないと……………もつと……………！」

## Act. 10 / 俺はもつと強くなる

く 稲妻町 鉄塔広場く

天馬

「うおおおおお!!」

ドーン!

天馬

「ドワツ!」

4月某日、稲妻町。夕日が照らす中、鉄塔広場では天馬が特訓をしていた。服は雷門時代のユニフォームに着替え、手にはキーパー用のグローブをし、背中にタイヤを背負い、ロープで木に吊り下げたタイヤを受け止めるといふもの。

天馬

「ハア……………ハア……………まだまだだ!!」

ブオン! ドーン!

天馬

「ガハッ!?!」

天馬はタイヤを放り投げ、勢い良く戻ってきたタイヤを再び受け止めようとする。だがタイヤの力に負け吹き飛ばされてしまう。

天馬

「くう……………もういつちよ!!」

天馬は立ち上がり特訓を再開。そんな天馬の姿を、近くの木陰からこっそりと見る蓮・竜司・杏・モルガナ・グッドストライカーの5人。何故こうなったのか、話は数日前に遡る……………



秀尽学園 屋上

4月19日 火曜日の放課後。

天馬達は屋上のアジトに集まり、今後の方針について話し合っていた。

モルガナ

「取り敢えず、お宝の場所と潜入ルートは昨日の時点で確保出来た。後は予告状を出して、鴨志田の心を頂くだけだ。」

竜司

「なあ、なんなら最初から予告状出しときやよかったんじゃないか?」

モルガナ

「お宝は何時までも実体化してる訳じゃない。刷り込んだ意識が薄れれば、また消えちまう。もって1日ってところだろうな……」

竜司

「……………ならいつそ、理事会の前の日に仕掛けてやろうぜ？アイツの事だ、仮に今日か明日に改心させたとしても、ひよっとしたら後でまた同じことするか、もしくは忘れてるかも知れねえ。」

杏

「そうだね……………理事会の前日は日曜日だから、その前……………4月30日の土曜日とかどう？」

蓮

「いいだろう。では決行は30日の土曜日。それまでに各自で準備を整えておこう。」

蓮の言葉に一同は頷き、この日は解散となった。



く地下鉄銀坐線 渋谷駅く

解散後、蓮と天馬は銀坐線で渋谷駅に戻ってきた。

天馬

「蓮、俺ちよつと用事出来たんだ。先帰っててくれないかな？」

蓮

「分かった、想治郎さんには俺から伝えておこう。」

天馬

「うん、ありがとう。」

そう言って天馬は蓮と別れ、蓮はルブランへと真っ直ぐ帰った。



く秀尽学園 正門く

だが翌日の放課後……………

竜司

「蓮、天馬、この後って暇か？」

蓮

「特に予定は無いが、どうした？」

竜司

「これからミリタリー屋に行こうと思ってんだけど、一緒に行かぬ？」

天馬

「ゴメン竜司、俺用事があるんだ。また今度ね。」

そう言つて、天馬は走り去つて行つた。

竜司

「どうしたんだ…アイツ？」

蓮

「……………」



く 渋谷駅 駅前広場 く

さらに翌日の放課後……………

杏

「ねえ、セントラル街でハンバーガー食べて行かない？」

モルガナ

「良いなあ杏殿！我輩、お供するぞ！」

天馬

「ゴメン、俺用事あるんだ。また今度ね。」

天馬はそう言って走り去って行った。

杏

「天馬？」

蓮

「……………」





秀尽学園 屋上

さらに翌日の放課後、アジトに集まって作戦会議を開いたが……

蓮

『今日は用事があって来れない、ゴメン』だそうだ。」

グッドストライカー

「なあ、アイツここんとこ変じゃないか？」

竜司

「確かに……毎日毎日用事用事って、ちよつと可笑しいぜ？何があつたんだ、天馬？」

杏

「ねえ、明日天馬の後を追ってみようよ？天馬が放課後何処で何をしてるのか、突き止めてみよう？」

蓮

「尾行か。なるほど、怪盗行動の特訓にもなるかも知れん。」



〳 渋谷駅 駅前広場〵

そしてさらに翌日の放課後、この日は全員で渋谷駅に来ていた。

天馬

「じゃあ俺、用事あるから。また明日！」

竜司

「おう！じゃあな！」

天馬は蓮達と別れ、JL線の改札へと向かった。

蓮

「……………行くぞ?！」

姿が見えなくなったのを確認すると、蓮達もJL線の改札を通り天馬の後を追った。そして電車が到着し、蓮達は天馬が乗る車両の1つ後ろの車両に乗った。

竜司

「電車なんかで何処行く気だよ？アイツ……」

『稲妻町河川敷、稲妻町河川敷です。』

電車で揺られること数十分、電車は稲妻町河川敷駅に到着した。

プシュー

ドアが開き、天馬は電車を降りた。蓮達も電車を降り、後を追う。

—————

〈商店街外れ〉

蓮達は天馬の後を追ったが、商店街の外れで見失った。

竜司

「あれ？何処行きやがった？」

杏

「可笑しいなあ、確かにこっちに行つた筈だけど……………」

モルガナ

「……………ん？」

モルガナが何かに反応し、蓮の鞆から顔を出した。

蓮

「どうした？」

モルガナ

「妙な音がする……………何かぶつかる様な音だ。」

竜司

「ぶつかるとは様な音？」

モルガナ

「ああ、それも何度も何度も……上の方からだな。」

杏

「上？」

モルガナ

「彼処だ。」

モルガナが示す先には、丘の上に立つ鉄塔が見える。

グッドストライカー

「鉄塔か……」

蓮

「行ってみよう。」

—————

く 鉄塔広場く

一同は丘を登り、鉄塔下の広場に着いた。

杏

「うわあ、キレイ！」

竜司

「ウヒョー！良い眺めじゃんか！」

広場から見える景色に見惚れる竜司と杏。

ドーン！

蓮・竜司・杏

「っ!？」

突然、辺りに何かがぶつかる音が響いた。音のする方を見ると、そこには傷だらけの

天馬の姿があつた。

天馬

「ハア………ハア………くそっ!!」

蓮

「天馬?」

蓮達は慌てて近くの木陰に隠れ、様子を見ることにした。

天馬

「まだまだ!こんなモノじゃない!」

天馬は何度もタイヤを放り投げ、何度もタイヤを受け止めようとするが……

ドーン!

天馬

「ドワツ!!」

ドーン!

天馬

「ガハッ!!」

ドーン!

天馬

「ウワツ!!」

何れもタイヤの力に負け、吹き飛ばされた。

竜司

「アイツ、まさか毎日こんな特訓やってたのか!?!」  
杏



「でも何で……………」

天馬

「まだまだ……………こんなんじや、蓮やみんなの力になれない！」

天馬は立ち上がり、再び特訓を再開した。

蓮

「アイツ、まさか俺達のために……………」

モルガナ

「我輩らと違って、アイツはペルソナを持ってないからな。化身やVSビークルの力に頼りっぱなしじゃいけない。だから自分なりに、自分自身が強くなろうとしてるんだ。」

「せいが出るな。」

そこへ、ヘアバンドを巻いた一人の男が現れた。

天馬

「円堂監督？」

円堂

「久しぶりだな、天馬。」

天馬

「お久しぶりです、監督！」

円堂

「……………ん？」

円堂は天馬の傷だらけの身体を見て、何かを察した様だ。

円堂

「ずいぶん熱心に特訓してるんだな。でもサッカーの特訓じゃないだろ？」

天馬

「えっ？」

円堂

「俺も悩んだりモヤモヤしたりした時は、コイツに付き合ってもらってたんだ。何か悩みでもあるのか？あるなら話してみろ。」

天馬

「監督……………」

天馬は特訓を中断し、円堂と共にベンチに腰掛ける。そして天馬は自分が話せる事を全て、円堂に打ち明けた。

円堂

「歪んだ欲望が生んだ異世界か……………その飛び下りた生徒つてのは、友達か?」

天馬

「いえ。でも、その子があんな目に合つたのに……………いや、それ以前に大勢の生徒が酷い目に合わされてる。なのに学校も親も見てみぬフリで、原因を引き起こした先生はまるで王様気取り……………俺、それがどうしても許せないんです。俺だけじゃない……………蓮や竜司、それに杏も……………だからみんなで異世界に行つて、その先生を改心させようつて決めたんです。」

円堂

「なるほどな……………」

話を聞いた円堂は、静かに立ち上がりタイヤの隣に立った。

天馬

「監督？」

円堂

「特訓再開するぞ、天馬。俺も付き合ってやる！」

天馬

「……………！はいつ、円堂監督！」

天馬は立ち上がり、円堂の指導の下で特訓を再開した。

蓮

「……………帰ろう、みんな。」

竜司

「えっ？いいのかよ？」

蓮

「大丈夫さ、天馬なら……………」

蓮は静かに鉄塔広場を後にし、竜司と杏も後に続いた。天馬の特訓は毎日続き、そして………4月28日 木曜日

ドカーン！

轟音と共に鉄塔広場周囲に砂煙が舞い上がった。

天馬

「ハア………ハア………」

円堂

「………」

拳を突き出す天馬と、静止したタイヤ、そしてそれを見る円堂。

円堂

「………見事にマスターしたな、俺の必殺技。これで特訓は終わりだ。」

天馬

「監督……………」

円堂

「俺が手を貸してやれるのは此処までだ。後はお前次第……………頑張れよ、天馬！」

天馬

「ハイッ！ありがとうございます！」

天馬は円堂に深く礼をした。



く秀尽学園 屋上く

翌日、4月29日 金曜日の放課後。

天馬・蓮・竜司・杏・モルガナ・グッドストライカーは秀尽学園の屋上に集まった。

竜司

「いよいよ明日だな。」

杏

「明日の朝予告して、その日の内にお宝を盗むんだよね？」

モルガナ

「予告の効果は、長くは続かないからな。不安か？」

杏

「いいや、むしろ待ちくたびれた！」

蓮

「ところで、肝心の予告状は誰が用意する？」

竜司

「俺に任せろ！」

竜司が一番に名乗りを上げた。

天馬

「竜司が？」

竜司

「派手にかましてやりてえんだ。なあ良いだろ？書かせてくれよ！」  
蓮

「よし、では予告状は竜司に任せよう。」

竜司

「おう！任せられた！」

杏

「ちよつと、ホントに大丈夫？正体バレたりしたら、これまでの苦労が……………」

竜司

「大丈夫だって、心配すんなよ！」

モルガナ

「よし、泣いても笑っても明日が勝負だ！お前ら気合い入れろよ!!」

「おう！」



く一階廊下 掲示板前く



そして、運命の4月30日 土曜日の朝。

掲示板の前には、何やら人だかりが出来ていた。

「予告状？」

「朝来たら貼つてあつたつてよ。」

そこへ何事かとやって来た天馬・蓮・竜司・杏の四人。掲示板には紅いカードが何枚も貼られていた。カードの表には何やら帽子と仮面のマーク、その下に「Take your Heart」と書かれ、裏には予告状が書いてあつた。一同は予告状を一枚ずつ取り、人だかりを離れ予告状を読み始めた。

天馬

『色欲』のクソ野郎 鴨志田卓殿。

抗できない生徒に歪んだ欲望をぶつけるお前のクソさ加減はわかっている。」

蓮

「だから俺たちは、お前の歪んだ欲望を盗って、お前に罪を告白させることにした。」  
杏

「明日やってやるから覚悟してなさい。心の怪盗団より。」

竜司

「中々なモンだろ？ ネットでソレっぽいの調べまくったからな！」

杏

「う〜ん……………言いたい事は分かるけど、バカな子が背伸びした感ある。」

自信満々な竜司に杏がそう言うと、蓮の鞆からモルガナ、天馬の鞆からグッドストラ  
イカーが顔を見せた。

モルガナ

「ハッキリ言ってビミヨーだな……………あのマークもイマイチ……………」

竜司

「そ、そんなことねえし！」

杏とモルガナの反応に対し、掲示板前は更に生徒が集まっていた。

グッドストライカー

「まあ盛り上がりつつあるみたいだし、良いんじゃないか？」

とそこへ、騒ぎに気づいた鴨志田がやって来た。

鴨志田

「だ、誰が!? 貴様か!? あっ!？」

鴨志田は予告状を見て早々発狂し出し、辺りの生徒に怒鳴り始めた。生徒達は慌てて、その場から逃げて行つた。

天馬

「あの感じ、どうやら効いてるみたいだね。」

モルガナ

「ああ、歪んだ欲望に心当たり有りまくりのリアクションだ！」

予告状の効果がある事を確認でき、一同は安心した。すると、鴨志田が天馬達を見つ  
け近づいてきた。モルガナとグッドストライカーは慌てて鞆の中に隠れる。

鴨志田

「おい!!お前らの仕業だな!」

蓮

「何の事だ?」

鴨志田

「惚けるな!!……………まあいい、どうせ貴様ら時期退学だ!」

ジジジジジ……………シュン!

突然辺りが暗くなり、鴨志田はシャドウ鴨志田へと姿を変えた。

シャドウ鴨志田

「来いよ……………盗れるモンなら盗ってみな!」

シュン！

シャドウ鴨志田がそう言うのと、辺りは元の光景に戻り、鴨志田も元の姿に戻っていた。

鴨志田

「チイ……………！」

鴨志田はイライラしながら、その場を去っていった。

天馬

「ねえ、今……………」

蓮

「ああ、鴨志田のシャドウが見えた。」

モルガナ

「恐らく、ヤツのパレスに影響が出てる筈だ。」

杏

「お宝出現って事!?! 今日ならイケんだよね?」

モルガナ

「『今日なら』じゃなくて『今日しか』だ。予告状を目にするインパクトは長続きしないし、二度目は絶対に無い。つまり、チャンスは一度きりだ。」

竜司

「一日もあれば十分だぜ！」

蓮

「放課後、正門前に集合しよう。集合して直ぐパレスに侵入して、お宝を頂く。」

杏

「絶対に成功させる………志帆のために！」

天馬

「うん、絶対に！」

# Act. 11 / 天馬覚醒!いくぜ、怪盗ガツタイム!

秀尽学園 正門前

その日の放課後、天馬達は約束した通り正門前に集まった。天馬も雷門のユニフォームに着替え、全員準備万端の様だ。

天馬

「じゃあ行くよ?イセカイナビ起動!」

イセカイナビ

『ナビを開始します。』

天馬はイセカイナビを起動し、一同は怪盗姿となって鴨志田のパレスに侵入した。天馬も急いで仮面を顔に着けた。

モルガナ

「それじゃ行くぜ？お前ら気合い入れろよ！」

モルガナの掛け声を合図に、怪盗団は古城へと侵入。城内を駆け抜け、王の間の前へたどり着いた。

竜司

「おいおい、どうなってるんだ？」

だがいざ着いてみると、王の間の大扉は開きつぱなし。しかも中にはシャドウ鴨志田も兵士も誰も居なかった。

天馬

「扉が開いてるし、誰も居ない………何で？」

モルガナ

「他に警備を回して、此処が手薄になったのかも知れん。だがお宝さえ盗めば我々の勝ちだ！このまま進むぞ！」



怪盗団は王の間を通り、宝物庫の扉を開ける。宝物庫の中には、以前は無かった超巨大な金の王冠があつた。

蓮

「これは?」

モルガナ

「ヨッシャー!! お宝、大・出・現ッ!!」

竜司・グッドストライカー

「つーか、デカツ!!」

モルガナ

「どうよ! 我輩の言った通りだろ? 嗚呼、この輝き…目に染みる!」

杏

「……………なんかムカつく。コレってアイツの欲望なんでしょ? 何でこんなに綺麗なの?」

姿を現したお宝に興奮するモルガナと、そのあまりの大きさに驚く竜司とグッドスト

ライカーと、鴨志田のお宝に納得がいかない杏。

モルガナ

「お、オタカラア……………」

天馬

「モナ？」

ピヨーン！

モルガナ

「ニャーーーーーッ！」

モルガナは何故か急に我を失い、王冠に飛び付いた。

モルガナ

「ニャフウウウウ！」

天馬

「ええっ!? ちょっとモナ!」

グッドストライカー

「おいおい、どうしたんだよ!」

蓮

「ソレはマタタビじゃないぞ?」

モルガナ

「ニヤツニヤツ!」

普段なら一発で「猫じゃねえ!」と突っ込み返す筈だが、全く効果が無い。

竜司

「いい加減にしろクソ猫!!」

竜司が思い切り大声で怒鳴り、モルガナはようやく我に帰り王冠から離れた。

モルガナ

「あ、いやその、何だ………レデイの前でみつともない姿を………」

杏

「完全にキャラ変わってたし………いったい何なの？」

モルガナ

「自分でも抑えられなかったんだ。人間の欲望に、こんなにも惹かれるなんて………それよりお前ら、急いで運ぶぞ！」

天馬

「よし、此処は俺に任せて！」

そう言うと天馬は両手に気を貯め、右手と左手の巨大な黄色いオーラを出現させた。

天馬

「《ゴッドハンドW》!!」

天馬はゴッドハンドWで、巨大な王冠を難なく持ち上げる。

天馬

「よし、大丈夫だ！」

竜司

「スゲー!!何だよソレ!？」

天馬

「俺が中学時代に御世話になった監督から教わった必殺技、その名もゴッドハンド!俺が王冠を運ぶから、みんなは護衛をお願い。」

竜司

「よし分かった!けど、思ったより簡単だったな。スゲー罫とかあると思ったが……………」

杏

「これ持って帰っちゃえば、パレスが消えるんだよね?それで、鴨志田のヤツも変わる

……………」

蓮

「その筈だ。とにかく急ぐぞ!」

一同は王冠を天馬に預け、蓮とモルガナを先頭に宝物庫を離れる。

モルガナ

「まさかこんなに上手いくとはな。しかも結果的にペルソナ使いが三人に化身使いも

……やっぱり我輩の目に狂いは無かったぜ！」

一同は王の間に出て、城の外を指す。

杏の声

「ゴーゴーレッツゴー、カーモシダ！」

バーン！

だが王座を過ぎた辺りで杏の声が聞こえたと思った矢先、大扉側からバレーボールが勢いよく飛んできた。

ガン！

天馬

「うわあ!?!」

バレーボールは王冠に命中し、天馬は命中した衝撃で転倒。ゴッドハンドが砕かれ王冠は床を転がる。そして転がる先には、王座に立つシャドウ鴨志田と杏姫の姿があった。

天馬

「鴨志田先生のシャドウ!」

シャドウ鴨志田は王冠を小さくし、自分の手元に引き寄せた。

シャドウ鴨志田

「コレだけは誰にも渡さん! コレは俺が城主である証明、この世界のコアだからな!」

竜司

「よう変態! 待ち伏せかよ?」

シャドウ鴨志田

「待ち伏せ? 探す手間を省いてやっただけだ! お前達は俺様が、直々に此処で処分してやる!」

蓮

「それは此方の台詞だ。」

竜司

「観念しろ、セクハラ野郎！」

シヤドウ鴨志田

「フツ、勝手な勘違いだな……………」

天馬

「何が勘違いだ！人に言えない事を散々やって来たクセに！」

シヤドウ鴨志田

「隠してくれたのは周りの連中だ。俺の実績に肖りたい大人や、勝ち組願望の強い生徒達……………ソイツらが進んで俺様を守ったんだよ。みんなで得するためにな！」

蓮

「得だと？」

シヤドウ鴨志田

「なのに、分からない馬鹿が多すぎるんだよ！貴様ら青臭いガキ共も、あの飛び下りた小娘もな！」

杏

「そうね……………アンタに良いようにされて死んじゃおうとか、ホント馬鹿……………それに



気付いてあげられなかった私は、もっと馬鹿!でもね………どんなに馬鹿でも、生きてく事にアンタの許しなんか要らないのよ!!」

シャドウ鴨志田

「偉そうにするなよ?俺だけの才能を、俺だけの為に使つて何が悪い?俺様は、他の人間共とは違うんだよ!!」

グッドストライカー

「お前はもう人間なんかじゃねえ!今のお前は、ゲスな欲望に取り憑かれた悪魔だ!」

シャドウ鴨志田

「そうさ!俺は貴様らとは違う………この世界を支配する悪魔さ!!」

ゴゴゴゴゴゴ………!

轟音と共にシャドウ鴨志田の足下から紅いオーラが現れ、シャドウ鴨志田と杏姫を王座ごと飲み込む。そしてシャドウ鴨志田は、4本の腕を持つ巨大な悪魔へと姿を変えた。

シャドウ鴨志田

「ガハハハハ！全部、俺様の勝手だろうが!!」  
蓮

「お前は間違ってる………決着を着けるぞ!!」

蓮はシャドウ鴨志田を指差し宣言した。

シャドウ鴨志田

「凡人のクソガキが！人に指差すなって習わなかったのか!?やれ、お前達！」

シャドウ鴨志田が叫ぶと、天馬達の周囲に大勢のジャックランタンが現れた。

天馬

「行くぞー！」

天馬はVSチェンジャーを装備し、ジャックランタンを攻撃。蓮達も武器を装備し、ジャックランタンを攻撃する。

シャドウ鴨志田

「食らえ!」

シャドウ鴨志田は蓮に向けて、右手に持つ金のナイフを突き刺す。蓮はジャンプし、華麗に攻撃を避けた。

竜司

「行けえ!!」

バーン!バーン!

竜司は散弾銃を装備しシャドウ鴨志田を攻撃するが、即座にジャックランタンが盾となり攻撃を防いだ。

『ジョーカー!』

天馬

「うおおおおおおお!!」

杏

「はあああああああ!!」

杏は鞭を、天馬はジョーカークロウを装備し、ジャックランタンを一掃する。

杏

「行くよ、カルメン!」

モルガナ

「来い、ゾロ!」

杏は仮面を外しカルメンを、モルガナはゾロを召喚。カルメンの火炎攻撃とゾロの疾風攻撃を組み合わせ、巨大な炎の球をシャドウ鴨志田に放ち攻撃。

竜司

「キャプテン・キッド!」

蓮

「アルセーヌ!」

竜司もキャプテン・キッドを召喚し電撃、蓮もアルセーヌを召還し呪怨攻撃を繰り出す。

天馬

「発射!!」

『イチゲキ! ストライク!』

更に天馬とグッドストライカーのイチゲキストライクが追い討ちを掛ける。だが、シャドウ鴨志田はびくともしない。

シャドウ鴨志田

「チツ、小癩な! 奴隷ども、アレもってこい!」

「は、はい!」

シャドウ鴨志田の命令を受け、一人の奴隷が背後からバレーボールを持って現れた。

竜司

「えっ!?!三島!?!」

蓮

「いや違う、アレは鴨志田の認知上の三島だ。」

シャドウ鴨志田

「三島、俺にパスを出せ!」

三島

「わ、分かりました!」

三島は怯えながらシャドウ鴨志田にパスを出す。

シャドウ鴨志田

「現役の時にブイブイ言わせてた、俺の必殺サーブをお見舞いしてやるぜええ!!」

シャドウ鴨志田は大きくジャンプし、三島の出したボールに必殺サーブを叩き込む。

ドカーン!

「うわあああああああ!?!」

必殺サーブは天馬達の目の前に落ち大爆発。天馬達は衝撃波に巻き込まれ大扉の近くまで吹き飛ばされた。

天馬

「つ、強い……………!」

蓮

「なんてパワーだ……………」

シャドウ鴨志田

「チツ、やっぱり三島じゃ調子出ないなあ……………」

「鴨志田様、ボールを御持ちしました♪」

と、そこへ今度はボールを持ったバニー姿の志帆が現れた。だが、天馬達が知ってる志帆とは明らかに様子が違う、

竜司

「鈴井!？」

杏

「ウソ!?!何で志帆が!?!」

モルガナ

「パンサー落ち着け!アレも鴨志田の認知だ!」

シャドウ鴨志田

「鈴井、俺にパスを出せ!アイツらに俺の本気の必殺サーブを見せてやる!」

志帆

「はい、喜んで♪」

蓮



「させるかー!」

蓮はナイフを装備し、鈴井に攻撃を仕掛ける。だが鈴井は華麗なジャンプで蓮の攻撃を避け、そして蓮を蹴り飛ばした。

蓮

「ごはっ!?!」

天馬

「ジョーカー!?!」

蓮は大扉に激突し、その場に倒れた。

シャドウ鴨志田

「よしよし、良い子だ鈴井。他の奴らも、コイツみたいに従順であるべきなんだよ!」

蓮

「貴様……………!」

蓮はシャドウ鴨志田を睨む。すると、シャドウ鴨志田は剥いた。

シャドウ鴨志田

「そうかそうか、俺の本気の必殺サーブ見たいのか？なら見せてやるよ、本当の必殺サーブを！」

志帆はシャドウ鴨志田にパスを出し、シャドウ鴨志田はジャンプし必殺サーブの体勢に入る。

グッドストライカー

「おい不味いぞ！次あんなの食らったら、マジでアイツ死んじまう！」

竜司

「分かってる！分かってるけど……！」

竜司達は何とか立ち上がろうとするが、思うように動けない。蓮も他のみんなも、先程の必殺サーブのダメージが酷く上手く動けない。

シャドウ鴨志田

「これで終いだ!食らえ!!」

バーン!

シャドウ鴨志田は蓮に向けて渾身の必殺サーブを放つ。その時……

天馬

「クッ……うおおおおおお!!」

天馬は根性で立ち上がり、蓮の前に立つ。そして右手に気を溜め、虹色に光輝く巨大な右手のオーラを出現させた。

天馬

「《ゴッドハンド》!!!」

蓮・竜司・杏・モルガナ・グッドストライカー

「っ!?!」

ドーン！

天馬は勢いよく右手を突き出し、ゴッドハンドで必殺サーブを受け止める。

ガシャーン！

そしてゴッドハンドが砕け散ると同時に、必殺サーブを打ち消した。

シャドウ鴨志田

「ナツ!? お、俺様の必殺サーブを……………!?!」

蓮

「ライデン……………」

天馬

「ハア……………ハア……………」

バサッ

天馬の仮面の帯がほどけ、仮面が外れ天馬は素顔を露にする。天馬の右手は、シヤドウ鴨志田の必殺サーブを受け止めた影響で熱を発し、煙を上げていた。

天馬

「……………これ以上、みんなを傷付けさせない!みんなは俺が、守る!」

『仲間を守るために自ら危険に立ち向かう『勇気』、見せてもらった……』

ドクンッ！

天馬

「ツ!?!」

突然、激しい頭痛が天馬を襲い、天馬の頭の中に誰かが語り掛けて来た。

『でもな、それだけじゃ駄目だ。お前に必要なのは、危険に立ち向かう『勇気』と、戦う『覚悟』だ。』

天馬

「グッ!?クッ……………!」

ガシンッ!

天馬は激しい頭痛に苦しむも、足を床に強く打ち付け、踏ん張り続けた。

『自分の夢を捨ててまで、仲間と共に戦う覚悟……………』

今のお前に、果たしてそれがあるか?』

天馬

「……………ああ、覚悟ならある!俺は……………俺は怪盗になる!怪盗になって、ジョーカー達

と一緒に何処までも駆け抜けてみせる！その為なら、大好きなサッカーから手を退いても構わない!!」

『…OK！覚悟、確かに聞いたぜ！』

汝に宿る力の源は、仲間達との絆にあり。例え地に落ちたとしても、この繋りは決して切れる事は無い……………

やっと見つけた《俺》の大事な仲間達……………

《俺》が信じる奴らのために、全力を尽くそうじゃないか!』

シャキン！

天馬の顔に、先ほどと全く同じ白いマスクが現れた。

『我は汝、汝は我……………』



さあ、反撃の狼煙を上げろ! 汝は風……………仲間達を逆境から守り、勝利へと導く《革命》の風……………

今こそ我を解き放ち、世界に革命を巻き起こそう! 今の汝に、不可能という言葉は存在しない!』

天馬

「ああ! 出てこい……………」

天馬は後頭部で結ばれた帯をほどき、流血と共にマスクを引き剥がす。

天馬

「《ナポレオン》!!」

マスクを引き剥がした次の瞬間、天馬の身体が青白い炎に包まれた。

シュン！

そして炎が消えると、天馬は全身に化身アームドの時と同じ白いベガサスの鎧を着着。右手にはかつて彼と共に戦った少年が操る小さな戦士が持っていたモノと同じ、クリアグリーンに輝く巨大な光の刃を持つ双頭槍。背後には軍服を纏い真紅のマントを羽織り、巨大な帽子と剣を持つ大男のペルソナがいた。

竜司

「ライデンもペルソナを!？」

蓮

「あれは……!？」

シャドウ鴨志田

「おのれ、又しても……!？」

新たなペルソナ使いの誕生に、その場に居た誰もが驚愕した。

天馬

「鴨志田、俺はお前を許さない。鈴井さんや三島さん、竜司に杏、そして蓮……俺の大切な友達を……大勢の生徒を苦しめ、玩んだお前を!お前がこの世界の王だと言うのなら、俺がお前の世界に革命を起こす!そして、みんなをお前の支配から解放する!」

天馬は槍先をシャドウ鴨志田に向けて宣言した!

シャドウ鴨志田

「笑わせるな!お前達、殺つてしまえ!」

シャドウ鴨志田は大勢のピクシーを召集し、ピクシー達は天馬に襲い掛かる。

天馬

「行くぞ、ナポレオン!」

ナポレオン

『おっしや!打て!!』

ドーン!ドーン!

ナポレオンの左右に大砲が出現し、大砲が火を吹き砲弾を発射。砲弾はピクシー達に次々命中し、ピクシーは次々と消滅した。

竜司

「す、スゲエ……………！」

すると今度は数十体のアークエンジェルが出現し、アークエンジェル達は剣を構え天馬に襲い掛かる。

アークエンジェル

「これ以上好き勝手はさせん！」

天馬

「それは此方の台詞だ！」

天馬はナポレオンを仮面に戻し、槍を構えアークエンジェル達に向かって走り出す。

天馬

「貫け!」

ドーン!

天馬は突風を起こしアークエンジェル達を吹き飛ばし、急停止して槍を頭上に投げる。さらに槍と同じくクリアグリーンの刃を持つナイフを両手に出現させ、何処かのメイド長が如く無数のナイフをアークエンジェル達に向けて投げ飛ばす。ナイフは全てアークエンジェル達に突き刺さり、アークエンジェル達は消滅した。

天馬

「行っけええええええええええ!」

天馬は背中中の翼を広げ大きくジャンプし、槍を掴むと急降下してシャドウ鴨志田に向けて勢い良く突撃を叩き込む。

ガシャーン!

シャドウ鴨志田

「ナニツ!?!」

シャドウ鴨志田はナイフとフォークをクロスさせ攻撃を防ぎ跳ね返したが、同時にナイフとフォークは粉々に砕けた。

スタツ

天馬はバク転で蓮達の前に着地し、そして手に握っていた槍を床に突き刺した。

シャドウ鴨志田

「クソツ!三島、鈴木、ボールだ!ボール持ってこい!」

天馬

「させるか!」

天馬は両手に同じくクリアグリーンに輝くボールを出現させ、振り回して三島と志帆

に向けて投げ飛ばす。

ガツンツ!

三島

「うわっ!」

志帆

「キャッ!」

ボーラは二人の身体に巻き付き、二人を拘束した。

天馬

「見せてやる………!」

天馬は右手を強く握り、拳を後ろに引き、上体を後ろに反らせて左足を空に掲げる。

天馬

「円堂監督直伝の、究極奥義！」

そして地面を強く踏み込み、拳を捻りながら突き出した。

天馬

「《正義の鉄拳》!!」

ドカーン！

突き出したと同時に、天馬の拳から巨大な拳が放たれた。

シャドウ鴨志田

「そ、そんな馬鹿な!?!」

ドーン！ ガシャーン！

シャドウ鴨志田は正義の鉄拳を食らい吹き飛ばされ、宝物庫の大扉に激突。王冠は天



馬の足下に転がり、シャドウ鴨志田は元の姿に戻り、その場に倒れた。

シャドウ鴨志田

「まさか、これ程の力を……………」

モルガナ

「なんて力だ……………下手すると現状じゃ我輩らの中じゃ最強クラスのペルソナ使いだぞ  
！」

蓮

「……………」

蓮達は立ち上がり、天馬の横に並び立つ。天馬は王冠を広い、シャドウ鴨志田に目を向けた。

天馬

「勝負ありましたね。」

シャドウ鴨志田

「まだだ……………まだ終わらん！」

シャドウ鴨志田は最後の力を振り絞り、立ち上がった。

シャドウ鴨志田

「俺は鴨志田……誰もが認めるこの世界の王、鴨志田卓だ!!」

ドオオオオン!

突然、シャドウ鴨志田が赤黒いオーラに包まれ、三島と志帆を巻き込み巨大な球体へと変化した。

蓮

「何だ!?!」

ピューン

天馬が手に持っていた王冠が球体に取り込まれ、球体は宝物庫を破壊し城の外へ。そ

して球体は全高50メートルはある巨大なシャドウ鴨志田へと姿を変えた。

竜司

「デカツ!?!何だよあの大きさは!?!」

竜司を始め、怪盗団一同は突然の現象に驚きを隠せない。そんな怪盗団を他所にシャドウ鴨志田は暴れまわり、周辺の建物を次々と破壊して行く。

モルガナ

「歪んだ欲望が暴走してる………あのまま放つといたら、現実の本人にどんな影響が出るか分からないぞ!」

杏

「でもどうするのよ!?!あんなデツカイ怪物相手に!」

解決策が見つからない怪盗団。その時、アイツがブラつと言い放つ。

グッドストライカー

「ライデン、今こそVSチェンジャーとビークルの真の力を発揮する時だぜ！」  
天馬

「VSチェンジャーとビークル?………どうか!敵が巨大なら、こっちも巨大化させれば良いんだ!」

天馬はVSチェンジャーを装備し、ジョーカーダイヤルファイターを手に取りVSチェンジャーにセット。

『ジョーカー!』

グリップを握り重心を右へ90度回し、銃口を空へと向ける。

『ゲットセット!レディ?』

そしてトリガーを引き、ジョーカーダイヤルファイターを発射。

『GO!ジョ・ジョ・ジョ・ジョーカー!!』

発射されたジョーカーダイアルファイターは瞬く間に巨大化し、全長20メートル以上ある巨大ビークルへ姿を変えた。

杏

「おっきくなった!?!」

蓮

「あんな小さなビークルがここまで……………」

目の前で起きた現象に着いて行けない蓮達。

『スカル!』

続いてトリガーマシンスカルをVSチェンジャーにセットし、銃身を左に90度回す。

『位置について、ヨイ?』

そして空に向けてトリガーマシンスカルを発射。

『出動ーン！喧・嘩・上・等!!』

更にエックストレインモナとエックストレインパンサーを発射。

『GO！モ・モ・モ・モナ!!』

『GO！パ・パ・パ・パンサー!!』

召喚され瞬く間に巨大化して直ぐ、エックストレインモナの後方に同色の中間車が1両連結され、その更に後ろにエックストレインパンサーが連結した。

天馬

「グッデイ!!」

グッドストライカー

「あいよ!!」

そして最後にグッドストライカーをVSチェンジャーにセットし、グッドストライカーを召喚した。

『ゲットセット!レディ?GO!グ・グ・グ・グッド!』

天馬

「みんな乗り込め!」

蓮

「よしー!」

天馬はグッドストライカー、蓮はジョーカーダイヤルファイター、竜司はトリガーマシンスカル、杏はエックストレインパンサー、モルガナはエックストレインモナに乗り込んだ。

キイイイイン!

乗り込んで直ぐ、蓮・竜司・杏・モルガナの手にはVSチェンジャーが現れた。

蓮

「VSチェンジャー？」

モルガナ

「これで操縦しろって事だな！」

竜司

「おもしれえ、やってやろうぜ！」

杏

「よっしゃー！」

蓮達はVSチェンジャーをコックピットに差し込み、天馬と蓮は上空から、竜司と杏とモルガナは地上からシャドウ鴨志田に接近する。

竜司

「ん？何だコレ？」



竜司はコックピットのパネルを操作する

《Ready?⇒GO!》

すると、トリガーマシンスカルのリアに搭載されたトリガーが連動して動き、前輪を含むフロント部分が前に変形し、大砲が出現した。

竜司

「うわっ!?変形した!?!」

グッドストライカー

「VSビークルは通常のノーマルモードから、戦闘形態のアタックモードに変形出来るんだ。」

天馬

「凄い!」

竜司

「よく分かんねえけど…まあいいや!行くぜ!」

ドーン！ ドーン！

トリガーマシンスカルは大砲から砲弾を発射し、シャドウ鴨志田を攻撃。

杏

「行くよ、モナ！」

モルガナ

「ガッテンだ。パンサー！」

《《Ready?⇒GO!》》

杏はコックピットのパネルを操作し、アタックモードを発動。エックストレインパンサーのコックピット両サイドに火炎放射機が現れた。

杏

「ブースト・オン！」

ボオオオオオオオオツ!!

火炎放射機をブースター代わりにし、エックストレインパンサーとエックストレインモナはスピードアツプ。

モナ

「オリャアアアアア!!」

シャキーン!

エックストレインモナはジャンプし、鋭利な刃状のスカートでシャドウ鴨志田を切り裂いた。

蓮

「俺も行くぞ!」

《Ready?⇒GO!》

蓮もコックピットのパネルを操作しアタックモードを発動。ジョーカーダイヤルファイター上部に搭載されたダイヤルが回り、機首部分が倒れ、ダイヤル下からキャノン砲が現れた。

ドーン！ ドーン！

ジョーカーダイヤルファイターはキャノン砲からビームを発射し、シャドウ鴨志田を攻撃。さらにそこへグッドストライカーが加勢し追い討ちを掛ける。

天馬

「やっぱり巨大化してるだけあって手強い……………」

だが、シャドウ鴨志田へのダメージは軽微。中々倒れない。

グッドストライカー

「よしお前ら、ここは一丁合体して勝負を決めようぜ!」

蓮

「合体だど!」

グッドストライカーの言うことに、怪盗団は驚愕した。

天馬

「VSビークルって合体出来るの!」

グッドストライカー

「ああ! オイラは元々、他のルパンコレクションを強くするコレクションなんだ。その名に掛けて、お前らを最高に強くしてやるぜ!」

天馬

「よし分かった! ジョーカー、スカル、パンサー、合体だ!!」

蓮・竜司・杏

「おう!」

ガコン!

エックストレインパンサーは連結を解除し、ジョーカーダイヤルファイター、トリガーマシンスカル、エックストレインパンサー、グッドストライカーは並走し合体の体勢に入る。

グッドストライカー

「怪盗ガツタイム！勝利を奪い取ろうぜ！」

グッドストライカーの合体号令を合図に、三台のVSビークルはアタックモードに変形。更にグッドストライカーのダイヤルが回転し、グッドストライカーは胴及び脚に変形。トリガーマシンスカルが右腕、エックストレインパンサーが左腕、そしてジョーカーダイヤルファイターが胸部及び頭部として合体し、各々のビークルの搭乗者が座席ごと頭部のコックピットに移動。ジョーカーダイヤルファイターのダイヤルが回転し、蓮の仮面を彷彿とさせるロボットの顔が出現した。

グッドストライカー

「完成、《フアントムカイザー》!!」

竜司

「オオオーツ!! スッゲーカッケー!!」

杏

「本当に合体しちゃった!」

天馬

「これでデカさも負けてないね!」

蓮

「ああ!」

コックピットの配置は、蓮を戦闘に右後方に竜司、左後方に杏、そして真後ろの一段高い位置に天馬となっていた。

ガコン ヒョイ

すると突撃、天馬の操縦席のパネルが開き、シルクハットを被りコウモリの羽根が付いたマスコットが現れた。

杏

「うわっ!?何か出た!？」

グッドストライカー

「よし、ちゃんと合体出来たみたいじゃねえか！」

天馬

「その声、まさかグッテイ!？」

グッドストライカー

「おうよ！合体するとオイラこうなるんだ。」

竜司

「……………まあそんな事より、これでデカくなった鴨志田とやりあえる！」

天馬

「うん！みんな行くぞ！」

蓮・竜司・杏

「おう！」

四人は操縦席のレバーを操作し、フアントムカイザーを操りシャドウ鴨志田にパンチ攻撃。シャドウ鴨志田も負けじと、フアントムカイザーにパンチを叩き込む。



竜司

「これでも食らえ!」

ドーン!ドーン!

竜司は右腕を操作し、シャドウ鴨志田に向けて砲弾を発射。

杏

「食らいなよ!」

ボオオオオオオオオオツ!!

杏も左腕を操作し、シャドウ鴨志田に向けて火炎放射攻撃を放つ。

モルガナ

「お前らするいで!我輩にもやらせろ!」

ジャキーン！

更にエックストレインモナが追い討ちを掛ける。

天馬

「ごめんごめん。スカル、モナと交代だ！」

竜司

「おっしやー！」

グッドストライカー

「右腕、乗り換えます！」

ガコン

竜司はコックピットを離れ、右腕のトリガーマシンスカルを分離。それと入れ替わる様にエックストレインモナが右腕に合体し、コックピットにモルガナが現れた。

モルガナ

「おうりゃ!」

ジャキーン!

合体して早々、モルガナは右腕を操作しシャドウ鴨志田に斬激を繰り出す。

モルガナ

「よっしや!」

グッドストライカー

「お前ら、そろそろフィニッシュ行こうぜ!」

天馬

「OK!モナ、スカルとチェンジだ!」

天馬の指示でモルガナは竜司と交代。右腕をエックストレインモナからトリガーマシンスカルにチェンジした。

蓮

「行くぞー!」

コックピットの四人は操縦桿からVSチェンジャーを引き抜き、銃口をシャドウ鴨志田に向ける。それと連動してフロントムカイザーは両腕をシャドウ鴨志田に向け、頭部のダイヤルを回しキャノン砲を出現させた。

天馬・蓮・竜司・杏・グッドストライカー

「《フロントムカイザー・フルバーストファイニッシュ》!!」

ズドドドドドドドーン!!

四人が引き金を一齐に引いたと同時に、フロントムカイザーの右腕・左腕・頭部から強力なビームが発射された。

シャドウ鴨志田

「ウオオオオオオオオオ!?」

ドカーン!

シャドウ鴨志田は必殺技を食らい大爆発し、その場から消滅した。

竜司

「ヨッシャー!!」

杏

「ヤッター!!」

天馬

「やったね、ジョーカー!」

蓮

「ああ!」

コックピットの四人は勝利を大いに喜んだ。

グッドストライカー

「気分は、サイコー!!」



く古城 屋上く

シャドウ鴨志田

「ハア……………ハア……………」

フロントムカイザーとの戦いに敗れ、元の姿に戻ったシャドウ鴨志田は古城の屋上に倒れていた。

ドーン!

上空から巨大化したグッドストライカーが現れ、グッドストライカーは屋上に着地。そして中から怪盗団が降り立った。

シャドウ鴨志田

「来たか……………」

シャドウ鴨志田は怪盗団が来たことに気づいたが、逃げようとはしなかった。

天馬

「逃げないんですか？」

杏

「逃げたきやトツトと逃げたら？オリンピックに出るほど、運動神経抜群なんでしょ？」

杏はそう言うが、シャドウ鴨志田は動かなかった。

シャドウ鴨志田

「……………昔からそうだった……………ハイエナ共が期待と言う名の押し付けばかり……………ソイツらの分までやってやったんだ……………見返りを望んで何が悪い？……………俺はそう思ってた……………」

「シャドウ鴨志田は立ち上がり、屋上の端へと進む。そしてゆっくりと辺りを見下ろし、感じた。恐いと言う感情を。」

シャドウ鴨志田

「あの娘……鈴木もきつと恐かったんだろうな……だが飛び下りるしか無かった……」

シャドウ鴨志田はゆっくりと身体を反転させ、手に持っていた王冠を蓮に投げ渡した。

シャドウ鴨志田

「止めをさせよ……そうすれば現実の俺にも止めをさせる……俺に勝ったお前らは、その資格が……」

ドカッ！

突撃杏がシャドウ鴨志田の左頬を殴り、シャドウ鴨志田を殴り倒した。



杏

「……………廃人になったら、アンタの罪が証明出来なくなる。現実の自分に戻って、自分の罪を償いなさい。」

天馬

「杏……………」

モルガナ

「杏殿は優しいな。」

シャドウ鴨志田

「……………分かった、俺は現実の自分に帰るよ。そして、必ず……………」

シユウウ……………

シャドウ鴨志田は最後に優しく微笑み、そして光となって消えた。

ゴゴゴゴゴ……………

だがシャドウ鴨志田が消えた直後、城が轟音と共にガラガラと崩れ始めた。

モルガナ

「おいおい、のんびりしてる暇はねえぞ？もうじき此処は崩壊する。」

天馬

「みんな、急いでグツデイに乗れ！」

怪盗団は天馬の指示で、急いでグッドストライカーに乗り込む。

天馬

「グツデイ、脱出だ！」

グッドストライカー

「しっかり掴まってるよ？」

グッドストライカーはエンジンを吹かし、全速力で空の彼方へと飛び立つ。そしてグッドストライカーが飛び立った瞬間、古城は跡形もなく崩壊し、辺りが閃光に包まれた。

# Act. 12 / 古城崩落! 結成、心の怪盗団ザ・ファントム!

秀尽学園 正門前

鴨志田パレスから脱出した怪盗団。気が付けば、最初に集まった秀尽学園正門前の路地に居た。服装は全員元に戻り、モルガナとグッドストライカーも元の姿に戻っていた。

杏

「ハア……ハア……何とか戻ってこれたね……」

天馬

「ありがとうグツデイ、助かったよ。」

グッドストライカー

「おう! お前らも、お疲れさん!」

竜司

「おいみんな！ナビ見てみる！」

何やら驚いた様子でナビを見る竜司。

イセカイナビ

『目的地が消去されました。』

ナビには目的地消去、つまりパレスに行けなくなったという通知が出ていた。

杏

「ホントだ、行けなくなってる……………」

蓮

「ん？」

蓮はポケットに手をつっ込み、何かを取り出した。取り出したのは、何かの金メダルだった。

天馬

「それ、メダル? 王冠はどこ行ったの?」

モルガナ

「鴨志田にとつての欲望の源が、ソレだつたつて事だ。ヤツにとつちや、そのメダルが王冠くらいにの価値ある代物だつたんだらう。」

竜司

「蓮、ちよつと貸してくれ。」

竜司は蓮からメダルを受け取り、メダルをよーく見る。

竜司

「やつぱり、これオリンピックのメダルだ。」

グッドストライカー

「アイツ、過去の栄光つてのにしがみついてただけみたいだな……」

天馬

「でも、これで鴨志田先生の心も変わったんだよね?」

モルガナ

「多分な。でも、鴨志田の人格に甚大な影響を与えたのは間違いない。」  
杏

「今から確かめられない？」

蓮

「こればかりは、様子を見るしか無いだろう……」

モルガナ

「多分大丈夫だぜ。アイツのシャドウも言ってただろ？現実の自分に帰るって。鴨志田卓、アイツは人間じゃない。でもあの時だけは、少しだけ人間らしかったぜ……」

杏

「モルガナ……」

天馬

「とにかく、今は待つしか無いね。」



〈体育館〉

そして運命の5月2日、月曜日の朝。全校朝礼の為、全校生徒が体育館に集められた。

「いきなり朝礼とか、マジでダルくない?」

「どうせ例の自殺の件だろうさ……頼まれても自殺なんかしないっての。」

朝礼に対する不満と愚痴を溢す生徒達。その中には蓮達と三島の姿もある。校長が舞台の上に現れ、朝礼が始まった。

校長

「全校朝礼を行います。先日、痛ましい事件が起きたのは皆さんも御存知の通りです。幸い心身共に異常は無く、退院も秒読みとの事です。さて、君たち未来ある若者に今一度考えてほしいのは、命の尊さ……」

ガチャ!

突然、体育館入口の扉が開き、鴨志田が姿を見せた。だが現れた鴨志田は、今までと

雰囲気丸つきり違っていた。

校長

「か、鴨志田先生!? どうし……………」

鴨志田

「……………私は、生まれ変わったんです。だから皆さんに、全てを告白しようと思います。」

鴨志田は静かに舞台上上がり、校長の隣に立った。突然鴨志田が全てを告白すると聞いて、蓮達を始め生徒と教員全員驚き、動揺しだす者も居た。

鴨志田

「私は、教師としてあるまじき事を繰り返してまいりました。生徒への暴言、部員への体罰、そして女子生徒への性的な嫌がらせ……………先日の事件、鈴木志帆さんが飛び下りた原因は、私です!」

鴨志田は舞台に膝をつき、そして涙を堪えながら告白を続ける。



鴨志田

「私はこの学校を、自分の城のように思っていた。気に入らないというだけの理由で、退学を言い渡した生徒達も居ます。もちろん、それは撤回します。何の罪もない青少年を酷い目に逢わせて、本当に済まなかった……………」

ドサツ!

ついに鴨志田は舞台上に強く頭を打ち付け、土下座した

「私は傲慢で、浅はかで、恥ずべき人間……………いや人間以下だ!……………死んでお詫び致します!」

校長

「か、鴨志田先生! 取り敢えず降りて……………」

杏

「逃げるな!」

動揺し混乱する生徒と教員達の声を書き消すかの様に、杏の叫び声が体育館全体に響いた。杏の叫び声を聞いて体育館は静まり返り、鴨志田は顔を上げた。

杏

「志帆だって、辛い事件の続きをちゃんと生きてる！アンタだけ逃げないで！」

鴨志田

「……………その通りだ、私はきちんと裁かれ罪を償うべきだ……………」

鴨志田は体を起こし、ついに堪えていた涙を流した。

鴨志田

「私は、高卷さんにも酷い事をしました……………鈴木さんにポジションを与えることを条件に、高卷さんに関係までも迫りました……………私は今日限りで、教師の職を辞して自首致します！誰か、警察を呼んでくれ!!」

教師

「ちよ、朝礼は終了だ！解散！」

全校朝礼が謝罪会見に変わり、教員達は慌てて生徒達を体育館から追い出した。そして誰も居なくなつた体育館には、蓮達4人が残つた。

杏

「本当に、心が変わつちやつたんだね……………」

竜司

「みたいだな……………でも、これで良かったのか?」

蓮

「どうだろうな……………」

するとそこへ、三島と2人の女子生徒が現れた。

天馬

「三島さん!」

三島

「高卷さん、ゴメン!」

三島は杏を見るなり頭を下げた。

三島

「俺達、知ってたのに見てみぬフリしてた……………」

女子生徒1

「私、誤解してて……………変な噂広めちゃって、ゴメン！」

女子生徒2

「鴨志田に無理矢理されてたんだね……………私、全然知らなくて……………ごめんなさい！」

女子生徒2人は杏に頭を下げ謝罪した。

三島

「雨宮、松風君、君たちにも本当に悪い事をした……………必ず、埋め合わせするから！」

教師

「おいそこ！早く戻れ！」

教師の指示で一同は体育館から追い出された。蓮達四人は体育館を離れ、渡り廊下に場所を変えた。

天馬

「どうやら、心が変わったのは鴨志田先生だけじゃないみたいだね。」

竜司

「良かったな高巻、これで妙な噂も無くなるぜ?」

杏

「いいよ、私は。鴨志田に志帆の事、謝らせてやった。それで十分……………」

蓮

「なら、早く報告してやれ。」

杏

「……………そうだね、そうする。」



く屋上く

放課後、天馬・蓮・竜司は屋上に集まった。そこにはモルガナとグッドストライカーの姿もあった。机の上にはパレスで手に入れた金メダルが置いてある。

天馬

「それにしても、本当に改心しててビックリだったね。」

竜司

「運良く廃人化も無かったし、百点満点だぜ！」

モルガナ

「なるほど………シャドウが死んじまう前に説得して、現実の本人の元に戻してやれば良いって事か。そうすれば、パレスが消えても廃人化は起きないって訳だ。」

ガシヤン

そこへ、志帆の見舞いを終えた杏が合流した。

杏

「ごめん、お待たせ!」

蓮

「見舞い、どうだった?」

杏

「志帆ね、連休明けに退院するって!」

杏の言葉を聞いて、一同は驚いた。

杏

「来週から学校にも来るって言ってた! でも……………」

蓮

「でも?…」

杏

「志帆の両親が、近々転校させようと思うって。志帆は秀尽に居たいって言ってたけど、セクハラとか自殺未遂とか、やっぱレットテル付いて回るし……………でも、私もそれで良いと思う。ここに居たら、きつと辛いし……………」

天馬

「そっか……………」

杏

「鴨志田が自分のしたこと認めたよって、志帆に言ったの。そしたら志帆、ごめんねって言うてくれたの。私が志帆のために鴨志田に媚びてたの、バレちゃってたみたい……………」

グッドストライカー

「悪いのは鴨志田だぜ？杏のせいじゃねえよ。」

杏

「……………そうだね。」

竜司

「にしてもお前、鴨志田のシャドウよく我慢したな？」

杏

「私はただ、鴨志田に直接謝らせたかったって言うか……………」

モルガナ

「杏殿は優しいからな。」

竜司

「クズ相手でも、廃人化は寝覚めが悪いつてか？」



グッドストライカー

「いやそれは違うだろ? アレは鴨志田に対する復讐だろ?」

杏

「その通り。アイツのしたこと考えれば、生きてる間ずーつと頭下げ続けなきゃいけないじゃん? 世の中、死ぬより辛い罰もあるなって思っただけ。」

杏の考えを知って、一同は内心恐怖した。

蓮

「まあ、とにかく一件落着だな……………」

竜司

「そう言や、1つ気になってんだ。あんな変な異世界が、何で鴨志田にだけあつたんだ?」

モルガナ

「鴨志田に限った話じゃない。欲望で心に歪みが起きてる奴なら、誰でも持ちえるものさ。何なら確かめてみるか?」

竜司

「いや、今はいい。しばらくは大人しくしてねえと、また騒がれるだろうしな……………」  
杏

「あー、その事なんだけど……………アンタ達もう噂になつてるよ？結託して、鴨志田に暴力まがいの脅迫したつて……………」

その情報を聞いて、蓮・天馬・竜司は驚いた。

グッドストライカー

「ま、怪盗が実在するつて早々に信じる奴は居ないだろうな……………」

杏

「あの予告状も、鴨志田の悪事を知つてた誰かの悪戯つて事になつてる。」

天馬

「ひとまず、今後の方針は騒ぎが落ち着いてからだね。」

竜司

「……………せつかくだしよ、このメダル換金してパーっと祝杯でも上げようぜ！」

モルガナ

「我輩も賛成だ！怪盗の相談は、美食の席でと決まってるからな！」

杏

「じゃあ、店は私が決めても良いかな? 前から志帆と行きたいって言ってた店なんだけど。」

竜司

「意義あり! と言いたいところだが、俺はコイツに借金があるから文句言えねえ……」

竜司は渋々賛成し、蓮達四人も賛成した。

杏

「行くのは連休の最後にしない? 次の日からの学校生活に備えて、勢い付けるって意味で。」

蓮

「換金は俺達が引き受けよう。何でも買い取ってくれる店を知っている。」

杏

「分かった、任せるね!」



く都内某所 高級ホテル ビュツフェく

そして約束の5月5日、一行は都内某所にある高級ホテルのビュツフェに来ていた。

竜司

「ウマツッ!」

モルガナ

「流石は杏殿の選んだ店!」

杏

「そりやそうだよ、有名なホテルだよ?」

一行はテーブルに沢山の料理を並べ、料理を満喫していた。

天馬

「……………ところで、近々学校に警察が聞き込みに来るらしいよ?」

グッドストライカー

「厄介だな……………ゼツテーお前達の名前出ちまうぜ? 鴨志田の事で妙な噂されてるしなあ……………」

竜司

「けどさ、学校の奴ら盛り上がってるぜ! 怪盗が本当に心を盗んだってな! マジで信じちやいねーだろうが、中には割と本気で感謝してるヤツもいる。ほら、コレ見ろよ。」

竜司はスマホを手に取り、あるサイトのページを開き見せた。

杏

「《怪盗お願いチャンネル》?」

天馬

「あ、それ知ってる! 最近出てきたサイトだよね?」

サイトの掲示板には怪盗団を否定・批難するコメントに紛れて、怪盗団を称賛・感謝するコメントが幾つも掲載されていた。

杏

「……………今まで自分の事で精一杯だったけど、こんな風に言われると、何だか不思議。」  
竜司

「だよな……………」

天馬

「俺、御代わり行つてくるよ。蓮も何か要る？」

蓮

「天馬に任せよう。俺はここで荷物係でもしているよ。」

竜司

「なら俺も行くぜ！牛のノルマ達成しねえと！」

杏

「スイーツメニユー、食べ尽くさなきゃ！」

一行は蓮を残し御代わりに向かった。そして戻つてくると、全体的にバランス良く料理を選んできた天馬に対し、竜司はステーキやローストビーフと牛肉料理ばかり、杏はケーキやタルトとスイーツばかりだった。そして終了時間10分前、一行は料理を全て平らげた。

天馬

「ふう、美味しかったあ……………!」

グッドストライカー

「ああ、気分はチヨースイコーだぜ……………!」

天馬・蓮・杏・グッドストライカーは大満足した様だが、竜司とモルガナはどうやら食べ過ぎた様だ。

モルガナ

「く、食った……………」

竜司

「俺達、みんなの勝利だ……………」

蓮

「おいおい、俺はまだまだ余裕だぞ?」

竜司

「嘘だろ!?! パレスかよ、お前の胃袋は……………」

すると、夫婦だろうか如何にも偉そうな中年の男女が近くを通り掛かった。

女

「ちよつと見て、あのテーブル……………」

女は早速、テーブルに積み上げられた皿を指差した。

男

「大目に見てあげようじゃないか。普段ロクな物を食べてないんだろう、きつと……………」

女

「親御さんの顔が見てみたいわね……………」

男女はそう言うと、静かに去っていった。

竜司

「何だと……………ウツプ！」



竜司はムカついたが、それどころでは無かった。

竜司

「やべえ……俺トイレ!」

天馬

「ちよつと大丈夫? 肩貸そうか?」

モルガナ

「わ、我輩も頼む! そつと運んでくれ……」

蓮

「仕方ない……」

モルガナは蓮に運ばれ、竜司は天馬に肩を借りトイレに向かった。

エレベーターホール

トイレを済ませた4人は、エレベーターホールでエレベーターを待っていた。

モルガナ

「吐くまで食うって豪語して、ホントに吐くヤツが居るかつての？」

竜司

「お前もだろうが！」

天馬

「まあまあ、2人とも落ち着いて……………」

4人は列の先頭でエレベーターを待っていた。すると……………

ドンッ

突然、数人の黒服が4人を押し退け前に割り込んできた。

天馬

「ちよっと、いきなり何するんですか!？」

黒服

「何か?」

蓮

「何かじゃない、こつちが先だ。」

黒服

「急いでいる。」

竜司

「急いでるなら割り込み有りつてか?」

竜司が割り込みを指摘するが、黒服達は全く動じない。

男

「しばらく見ない間に客層が変わったな………託児サービスでも始めたか?」

黒服達の雇い主だろうか、サングラスをしたスキンヘッドの男が口を開いた。

黒服

「先生、御時間が……………」

男

「分かってる。」

チーン

エレベーターが到着し、男と黒服達はエレベーターに乗り込み、早々にドアを閉めた。

竜司

「何だよあの偉そうなの……………テメエ以外素で見下しやがって……………！」

天馬

「まあまあ竜司、落ち着い……………蓮？」

男の態度にイライラしている竜司に対し、蓮は顔を手で抑え冷や汗をかき、何やら気分が悪そうだった。

蓮

「今の声、何処かで……………」

天馬

「蓮、大丈夫？ 顔色悪いけど……………」

蓮

「大丈夫だ、気にするな……………」

モルガナ

「普段ロクなモン食べてないからだろう？ 我輩もネコ缶ばっかだし……………」

チーン

エレベーターが到着し、4人はエレベーターに乗り込んだ。

—————

くビュツフエ

ビュツフエに戻ってみると、杏が何やらイライラしていた。

杏

「遅い！」

竜司

「わ、悪い……………って、何でキレてんだ？」

グッドストライカー

「さっき他の客とトラブルになっちまってよ。向こうが杏にぶつかって、客が皿落として割っちゃまったんだ。悪いのは向こうなのに杏のせいだって決めつけて聞かなくてよ……………」

杏

「でも大丈夫、お店の人が私を見て、『あーあ』みたいな顔してたのがき……………私ら、やっぱり場違いだったのかな……………」

竜司

「……………なあ、モルガナ。」

竜司に呼ばれ、モルガナは蓮の鞆から「何だ？」と顔を出した。

竜司

「パレスってさ、誰にでもあるんだよな?」

モルガナ

「ああ、歪んだ強い欲望を持った奴ならな。」

竜司

「せいづらも鴨志田みたいに、お宝盗れば改心するんだよな?」

杏

「急にどうしたの?」

竜司

「さつき、俺らも会ったんだ。身勝手に人の事見下してくるクソな大人……俺らなら、そんな奴らを改心させられんじゃねーかと思つてよ。」

天馬

「それって、怪盗を続けるって事?」

竜司

「考えてたんだ……せつかく鴨志田を改心させたのに、怪盗のこと全然信じられてねえ……それによ、我慢するしかなかった奴らが感謝してくれてんだぜ?」

杏

「私だっと思ってよ……困ってる人を見過ごしたら、前の自分に戻っちゃう……」  
竜司

「俺達怪盗団なら、助けてやれんじゃねーか？」

蓮

「確かに俺達の力があれば、人助けくらいは出来るかも知れない。」

杏

「でもさ、またシャドウと戦うんだよね？」

竜司

「まあ何とかなんだろう？な？」

蓮

「皆が良ければ、俺は構わない。」

蓮の言葉に、竜司と杏は同意の眼差しを向ける。だが、天馬だけは違った。

天馬

「……ねえみんな、少し付き合ってくれないかな？」

竜司





一行は天馬に続いて梯子を上る。そして、鉄塔の中腹にあるデッキに到着した。

蓮

「これは?!」

杏

「いい眺め!」

竜司

「つーか高!俺ら、こんな高さまで上ったのか!」

天馬

「俺の師匠のお気に入りの場所。ここからの景色を見ると、何だか自分がチツポケに見えてくるんだ。悩みとか色々……」

モルガナ

「ウヒョー!タケー!」

鉄塔からの景色にテンションが上がる一行。すると、天馬が何やら真剣な眼差しを向けた。

天馬

「俺、ずっと迷ってたんだ。蓮やみんなと一緒に怪盗をやるか、サッカーを続けるかで

……………」

蓮・竜司・杏

「?」

天馬

「俺はみんなと一緒に戦いたかった。でも、そうするには大好きなサッカーから手を退かなきゃならない。俺には、大好きなサッカーを捨てる勇気が無かったんだ……………」  
「でも、ここで特訓してる時に、俺の師匠……………円堂監督は言ったんだ。自分の気持ちに嘘をつくなんて。」

モルガナ

「自分の気持ち……………」

天馬

「鴨志田先生のパレスで蓮が殺られそうになった時、その迷いが一気に吹っ飛んだ。俺は蓮やみんなと一緒に戦いたい。その為なら、サッカーを捨てても良いって!」

そう言うと、天馬はサッカー部に入るために用意した入部届を手に取り……………

ビリッ！ビリッ！

グッドストライカー

「お、おい!？」

そしてビリビリに破り捨てた。

天馬

「俺、怪盗続けるよ！俺が蓮やみんなを後押しする風になってみせる！」

天馬の真っ直ぐな瞳を見て、蓮達は喜んだ。

モルガナ

「フフ…これで我輩達、駆け出しだが怪盗『団』になれるって事だな。」

杏

「駆け出しか………何だか私達っぼいね。」

竜司

「決まりだな! クソな大人どもアツと言わせて、世の中に知らしめてやろうぜ、俺らの事

!」

杏

「ところで、リーダーって蓮で良いよね?」

蓮

「えっ? 俺か?」

突然リーダーに指名されて戸惑う蓮。

竜司

「異議なし! 俺、そういう責任感いるの苦手。」

モルガナ

「我輩を差し置いてるのはあるが………まあ杏殿の推薦だ、許可してやる。」

蓮

「………なら、俺は天馬をサブリーダーに推薦しよう。」

天馬

「えっ？俺が!？」

杏

「さんせい！何か天馬と蓮って相性良さそうだし。」

竜司

「同じ部屋友なんだし、引き受けてやれよ？」

天馬

「……………分かった、サブリーダー引き受けるよ！」

こうして怪盗団のリーダーは蓮、サブリーダーは天馬に決まった。

グッドストライカー

「せっかくだ、怪盗団の名前決めようぜ？予告状に名前書いたらきつとカッコいいぜ？」

蓮

「なら、《ザ・ファントム》でどうだ？」

杏

「ザ・ファントム……………割と良いんじゃない？」

天馬

「うん、俺もそれがいい!」

竜司

「改心させるターゲットだけどき、あえて大物だけ狙うのはどうだ?」

天馬

「それって、有名人とか大企業の社長とか?」

竜司

「そんなとこだ。大物ならニュースになつたりすんだろ? そしたら俺らを信じる奴ら、今よりずっと増える気しねえか?」

杏

「確かに、私達のことをもっと広まれば、沢山の人に勇気をあげられるかもしれない……でも、適当に誰彼構わずってのは何か嫌じゃない?」

天馬

「なら、ターゲットは全会一致で決めた相手にしようよ。これは俺達の掟、俺達のルールって事にしてさ。」

蓮

「うん、それで行こう。」

モルガナ

「怪盗団、結成だぜ！」

こうして、心の怪盗団《ザ・ファントム》が結成された。そして鉄塔の下には、鉄塔を見上げる円堂の姿があった。

円堂

「天馬……………」

円堂は足下に目を向ける。足下には先程、天馬が破り捨てた入部届の残骸が落ちていた。

円堂

「お前がサッカーから離れるのは残念だが、お前はそれ以上に素晴らしいモノを手に入れたみたいだな……………頑張れよ、天馬！」

円堂は微笑むと空に向けてガッツポーズをし、静かに鉄塔広場を後にした。



Act. 13 / 潜入メモメントス!これが私の恩返しよ!

《前編》

ベルベツトルーム

心の怪盗団ザ・ファントムが結成された日の夜、蓮と天馬はベルベツトルームに呼び出されていた。

イゴール

「ご機嫌よう。先ずは、おめでとぅと言っておこう。美学を共有する仲間と出会い、お前達は現実に自分の居場所を見出した……ククク、いよいよだ。」

蓮

「イゴール、いったい何が始まるんだ?」

イゴール

「蓮、お前には特別な素養がある。だが素養とは、磨かれて初めて『力』となる。今はまだ弱い、それを養い来るべき破滅に抗いうる『強さ』を得ること、それがお前に課す

『更生』だ。破滅に抗う力を得る術はいくつかある。シャドウと戦い経験を積むも一つ、以前教えた合体もその一つだ。」

カロリーヌ

「ただし囚人、主がお前を手引きするのならだ。」

ジュステイーヌ

「僭越ながら、私達からも助言を……貴方達が現実を過ごす合間に、契約した者との関係を洗練させなさい。」

天馬

「契約の洗練って……どうするの？」

ジュステイーヌ

「簡単です、契約した者と同じ時を過ごしなさい……それが関係の洗練に繋がります。」

カロリーヌ

「惰眠を貪る暇があれば契約者を訪ねろ、囚人！」

ジュステイーヌ

「それもまた、主が仰った破滅に抗いうる『強さ』を得る術です。」

イゴール

「同志達との契約で、お前達の心は着実に抗う力をつけている……更生は順調な様だ、実に喜ばしい。今後とも、期待している。」

ジリリリリリリリリ!

警報が鳴り響き、天馬と蓮は現実へと戻された。



く秀尽学園 教室棟 2階廊下く

翌日、5月6日 金曜日の昼休み。

蓮・天馬・竜司・杏は教室棟2階の階段付近に集まり、怪盗お願いチャンネルの書き込みを見ていた。蓮の鞆の中にはモルガナ、天馬の鞆の中にはグッドストライカーも居る。

天馬

「怪盗お願ひチャンネル、少しずつだけど書き込み増えてるよ。」

竜司

「『いつも借りパクする友達に謝罪させたい』って、そんなのテメエで何とかしろっつーの!」

すると、一行の直ぐ近くで2年の女子生徒2人が何やら話をしていた。

女子生徒1

「怪盗が鴨志田の心盗んだってマジ?」

女子生徒2

「あんなの作り話に決まってるでしょ? アンタマジで怪盗なんか信じてんの?」

女子生徒1

「でも、鴨志田ああなったじゃん?」

女子生徒2

「飛び降り自殺して隠し通せなくなつて、自分でゲロツたんだよ。それよりこんなことで学校が有名になつても、マジ迷惑なんですけど………」

女子生徒2人はそのまま階段を下りて行き、女子生徒2人が見えなくなったと同時に、グッドストライカーとモルガナが鞆から顔を出した。

グッドストライカー

「やっぱ、現状は何処もあんな感じか……………」

竜司

「だよな、でも今に見てろ……………誰でも知ってる大物を2人3人やってけば、信じるしかねえ筈だ!」

杏

「でも、その大物って今のところメド無しなんだよね?」

蓮

「鴨志田に対する脅迫の噂もあるしな……………」

モルガナ

「しばらくは、真面目に学生生活を送るしか無さそうだな……………」



く中庭 休憩スペースく

放課後、天馬と蓮は中庭の休憩スペースに居た。すると……

三島

「あ、居た居た！」

そこへ三島が現れた。全身にあつた怪我や痣は綺麗に消え、暗かった印象もすっかり無くなっていた。

天馬

「三島さん？」

三島

「探したよ、2人とも。」

三島は天馬の隣に腰を下ろした。

三島

「見てくれた? 怪盗お願いチャンネル。」

蓮

「ああ、最近話題になってるな。」

三島

「あれ立ち上げたの、俺なんだよね。」

三島の突然のカミングアウトに、2人は驚愕した。すると……

竜司

「おーい、来たぜ? って、三島?」

今度は竜司と杏と志帆がやって来た。志帆も全身にあつた怪我や痣は綺麗に消えていた。

志帆

「久し振り、松風君。」

天馬

「鈴木さん！」

天馬は立ち上がり、志帆に近づいた。

天馬

「身体は大丈夫なんですか？」

志帆

「うん、もうバッチリ！」

杏

「志帆ね、天馬にこの前の御礼がしたいんだって。」

天馬

「この前って……………？」

志帆

「私が飛び降りた時、松風君が受け止めてくれたでしょ？あの時、松風君が私を受け止めてくれなかったら、私は多分……………だから、退院したらちゃんと御礼が言いたかったの。

ありがとう、松風君。」



天馬

「いやそんな、御礼なんて……………」

志帆に感謝の御礼を言われ、照れる天馬。と、志帆は何故かモジモジしていた。

志帆

「それとね……………えーつと……………」

天馬

「はい?」

志帆

「……………やっぱり何でもない!ありがとう、それとゴメンね!」

志帆はそう言うと、中庭を去っていった。

蓮

「急にどうしたんだ?」

杏

「志帆つてば、あとちよつとだったのに……………」

天馬

「ん？」

三島

「……………ところでさ。」

と、突然三島が口を開いた。

三島

「単刀直入に聞くけど、怪盗団つてのは君らなんだろう？」

三島の発言に、一行は驚愕した。

三島

「やつぱり……………もし俺が思ってる通りなら、秘密にしておいた方がいいよな？君達に酷いことをしてきた御詫びって訳じゃないけど……………俺に出来る事があれば、何でも言ってくれ！」

蓮

「気持ち嬉しいが……………」

三島

「俺も、そう言ってくれると嬉しいよ。悪い大人は鴨志田以外にも沢山居る。でも、怪盗ならきつと何とかしてくれる……………1度きりで終わる筈ない。」

天馬

「だから怪盗お願いチャンネル……………悩み事が集まるサイトを作ったって事ですか?」

三島

「そう言うこと。俺の他に怪盗団の今後に期待してる連中は、多分沢山居る。だから、あのページには匿名アンケートも実装してあるんだ。」

杏

「匿名アンケート?」

竜司

「ひよつとしてコレか?『怪盗団を信じますか?信じませんか?』ってヤツ。」

竜司はスマホでサイトのページの開き画面を見せる。ページには信じる、つまり支持率を示すゲージが映っている。

三島

「俺はいつか、それを支持の声でいっぱいになりたい……怪盗団の正義の行いの役に立ちたいんだ！なあ、いいだろ？」

蓮

「……なるほど、面白そうだな。」

蓮は笑顔でそう答える。それは三島に対するOKのサインだった。

三島

「期待に答えてみせるよ……じゃあね！」

三島はウキウキしながら、その場を去っていった。三島が居なくなつた事を確認すると、モルガナとグッドストライカーが鞆から顔を出した。

グッドストライカー

「なあこれ、オイラ達のことバレてるよな？」

杏

「でも、あの様子なら大丈夫だと思うけどね。」

モルガナ

「悩み事が集まるページか……………コイツは意外と使えるかもだぜ。」



〈教室棟 屋上〉

翌日、5月7日 土曜日の放課後。

怪盗団一行は屋上のアジトに集まって怪盗お願いチャンネルの掲示板を見ていたが

……………

竜司

「ロクな書き込みがねえ、恋人やら親への愚痴ばかりだ……………」

グッドストライカー

「大物の依頼は来そうにねえな……………こうなりや地道に足で探すか?」

天馬

「いや、余計無理じゃないかな？」

ガチャン

突然屋上の扉が開き、茶色っぽい黒髪のショートボブにクラウンブレイドをした、赤い瞳の凛々しい女子生徒が現れた。モルガナとグッドストライカーは慌てて隠れ姿を消した。

天馬

「あれは……………生徒会長？」

蓮

「知ってるのか？」

天馬

「あ、蓮は知らないんだ……………3年生の《新島 真》先輩、学園の生徒会長だよ。と言っても、俺も入学式の時に顔を見ただけで、直接的な面識は無いんだけど……………」

真は真面目な顔で蓮達を見るが、竜司と杏は何やら警戒している。

真

「ここ、立入禁止の筈だよ?」

竜司

「話終わったら直ぐ出ますって……………つか、会長サンが何か用ツスか?」

真

「いえ……………問題児君に噂の彼女、それに訳有りの転校生とそのルームメイト、変わった取り合わせだなって思ってたね。」

杏

「感じワル……………」

真

「ところで、鴨志田先生と色々あったみたいけど?」

杏

「この学校に居れば、嫌でも鴨志田先生と接点あるでしょ?」

杏がそう言うと、真は蓮に目を向ける。

真

「前歴のこと、鴨志田先生がバレー部員を使って広めたらしいわね？」

と、今度は天馬に目を向ける。

真

「あなたも鴨志田先生が信じ込ませた噂のせいで、サッカー部の入部テストを取り消された……ねえ、鴨志田先生のこと憎くないの？」

真はまるで天馬と蓮を煽る様な発言をする。2人はここに来てようやく、真に対する警戒心を抱いた。

竜司

「おあいにく様、コイツら会長サンが思ってるよりズーツと出来た人間なんで。」

真

「気を悪くしないで、鴨志田先生の件で動揺してる生徒も多いの。予告状みたいな可笑



しな貼り紙の噂も、中々消えないし……………」

杏

「意外!新島先輩って、あんなセンス無い貼り紙のこと気にしてんだ。」

竜司

「センスねえ事はねえと思うけど……………つか、もうよくねえツスカ?話しかけられてると出れねえし。」

竜司がそう言うと、真は何やらイラついた目をする。

真

「悪ふざけに付き合わされる身にもなつてよ……………そうそう、ここ例の事故もあつたし封鎖することになったの。誰かさんが無断で入つてるって、そんな噂もあるしね。」

そう言うと、真は屋上から去つていった。真が去つた事を確認すると、モルガナとグッドストライカーが姿を見せた。

杏

「何よ、あれ!？」

グッドストライカー

「な〜んか感じの悪い女だなあ……………」

モルガナ

「こりや完全に目え付けられてるなあ……………あの新島とか言う女、なかなか頭がキレそうだ。用心した方が良さぞ。」

竜司

「メンドくせー事になったなあ……………」

モルガナ

「頭と面倒臭いと言えば、お前らちやくんと勉強しろよ? 知性で解く罠だつて少なくないだろうし。日常の行動全てが力になると思え。」

竜司

「そうだけだよお、せつかく世直しすんぞつて気合い入ったとこなのに、ノらねえなあ……………」

モルガナ

「だつたらその前に、面白い場所へ連れて行ってやろう。元々我輩の仕事の手伝いもするって約束だったしな。」



4人は掲示板の書き込みから、相手の実名が晒されてる書き込みを探す。すると  
.....

蓮

「あつたぞ。『元カレが最近ストーカー化して困ってます。名前は、中野原夏彦。区役所の窓口係です。』だそうだ。」

天馬

「区役所の方がストーカーって.....」

相手の方に呆れる天馬であつた。

モルガナ

「手頃だな。よし、ならイセカイナビの用意だ。」

竜司

「即パレス行くって事か？ま、俺はいいけど！」

蓮

「なら、行くしかないな。」

天馬

「俺も賛成。」

杏

「私も!」

グッドストライカー

「決まりだな!」

全会一致で、ターゲットは中野原夏彦に決まった。すると、天馬が掲示板の書き込みに気になるモノを見つけた。

天馬

「ちよつと待って!………これ、もしかして鈴木さんの書き込みじゃないかな?」

一行は天馬の発言に驚き、天馬は書き込みを読み始める。

天馬

「『怪盗団の皆さん、助けて下さい!私は秀尽学園に通う2年生の生徒です。先日怪盗団

が鴨志田先生を改心させてくれたお陰で、私ももう一度頑張ろうって思いました。ですが私の両親は頑なに、自殺未遂のレッテルがあるから他の学校に転校させると言って、話を全く聞いてくれません。私の大好きな親友は、どんなに酷い噂をされても、どんなに酷い扱いをされても、私のために頑張ってくれました。私は、大好きな親友がいる秀尽学園を離れたくありません。怪盗団の皆さん、お願いします……私の両親を説得して下さい！両親の名前は……。」

掲示板に晒された両親の名前を聞いて、杏は驚愕した。

杏

「これ、志帆のお父さんとお母さんの名前！」

モルガナ

「どうやら間違い無い様だな……杏殿の親友の頼みだ、引き受けてやろうじゃねえか！」

竜司

「んじゃ、先ずは中野原から行くか！え〜つと、名前と場所と……。」

モルガナ

「いや、今回は両方とも入れなくていい。代わりに、我輩の言う通り入力してくれ。キーワードは、『メメントス』だ。」

天馬

「メメントス?」

偶然にも天馬のスマホの音声入力が作動し、イセカイナビにメメントスと入力された。

イセカイナビ

『候補が見つかりました。』

ブオーン……………

ナビを起動した途端、辺りの空間が歪み始め、気付けば自分達以外の人々が姿を消した。

グッドストライカー

「おい、人が消えたぞ!」

竜司

「ここが、中野原つてヤツのパレスか?」

モルガナ

「半分正解、半分間違いだな。確かに此処もパレスだが、普通のパレスとはちよつと違う。今から地下に下りるぞ、此処のシャドウはどういう訳か地下に溜まつてるんだ。」

一行はモルガナを先頭に、地下鉄入口から地下に下りる。だがこの時、一行は気が付いていなかった。青ガエルの影に、誰かが居たことに……

くメモントス 入口く

地下に下りた怪盗団一行。だが下りた先は、自分達の知ってる渋谷の地下とは違っていた。



天馬

「うわあ……………」

蓮

「何だこれは……………」

到着したのは駅の改札の様だが、辺りに血管の様な根つこの様なモノが絡み付き、恐ろしく禍々しい雰囲気を放っていた。

竜司

「つか、俺ら変わってるぞ!?!」

さらに気付けば、一行はいつの間にか怪盗服に変身していた。

杏

「シャドウに気付かれたの!?!」

モルガナ

「とつくにな。だがまだ此処は大丈夫だ。何度か来て調べたが、シャドウは何故かこのフロアまでは上がって来ない。」

天馬

「此処が、さつきモルガナが言つてたメモメントス？」

モルガナ

「そう、言い換えるなら皆のパレスだな。」

—————

く思想奪われし路　ホームく

一行は改札を抜け、止まつてるエスカレーターを下り、地下鉄のホームらしき場所に到着した。

モルガナ

「前の城みたく、1人に支配されたパレスが出来上がるのは、歪みが並外れて強い奴だけだ。だが他の普通の大衆は、1つに融合した巨大なパレスを共有してる。それが此処、

メモントスだ。」

竜司

「みんなのがくつつついてるのか?赤の他人同士なのに?」

モルガナ

「まあ要するに、ここを使えばパレスが無い人間でも改心させられるって訳だ。手順が少し違うがな。」

グッドストライカー

「けどよ、これだいぶ……………いやかなり広いんじゃないか?歩いて行くなんて無理だろ……………?」

天馬

「VSビークル……………は、駄目だ。此処じゃ狭すぎる。」

モルガナ

「フッフッフ……………」

突然、モルガナが不気味な笑い声を出し始めた。

モルガナ

「モルガナあー、変……身！トウツ!!」

何故かモルガナは謎の変身ポーズを決めジャンプ。

ボンツ！ ドシン！

すると何と言う事でしょう。モルガナは黒いワンボックスカーに変身したではありませんか。

天馬・グッドストライカー

「ええええええええええええっ!」

杏

「車に変身した!?!」

竜司

「あり得ねえ!!」

一行はモルガナの摩訶不思議な変身に仰天した。

モルガナ

「大衆の心の中には、何故か『猫はバスになる』って認知が物凄い広く浸透しててな、そこで認知が具現化する異世界の仕組みを逆に利用して、ちよいと修行したんだ。名付けて、《モルガナカー》！」

蓮

「何で猫がバスになる認知が浸透してるんだ？」

モルガナ

「分からん……とにかく、これでメメントスの探索も楽になるぜ!さあ乗れ、お前ら!」

杏

「ハイハイ、じゃあ私が先!レディ・ファーストよ!」

杏はウキウキ気分でモルガナカーに乗り込む。

竜司

「おい、ちよつと待てよ!」

だが突然、竜司が待ったを掛けた。

蓮

「どうした？」

竜司

「天馬のコードネーム、まだ仮のままだろ？天馬もペルソナ使いになったんだし、探索する前にちゃんとしたコードネーム付けてやろうぜ？」

杏

「あ、そう言えば《ライデン》って仮のコードネームだったっけ？」

杏はモルガナカーを降り、蓮達は天馬の姿を見てコードネームを考え始める。

竜司

「……………俺やパンサーみたいに見た目で判断するなら、やっぱ《ペガサス》だよな？」

天馬

「悪く無いけど……………出来れば、もうちょっと凝った名前が良いなあ……………」

モルガナ

「なら、《ストーム》か《テンペスト》はどうだ?どっちも《嵐》って意味だが。」

グッドストライカー

「おお、カツコいいじゃん!」

天馬

「うくん、何か違う気がする……………」

蓮

「なら、《ゼファー》はどうだろうか?」

竜司

「ぜふぁー?」

蓮

「ギリシヤ神話に登場する西風神、ゼピュロスの英語名だ。そこから転じて英語で西風。強風ではなく、そよ風を表している。」

竜司

「お前、ホントまじで優等生だろ……………」

蓮の学力の高さに啞然とする竜司。

グッドストライカー

「けど確かに、天馬って風ってよりそよ風って感じだよな？」

天馬

「ゼファーか……うん、俺それがいい！」

杏

「私も！何だか優しい天馬にピッタリかも！」

モルガナ

「決まりだな。よろしく頼むぜ、ゼファー！」

天馬の正式なコードネームは《ゼファー》に決定した。

ブオオオオオオオオン！

モルガナ

「出発進行！エンジン全開でカツ飛ぶぜ！」



そして一行はモルガナカーに乗り込み、ジョーカーの運転で線路に下り、メメントスの探索に出発した。

杏

「車がレールの上を走るって、何だか新鮮だね。」

天馬

「此処の何処かに、中野原って人のシャドウが居るの?」

モルガナ

「パレス程じゃないが、ソイツも恐らく自分だけの空間に閉じ籠ってる筈だ。強い歪みのある場所に、ソイツの空間がある筈だ。」

一行はレールの上を走り、中野原の居る空間を探す。道中には何とも言えない見た目をしたモンスターのシャドウがウジャウジャ居る。

竜司

「にしても、アッチもコッチもシャドウだらけだな。」

モルガナ

「大衆のパレスだからな、当然シャドウもウジャウジャ居る。あまりシャドウを刺激するなよ？」

一行を乗せたモルガナカーは、シャドウを避けながら更に奥へと進む。すると、前方に強い歪みが見えた。

モルガナ

「見えたぞ！あの歪みの向こうだ！」

モルガナカーはスピードを上げ、歪みに突っ込んだ。

Act. 13 / 潜入メモメントス!これが私の恩返しよ!

《後編》

歪みを抜けた先には、謎の小さな空間。その空間の中にはスーツ姿の若い男が居た。

グッドストライカー

「おい、誰か居るぞ?」

蓮

「アイツが中野原のシャドウか。」

竜司

「確か中野原は区役所の窓口係で、それがストーカーになったんだっけか?」

モルガナ

「とにかく、下りて話をしてみようぜ。」

蓮達はモルガナカーを下り、モルガナは元の姿に戻る。そして、一行は中野原のシャドウと対峙した。

シャドウ中野原

「誰だお前ら!？」

竜司

「お前が中野原ってストーカー野郎か？ 相手が嫌がる事して何が楽しいんだよ？ 少しは相手の気持ち、考えたらどうだ？」

シャドウ中野原

「うるさい！ あの女は俺の物だ！ 俺の物をどう扱おうが俺の勝手だろ！ 俺だって物扱いされたんだ………同じことをして何が悪い!？」

竜司

「自分がやられたからって、人を物扱いすんな！ ふざけやがって………」

シャドウ中野原

「俺より悪い奴なら幾らでも居るだろ!？ そうだ、《マダラメ》………俺から全てを奪ったアイツは良いのかよ!？」

シャドウ中野原はそう言うと、背負いをせがむ小鬼のシャドウ《オバリヨン》に変身し、怪盗団に襲い掛かってきた。

蓮

「散れ!」

怪盗団は一旦散開し、全員距離を取る。

竜司

「どうやってやっつける?」

天馬

「俺がヤツの動きを止める。そしたら全員で一斉攻撃でどう?」

天馬のアイデアに、一行は賛成した。

天馬

「グツデイ、前に教えてくれたヤツやろう!」

グッドストライカー

「待ってました!行くぜ!」

天馬はグッドストライカーを掴み、ダイヤルファイター状態のままVSチェンジャーにセツト。

『グッド！ストライカー！』

グッドストライカー

「メイクアップ・ゲーム！」

ダイヤルを回し、3桁の数字を入力。

『3・2・1！（キュピーン！）』

そして黒いグリップを握り、銃身を右へ90度回す。

『アクション！』

するとなんと、天馬が3人に分身した。

蓮

「分身しただと!?!」

天馬×3

「行くぞ!」

3人の天馬は各々武器を構え、シャドウ中野原に襲い掛かる。シャドウ中野原はチョコマカと動き回り攻撃を避ける。

天馬

「そこだ!」

ガツンツ!

分身の1人がタイミングを合わせてボウラを投げ飛ばし、シャドウ中野原を拘束し

た。

天馬

「今だ！」

竜司

「行くぜ！」

ドカツ！バキツ！ドンツ！

蓮・竜司・杏・モルガナは武器を構え、一斉攻撃を叩き込む。そしてシャドウ中野原は降参したのか、元の姿に戻った。

シャドウ中野原

「わ、悪かった！許してくれ！俺、執着心が止められなくなつた……悪い先生に使い捨てにされて……」

蓮

「悪い先生？さつき言つてたマダラメつてヤツか？」



杏

「そっちも、身勝手なヤツのせいで苦しんでたんだね……………」

天馬

「だとしても、関係ない人を巻き込むのはよくないです。自分がやられたから自分もやるなんて、完全にお門違いですよ。」

シャドウ中野原

「そうだな、その通りだよ……………この恋は終わりにするよ。でもマダラメ……………アイツも改心させてくれ!沢山のヤツが犠牲になる前に……………!」

シユウウ……………

そう言い残すと、シャドウ中野原は光となって消えた。天馬はVSチェンジャーからグッドストライカーを外し、分身を解いた。

竜司

「これで中野原ってヤツは改心したんだよな?」

モルガナ

「恐らく。ただ確認する方法は無いが……………」

杏

「ネットに実名書くぐらいなんだし、改心してたら御礼の書き込みとか書くんじゃない？」

蓮

「取り敢えず、中野原はこれでOKだ。次は鈴井の両親のシャドウを探そう。」

蓮の意見に一行は合意。再びモルガナカーに乗り込みメモメントスを探索し、志帆の両親のシャドウを探す。だが……………」

ゴトン……………ガタンゴトン……………」

竜司

「ちよ、ちよつと待て……………何か音しねえか？」

モルガナカーの後方から電車の音がする。恐る恐る後ろを見ると、後方から電車が猛スピードで接近していた。

フアーン!

グッドストライカー

「マジの電車来たー!?!」

蓮

「マズイ!」

蓮はアクセルを踏みスピードを上げるが、じわじわと距離は縮まって行く。

竜司

「このままじゃ追い付かれちゃうぜ!?!」

天馬

「ジョーカー、あれ!」

天馬が前方に分岐点を見つけた。蓮は迷わず間一髪で引き込み線に逃げ込み、引き込み線内で停車。

ガタンゴトン！ガタンゴトン！

一方電車は分岐点を直進し、メモントスの闇の向こうに消えていった。

杏

「た、助かったあ……………」

一行はギリギリ助かり安心したが、竜司はカンカンだった。

竜司

「おいモナ！！モロ営業中じゃねえかコラ！！」

モルガナ

「此処は地下鉄だぜ？電車走ってて当たり前だろ？」

杏

「でも、此処って一応パレスなんでしょ？」

蓮

「となると、これが大衆が見てる日常の風景って事か?」

グッドストラライカー

「こんな暗いトンネルが日常? 理解に苦しむな……………」

その後、一行は引き込み線を離れメメントス探索を再開した。

天馬

「て言うか、俺達普通に線路走って大丈夫なの? また電車が来たりしたら……………」

モルガナ

「そんな時はまた引き込み線に逃げ込めば良いんじゃないか? よく知らんが。」

竜司

「マジかよ……………ポイントが逃げた方向に変わってたらどうすんだよ!？」

それから一行は電車に遭遇する事は無く、別の強い歪みを発見した。モルガナカーはスピードを上げ歪みに突っ込み、小さな空間に到着。空間の中には中年の男女が居た。

杏

「居た！志帆のお父さんとお母さん！」

一行はモルガナカーを下り、モルガナは元の姿に戻った。そして怪盗団は志帆の両親のシャドウと対峙した。

シャドウ 鈴井父

「お前たち、何者だ!?!」

天馬

「鈴井志帆さんの御両親ですね？何で娘さんを転校させるって頑なになってるんですか？」

シャドウ 鈴井母

「決まってるでしょ!?!それが志帆と私達のためになるからよ！」

シャドウ 鈴井父

「自殺未遂のレツテルに苦しめられてるのは志帆だけじゃない！私達だって志帆が自殺を図ったせいで、苦しんでるんだ！共に勤めてた会社で信用を失い、鴨志田先生の虐待を黙認していた事もバレた！」

シャドウ 鈴井母

「もう、この街に私達の居場所は無い!だから私達は志帆と一緒に、何処か知らない街で幸せに暮らすのよ!」

杏

「……………だからって、志帆の意志は無視するの!?!私だって、志帆は秀尽なんか居ない方が幸せだって思ってる……………でも、秀尽はレットルの事なんか全く気にしてない!志帆はこれからも、秀尽で頑張ろうとしてるのよ!」

シャドウ鈴井父

「黙れ!!志帆は私達の娘……………私達の物だ!!娘の将来は、私達が決める!!」

杏の説得に全く動じようとしない鈴井父のシャドウ。その時……………

「杏……………?」

突然、杏を呼ぶ少女の声があった。一行が声のする方を見ると、そこには……………

天馬

「えっ?!」

杏

「志帆?!」

そこには何故か、志帆の姿があった。

竜司

「もしかして、鈴井のシャドウか?」

モルガナ



「いや違う……………アレは本物、鈴井志帆本人だ!」

モルガナの発言に、一行は驚愕した。

シャドウ鈴井父

「志帆!」

志帆

「お父さん!?お母さん!?どうして此処に!?!」

志帆は両親のシャドウを見て驚いた。

シャドウ鈴井父

「志帆、お前は私達の子供だ!子供なら大人の、親の言うことに従うのが筋じゃないのか!?!ああ!?!」

志帆

「お父さん……………」

シャドウ鈴井母

「元はと言えば貴女があんな事しなければ、こんな事にはならなかった!!もうこれ以上、私達を苦しめないで!!」

志帆

「お母さん……………」

両親のシャドウから罵声を浴びせられ、志帆は泣き崩れそうになる。だが……………

天馬

「……………家族のため?娘のため?」

天馬は拳を握り、怒りの炎をメラメラと燃やしていた。

天馬

「そんなの只の言い訳だ。貴方達は、自分達の置かれた状況が嫌で逃げたいだけじゃないのか?」

シャドウ鈴木父

「な、何だと!」

天馬は静かに志帆に眼を向ける。志帆は天馬の眼差しに気付き、顔を上げた。

天馬

「鈴木……………いや志帆さん。貴女は何で秀尽に残ろうと思ったんですか?」

天馬が志帆に問うと、志帆は俯きながら答えた。

志帆

「……………杏が頑張ってたから。杏は周りからどんな扱いをされても、私のために一生懸命頑張ってくれた。だから私も、秀尽で頑張りたいって思った。レットルに縛られない強い自分に成りたかった……………でも、私には無理なのかな……………弱い私じゃ……………」

天馬

「……………雷門中時代、円堂監督が言っていました。『自分のことを決められるのは、自分だけだ。』『昨日の自分を超えていけ』って……………」

志帆

「自分のことを決められるのは、自分だけ……………昨日の自分を、超える……………」

志帆は思い出した。鴨志田に虐げられ、親友に真実を打ち明ける事も出来ず、そして自ら命を絶とうとした、嘗ての自分を……

志帆

「……………嫌……………！」

志帆は拳を握り、涙を流す。

志帆

「もう弱い私は嫌……………私は……………私は強くなりたい！」

天馬

「なら、俺達と目指しましょう。今よりも強い自分……………今よりも強い、鈴木志帆を……………」

天馬と杏は優しく微笑み、志帆に優しく手を差し出す。

志帆

「天馬君……………!杏……………!」

志帆はブレザーの袖で涙を拭い、天馬と杏の手を取る。そして永いこと忘れていた、  
本当の笑みを浮かべた。

『本当に?』

ドクンツ!

志帆

「あッ……………!?!」

突然、激しい頭痛が志帆を襲い、志帆の頭の中に誰かが語り掛けて来た。

天馬

「志帆さん!?!」

杏

「志帆!？」

『弱い私? 強くなりたいたい? ……違う、貴女は弱くない。貴女はただ、自分の本当の強さを知らないだけ。』

志帆

「私の………本当の………強さ………?」

『私を解放しなさい。そうすれば、貴女は本当の強さを手に入れられる。貴女を助けてくれた彼に、貴女の大事な親友と一緒に戦える強さを。』

志帆

「………分かった、私やる!」

志帆は顔を上げ、両親のシャドウを睨む。すると志帆の顔に、杏のマスクと同形状の黒いキャットマスクが出現した。

『契約成立。我は汝、汝は我………これで始められるね、貴女の恩返し。』

志帆

「うん!出てきて、《ユウヅル》!」

志帆は流血と共に仮面を引き剥がす。仮面を引き剥がした次の瞬間、志帆の身体が青白い炎に包まれた。

ジャキン! シュン!

斬撃と共に炎が消えると、志帆は黒いラバースーツ姿となり、脚には黒いロングブーツ、腰には黒い尻尾、両手には黒いグローブと、銃身に赤いラインが刻まれた黒鉄色に輝く刃を備えたハンドガン型の銃剣を二丁。そして背後には、鶴を彷彿とさせる白い着物を纏った少女のペルソナがいた。

蓮

「鈴井が、ペルソナを!？」

竜司

「つかあれ、パンサーと同じ姿じゃ……………」

志帆

「お父さん、お母さん、ごめんなさい!私、もう今までの弱い私じゃない……………私はこの先、何があっても強く生きてみせる!杏と天馬君……………私の大切な人達のために!」

シャドウ鈴井父

「……………親の言うことが聞けないか!?!この親不孝者が!!」

怒りに震える両親のシャドウは合体・変身し、酔いどれる多頭蛇のシャドウ《ヤマタノオロチ》に変身した。

蓮

「いや、これも立派な親孝行だ。自分達が思うより、強くなった自分を証明すると言うな!」



怪盗団は志帆を中心に集まり、両親のシャドウと対峙する。

志帆

「みんな、力を貸して！」

天馬

「ああ、喜んで！」

ヤマタノオロチは首を振り回し、怪盗団を攻撃する。怪盗団は四方に大きくジャンプし首を避け、志帆は着地して直ぐヤマタノオロチの8つの首に銃弾を撃ち込む。

グニユグニユ………

だが撃ち込まれて直ぐ、首に空いた穴が塞がった。

モルガナ

「何て再生能力だ!?!」

蓮

「ならば！」

蓮はナイフ、モルガナはサーベルを振るい、杏はサブマシンガン、竜司は散弾銃を連射し、そして志帆は銃剣を、天馬はクリアグリーンの刃を持つブーメランを投げ、ヤマタノオロチの首を切断する。

グニユグニユ……

だが切断して直ぐ、全ての首が元通りに繋がった。

竜司

「これじゃキリがねえ！」

ゴパツ！

ヤマタノオロチは口から溶解液を吐き出す。怪盗団は華麗に避けるが、ジョーカーのスーツに溶解液が少し触れ、スーツの端が少し溶けてしまった。

志帆

「どうしよう、このままじゃ……………」

キイイイイン!!

突然、志帆の手の中に光る玉が現れ、光る玉は黄金に輝くダイヤルを持つ黒い銃に変化した。

志帆

「これって……………天馬君、これ使って!」

志帆は黒い銃を天馬に投げ渡し、天馬は銃を受け取った。

天馬

「これは、銃?」

グッドストライカー

「んんっ!？」

グッドストライカーは銃を見て、何やら思い付いた様だ。

グッドストライカー

「ゼファー、ソイツをVSチェンジャーと合体させてみる！」

天馬

「VSチェンジャーと？分かった、やってみる！」

天馬はVSチェンジャーを右手、黒い銃を左手に装備し、両者を合体させる。

『フアントム・ファイバー!!』

そして黒い銃の銃口をヤマタノオロチに向け、トリガーを引いた。

『イタダキ！ストライク!!』

銃口から8発の銃弾が放たれ、ヤマタノオロチはそれを1発ずつ飲み込んだ。

杏

「食べちゃった!？」

志帆

「ユウヅル、お願い!」

グブブ………ドカーン!

すると、ヤマタノオロチの胴体が膨らみ、そして大爆発を起こし、辺りに溶解液が飛び散った。志帆のペルソナ、ユウヅルは怪盗団全員の前に障壁を出現させ、怪盗団を溶解液から守った。ヤマタノオロチが爆発した事によって、志帆の両親のシャドウは元の姿に戻った。だが2人とも戦意を喪失していた。

天馬

「勝負ありですね。」

シャドウ鈴木井父

「ああ、認めよう……………私達の敗けだ……………志帆、すまなかった。私達はもっと、お前の声を聞くべきだったよ……………」

シャドウ鈴木母

「私達は、娘の声に耳を傾けず、娘より自分達の安心を求めた……………弱いのは、私達の方だったのね……………」

シャドウ鈴木父

「……………志帆、お前は強い子だ。お前はこの先、自分の選ぶ道を進むと良い。」

シャドウ鈴木母

「応援してるからね……………ガンバるのよ！」

シユウウ……………

両親のシャドウは優しい笑みを浮かべ、光となって消えた。

志帆

「お父さん!?!お母さん!?!」

天馬

「大丈夫、アレは志帆さんの両親の心です。改心して、元の自分に戻ったんですよ。」

志帆

「そう……なの?」

「どうやら志帆は何が何だか分かってない様だ。」

モルガナ

「一旦メメントスの外に出るぞ?探索は一旦中止だ。」

モルガナの意見に一行は賛成し、怪盗団はメメントスを離れた。



↳ 渋谷セントラル街↳

メメントスを離れた一行は、渋谷駅前広場に居た。一行は志帆が落ち着きを取り戻したところで、自分達怪盗団について全てを話した。

天馬

「これで俺達の、怪盗団の事は全部です。」

志帆

「みんなが最近噂になってる心の怪盗団……………鴨志田先生が変わった理由だったんだね

……………」

杏

「黙っててゴメンね……………」

志帆

「良いよ、私だって体罰のこと内緒にしてたんだから、お相子だよ。」

モルガナ

「それで、お前はこれからどうするんだ？」

モルガナは志帆に問うと、志帆はこう答えた。

志帆

「私、怪盗団の仲間になりたい！」



志帆の答えに、一行は驚愕した。

志帆

「怪盗団は、私を心から救ってくれた恩人……だから私、怪盗団に恩返しをしたい。杏や天馬君、みんなの力になりたい。」

志帆は怪盗団入団を希望し、一行は考えた。そして……

蓮

「……………分かった、よろしく頼む。」

竜司

「あまり無茶すんなよ? 病み上がりなんだからよ。」

杏

「よろしくね、志帆!」

天馬

「よろしくお願います!」

全会一致で、志帆は正式に怪盗団のメンバーとなった。

志帆

「ありがとうございます！」

杏

「ねえ志帆、この際だし天馬に打ち明けたら？」

杏がそう言うと、志帆は何やら頬を赤く染め、モジモジし始めた。

天馬

「志帆さん、どうしたんですか？」

杏

「志帆ね、実は天馬に惚れてんだ。」

杏のカミングアウトに一行は仰天し、志帆は顔が真っ赤になった。

グッドストライカー

「天馬に惚れてるって、マジ!？」

志帆

「うん……天馬君は私にとって、白馬の王子様なんだ。屋上から飛び下りた私を、身体を張って受け止めてくれたから……。」

天馬

「は、はあ……。」

天馬もどうやら混乱してる様だ。

志帆

「私、天馬君の事が……その……好きになっちゃって……。」

竜司

「えっ?好きって……。」

蓮

「シッ!」

蓮に口を無理矢理封じられる竜司。

志帆

「その、学生と怪盗の二重生活で大変なのは承知だけど……………私と……………お、お付きあいして頂けませんか……………?」

顔を赤く染めながら何とか天馬に告白した志帆。そんな志帆を見て、杏は心の中で「志帆、やっと言えたね!」と呟いた。そして一行は、一斉に天馬に眼を向ける。天馬は深呼吸をすると、右手を志帆に差し出した。

天馬

「……………不束者ですが、よろしくお願いします!」

志帆

「は、ハイッ!」

志帆は天馬と握手をし、そして喜びの余り天馬に抱き付いた。

杏

「おめでどう志帆!」

竜司

「おいおい、こんな展開有りか!?でも良いや!おめでどう、御二人さん!」

怪盗団は2人を祝福し、拍手を送った。

蓮

「よし、じゃあ今夜は志帆の親睦会と2人の祝杯パーティーだ!みんなで美味しい物でも食べに行こう!」

竜司

「さんせい!い!なら俺はうなぎ!国産の!」

モルガナ

「我輩寿司が良い!回らないヤツで!」

グッドストライカー

「オイラはフランス料理が良いなあ。」

杏

「ちよつと、親睦会と祝杯パーティーには賛成だけど、メインは志帆と天馬だからね！  
……それはそれとして、私はスイーツが良いなあ！」

各々の希望を言い合う怪盗団。その様子を見て、天馬と志帆は笑顔を浮かべていた。

# Act. 14 / メメントスと謎の美少年

↳ 渋谷駅 駅前広場↳

志帆が怪盗団に加わった翌日、5月8日 日曜日。

怪盗団一行は渋谷駅前広場に集まっていた。だが、そこには何故か志帆の姿が無い。

天馬

「志帆さん遅いね……………」

杏

「おつかしいなあ、今まで約束の時間に遅れたこと無かったんだけど……………」

すると、噂をすれば影……………地下階段から志帆が姿を見せた。

志帆

「ゴメン、遅くなっちゃった……………！」

天馬

「あ、こんにちは志帆さん！」

杏

「志帆、何かあったの？」

志帆

「お父さんとお母さんと、少しお話してたの。」

蓮

「どうだった？両親の様子は。」

蓮が聞くと、志帆は黙り込んだ。一行は一瞬、改心は失敗したのかと思ったが……………。

志帆

「無理やり転校させようとしてゴメンねって、お母さんが……………転校の話は無かった事にするって、お父さんが言ってた。」

天馬

「それじゃあ……………！」

志帆



「うん……私、このまま秀尽に居れる事になったの！」

志帆の言つた事に、怪盗団は大いに喜んだ。特に杏は。

モルガナ

「どうやら、両親の改心は成功したみたいだな。」

志帆

「うん！これもみんなのお陰だよ、ありがとう！」

—————

く 渋谷駅 田苑都市線・伴蔵門線地下ホームく

その少し後、一行は渋谷駅地下ホームに下りた。

グッドストライカー

「それでモルガナ、今日はどうする？」

モルガナ

「今日は昨日中断した、メメントス内部の探索だ。」

志帆

「メメントスって、昨日のあの？ どうやって行くの？」

天馬

「イセカイナビって言う、特殊なナビアプリを使うんです。」

志帆

「イセカイナビ？ それって……………」

志帆はポケットからスマホを取り出し、ホーム画面を見せる。ホーム画面には、イセカイナビがインストールされていた。

天馬

「それ、イセカイナビ!？」

志帆

「朝起きたら勝手にインストールされてただけど、なるほど……………これで異世界に行けるんだね。」

竜司

「ちよつと待て！じやあ何で昨日、志帆はメメントスに居たんだ？昨日はまだナビ持ってなかつたんだろ？」

志帆

「みんなが青ガエルの近くで集まつてるのが見えて、それでそつと近づいたらいつの間にか迷い込んで、それから地下に下りて後を付けてたの。」

杏

「つまり、いつかの私みたいに巻き込まれたんだね……………」

天馬

「て言うか、あんな気味悪いシャドウがウジャウジャ居るのに、よく歩けましたね……………」

モルガナ

「……………まあいい、早くナビを起動しろ。ナビにメメントスって入力すれば、行けるようになる。」

志帆

「分かった、やってみるね。」

志帆は早速イセカイナビを開き、メメントスと入力する。

イセカイナビ

『ナビゲーションを開始します。』

駅アナウンス

『まもなく電車が通過します。黄色い線の内側まで御下がり下さい。』

フーン！

ナビを起動したと同時に、一行の前を回送電車が通過。通過し終えると一行はいつの間にか怪盗服姿に変わり、辺りの風景もメメントスに変化していた。

志帆

「……、昨日の！ホントに来れちゃった……………」

モルガナ

「そうだ、コードネームを決めないとな。」

志帆

「コードネーム？」

杏

「私達は、怪盗として動いてる間はコードネームで互いを呼び合ってるの。」

竜司

「杏がパンサー、俺がスカル、リーダーの蓮がジョーカーで、サブリーダーの天馬がゼファー、それからモナとグツデイだ。」

一行は先ず、志帆の怪盗服姿を見る。

竜司

「つか志帆の格好、まんまパンサーの色ちがいじゃね……………？」

志帆

「え〜っと、昨日初めて見た杏……………じゃなくて、パンサーの怪盗服が凄くインパクトあつたから、そのせいかな？」

杏

「なんだろう、急に物凄く恥ずかしいんですけど……………」

蓮

「うむ……なら、《レパード》でどうだ？」

天馬

「パンサーと同じ豹って意味だよな？ 良いんじゃないかな？」

志帆

「みんなが良いなら、私は大丈夫だよ？」

竜司

「決まりだな！」

志帆のコードネームは《レパード》に決定した。

天馬

「じゃあ、この銃の名前はレパードマグナムってところかな？」

天馬はそう言うと、昨日志帆から預かった黒い銃を取り出した。

グッドストライカー

「何かシツクリ来ねーなあ……………《ファントムマグナム》にしようぜ？」

志帆

「その銃も、グッデイが話してたルパンコレクションなの？」

グッドストライカー

「ああ、しかもオイラの見立て通りなら、今のところ最も強力なコレクションに該当する筈だ。扱いには気を付けろよ？」

—————

く思想奪われし路く

一行はモルガナカーに乗り込み、ホームから線路に下り、メメントス内部を探索する。

志帆

「モナって凄いな。猫なのに普通にお喋り出来るし、車にも変身できるなんて。」

モルガナ

「と言っても、変身できるのは異世界限定だけだな。あと、どういう訳か普通の人間には

我輩の声は猫の鳴き声にしか聞こえない。あと、我輩は猫じゃねー。」

志帆

「メメントスって不気味な場所だね……………鴨志田先生も、こんな異世界を持つてたの？」

モルガナ

「まあな。だが鴨志田の場合は心の歪みが並外れて強かったから、自分が支配する自分だけのパレスを持つてたんだ。他の普通の人間は、1つに融合した巨大なパレス……………つまりこのメメントスを共有してる。」

蓮

「個人のパレスもメメントス同様、入るにはイセカイナビが必要になるんだが、その場合は本人の名前と場所、そしてその場所を何と勘違いしてるかが必要なんだ。」

天馬

「鴨志田先生は学校を自分の城だと思ってた。だから鴨志田先生の場合は、先生の名前、秀尽学校、城、この3つがパレスに入るのに必要なキーワードだったんだ。」

志帆

「なるほど……………」

キキキーツ!!



しばらく走っていると、モルガナが急ブレーキを掛け停車した。

モルガナ

「着いたぞ。」

到着したのは駅のホームの様だが、ホームには下りのエスカレーターしか設置されて居なかった。

天馬

「駅のホーム？戻って来ちゃったのかな？」

蓮

「いや、エスカレーターが下りしか無い。最初に来たホームとは別みたいだ。」

モルガナ

「そのこのエスカレーターから下のエリアに下りるぞ。そこが今日の目的地だ。」

一行はモルガナカーを下り、駅のホームから下りのエスカレーターを通り下のエリア

に向かう。そしてエスカレーターの先には島式のホームがあり、ホームの先には不気味な壁が存在していた。

グッドストライカー

「おいおい、何だよ行き止まりじゃねえか？」

杏

「でも、何かちよつと不気味……………」

モルガナ

「まあ見てろ……………我輩の勘が正しければ、これは只の壁じゃない……………」

モルガナはそう言うと、静かに不気味な壁に手を当てる。

ゴゴゴゴゴゴ……………！

すると突然、轟音と共に不気味な壁が開き、新たな下りのエスカレーターが出現した。

イセカイナビ

『最深部に新規エリアが確認されました。案内情報を更新します。』

さらにイセカイナビが新規エリア確認の通知を発した。

天馬

「壁が開いた!?!」

モルガナ

「見ろ! 思った通りだぜ!」

グッドストライカー

「なあ、いったいどういう事だ?」

モルガナ

「まだお前らやグツデイと会う前、鴨志田のパレスに潜入する前に来たときは何も起こらなかったんだ。けどメメントスの最深部が、こくんな何の変哲も無いフロアだなんて妙だろ?」

竜司

「更に奥があつたつて事か。」

モルガナ

「鴨志田のパレスが消えたし、現実でも騒がれて噂になってるだろ？だから、メモントスにも変化があるんじゃないかって思ったのさ！」

杏

「てか、どんくらい下まであんの？降りてみる？」

モルガナ

「いや、今回はそこまでのつもりで来てない。今回の探索は此処までにして、一旦戻ろう。説明はその後だ。」

—————

くメモントス 入口く

一行は探索を終え、メモントス入口に戻ってきた。すると……

天馬

「あれ？誰か居る？」

改札の向こうに水色のバギーと、白い服の少年が居た。バギーの後部には木箱やら段ボール箱やらが大量に積まれており、少年は何やら目の前に浮かぶ不思議な花を見ていた。

少年

「これはどうだ？」

シユウウ……………

すると、花が少年の手に吸い寄せられ、オレンジ色のジュースに変身したと思うと、少年は何の躊躇も無くジュースを口にした。

少年

「ぷはっ！うまつ！」

一方怪盗団は、美味しそうにジュースを飲む少年を改札の向こうから見ていた。

竜司

「アイツ、何か飲んでね？」

志帆

「お花がジュースになっちゃった？」

モルガナ

「何者だアイツ……………人間なのか？」

怪盗団は改札を抜け、謎の少年に近づく。少年も怪盗団に気付いた様だ。

少年

「ん？変な気配がすると思ったら……………お兄さん達、何者？」

モルガナ

「いやコツチが聞きてえよ……………」

少年の質問に突っ込みで返すモルガナ。

少年

「おっと、ゴメンなさい……………名前を聞くときは、先ず自分から名乗るのが人間の礼儀だ。ご指摘ありがとう、タヌキ……………じゃなくて猫さん？」

モルガナ

「迷うのかよ!?!つかどつちもちげえし！」

少年

「でも驚いたな、お兄さん達ふつうの人間でしょ?こんな所に来られる人も、いるんだね。」

モルガナ

「まあ、我輩達が特別って言うか……………って、そうじゃなくてだな!お前は何者なんだよ!?!」

少年

「僕の名前は《ジョゼ》。花を探してるんだ。」

志帆

「花？」

杏

「それって、さつきジュースみたいにして飲んでたやつのこと?」

ジョゼ

「そうだよ、綺麗なお姉さん。僕は人間を勉強しなくちゃいけないくて、あの花をいっぱい集めたいんだ。」

天馬

「勉強って、さっきのジュースみたいにして飲むの？」

グッドストライカー

「花のジュース飲むのが勉強になんのかよ……………」

ジヨゼ

「そうだ！ねえお兄さん達、僕の勉強を手伝ってくれないかな？花を集めてきて、それを僕に譲ってほしいんだ。もちろん、只でとは言わない。僕が此処で拾った、役立ちそうな物と交換しよう？」

モルガナ

「それなら、我輩達にもメリットはありそうだな……………いや、相手は正体不明の子供だし……………」

ジヨゼの正体が不明なため慎重になるモルガナだが……………

杏



「えー、手伝ってあげようよ？困ってるみたいだし、探索ついでに花集めるくらい難しい無いんじゃない？」

竜司

「俺は別に良いぜ？集めたらお礼くれるみたいだし。」

天馬

「俺も手伝うに一票。」

グッドストライカー

「オイラも賛成だ！」

志帆

「私も！」

蓮

「決まりだな、手伝ってやろう。」

ジヨゼ

「ありがとう！」

他の面子は手伝う事に賛成の様で、結果自然と多数決で決定した。

モルガナ

「待て待て、コイツが何者かまだ分かんないだろ!? お前もありがとうとか言ってるじゃねえ!!」

が、モルガナは未だ反対の様だ。

ジヨゼ

「猫さん凄くイライラしてるけど、疲れてるの?」

モルガナ

「ね、猫じゃねーし!! イラついてもねーし!!」

ジヨゼ

「あ、分かった! お腹空いてるね?」

ジヨゼはそう言うと、ポケットからクッキーを取り出しモルガナに渡した。

ジヨゼ

「よかったら、どうぞ。」

モルガナ

「気持ちだけ貰つとく……………」

竜司

「扱い使われてんじゃねーか……………完敗だな。」

竜司のこの一言が効いたのか、モルガナは崩れるように床に手をついた。それから少しして、ジョゼはバギーに乗ってメメントスの奥へと去っていった。

グッドストライカー

「何だったんだ、アイツ……………」

天馬

「人間を勉強してるって言ってたから、人間じゃないのかな？」

モルガナ

「まあでも、アイツからシャドウの気配はしなかった。少なくとも今は、危険は無さそう  
だ。」

竜司

「さつき言ってた、花？今度それ見つけたら、拾つとこうぜ？」



↳ 渋谷駅 駅前広場  
↳

夕方、一行はメメントスから渋谷駅前広場に戻ってきた。

竜司

「よく分かんねえ場所だったな、メメントス………んで、最後のあの壁は何だったんだ？」

モルガナ

「詳しくは分からんが、アレのせいで一定より深く入れなかったんだ。だが、大衆が我輩らを信じたり受け入れたりすれば、影響はある。」

杏

「ねえ、何でモルガナはあんな場所の事、色々詳しいの？」

モルガナ

「どうも記憶がはつきりしないんだが、メメントスの億がどうなってるのか、どうしても

知りたいんだ。」

蓮

「どうしても?」

モルガナ

「メメントスはみんなのパレスだが、同時に全てのパレスの源でもある。昔は鴨志田の城みたいなの、1人が支配するパレスなんて無かった。だから歪みの大元であるメメントスを何とか出来れば、我輩のこの姿だって……………!」

志帆

「そっか、モルガナも助けて欲しかったんだね……………」

竜司

「そうか、だから俺らにちよっかい出したり、グツデイと一緒にだったんだな。」

杏

「私、協力してあげるよ。亡くした物、取り戻せるといいね……………」

モルガナ

「うむ……………よろしく、頼む……………」

縮こまるモルガナであった。

グッドストライカー

「そう言えばずっと気になってたんだけどさ、モルガナって男なのか？女なのか？」

天馬

「車だったりして？」

モルガナ

「んな訳あるか!!というか、男に決まってるだろ!?!……………とにかく、小者の改心はメメントスで出来る事が分かった。目につく情報があれば、実践練習ついでに退治するのもしりだな。」

杏

「今回は特に目ぼしいのは居なかったね……………」

竜司

「大物改心させて怪盗団の名前を売れば、山ほど書き込まれんだろうさ？」

天馬

「でも、先ずは目の前の問題を片付けなきゃ。来週は中間テストだから……………」

竜司

「そうだった、勉強しねえと……………」

「やりたくねえ」と言いたいかの様に、肩を落とす竜司。だが、彼らを遠くから見ると一人の人影が居たことに、怪盗団一行は全く気付かなかった。



◇ 地下鉄銀坐線 渋谷駅◇

それからは流れ、5月14日 土曜日の朝。

天馬・蓮・竜司・志帆・モルガナ・グッドストライカーは渋谷駅で電車を待っていた。が、天馬と竜司はとてもし眠そうだ。

天馬

「ふあああ………」

志帆

「眠そうだね？徹夜でもしたの？」

天馬

「うん、今日は苦手科目のテストだから、昨日の夜蓮に予習手伝ってもらって、その後は気付けば朝まで自主勉……眠い……。」

竜司

「俺も……今日でテスト終わりって思ったらつい……張り切って徹夜でやつちまった……。」

モルガナ

「竜司が勉強？ 槍でも降るんじゃないか？」

蓮

「いや、恐らくテストは諦めてゲームに精進してたつてヲチじゃないのか？」

竜司

「ああ……今に始まった事じゃねえからな。赤が幾つ付こうが、今さら変わんねえよ……。」

グッドストライカー

「開き直りやがった……。」

するとそこへ、これまた眠そうな杏が合流。



杏

「ふああ、おはよう……………」

竜司

「よう、朝っぱらから大口開けてんな。」

杏

「やっと試験終わりだし、最後まで頑張りよう……………っ!？」

突然、杏が何やら後ろをキョロキョロし始めた。

志帆

「どうしたの?」

グッドストライカー

「ひょっとして痴漢でも居たのか? こういう朝の通勤ラッシュってのは多いらしいからな。」

杏

「……………何でもない、気のせいだったみたい。」

杏の不安は消えないまま、一行は銀座線に乗り込んだ。だが蒼山一丁目下車して直ぐ、エスカレーターで杏が後方に嫌な気配を感じた。

杏

「嘘!! アイツ降りてきた!」

志帆

「えっ?」

天馬

「……………蓮、竜司、ちよつといいかな?」

蓮・竜司

「ん?」

天馬は蓮達に何かを伝え、一行はエスカレーターを登りきる。

—————

く蒼山一丁目駅 出入口付近く

駅の出入口付近には、何故か杏だけが取り残されていた。一人の人影が階段を上り外に出ると、杏の背後に静かに近づき手を伸ばす。

杏

「ッ!!」

スタツ

だが杏が振り向いたと同時に、天馬が上から飛び下りて目の前に着地。両サイドから蓮・竜司・志帆が現れ行く手を塞いだ。人影の正体は、青みがかつた黒髪をした、蓮達と同じ年くらい的美少年だった。黒いズボンと左胸に黒百合が描かれたYシャツと、秀尽とは違う学生服を着ていた。

美少年

「ん?」

美少年は不思議そうに首を傾げ、天馬達も「まさかこの人が痴漢？」と言った顔で美少年を見ていた。

美少年

「君たち、何なんだ？」

杏

「何なんだって、それはこっちの台詞よ！電車の中からずっと後付けてたでしょ？」

美少年

「それは……………」

「おい《祐介》！」

すると、階段の奥から別の少年の声が聞こえてきた。少年は階段を駆け上がり、一行の前に姿を見せる。紺色のブレザーにウエーブがかかった灰色の髪。

天馬

「神童さん!？」

天馬は少年を見て思わず叫んだ。現れたのは天馬の雷門中時代のチームメイト、《神のタクト》の異名を持つ天才ゲームメーカー、神童拓人だった。

神童

「天馬!？」

神童も突然の天馬との再開に仰天。すると今度は近くの路肩に、1台の黒いセダンが停車。後部座席の窓が下り、1人の老人が姿を見せた。

老人

「やれやれ、いきなり車を降りたと思えば……………呆れる程の情熱だな、《祐介》。結構結構、ハハハハハッ!」

祐介

「車から見かけて、追いかけずには居られなかった……………先生の着信にも、拓人の呼び声にも気付かないほど、けど良かった。」

キリツ

祐介と言う美少年は突然、杏に鋭い眼差しを向ける。その瞳には何やら、物凄いオーラが宿っていた。

祐介

「君こそ、ずっと探していた女性だ！是非俺の……俺の絵のモデルになってくれ！」

杏・志帆

「モデル？」

祐介

「俺は今まで、納得のいくものが描けなかった……君から他の人にはないパッションを感じる。是非、協力してくれないだろうか!？」

竜司

「待てっ！そもそも、お前ら誰よ？」

竜司が割って入り、祐介は落ち着きを取り戻した。

祐介

「ああ、失礼……………俺は《都立洗星高校》美術科2年、《喜多川 祐介》だ。」

神童

「同じく音楽科2年、神童 拓人だ。」

竜司

「神童 拓人……………もしかして、天才ゲームメーカーの!？」

妙に興奮する竜司と、何やらキョトンとする蓮と杏。

杏

「もしかして有名人？」

竜司

「知らないのかよ!?! 神童 拓人は元雷門中サッカー部のキャプテン! 別名、神のタク  
トって異名を持つ超天才ゲームメーカーなんだよ!」

蓮

「雷門中サッカー部と言うことは、天馬のチームメイトか?」

神童

「ああ、3年前に天馬がサッカー部に入部した時からの付き合いだ。進学してからはらく連絡出来てなかったが、まさかこんなところで再会するとは。」

天馬

「俺もまさか、こんなところで会えるなんて思いませんでしたよ……喜多川さんとはお知り合いなんですか？」

神童

「祐介とは以前、学校で彼の描いた絵を見て知り合ったんだ。」

祐介

「俺は斑目先生の門下生で、画家を目指すため先生のアトリエに住み込みさせてもらってるんだ。」

杏

「斑目って、あの？この間の『情熱帝国』に出てた!？」

斑目という名を聞いて、何やら驚きを隠せない杏。

天馬



「斑目って？」

志帆

「有名な日本画家だよ。世界で評価される日本画家なんだって。」

と、一行はセダンに乗る老人に目を向ける。どうやらあの老人が例の斑目らしい。

蓮

(そう言えば、前にメメントスで……………)

祐介

「そうだ！明日から駅前のデパートで、斑目先生の個展が開かれる。初日は俺も手伝いに行くんだ。是非来てくれ！」

何処から用意してたのか、祐介はポケットからチケットを5枚取り出し、杏に渡した。そして「明日会場で！」と言い残すと、斑目の車に乗り込みその場を去った。

竜司

「わっかかりやすいヤツ……………」

モルガナ

(杏殿を狙うとは……喜多川 祐介、その顔覚えたからな！)

## Act. 15／無限の泉

↳渋谷駅 改札前↳

中間テストが終わり放課後、天馬達は学校を離れ渋谷駅の銀座線改札前に集まっていた。杏はようやく緊張が解れたのか背伸びをし、竜司は言わずとも分かるくらいの酷い顔をしている。

竜司

「終わった……お前らどうだった？」

蓮

「手応えはあったな。」

天馬

「俺も少しは……それより。」

天馬はスマホを手に取り、怪盗お願いチャンネルを開いた。

グッドストライカー

「随分と書き込み減ったな……………このままじゃ俺達一発屋で終わっちゃうぜ？」

杏

「ジタバタしてもしょうがないよ。取り敢えずテストも済んだし何処か行かない？今朝貰った斑目展のチケットも……………つて、コレ明日だった。」

モルガナ

「まさか、あの祐介に一目惚れ……………」

杏

「そんなんじゃないって……………テレビの特集見てたとき結構良い絵だったし、せっかくチケットあるならつて思っただけ。それにもしかしたら、前にメントスで聞いたのと関係あるかもだし。」

蓮

「確かアイツも、マダラメと言っていたな。確かに気にはなる。」

杏

「チケットも丁度人数分あるし、たまにはみんなで芸術鑑賞してみる？」

モルガナ

「賛成だ、芸術鑑賞は人間の魅力や品性を高める。美術品の真贋を間違う怪盗なんて、ダメらしいな。」

天馬

「俺は行くよ。何だか面白そうだし。」

志帆

「天馬君が行くなら、私も一緒にいいかな？」

竜司

「まあ、みんなでなら俺も………」

蓮

「決まりだな。」



く斑目展 展示会場く

次の日、5月15日 日曜日。

一行は渋谷駅前デパートで開かれている斑目の個展に来ていた。会場内は斑目の作

品を見るため集まった客で溢れかえっていた。

モルガナ

「混んでんな……………」

竜司

「モルガナは一緒に居るのバレたら面倒だからな、あんま出てくるなよ?」

モルガナは了解し、蓮の鞆の中に身を隠す。すると丁度そこに祐介が現れた。祐介は杏を見るなり喜びの笑みを浮かべる。

祐介

「来てくれたんだね!」

杏

「えっ? まあ、うん……………」

少々動揺する杏。祐介は天馬達にも気付き、天馬達に目を向けた。

祐介

「おや、君達も来たのか？」

竜司

「いやテメーが人数分の券置いて行ったんだろーが……………」

祐介

「まあ理由はともかく、他のお客様の御迷惑にならないようにな。」

蓮

「善処する。」

祐介は杏に個展を案内するため、杏と2人でその場を後にした。

モルガナ

『杏殿、大丈夫なのか!? 大きな絵の裏で、ゴニヨゴニヨなんてこと……………』

志帆

「大丈夫だよ。杏、とっても強いから。」

天馬

「それってどういう……………」

竜司

「ところで、マジで芸術鑑賞する？ 帰るって手もアリじゃね？」

天馬

「うーん……………俺は普通に鑑賞したいかな？」

蓮

「俺もだ。マダラメの事を知りたい。」

竜司

「ふう……………いっぺんだけザツと見て回るか。」

天馬達4人は各々、天馬・志帆ペアと蓮・竜司ペアに別れ、斑目の個展を見て回った。そして数十分後、天馬と志帆が個展内を歩いていると……………

神童

「天馬？」

天馬

「神童さん！」



偶然、2人は神童と再会した。

天馬

「神童さんも個展見に来たんですか？」

神童

「ああ、祐介からチケットを貰ってな。それより天馬、少し話があるんだが良いか？」

天馬

「はい？」



↳ 渋谷駅 連絡通路↳

それからしばらくして、人気の無い渋谷駅ビルの連絡通路には蓮と竜司が居た。が、竜司はどうやら個展の人混みでダメージを負ったようだ。

竜司

「オバチャンの肘がモロ……………」

モルガナ

「ゼエ……………ゼエ……………やっと外に出れる……………鞆の中でペシャンコになるかと思っただぜ……………」

モルガナもようやく解放されグツタリしていた。

竜司

「でも、おかげで思い出したぜ。」

蓮

「何を?」

竜司はスマホを手に取り、怪盗お願いチャンネルを開き掲示板の書き込みを見る。すると……………

天馬

「あ、ここに居たんだ。」

杏

「ちよつと、何で先帰んの!？」

祐介から解放されたのか杏が合流。同時に天馬・志帆・神童も合流した。

竜司

「ちげえよ、俺ら巻き込まれて………つて、アンタ神童 拓人？何で天馬と一緒になんだ？」

神童

「俺も個展を見に来ていたんだ。それよりも、君達に話がある。」

蓮

「話?！」

神童

「最近秀尽で噂になってる怪盗団の事だ。単刀直入に聞くが………天馬を含め、君達が例の怪盗団で間違い無いんだな？」

神童の発言に、蓮達は驚愕した。

蓮

「天馬、まさか俺達の事を彼に？」

天馬

「ごめん……でも、安心して！神童さんは俺が一番信頼してる人だし、俺達の事は秘密にするって約束してくれたから。」

神童

「すまない……実は、怪盗団に依頼したい事があるんだ。」

杏

「怪盗団に？」

神童

「斑目先生の噂について調べてほしい。」

神童の依頼内容に、一行は驚いた。

神童

「祐介の師匠、《斑目 一流斎》先生。表向きは世界的に有名な日本画家だが、実は裏で

盗作や弟子への虐待をしているという噂があるんだ。」

竜司

「盗作に虐待……それってコレの事か？」

竜司は怪盗お願いチャンネルの掲示板のとある書き込みを見せた。

竜司

『日本画の大家が弟子の作品を盗作している。テレビは表の顔しか報じていない。アトリエのあばら家に住み込みさせている弟子への扱いは酷く、こき使うだけで絵など教えてもらえない。それどころか人を人とも思わない仕打ちは、飼犬をしつけるかの様だ。』

志帆

「弟子の作品を盗作!？」

竜司

「俺も最初は何とも思わなかったんだが、さつき斑目の爺さんが取材受けてる時に『あばら家』って言ってたんだ。それでピンと来た。」

神童

「祐介は幼い頃に両親を2人とも亡くし、それから身寄りの無い自分を斑目先生に拾われ、今日まで親代わりとして育てられたそう。今斑目先生の弟子は祐介1人だけ。もし噂が本当なら、祐介も……祐介は俺の大事な友達なんだ、だから頼む。」

天馬

「神童さん……」

竜司

「……どうする、リーダー？」

蓮

「天馬の戦友の頼みだ、引き受けよう。時間は掛かるが、必ず真実を突き止めてみせよう。」

神童

「……感謝する、怪盗団。」



くセントラル街 ファミレスく

一行はその後神童と別れ、セントラル街のファミレスに場所を移した。

蓮

「意外な収穫だったな。」

竜司

「ああ、マジなら大スキヤンダルだぜ？」

杏

「この掲示板の書き込み、もしかして喜多川君が書き込んだのかな？だって弟子なんですよ？」

竜司

「さあ、匿名の書き込みだから………」

天馬

「となると、前にメモメントスで聞いた『マダラメ』と同一人物って可能性もあるって事だよね？」

グッドストライカー

「怪しいな、偶然にしちゃ出来すぎだ。」

志帆

「斑目先生が盗作に虐待、ホントなのかな……?」

竜司

「そーいや杏、モデルの話はどうなってんだ?」

杏

「喜多川君から連絡先と、斑目先生のアトリエの住所教えてもらった。」

竜司

「……:そう言えば住み込みって言ってたな、丁度良い。明日の放課後、斑目の家に行こうぜ!」

杏

「えっ?モデル……:明日!」

竜司

「ちやうちやう、喜多川に話を訊きに行くんだよ。」



〈都内某所 斑目宅前〉



翌日、5月16日 月曜日の放課後。

一行は渋谷駅近くの住宅街にある、斑目の家にやって来たが……

竜司

「もしかして、アレ？」

杏

「住所も合ってるけど……」

現れたのは辺りの真新しい住宅の中でポツンと建つ、トタン張りのレトロな古民家だった。

天馬

「確かに、あばら家って言うだけの事はあるね……」

グッドストライカー

「ちゅーかメチャレトロだな。此処だけザ・昭和って感じがするぜ。」

志帆

「表札も斑目になってる。此処で間違い無いみたい。」

杏

「取り敢えずチャイム押してみるけど……壁倒れたりしないよね？」

蓮

「タライが落ちてくるかもな？」

一行は玄関の前に集まり、杏が慎重にインターホンを押した。押して数秒後、スピーカーから聞き覚えのある少年の声が聞こえてきた。

祐介

『どちら様でしょうか？先生なら今は……』

杏

「こんにちはは、高巻ですけど？」

祐介

『高巻さん!?!直ぐ行くよ!』

スピーカーから音が消えると、家の中からドタドタと走るような音がする。

ガラガラガラ………ピシャン!

そして玄関の引き戸が勢い良く開き、祐介が姿を見せた。

祐介

「高卷さん!」

ベコン!

天馬

「ホゲっ!」

だが引き戸が開いた衝撃で、ひさしのトタン板が滑り落ち天馬に直撃。天馬はうつ伏せでトタン板の下敷きになった。

志帆

「天馬君!」

祐介

「すまない！怪我は無いか？」

祐介が慌ててトタン板を退け、天馬は頭を手でさすりながら立ち上がった。

天馬

「イテテテテ、びつくりしたあ……………」

祐介

「高巻さんだけかと思ったが、君達も来てたのか？」

竜司

「悪いけど、モデルの話じゃねえんだ。訊きてえ事があつてよ……………斑目が盗作して  
るってマジ？あと虐待もなんだろう？」

何の躊躇いも無く質問する竜司。祐介は竜司に対し鋭い目を向ける。

祐介

「正気か？」

竜司

「ネットに出てたんだ。ホレ。」

竜司は例の掲示板の書き込みを祐介に見せる。

祐介

「これか……：……はあ、下らない。盗作もあり得ないが、虐待するほど子供が嫌いななら、住み込みの弟子なんて取らないだろう？それに今は住み込みの門下生は俺一人。俺が無いと言うんだから、疑う余地は無い筈だ。」

竜司

「お、お前が嘘ついてつかも知んねえだろ!？」

祐介

「身寄りの無い俺を引き取って、此処まで育ててくれたのは先生だ！恩人をこれ以上愚弄する気なら、許さんぞ！」

ヒートアップする竜司と祐介。すると、家の奥から斑目本人が姿を見せた。

斑目

「どうしたんだ祐介？ 大声を出して。」

祐介

「先生！ 実は、コイツらが根も葉もない先生の噂を……………」

祐介がそう言うと、斑目は杏と蓮達に目を向ける。そして静かに目を閉じた。

斑目

「許してやりなさい。彼らは私の噂を耳にして、彼女のことを心配して来たんだろう。まあ、この偏屈な年寄りが万人に好かれているとは、自分でも思わんさ。」

斑目は目を開き、蓮達に目を向ける。

斑目

「横からでしゃばってすまない。けど、御近所の手前もある。程々に頼めるかね？」

竜司

「は、はい……………」

斑目

「うむ、では失礼……………」

斑目は静かに家の奥に消えた。

祐介

「すまん、非礼だったな……………」

祐介は頭を下げ、杏達に謝罪した。

祐介

「そうだ、この絵を見てくれないか？先生の処女作であり代表作、『サユリ』だ。」

杏

「サユリ？」

祐介はスマホを取り出し、一枚の画像を見せた。紅い衣に身を包み、優しい笑みを浮かべる、黒髪の美しい女性の絵だ。

天馬

「凄い……………」

志帆

「綺麗……………」

竜司

「芸術はよく分かんねえけど、この絵が凄いつてのは分かる……………」

蓮

「ああ、素晴らしい絵だ……………」

サユリの素晴らしさに感動する一行。

祐介

「この絵は、俺が画家を志すきっかけをくれた絵なんだ。高卷さんを初めて見たとき、この絵を見たのと同じ感動があった。俺は、こんな『美』を追求したい……………」

祐介はスマホを仕舞い、杏に頭を下げた。





竜司

「くそう、せつかく大物見つけたと思ったのによお……………」

蓮

「……………仕方ない、イセカイナビに試しに入力してみよう。」

蓮はスマホを取り出す。すると、イセカイナビは既に起動済み。ナビには既に『斑目』と『あばら家』と『盗作』、3つのキーワードが入力されていた。

志帆

「これって……………さっきの会話を拾ってたって事？」

グッドストライカー

「しかもこれ、斑目にもパレスがあるってことじゃねーのか？」

モルガナ

「斑目と盗作にあばら家、コイツがキーワードみたいだ。」

竜司

「ホントに、あんな爺さんにもパレスがあんのか……………!？」

志帆

「え〜つと………確かパレスに入るには名前と場所と、もう一つキーワードが要るんだよね？」

モルガナ

「ああ、既に斑目とあばら家は確定済み。後は斑目が、あばら家を『何』と勘違いしてるかだ。」

蓮

「適当に何か入れてみよう。取り敢えず、鴨志田の時みたたく『城』でどうだ？」

杏

「虐待してるなら、『牢獄』とか？」

竜司

「つたく面倒くせえ！『刑務所』！『倉庫』！『教育指導室』！ついでに『牧場』！」

とにかく片っ端からキーワードを入れていくが、どれも該当しない様だ。

グッドストライカー

「かすりもしねえな………」

天馬

「画家に關係する建物なら……『美術館』とか？」

ピロン！

イセカイナビ

『ナビゲーションを開始します。』

ブォーン……………

天馬が美術館と言った途端、イセカイナビが起動。辺りの空間が歪み、一行は気付けば怪盗服姿に変身していた。

杏

「ちよ、これって……………!?!」

モルガナ

「おい、いつの間に開始したんだ!?!びっくりしたぞ!」

天馬

「もしかして……さっき俺が言った美術館が、最後のキーワードだったってこと？」

一行はあばら家があった方を見る。そこには先程までのあばら家とは打って変わって、黄金色に輝く巨大建造物の姿があった。

竜司

「《斑目大画伯美術館》って……マジ？」

蓮

「行ってみよう。」

一行は公園を離れ美術館に向かう。建物は悪趣味な黄金作り。入り口にはお客とおぼしき長蛇の列が出来ていた。

グッドストライカー

「なんつー悪趣味な建物だ……ホントに美術館か此処？」

モルガナ

「パレスは欲に駆られた妄想の景色だ。鴨志田のパレスで、学校が『城』だった様にな。」

志帆

「つまり斑目先生は、あばら家を美術館だつて思い込んでるつて事？」

杏

「でも、斑目先生の絵つて現実の美術館でも沢山飾られてるよ？ 個展も大人気だったし尊敬もされてるし、そんな人が態々美術館を妄想するかな？」

竜司

「言われてみりや、盗作や虐待とも関係ねえよな？」

天馬

「取り敢えず中を調べてみよう。」

一行は正面入り口を避け、駐車場に止めてある自動車と塀を足掛かりにし、美術館の庭園に侵入。庭園のオブジェの上を次々と跳び移り、建物の屋上へたどり着いた。

天馬

「ジョーカー、此処から中に入れそうだよ？」

天馬は屋根上の天窓が開いている場所を見つけた。天窓から館内を見ると、中は灯り

もなく真つ暗。床も天窓より遥か下にあつた。

杏

「けっこう高いね。どうやって下りる？」

天馬

「俺に任せて。」

天馬はそう言うと、右手にクリアグリーンに輝く光の縄手錠を持ち、手錠の片方を屋上のパイプに固定。もう片方を天窓から美術館の中に落とす。

天馬

「OK、これで入れるよ。」

蓮

「よし、行こう。」

一行はロープを伝い美術館内部に侵入。

パチツ

グッドストライカーが証明のスイッチをONにし、館内に灯りが灯った。着いたのは展示室だろうか、室内には大小様々な人物画が幾つも飾られていた。

志帆

「これって人物画かな？何だか動いてるみたいだけど……」

天馬

「ねえ、この絵タイトルが書いてないよ？」

天馬は絵の近くにあるプレートを指差す。プレートには何故か、人の名前と年齢が書かれていた。

蓮

「絵の作者の名前か？」

モルガナ

「うむ……他の絵も調べてみるか。」



竜司

「つか、今考えれば美術館に怪盗ってド定番じゃね？」

蓮

「だが畏も定番だ。落とし穴や赤外線センサー等色々な。」

一行は慎重に展示室の奥へと進む。だが右を見ても左を見ても、何故か人物画しか飾られていない。しかも外に長蛇の列が出来ていた割に、恐ろしく静かだった。

杏

「ねえ、やっぱり変だよ。斑目先生は作風が多彩なことで有名なのに、此処に飾ってあるのは何れも、同じような人物画ばかり……………」

天馬

「個展の時とはまるで違うね……………ん？」

天馬は人物画の中から気になる絵を見つけた。それは何処か見覚えのある男性の絵。近くのプレートには、「中野原 夏彦」と書いてあった。

天馬

「これ、前にメモントスに居た中野原さんじゃないかな？プレートにも名前が書いてある。」

志帆

「もしかして、知ってる人？」

天馬

「うん、俺達がメモントスで最初に改心させた人。そして、俺達にマダラメを改心させて欲しいってメッセージを残してくれたんだ……………」

竜司

「このプレートは、書かれてる奴の名前だったのか……………でも、何でアイツの絵が此処にある……………って、アレは？」

竜司は展示室の奥の巨大人物画を指差す。そこに飾られていたのは、祐介そっくりの少年の人物画。プレートには「喜多川 祐介」と書かれていた。

竜司

「この絵、アイツのじゃねえの？」

モルガナ

「喜多川 祐介ってプレートにも書かれてる……間違い無いだろう。」

杏

「ちよつと待つて！じゃあ、此処にある絵は全部……」

蓮

「斑目の弟子……いや、弟子だった者達だろう。最後の一人、喜多川を除いて。」

天馬

「じゃあ中野原さんも、斑目先生の弟子だったって事？」

モルガナ

「……もう少し奥を調べるぞ、確信が欲しい。」

く 美術館 玄関ホールく

怪盗団一行は展示室を抜け、玄関ホールに到着した。玄関ホールの壁面は黄金に輝き、黒で松や鳳凰が描かれ、天井からこれまた金の垂れ幕が下りていた。

グッドストライカー

「内装まで金ピカだぜ、目がチカチカしやがる……………」

玄関ホールの中央には、何やら巨大なオブジェが展示されていた。まるで金色の巨大な渦に、人が飲み込まれている様な不思議なオブジェだ。

天馬

「何これ……………《無限の泉》？」

志帆

「泉って言うより、人が渦に吸い込まれてる様な……………」

天馬は無限の泉なるオブジェの近くにある、プレートの説明文を読み始める。

天馬

「『彼らは、斑目館長様が私費を投じて作り上げた作品群である。彼らは自身のあらゆる着想とイマジネーションを生涯、館長様に捧げ続けなければならない。それが叶わぬ者

に、生きる価値無し。』だって!？」

説明文の内容を聞いて、一行は驚愕した。

杏

「ねえこれ、もしかして盗作の事!？」

モルガナ

「弟子は俺のモノって事か……これがホントなら、奴はまともな絵描きですらないぜ。」

蓮

「弟子の生活を保証する変わりに、弟子の着想を盗んでいるんだ。沢山飾ってあった人物画は、斑目の『認知上の弟子』という事だろう。」

志帆

「最後の生きる価値無しって、もしかして虐待の事?」

グッドストライカー

「恐らくな。斑目様の役に立つうちは置いてやるが、ダメになったら……」

竜司

「クソ！トンだ食わせジジイだあの野郎！つか、何で祐介は黙ってんだ!? いくら恩人だからって言っても、かばう理由ねえだろ!？」

杏

「……………個展の時、飾ってあつた絵を私が褒めたんだけど、喜多川君……………何だか様子が変だつた。」

~~~~~

く 斑目展 展示会場く

それは先日、杏が祐介の案内で個展を巡っていた時の事。

杏

「日本画って、こんなに種類があるんだね……………」

祐介

「普通はもつと作風は絞られる。でも、先生は全てを1人で創作してる。先生は特別なんだ。」

すると、杏はとある一枚の絵に目を向けた。杏は絵の目の前に移動し、祐介も後に続いた。

杏

「あ、コレだ！生で見たかった絵！描いた人の怒りって言うのかな？分かんないけど……熱い苛立ちを感じるの。あんな気さくで紳士的な人なのに、こんな絵が……」

斑目の絵を褒める杏だったが、祐介は何故か険しい表情を浮かべ、絵から目を反らし
ていた。

杏

「どうしたの？」

祐介

「えっ？いや、何でもない……」

~~~~~

杏

「もしかしたら、個展に飾ってあったあの絵も盗作だったんじゃない?……」

竜司

「どうするよ?これもう斑目がターゲットでいいだろ!？」

モルガナ

「待て、先ずは祐介に事実確認をするべきだ。実際に悪事があつたかどうか、ウラ取つておいた方がいい。」

蓮

「確かにな。それに俺達全員、斑目について知らなさ過ぎる。奴について、もう少し調べべきだ。」

杏

「なら私、喜多川君に連絡してみる。モデルの話受ければ、真相聞けるかも知れないし……」

志帆

「パンサー、本気でモデルやるの?」

杏



「いやでも、みんなも来てよね？一人じゃ恐いから……」

竜司

「にしても、偉い画家の先生か……鴨志田より手強いかも知れねえ。」

蓮

「取り敢えず、祐介からウラを取れるまでは準備だ。怪盗団としての初陣、絶対に成功させるぞー！」

## Act. 16 / アトリエの黒い過去

く秀尽学園 中庭 休憩スペース

斑目のパレスを発見した翌日、5月17日 火曜日の放課後。  
怪盗団一行は中庭の休憩スペースに集まっていた。

杏

「喜多川君から返事来たよ。今日の放課後、先生の家に来て欲しいって。」

竜司

「そりゃ願ったりだ！アイツ、最速で予定に入れやがったな？」

モルガナ

「……………静かに、例の生徒会長が居るぞ。」

モルガナの目線の先には、真に質問される三島の姿があった。

志帆

「今日は三島君が捕まってる……………」

蓮

「見つかるかと面倒だ。バラバラに下校して、渋谷駅で集まろう。」

一行は蓮の考えに賛成し、時間差でバラバラに下校し学校を離れた。

—————

↳ 渋谷駅 連絡通路↳

渋谷駅に場所を移した怪盗団だが、何故かその場に杏の姿は無かった。

竜司

「遅えな、杏のヤツ……………」

と、そこへ慌てた様子で杏が合流した。

杏

「ごめん！考え事してたら、いつの間にか時間過ぎちゃってて……」

天馬

「考え事？」

杏

「うん……喜多川君ってさ、明らかに斑目のこと庇ってるよね？だって一緒に住んでるなら、斑目の本性を知ってても可笑しくないのに……」

竜司

「それをこれから調べに行くんだろ？大丈夫なのか、モデル？」

志帆

「大丈夫だよ。だって杏、ファッション雑誌のモデルやってるし。」

天馬

「えっ？そうなの？」

杏

「あれ、言っただけだったっけ？」



くあばら家 祐介自室く

斑目のあばら家に到着した一行は、祐介の自室に招待された。部屋の中には鉛筆や筆、絵の具にパレット、キャンバスにスケッチ台と、絵を書くための様々な道具が置いてあった。

祐介

「高卷さんだけだと思ってたんだがな……………」

竜司

「監視だよ。お前が変なことしねえように。」

祐介

「妙な勘繰りは止めてくれ……………彼女に異性としての興味は一切無い。」

杏

「えっ!?!」

祐介

「何か問題でも？」

杏

「ううん、別に……………」

異性としての興味が無いと言われ、杏は少しショックを受ける。杏は部屋の真ん中に置かれた椅子に腰掛け、祐介はその前にスケッチ台とキャンバスを設置した。

祐介

「じゃあ、始めよう……………」

そして鉛筆を手に持ち、キャンバスに絵を書き始める。

杏

「ねえ、喜多川君？」

祐介

「……………」

途中、杏が何度か祐介に声を掛けるが、祐介は全く動じること無く、一心不乱に絵を書き続ける。

志帆

「ダメだね……………」

竜司

「こりゃ終わるまで待つしかねえな……………」

天馬

「ボソツ……………グツデイ、ちよつと部屋の外を見てきて。」

蓮

「ボソツ……………モルガナも頼む。」

天馬と蓮はモルガナとグッドストライカーを鞆から静かに出し、二人は静かに部屋の外へ偵察に向かった。そして、作業を開始して1時間……………

祐介

「はあ……………」

突然、祐介の手が止まった。

祐介

「ダメだ、こうじゃない……………」

祐介が溢した言葉に首を傾げる一行。一行は立ち上がり、キャンバスを見る。キャンバスには鉛筆で描いたラフな絵ではあったが、とてもラフとは思えない程素晴らしい杏の絵が描かれていた。

天馬・志帆

「凄い……………」

蓮・竜司・杏

「……………」

祐介の画家としての技術力の高さを実感し、五人は言葉を失った。



祐介

「今日は調子があまり良くない様だ……すまないが、日を改めさせてくれ……」

杏

「えっ、これで調子良くないの？ って、違う違う……」

竜司

「悪い、俺達今日は話があつて来たんだ。お前んとこの先生の噂。」

竜司が思いきつて話を切り出すと、祐介は鋭い眼を向ける。

祐介

「またその話か？」

杏

「ねえ喜多川君、前に私が個展で褒めた絵……あの絵って、本当は喜多川君が描いたんだよね？」

祐介

「そ、それは……」

祐介は僅かに動揺し、杏から目線を反らした。

杏

「やっぱり……………」

竜司

「お前の先生、マジでヤバいぜ？弟子をタダの『物』だと思つてやがる。虐待だろうが盗作だろうが御構い無しつて訳だ。」

天馬

「喜多川さん、お願いです。話してくれませんか？」

祐介

「……………君たちの言う通り、俺達は先生の『作品』だ。」

祐介の放つた言葉に、一行は驚いた。

祐介

「だが勘違いしないでくれ。俺は、自分から着想を譲つたんだ。これは盗作とは言わない。先生は今、スランプなんだ……………」

蓮

「どういう事だ？」

蓮が祐介に問うが、祐介は何故か黙り込んだ。

竜司

「出てけば良いだろ!? 弟子にもみんな逃げられて、それでお前一人つて事じゃねーのかよ!？」

祐介

「弟子が師匠を助けて何が悪い!? 被害者など何処にも居ない! 俺は弟子として先生を支えているだけだ! これ以上身勝手な正義を押し付けるなら、通報させてもらおうぞ!」

天馬

「ちよつと、二人とも落ち着いて!」

杏

「そうだよ! 喜多川君、少し落ち着こ?」

ヒートアップする竜司と祐介。天馬と杏が慌てて二人の間に入り、二人を落ち着かせ

た。

祐介

「すまない、俺としたことが……通報は止めておこう。ただし条件として、高卷さんにモデルを続けて欲しい。」

杏

「えっ？でもさつき、こうじゃないって……」

祐介

「あれは、俺が無意識に君に遠慮してしまっていたんだ……けどもう心配しなくていい。君が全てをさらけ出してくれるなら……俺も全身全霊を込めて、最高の裸婦画に仕上げてみせる！」

杏・志帆

「ら、裸婦う!?!」

祐介の話を聞いて、杏を始め一行は仰天した。が、天馬は何故かちんぷんかんぷんの様だ。

天馬

「ラフ画って、さつき書いてなかった？」

竜司

「バカ、ちげーよ！『裸』の『婦』って書いて『裸婦』！つまり、杏のヌード絵を描くって事だ！」

天馬

「えええっ!？」

竜司から説明を受けようやく意味を理解し、天馬は仰天した。

祐介

「もちろん君達は入れないし、今回の話は忘れてもらう。そろそろ先生に新作を提出しないと……色々不都合がな……」

竜司

「いや待て待て！いくら何でも流石に不味いだろ!？」

祐介

「大丈夫だ。個展の会期中なら昼は先生も不在が多いから、此処を好きに使える。もち

ろん、高卷さんのプライベートも考慮する。個展が終わる頃までには来てくれ。」  
杏

「ち、違う！そういう問題じゃ……………」

ゴーン！ゴーン！

突然、何処かからか古時計の鐘の音が響いた。

祐介

「おっと、悪いが今日は此処までだ。高卷さん、何時でも連絡を待ってるよ。」

杏

「ダメダメ待つて！話終わってないから！」

蓮

「仕方無い、此処は一旦出直そう……………」



くあばら家付近 公園く

一行はあばら家を離れ、真向かいの公園でモルガナとグッドストライカーと合流。作戦会議を兼ねて部屋の中での経緯を二人に話した。

モルガナ・グッドストライカー

「何だつて!？」

案の定、二人は仰天した。

蓮

「ああ、まさか喜多川があんな提案をするとは思わなかった……………」

竜司

「全くだ、今回は向こうが一枚上手だったぜ……………」

杏

「簡単に納得すんな!このままじゃ私、ヌード確定だよ!？」

志帆

「あの感じだと、きつと『セミ』じゃなくて『フル』だね……………」

天馬

「その話は一旦置いて……………今回の場合は個展が終わるまでに、斑目先生を改心させれば良いって事だよな？」

杏

「でもさ、喜多川君は先生を恩人って思ってる。改心させる必要、あるのかな？」

竜司

「何でだよ？斑目は親の居ない祐介を利用してやがんだぜ？他の弟子達と同じヒデエ目に遭わされんのに、見過ごせてのか!？」

杏

「でも、本人にそれで良いとか言われたままだと、何か悔しいって言うか……………」

天馬

「だったら尚更、斑目は改心させるべきだよ！斑目を改心させて、喜多川さんの目を覚まさせよう！俺達と同じになる前に！」

志帆

「うん……………私も、それがベストだと思う。」

モルガナ



「なら先ず、斑目について調べる必要があるな。まだ表沙汰になつていないヤツの裏の顔がある筈だ。それに個展で忙しいとなると、その分パレスの中も調べやすくなつてるだろう。」

杏

「あと、私のモデルの事も！『新作を出さないと不都合が』って、喜多川君言つてた。もしかしたら、斑目の作品つてことで近々何か発表があるのかも……………」

天馬

「もしかして喜多川さん、その時に杏のヌード絵を出す気じゃ……………ないよね？」

天馬の推測に一行はゾツとした。

グッドストライカー

「こりや一刻も早く、斑目を何とかしないと……………」

竜司

「早速、明日の放課後から動こうぜ！屋上はまた会長に見つかると面倒だし、渋谷駅の通路にしようぜ？」

モルガナ

「なるほど、アジトを転々と変えるか……嫌いじゃないぜ？」

他のメンバーも賛成し、新たな怪盗団のアジトは渋谷駅の連絡通路に決まった。する  
と……………

「君達、ちよつといいかな？」

一行のところへ、首にカメラを下げた黒髪ボブカットの若い女性が現れた。

女性

「見たところ君ら、タダの押し掛けファンって雰囲気じゃないよね？」

天馬

「あの……………」

突然声をかけられ困惑する一行。

女性

「おっと、ごめん。実は斑目の門下生と知り合いの人間を探してんの。昔盗難にあつたっていう、『サユリ』って絵があるんだけどね……………」

蓮

(サユリ……………前に喜多川が見せた美人画か……………)

女性

「当時の門下生が、斑目の虐待の腹癒せに盗んで出てつたつて噂を掴んだワケ。何か聞いたこと無い？」

女性は蓮達に問いかけるが、全員「知らない」と返した。返事を聞いた女性は「そっか……」と、少しガツカリした様に肩を落とした。

女性

「被害者が居て、初めて事件になる。虐待がないとなれば、書きようも無いか……………ごめんね、時間取らせて。」

女性はそう言うと、ポケットから名刺を取り出し蓮達に配った。

蓮

「毎朝新聞、『大宅一子』？」

大宅

「そーアタシ、こう見えて記者やってんの。何かネタあったら、この番号に連絡してね。それじゃ！」

大宅は名刺を配り終わると、その場を後にした。



くルブラン 屋根裏部屋く

その日の夜、蓮と天馬はルブランの屋根裏部屋で寝支度をしていた。各々のベッドの枕元にはモルガナとグッドストライカーの姿もある。

モルガナ

「それにしても祐介め、通報を盾にして杏殿にヌードを迫るとは許せん！」

グッドストライカー

「んな事言つて、ホントは自分も見たいんじゃないのか？」

モルガナ

「そ、そんな訳無いだろ!？」

蓮

「竜司が斑目について少し調べてくれた。斑目の弟子の中にはかつて、盗作を断れず自殺したヤツが居たそうだ。」

天馬

「自殺？ホントなの？」

蓮

「あばら家で会った記者が斑目について情報集めをしてた事を考えると、あり得ない話では無いだろう。だが噂が本当なら、他に被害者が居る筈なんだが……」

♪

突然、蓮のスマホの着信音が鳴った。電話の相手は三島の様だ。蓮はスマホを手を取

り電話に出た。

蓮

「もしもし?」

三島

『よっ!夜遅くにごめんよ……………実は耳寄りな情報があるんだ。ちよつと良いかな?』

蓮

「耳寄りな情報?」

三島

『怪盗お願いチャンネルがきつかけで、改心したってヤツから連絡もらったんだ。そして、他にも改心させたいヤツが居るから会えないかって。相手さん曰く、その改心させたいヤツつてのが相当ヤバイヤツらしくて、ネット経由で名前出すと面倒な事になるかもつて。』

蓮

「なるほど……………じゃあ明日の放課後、依頼人と会わせてくれないか?場所は渋谷駅の改札付近。」

三島

『分かった、向こうにもそう伝えておくね。ちなみに依頼主は、《中野原》って男の人だ。じゃあ明日、よろしくね!』

三島は要件を伝え終わると、電話を切った。

蓮

「三島から連絡だ。前に改心させた中野原って男が、俺達に会いたいそうだ。」

天馬

「中野原……それって、斑目先生の元弟子の?」

蓮

「恐らくな。明日の放課後、渋谷駅で待ち合わせる予定だ。俺達に改心させたいヤツが居るらしい。」



渋谷駅 改札付近

翌日、5月18日 水曜日の放課後。

怪盗団一行は中野原に会うため渋谷駅に居た。そこには何故か神童の姿もある。

神童

「斑目先生の元弟子？」

天馬

「ええ、名前は中野原さん。区役所の窓口係で、前に彼がストーカーをしてくるって書き込みがサイトにあつて、俺達が改心させた人です。」

蓮

「その人と今日、渋谷駅で会うことになってるんだ。改心させたいヤツが居ると言っていたが……………」

「キミ……………ちよつと良いかな？」

突然、蓮の後ろから男の声がする。振り向くとそこには、何処か見慣れた顔をしたスーツ姿の優しそうな男がいた。



蓮

「貴方は？」

男

「中野原です。前に怪盗お願ひチャンネルに書き込まれた、中野原夏彦。サイトの管理者から、猫を連れた秀任の制服を探せって連絡を貰ったんだけど……」

蓮

「多分、俺達の事だ。」

志帆

「この人が、中野原さん？」

怪盗団一行は中野原を見て、「こんな優しそうな人がストーカーを？」と思った。

中野原

「聞いてると思うけど、怪盗団に改心させてほしい男が居る。斑目って画家だ。」

中野原から斑目の名が出た時、一行は驚き確信した。そして中野原は怪盗団に全てを話した。

彼は斑目の元弟子で、当時は本気で画家を目指し斑目のアトリエに住み込んでいた。彼の少し上にいた兄弟子はとても才能のある人間だったが、斑目に目を付けられ自身の作品を全て斑目のモノにされた。そして斑目が自分の作品で評価される事に耐えきれず自殺。中野原は恐怖し斑目の反対を押し切りアトリエを出たが、斑目によって方々から圧力を掛けられ画家の道を諦めた。心機一転して区役所で働くも、絵の執着により気持ちが悪み、遂にはストーカーに発展し今に至ると言う。

中野原

「……………実は今も一人だけ、斑目のところに残っている若者が居る。君達と同一年くらいの男の子だ。」

天馬

「まさか、その人って……………」

神童

「間違いない、祐介だ。」

中野原

「彼は絵の才能があるばかりか、身寄りがなくて斑目には恩義がある。まだ私が斑目のところに居た頃、『斑目と一緒に居て辛くないのかい?』って聞いたことがあるんだ。そ

したら彼、こう言ったよ……………『逃げられるものなら逃げ出したい』ってね。」

神童

「祐介……………」

杏

「喜多川君……………」

中野原

「逃げ出した私が言うのもなんだが、自殺した兄弟子の悲劇は繰り返したくない！改め  
てお願いだ、斑目を改心させてほしい。一人の男の命を……………前途ある若者の未来を救  
うために！どうか、よろしくお願い致します！」

中野原は全てを話し終えると、その場から去っていった。

神童

「……………怪盗団、俺からも頼む！祐介を助けてやってくれ！」

天馬

「神童さん……………」

蓮

「……………斑目の被害者と、祐介の親友からの直々の依頼だ。もちろん、引き受けよう。」  
竜司

「おうよ！斑目は弱い奴らを食いモンにする、正真正銘のクズだ！」

志帆

「自殺なんて、そんなこと絶対にさせない！」

杏

「それに、喜多川君の本音も聞けたしね！」

神童

「……………感謝する、怪盗団！」

神童は深く感謝の礼をし、怪盗団の次なるターゲットは斑目に決定した。



く連絡通路（怪盗団アジト）く

怪盗団一行は神童と別れ、新たなアジトに場所を移し作戦会議を始めた。

モルガナ

「今回のターゲットは日本画家、斑目だ。あのパレスの規模からして、難易度は鴨志田以上。ナメてたら痛い目を見るぜ？」

志帆

「ねえ、改心させるって具体的に何をするの？」

天馬

「パレスの核になっている欲望の象徴、つまりお宝を盗むんです。そうすればパレスと一緒に、歪んだ欲望も消えて改心させる事が出来ます。」

グッドストライカー

「だがそれには準備が必要だ。お宝までの潜入ルートを確保して、その上で心を頂く予告をして、お宝を実体化させて、最後に頂く。これが大まかな流れだ。」

竜司

「そういえば、斑目って俺らのこと知らねえじゃん？ 何で初っ端から警戒されてたわけ？」

蓮

「恐らく、誰も信じてないんだろう。知らない相手は全員敵扱い。或いは、悪い噂が広

まってるって知ってイライラしているか。」

モルガナ

「何にせよ、我輩達は良い子ちゃんて居ようぜ。無駄に警戒度を上げたら、お宝を盗りづらくなる。」

天馬

「喜多川さんにも気を付けた方がいいかも。多分、見られたら斑目に直ぐ伝わるよ。」

蓮

「今回の期限は個展が終わるまで。つまりタイムリミットは6月5日。2日までにはルート確保して、3日までには予告状を出す。これでいいか？」

蓮の考えたプランに、一行は同意した。

モルガナ

「じゃあ今日は一旦解散して、明日から作戦開始だ。ザ・ファントムの初仕事、絶対に成功させるぞ？」

Act. 17 / 怒りの祐介 来たれよ、俺のペルソナ!

《前編》

〱 四軒茶屋 路地〱

解散後の夕方、蓮と天馬は四軒茶屋に戻ってきた。

蓮

「今日は明日からに備えて、早く寝るとしよう。」

天馬

「そうだね……………ん?」

だがルブランに向かおうとした途端、天馬が何かを発見したのか、直ぐ近くにあるリサイクルショップ《夢ノ島》に向かった。

蓮

「天馬?」

蓮が天馬の様子を伺っていると、天馬は手に何かを持って戻ってきた。銀・黒・水色の3色で構成された、戦闘機の壊れたオモチャの様だ。

蓮

「それ、どうしたんだ?」

天馬

「よく分からないんだけど、何だか不思議な感じがして……コレに呼ばれたって言うか、何て言うか……」

ゴソゴソ……

すると、今度は天馬の鞆からグッドストライカーが出てきた。

グッドストライカー

「おい天馬! それ、ルパンコレクションだぞ!」



天馬

「えっ? ルパンコレクション!?」

グッドストライカー

「ああ! しかもソイツは、正真正銘のオリジナル。つまり俺の世界の代物だ!」

—————

〜ルブラン 屋根裏部屋〜

夜、天馬達はルブランの屋根裏部屋で壊れたルパンコレクションの解析を始めた。

天馬

「これがオリジナルのルパンコレクション……」

グッドストライカー

「コイツの名前は『世界を一緒に守ろう』。とある組織の男が大切な相棒を守る為に、特命で作らせた戦闘機を模したコレクションだ。向こうの世界じゃ見つけられなかったが、まさか此方の世界に居たなんてなあ……」

蓮

「しかし、何故オリジナルのルパンコレクションが俺達の世界に？」

モルガナ

「グツデイがパレスを通じて此方に来たように、コイツも何らかの理由で此方の世界に迷い込んだんだろう。しかし、随分とボロボロだな……………」

カタカタ……………

すると突然、例のルパンコレクションが僅かに動いた。

天馬

「あれ？今、動いた？」

グッドストライカー

「良かった、まだ生きてるみたいだ。」

蓮

「生きてる？」

グッドストライカー

「コイツもオイラと同じく意思を持つコレクションなんだ。コイツ今、オイラ達に助けを求めてる。」

天馬

「グツデイ、分かるの?」

グッドストライカー

「アタボウよ!とは言っても見た目がこの状態だ。相当弱ってるな……………」

すると、天馬が良い事を思い付いた。

天馬

「ねえグツデイ、俺達でこのコレクションを修理出来ないかな?確か俺のVSチエンジャーも君も、元々コレクションを改造して作られたんでしょ?」

モルガナ

「我輩達がコイツを新しいVSビークルに作り替えるって事か?」

カタカタ!カタカタ!

話を聞いていたのか、コレクションが又しても動いた。

グッドストライカー

「コイツも頼むって言ってるぜ。コレクションの改造、悪くねえかも知れねえな。アルセーヌに出来たんだから、お前らでも出来る筈だ。」

蓮

「俺も手伝おう。面白そうだ。」

天馬

「よし、じゃあルパンコレクション大改修作戦開始だ！」

こうして、ルパンコレクションの改修が始まった。アイテムが戦闘機を模している事からダイヤルファイターへの改造で決まり、天馬と蓮はグッドストライカーから教えてもらいながらコレクションを改修した。そして作業を始めて数時間後……

天馬

「終わったあ〜！」

コレクシヨンの改修作業が終わり、無事コレクシヨンは新たなダイヤルファイターに生まれ変わった。全体的な見た目はそのままに、後部にダイヤルを取り付けた見た目になっっている。

グッドストライカー

「お疲れさーん！つて、あれ？」

天馬・蓮・モルガナ

「Z……………Z……………Z……………」

気付けば時刻は深夜0時過ぎ。いつの間にか天馬は机に、蓮はベッドに突っ伏した状態で眠り、モルガナは蓮の側で丸くなり眠っていた。

グッドストライカー

「オイラも寝るとすつか……………」

グッドストライカーは天馬と蓮に優しく毛布をかけ、机の端に着地して眠りについた。そして夜が明け、5月19日 木曜日の朝。

コンツコンコンツ

天馬は何かに頭をつつかれる感覚がして眼を覚ました。

天馬

「ん…………グツデイ？」

寝ぼけながら目を開くと、目の前には昨日修理したダイヤルファイターが居た。

天馬

「うわあ!？」

天馬はビックリして飛び起き、同時に蓮・モルガナ・グッドストライカーも眼を覚ました。

グッドストライカー

「ん……………どうしたんだ?」

三人が寝ぼけながら目を開くと、例のダイヤルファイターは部屋中を元気に飛び回っていた。

天馬

「つて君か。ビックリした……………」

モルガナ

「アイツ、もう元気になったのか!?!」

蓮

「頑張つて修理したお陰だな。」

ジジジジ……………ガチャン!

すると、ダイヤルファイター後部のダイヤルが回転しアタックモードが発動。機首が格納され、両サイドから2本の角と4本の足が展開し、ダイヤルファイターはクワガタムシ型のメカに変形した。

天馬

「変形した!？」

そしてゆつくりと天馬の頭頂部に着陸した。

グッドストライカー

「コイツ、天馬のこと気に入っただけだぜ？」

蓮

「天馬、せっかくだし名前を付けてやったらどうだ？」

天馬

「名前か……………」

天馬はダイヤルファイターを頭から下ろし、両手に載せた。

天馬

「何だかクワガタムシみたい……………決めた、君の名前はスタッグ。《スタッグダイヤル



ファイターだ!」

キュイーン! キュイーン!

スタッグダイヤルフアイターは名前を気に入ったのか、その場で宙返りをした。

グッドストライカー

「どうやら気に入ったみたいだぜ?」

天馬

「今日からよろしくね、スタッグ!」

コクン



く連絡通路 (怪盗団アジト) く

その日の夕方、天馬達は学校を終えて怪盗団のメンバーと共に渋谷駅のアジトに集まった。天馬はそこで、スタッグダイアルファイターをメンバーに紹介した。

天馬

「と言う訳で、新しい仲間のスタッグダイアルファイターだよ。」

スタッグダイアルファイターは天馬の頭の上で御辞儀をし、「よろしくお願いします」と意思表示をした。

志帆

「カッコいい!」

杏

「ちよつと可愛いかも?」

竜司

「これ、ホントに天馬と蓮が修理したのか?」

蓮

「ああ。グツデイに教えてもらいながら、夜通しで修理したんだ。」

モルガナ

「にしても、まさかオリジナルのコレクションが見つかるとはな……」  
グッドストライカー

「コイツの強さは折り紙付きだ。今後の怪盗団の力になってくれること、間違い無しだぜ?」

クイツ! クイツ!

スタッグダイヤルフアイターも角を上へ上げ、やる気を見せている。

天馬

「頼りにしてるね。」

竜司

「うしっ! じゃあ紹介も済んだし、早いとこ斑目のとこ行こうぜ?」



## く斑目パレス 美術館 特別展示室く

一行はあばら家付近に移動し、イセカイナビで斑目のパレスに侵入。以前潜入したルートで、中野原や祐介の人物画が展示されている特別展示室までやって来た。だが以前より警戒度が上がったのか、通路のアチコチには赤外線センサーが張り巡らされ、警備員の格好をしたシャドウが巡回していた。

## モルガナ

「やっぱりな……悪い噂が広まってるぞと知って、斑目の警戒心が上がってやがる。慎重に行くぞ。」

一行は展示品の物陰を利用し、センサーと警備員シャドウの視界を掻い潜り、玄関ホールまでやって来た。天馬は近くにあった美術館のパンフレットを手に入れ、パンフレットに記載されてる館内マップでルートを確認する。

## 天馬

「この先に第一と第二展示室、そこを抜けると中庭がある。中庭の向こうには宝物殿が

あるみたいだけど、このパンフレットには宝物殿のマップは書いてないみたい。」

蓮

「取り敢えず行けるところまで行こう。先ず目指すは中庭だ。」

一行は第一展示室に侵入し、再びセンサーと警備員シャドウの視界を掻い潜り奥へ進む。だが……………

竜司

「ゲッ!? 何じゃこりゃ!?!」

途中、赤外線センサーが嚴重に張られた通路に到達。幾つものセンサーが縦と横に何度も交互に切り替わり、怪盗団の行く手を塞ぐ。センサーの網の向こうには警備室がある。

杏

「こんなの、通り抜けられないじゃない!」

蓮

「しかし、地図では此処以外に奥へ通じる道は無い。どうすれば……………」

頭を悩ます怪盗団だが、天馬はこの光景に覚えがあつた。

天馬

(このセンサーの動き、あの時と同じだ！)

それは以前フェイ達と共に200年後の未来世界へ行き、サッカー記念博物館から覇者の聖典を盗んだ時のこと。

天馬

「みんな、ここは俺に任せて！俺なら通り抜けられる！」

天馬は何の迷いも無く、センサーの網へと走り出す。

志帆

「ゼファー!？」

モルガナ

「おいバカ、無茶だ!」

シュツ!シュツ!

天馬はセンサーが切り替わるタイミングに合わせ、右に左に通路を駆け抜けセンサーを華麗に避けて行く。そしてアツと言う間に警備室の前に到着した。

天馬

「よし、上手く行った!」

竜司

「スッゲー!!何だ今の動き!?!」

竜司を始め仰天する怪盗団。すると少し遅れて、グッドストライカーとスタツグダイヤルファイターがセンサーの網を抜け天馬と合流した。

グッドストライカー

「サイコーだぜゼファー！」

天馬

「ありがとう。よし、後はセンサーを解除して……………」

天馬は警備室に入り、端末からセキュリティシステムにアクセスする。だが、解除にはパスワードが必要の様だ。

天馬

「これだ。でもパスワードが要るのか……………ん？」

すると、スタッグダイヤルファイターの端末の画面に貼り付いた。

ジジジジ……………ピッピッピッピッ

スタッグダイヤルファイターのダイヤルが回転し、それと連動するかの様に端末にパスワードが入力される。



ピー! 《SYSTEM DOWN》

するとセキュリティシステムが解除され、通路に張り巡らされていたセンサーが全て消えた。

杏

「やった! センサーが消えたよ!」

外に居た怪盗団は喜び、警備室から出た天馬は驚いた。

天馬

「凄い! どうやったの?」

グッドストライカー

「言い忘れてたが、ダイヤルファイターには錠を開ける能力があるんだ。本来は扉の鍵とか金庫の暗証番号を解くための能力なんだが、まさかコンピューターのパスワードまで解いちゃうとは思わなかったぜ……」

カチン！カチン！

スタツグダイヤルファイターも誇らしげに角を鳴らす。

—————

ゝ美術館 中央庭園ゝ

一行はそのまま第二展示室を抜け、中央庭園にたどり着いた。庭園の奥には宝物殿の入り口だろうか、孔雀の羽の柄をした派手な大扉がある。だが庭園内には高電圧レーザーが無数に張り巡らされ、奥の宝物殿には近づけそうにない。

志帆

「これ、もしかしてレーザー光線!?!」

モルガナ

「だな。こんだけ嚴重って事は、守りたいモノがこの先にあるって証拠だ。」

すると、杏が近くに立て札を見つけた。

杏

「ナニナニ? 『警備員各位に通達。展示期間中、宝物殿への扉は殿内警備室のみで開閉が管理される。外からの解錠は不可能となるため、各員とも注意されたし。』」

天馬

「外から開けられないんじゃ打つ手無いよ。どうしよう……」

行き詰まる怪盗団。だがモルガナとグッドストライカーは、宝物殿の大扉をジツと見ていた。

グッドストライカー

「なあモナ、あの大扉の柄に見覚え無いか?」

モルガナ

「ああ、間違いない。前に斑目のあばら家で見たのと同じ柄だ。だとしたら……」

蓮

「どうしたモナ?」

モルガナ

「お前ら、一旦引き上げるぞ！アレが現実の何処の扉の認知か、検討がついた。別のやり方でこじ開けられるかも知れん！」



〽渋谷駅 連絡通路（怪盗団アジト）〽

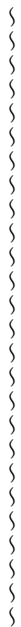
一行はパレスを離れ、一旦アジトに戻った。

天馬

「モルガナ、別のやり方でこじ開けられるってどういう事？」

モルガナ

「前に祐介の部屋に邪魔した時、我輩とグツデイを部屋の外へ偵察に出しただろ？実はあの時、あの宝物殿の扉と同じ柄の襖を見つけてたんだ。」



くあばら家 二階廊下く

それは先日、祐介が杏の絵を描いている間に、モルガナとグッドストライカーが偵察に出っていた時のこと。

グッドストライカー

「しっかし、カビ臭い家だぜ……………」

モルガナ

「文句言うなグツデイ。杏殿が祐介を足止めしてる隙に、この屋敷の中を調べるぞ。」

すると突き当たりを左に行つて直ぐ、二人は孔雀の羽の柄が描かれた派手な襖を発見した。襖には何故か、大きな錠前が掛けられている。

グッドストライカー

「これ……………襖か? メツチャ派手だな。」

モルガナ

「それにアレは、鍵か？襖にゴツイ鍵……何が入ってるんだ？」

~~~~~

モルガナ

「斑目にとってあの美術館はこの屋敷。そして宝物殿の扉はその鍵の掛かった襖だとすれば、宝物殿に入る方法は一つ。斑目本人の目の前でその襖を開けて、『扉は開けられない』ってという認知を変えるのさ。そうすれば宝物殿の扉も、ひとりでに開く筈だ。」

竜司

「なんかピンと来ねえなあ……」

蓮

「しかし、今の俺達に出来ることはソレしかない。試してみる価値は大いにある。」

志帆

「でも、現実の襖にも鍵が掛かってるんだよね？」

グッドストライカー

「そこはオイラ達の出番だ。ダイヤルファイターの能力でなら、どんな鍵でも開けられる。だが最初から斑目の前でやるのは無理がある。オイラとスタッグが鍵を開けるま

での間、目をそらしといてくれる人が居たらなあ……………」

と、グッドストライカーは静かに杏の方に目を向ける。

竜司

「あー、なるほど……………つか屋敷に入るのもどうやるかなー?無理に入れば今度こそ通報だし……………」

何かを察したのか、ワザとらしく困ったセリフを言いながら杏を見る竜司。蓮達もどうやら同じ考えなのか、静かに杏に目を向ける。

杏

「ちよつと、ナニ?」

竜司

「やっぱ……………ヌードしかなくね?」

杏

「ヌード……………はあ!?!」

案の定仰天する杏。

竜司

「いや、別にマジで脱げとは言わねえよ。今んとこ、俺達の中で屋敷に怪しまれず入れるのは杏だけ。でもって、それが一番の入る口実だ。」

モルガナ

「確かにな。ここは、杏殿に一芝居うってもらいたい。」

杏

「急にそんなこと……でも、その鍵の掛かってる場所、私知らないよ?」

グッドストライカー

「大丈夫だ、オイラとスタッグも一緒に行く。」

杏

「でもそれって、実質私一人じゃん……最悪、バレた時どうするの?」

天馬

「パレスに逃げ込む……とかじゃダメ?」

志帆

「それ、解決になってるのかな？」

竜司

「大丈夫だった。ちよくつと祐介を騙して部屋に連れて行かせて、チャチャつと開けるだけじゃん？」

杏

「簡単に言ってる……分かった、分かったわよ！私が囮になるわ！その代わり、絶対に何とかしてよね!!グツデイ!!」

グツドストライカー

「おうよ！このグツドストライカーに二言はねえ！」

竜司

「頼んだぜ、グツデイ、スタッグ！んじゃ、早速明日決行だ！」

杏

「えっ？明日!? いやでも、心の準備がまだって言うか、喜多川君が良いって言うかな？」

蓮

「喜多川なら多分、一つ返事でOKするんじゃないか？」

杏

「うう、確かに……もう！これでパレスの扉が開かなかったら私、ファントムカイザー

「あの美術館ぶっ壊すから！」
蓮

「杏達が屋敷に居る間、残りの俺達はパレスの中庭に待機しておこう。扉が開いている間に宝物殿に入って、セキュリティを切るんだ。」

天馬

「OK、分かった。」

こうして、自棄になりながらも杏の囮作戦が決まった。



くあばら家 祐介自室く

翌日、5月20日 金曜日の放課後。

作戦通り、杏は再び祐介の部屋を訪れた。祐介はウキウキしながら、絵を描く準備をしている。

祐介

「ホントに来てくれるなんて……連絡くれた時は嘘だと思ったよ。」

杏

「ゴメンね、急で……」

祐介

「とんでもない。ただ昨日伝えた通り、今日は先生がもう2〜30分もすると戻られる。その……気を使わせてしまうかもしれないね……」

杏

（だから今日、来たんだっつーの。）

かれこれ話している内に、祐介は絵を描く準備を整えた。

祐介

「これで良し。高卷さん、取り敢えずここで、その……用意、いいかな？」

流石の祐介も、杏を意識しているのか緊張している様だ。

杏

「良いけど……恥ずかしいから、アッチ向いてて？」

祐介

「わ、分かった……」

祐介は杏に背を向け、杏はブレザーを脱ぐ。すると、ブレザーの背中からグッドストライカーとスタツグダイヤルファイターが出てきた。

杏

（頼んだわよ。）

グッドストライカー

（行つてくるぜ！）

グッドストライカーとスタツグダイヤルファイターは静かに祐介の部屋を抜け出し、例の鍵の掛かった襖に向かった。そして二人が部屋を出たのを確認すると、杏は祐介に甘く問い掛けた。

杏

「ねえ、場所変えられない？もつと雰囲気良いところの方がいいな。鍵の掛かる部屋とか？」

祐介

「いや、此処で十分な気が……先生の部屋なら鍵はあるが、俺は部屋の鍵を持ってないし……」

効いているのか、祐介は明らかに動揺している。

祐介

（いや待てよ、モデルの気分を盛り上げた方が、良い絵になるかも知れない。大胆な構図や、ポーズにも協力してもらえるかも！）

杏

「ほら、せつかく脱ぐんだし……ね？」

祐介

「そ、そうだな……探せば鍵付きの部屋が有るかも……いや、だがしかし……」

杏

「もう、せつかくその気になってきたのにいゝ。ねえ、この部屋とかダメ〜?」

杏はそう言うと、いつの間にか部屋を出てブレザーを廊下に脱ぎ捨てた。祐介は杏が居ないことに気が付き、ブレザーを拾い急いで杏を追いかけた。

祐介

「ま、待ってくれ! 勝手なことをされると先生に……!」



く斑目パレス 美術館 中央庭園く

その頃、蓮・天馬・竜司・志帆・モルガナは、美術館の中央庭園で待機していた。

竜司

「パンサーの奴、『演技で誘惑してみせる』とか言ってたけど、大丈夫か?」

天馬

「もうすぐ、斑目が帰ってくる時間の筈だけど……………」

志帆

「開く気配しないね。」

竜司

「つかグツデイとスタッグが鍵を開けたとしても、斑目に見せるってムズクね? 見せたとしても普通、直ぐ閉めんだろう?」

蓮

「大丈夫だ、パンサーとグツデイ達を信じよう。」

モルガナ

「そうだな、アイツらなら必ずやる。頼んだぞ……………」



くあばら家 廊下く

一方、あばら家に居るグッドストライカーとスタッグダイヤルフアイターは、例の襖に到着した。

グッドストライカー

「アレだ。頼むぞスタツグ。」

スタツグダイヤルファイターは了解し、襖の錠前に貼り付く。

キュピーン！ガチャ！

すると錠前は意図も簡単に外れ、襖が開いた。

グッドストライカー

「よっしや開いた！後は斑目が来れば……………」

「ちよつと、いい加減に……………」

するとそこへ、杏と祐介がやって来た。グッドストライカーとスタツグダイヤルファイターは例の部屋に入り、襖の影に隠れる。

杏

(モルガナとグツデイが言ったのは、確かこの先……)

杏は突き当たりを曲がり襖が開いている事を確認すると、祐介に問い掛けた。

杏

「ねえ喜多川君、この部屋は？ 此処ならきつと、誰にも邪魔されないよ？」

祐介

「えつと、そっちは古い絵の保管庫だ。ただ、中には先生しか……えつ？」

祐介は開かない筈の保管庫が開いている事に驚いた。

祐介

「開いている？ 何で？」

ガラガラガラ

斑目

「帰ったぞ。」

すると、今度は斑目が外から帰ってきた。

祐介

「せ、先生!？」

斑目は屋敷に上がり、祐介と杏を見つけた。

斑目

「祐介、そんな所で何をしてるのかね？」

祐介

「あ、いや、これには事情が………」

杏

「喜多川君、こっち！」

ガシッ!

祐介

「んなっ!?!」

杏は祐介の手を引き、二人は保管庫の中へ入った。

斑目

「待て! その中は……!」

Act. 17 / 怒りの祐介 来たれよ、俺のペルソナ!

《後編》

↳ 斑目パレス 美術館 中央庭園↳

竜司

「全然開く気配無え……………」

パレスで待機する蓮達だが、待ちくたびれたのか竜司はグツタリしていた。

モルガナ

「そろそろ時間の筈だが……………ん?」

ゴゴゴゴゴ……………ドーン!

突然、中庭に張り巡らせたレーザーが一斉に消え、轟音と共に宝物殿の扉が開いた。

志帆

「やった！開いたよ！」

天馬

「パンサー達がやってくれたんだ！」

蓮

「行くぞ！」

一行は宝物殿のラウンジに入り、警備員室に侵入し操作端末を発見。画面にはパスワードの入力画面が映っていた。

天馬

「あつた、これだ。」

天馬はジョーカーダイヤルファイターを取り出し、端末の画面に張り付ける。

ジジジジ……………ピッピッピッピッ

ジョーカーダイヤルファイターのダイヤルが回転し、端末にパスワードが入力される。

ピー！ 《セキュリティシステム：解錠》

端末にセキュリティ解錠と表示された事を確認すると、今度はトリガーマシンスカルを取り出し、端末の画面に張り付けキーボードを操作した。

ピピッ 《パスワード変更完了》

天馬

「これでOK。」

蓮

「何をしたんだ？」

天馬

「パレスに行く前にグツデイが教えてくれたんだけど、鍵を開けるダイヤルファイター

に対して、トリガーマシンには鍵を掛ける能力があるんだ。だからセキュリティシステムを解錠した後に、トリガーマシンでパスワードを初期化して入れ直したんだ。」

竜司

「なるほど。パスワードが変わっちゃえば、動かせねえもんな。」

天馬

「その通り。これで宝物殿は開きっぱなしになる筈だから、何時でも出入り出来るよ。」

蓮

「よし、一旦外に出てパンサー達と合流だ。」

一行は警備員室を離れ、急いで宝物殿から中央庭園に出る。すると……………

「いやあああああああ!!」

突然、一行の真上に歪みが出現し、叫び声と共に杏と祐介が落ちてきた。

ドシーン!

祐介は杏を抱き抱え、物凄い音と共に蓮達の目の前に着地。

カコーン！

祐介

「うがつ!？」

だが着地直後に落ちてきたグッドストライカーが頭に激突。グッドストライカーは床に転がり目を回し、祐介は何とか踏ん張る。そして遅れてスタツグダイヤルファイターが合流した。

グッドストライカー

「はらほれひく………」

天馬

「パンサー！それに喜多川さん!?! ってグッデイ大丈夫!?!」

目を回すグッドストライカーを拾い上げる天馬。

杏

「死ぬかと思った………って、いつまでくっついてるの!」

ドンツ!

祐介

「うごっ!」

杏は思わず祐介を突き飛ばす。

杏

「やば、変なところ入っちゃった!?! 大丈夫!?!」

祐介

「だ、大丈夫だ………」

グッドストライカー

「う、うくん………」

祐介は起き上がり、蓮達を見る。同時にグッドストライカーも目を覚ました。

祐介

「だ、誰だお前らは!？」

杏

「落ち着いて喜多川君！私よ！」

杏は仮面をずらし、祐介に素顔を見せる。

祐介

「高卷さん!?!じゃ、じゃあ……………」

蓮達も仮面をずらし、素顔を見せた。

祐介

「やはり君達だったのか。何なんだ、此処は？」

杏

「斑目の心の中よ。」

祐介

「先生の? ……高卷さん、気は確かかい?」

竜司

「嘘じゃねえ、これがヤツの本音なんだよ。欲望まみれの、カネの亡者ってこつた。」

杏

「喜多川君だつて思ったんでしょ? 斑目のこと、何かおかしいつて。」

祐介

「それは……………」

杏

「此処は斑目が見ているもう一つの現実……………斑目の本心なの……………」

祐介

「こんなおぞましい世界が、先生の……………お前ら、いったい何なんだ?」

蓮

「悪人を改心させる集団、とでも言っておこう。」

天馬

「……………パンサー、向こうで何があったの？何で喜多川さんと一緒にパレスに？」

杏

「実は……………」

杏は屋敷での出来事を話した。

例の襖の奥、古い絵の保管庫の中には、以前祐介が見せた美人画『サユリ』が何故か大量に保管されていた。斑目は最初、借金返済のため特別なルートで売っている、自身が描いた模写だと説明。過去にサユリが弟子に盗まれ、スランプに陥り、弟子の着想を譲って貰った事は事実だと斑目は言うが、杏は「元の絵が盗まれたのに模写が描けるのか」と疑問を抱いた。斑目は精巧な写真を元に描いたと説明するが、グッドストライカーが保管庫の奥から盗まれた筈の本物の『サユリ』を発見。斑目は模写だけ買った贋作だと言うが、祐介が嘘だと見抜き真実を迫る。すると斑目は警備会社に通報。杏達は保管庫から脱出し、祐介が杏を追いかけ、そして祐介を巻き込み今に至る。

志帆

「盗まれた筈の絵が、盗まれてなかった……………」

祐介

「確かに君達の言うことが本当なら、俺の知る先生など何処にも……だが、それでも10年置いてもらった恩義だけは消えない……うう……」

突然、祐介は膝を落とし踞った。

杏

「大丈夫!?!」

祐介

「すまない、頭理解に気持ちがついて行かない……」

モルガナ

「お前ら、急いで引き上げるぞ! スツゴい警戒されてる。」

一行は祐介を連れて、美術館の外を目指す。その道中、祐介は幾つもの弟子の人物像を目にする。

祐介

「何故、彼らの絵がこんなに……」

モルガナ

「絵じゃねえ……ソイツらが弟子本人さ。斑目にとって、弟子はモノ扱いって事だ。お前のもあるぜ？」

祐介

「……………」

一行は展示室を抜け、『無限の泉』がある玄関ホールに到達。だが目前で警備員シャドウに行く手を塞がれてしまった。

グッドストライカー

「くそっ、出口は目の前だったのに！」

「アーツハツハツハツハツハ！」

すると突然、辺りに聞き覚えのある老人の笑い声が引き渡る。怪盗団が振り替えると、そこには上から下まで金尽くめの殿様に扮した斑目のシャドウが居た。

シヤドウ斑目

「ようこそ、斑目画伯の美術館へ。」

志帆

「あれって、もしかして!？」

天馬

「間違いない、このパレスの主……斑目のシヤドウだ!」

竜司

「ふざけた格好しやがって……王様の次は殿様かよ!」

祐介

「貴方は……先生なのですか? その姿は……」

シヤドウ斑目

「驚いたか? あんなみすぼらしい格好は演出だ。有名になってもあばら家暮らし? 別宅があるのだよ。女名義だがな。」

祐介

「……貴方が先生だと言うのなら、教えて下さい。盗まれた筈のサユリが何故保管庫に? 本物があるのに、何故あんな沢山の模写を?」

シヤドウ斑目

「まだ気付かんのか？弟子に盗まれたというのは、私が流したデマだ。全て計算し尽くされた演出なのだよ。」

祐介

「演出だと？」

蓮

「……………そういう事か。『絵が盗まれた』というデマを流し、秘密裏に模写を量産。そしてしばらくして『盗まれた絵が見つかった』という偽の情報と共に、模写を『見つかった本物の絵』として、なおかつ『公に出来ない曰く付きの特別品』として売り出す。客は価値の無い模写を本物と思い込み、大金をはたいてでも手に入れようとするって事だ。」

シヤドウ斑目

「ハハハッ、その通りだ若造！絵の価値など所詮は思い込み……………ならばこれも正当な経済行為だ！」

杏

「どうりで、こんな金ぴかの趣味悪い美術館が出来る訳ね！って言うか、アンタ芸術家なんだでしょ!?盗作とか恥ずかしく無いわけ!?!」

シヤドウ斑目

「芸術など道具に過ぎぬわ! カネと名声のためのな! 祐介、これだけは言っておいてやる。この世界でやっていきたいのなら、私に齒向かわぬことだ。私に異を挟まれて出世出来ると思うか?」

祐介

「こんな……こんなヤツの世話になっていたとは……」

シヤドウ斑目

「私が唯の善意で引き取ったとど思っておったのか? 違うな……有能な弟子を集め着想を吸い上げれば、才能ある目障りな新芽も摘み取れる。着想を頂くなら大人よりも、言い返せん子供の将来を奪った方が楽。家畜から毛皮や肉を剥ぎ取って殺すのと同じだ。」

祐介

「……許せん。」

祐介は拳を握り、静かに立ち上がる。彼の心の中では、斑目に対する怒りの炎が静かに燃えていた。

祐介

「許すものか、お前が誰だろうと……………」

斑目

「チツ、長年飼ってやったと言うのに結局は仇で返すか……………賊を始末しろ！」

斑目は警備員シャドウを増員し、警備員シャドウは警防を持ち怪盗団を取り囲む。怪盗団は全員銃を構え臨戦態勢に入る。が……………

祐介

「フッフ、面白い……………」

祐介は何故か落ち着き、静かに笑っていた。

天馬

「喜多川さん？」

祐介

「事実は小説より奇なり……………そんな筈は無いと、俺は長い間自分の瞳を曇らせてきた。人の真贋すら見抜けぬ節穴とは……………まさに俺の眼だったか！」

『ようやっと目が覚めたかい?』

ドクン!

突然、激しい頭痛が祐介を襲い、祐介の頭の中に誰かが語りかけて来た。

祐介

「っ!?!」

『真実から眼を背けるキサマこそが……』

何より無様なまがい物……

たった今、決別するのだな……!』

祐介

「アアアアア!?ぐっ……………!」

『いざや契約、ここに結ばん……………』

我は汝、汝は我……………

人世の美醜の誠のいろは……………

今度はキサマが教えてやるがいい!』

シャキン!

祐介は顔を上げ、シャドウ斑目を睨む。すると、祐介の顔に白い狐の面が出現した。

祐介

「よかろう……………来たれよ、《ゴエモン》!」

祐介は流血と共に狐の面を引き剥がす。引き剥がした次の瞬間、祐介の身体が青白い炎に包まれた。

祐介

「絶景かな、絶景かな………」

そして炎が消えると、祐介は白いブーツと和モダンなゆったりとした白黒スーツ、腰には白い狐の尻尾。そして彼の背後には、リーゼント頭に巨大なキセルを構えた歌舞伎役者の様なペルソナが居た。

天馬

「アレは、ペルソナ!？」

祐介

「まがい物とて、こうも並べば壯観至極。悪の花は栄えども、醜悪、俗悪は滅びる定め。貴様を親と慕った子供達、将来を預けた弟子達、いったい何人踏みにじって来た? 幾つの夢を金で売った!?! 俺は貴様を、絶対に許さない!!」

ビューー！カチカチ！

祐介を中心に辺りに吹雪が発生し、警備員シャドウは一斉に凍り付いた。

志帆

「凄い……………」

祐介

「勉強させて貰ったよ、斑目。真贋を見抜くには、時に冷徹さが要ることを。心置きなく貴様を見定めさせてもらう！俺のゴエモンと共に！」

斑目

「フン、意気がりおって……………諸ども、出合え出合え出合え!!」

斑目の前に、先程より大量の警備員シャドウが出現。怪盗団は祐介の両サイドに並び立つ。

蓮

「お手並み拝見と行こう。」

祐介

「ああ、任せろ！」

祐介はゴエモンを仮面に戻し、日本刀を構え走り出す。怪盗団も近接武器を構え走り出し、一行は警備員シャドウ達と交戦する。

天馬

「スタッグ、来てくれ！」

天馬はスタッグダイアルファイターを呼び、スタッグダイアルファイターはアタックモードからノーマルモードに変形し、自らVSチェンジャーに装填。

『スタッグ！』

天馬はダイアルを回し、4桁の数字を入力。

『9・0・5・3！（キュピーン！）マスカレイズ！』

そしてグリップを握り、銃身を右へ90度回し、トリガーを引いた。

『怪盗ブースト!』

トリガーを引いた瞬間、スタッグダイヤルファイターは光の球となって放たれ天馬の左腕と合体。天馬は左腕に、スタッグダイヤルファイターのアタックモードと同型の巨大な盾を装備した。

天馬

「名付け、《スタッグシールド》！」

天馬はスタッグシールドで警備員シャドウの攻撃を受け止め押し返す。

ガコン!

すると、同時にスタッグシールドが左腕から分離し飛行。警備員シャドウを尻払っ

た。

警備員シヤドウ

「斑目様の御膳である! 頭か高いぞ!」

警備員シヤドウは一塊に融合し、苦渋の鍛冶師のシヤドウ《イツポンダタラ》に変身。更に周囲にたわけた山伏のシヤドウ《コツパテング》を無数に出現させた。

天馬

「行くぞ、フアントムマグナム!」

天馬はスタッグシールドを元のダイヤルファイターに戻し、左手にフアントムマグナムを装備。

『フアントム・ファイバー!』

天馬はフアントムマグナムをVSチェンジャーと合体させ、銃口をイツポンダタラに

向け、そしてファントムマグナムのダイヤルを3回まわす。

『アン・ドウ・トロワ！』

ファントムマグナムの周囲に無数のエネルギー弾が出現し、一つの巨大なエネルギー弾として銃口に集約される。

『イタダキ・ド・ド・ドストライク！』

そしてトリガーを引き、エネルギー弾を発射。エネルギー弾はイツポنداタラ弾の目の前で炸裂し、無数のエネルギー弾が雨の様にイツポنداタラとコツパテングを襲う。

ガシャーン！ダーン！

更にエネルギー弾は玄関ホールの装飾や、無限の泉を破壊。イツポنداタラとコツパテングは、蜂の巣となり消滅した。

シャドウ斑目

「わ、私の大事な作品が!？」

竜司

「オイオイオイ、何だよ今の威力!？」

グッドストライカー

「だから言っただろ? 扱いには注意しろって。」

シャドウ斑目

「チツ………良いだろう、今日のところは見逃してやる。だが祐介、貴様は輝かしい未来をドブに捨てたんだ。貴様の絵描きへの道、あらゆる手を使って刈り取ってくれる! 私に歯向かった事を、一生かけて悔いるがいい!」

フアントムマグナムの威力に恐れ入ったのか、シャドウ斑目は逃げるように玄関ホールから去っていった。



↓ 渋谷セントラル街 ファミレス ↓

一行は一旦斑目のパレスを離れ、渋谷セントラル街のファミレスに移動した。テーブルの上には蓮の鞆から顔を出すモルガナと、天馬の鞆から顔を出すグッドストライカーが居る。

杏

「喜多川君、ホントはずっと前から気付いてたんでしょ？」

祐介

「俺は、そんなに朴念仁じゃないさ……数年前から妙な連中が出入りする様になったし、盗作も日常茶飯事だった。けど、そんなの認めたくないじゃないか。世話になった人が、そんな……」

天馬

「何で、斑目の側を離れようとしなかったんですか？」

祐介

「サユリを描いた人だし、それに特別な恩義もある。拓人から聞いてると思うが、俺には父親が居ない。母親も俺が3つの時に事故で亡くなった……その時、俺は先生に拾われたんだ。母も生前、先生の世話になっていたらしい。」

蓮

「らしい?」

祐介

「まだ幼かった頃の事だから、母親の事もあまり覚えてないんだ。だから先生を親と
思つて尽くしてきたつもりだったが、先生は変わってしまった……自分の原点でもあ
るサユリまでも、あんな風に……!」

竜司

「色々、あつたんだな……」

祐介

「お前達が盗作だのと言つてきた時、内心じや気付いていたんだ。だからこそ拒んでし
まった……俺は逃げてたんだ……だが今日、自分が誤魔化して来たことと向き合う
事が出来た。そのきっかけをくれた事に、感謝する。」

天馬

「喜多川さんは真面目ですね。」

竜司

「だな。でもさ、そんなんだから行き詰まっちゃうんだよ。俺なんかもつとテキトーだ
ぜ?」

蓮

「斑目は変わってしまった……だが、俺達ならヤツの心を変えられる。ヤツに罪を償わせる事も出来る。聞いたこと無いか？心を盗む怪盗の噂を。」

蓮達は自分たち怪盗団の事と、以前自分たちが鴨志田を改心させた事を話した。

祐介

「なるほど……それで、その体育教師は心が入れ替わったと……心を盗む怪盗、実在したとはな。」

天馬

「信じてくれますか？」

祐介

「あんな世界を見たあとだ。信じるしか無い。それでお前達は先生……いや、斑目を改心させるつもりなのか？」

蓮

「そうだが？」

祐介

「だったら、俺も怪盗団に加えてくれないだろうか? もっと早く現実を見ていれば、こうはならなかった……画家としての未来を奪われた多くの門下生のためにも、俺が終わらせなければならぬ。それが曲がりなりにも親だった男への、せめてもの礼儀だ。」

志帆

「礼儀か……」

モルガナ

「だが、失敗すると廃人になるかもだぜ? 防ぐ方法も分かっちゃいるが、絶対は無い。それでもやるか?」

祐介

「斑目は美術界を牛耳っている。俺如きが声を上げたって、揉み消されるだけだ。やるしかない。」

蓮

「分かった……歓迎するよ、祐介。」

天馬

「よろしくお願ひします、喜多川さん!」

祐介

「祐介で構わん。あと、堅苦しい事は無しで頼む。」

竜司

「足、引つ張るなよ?」

全会一致で、祐介は怪盗団の仲間になった。

杏

「そう言えば、現実の斑目は? 私と祐介、そうとうヤバかったけど……」

祐介

「それなら、此処に来る前に連絡を取った。俺は高巻さんを追いかけていた事になってる。それと君らの説明通り、シャドウとの事は知らない様だ。女子高生ひとり捕まえられないのかと、警備会社に愚痴っていたよ。怒りは収まらない様で、全員告訴するとも言っていた。」

告訴する、それを聞いた怪盗団は仰天した。

天馬

「告訴って、いくら何でも必死過ぎない?」

グッドストライカー

「あの大量の模写以外にも、何か隠してるのかもな。」

祐介

「だが、動くとしても個展を終えてからだろう。期間中に醜聞が立つのは向こうが損だ。」

モルガナ

「となると、やはり作戦期間は個展の期間中ってことだな。」

祐介

「ところで……………」

祐介はジーツと、モルガナとグッドストライカーに目を向ける。

祐介

「これは何だ？」

天馬

「これ？猫がモルガナで、こっちはグッドストライカー。俺達の仲間だよ。」

祐介

「喋る黒猫に、喋るメカか……ふむ……」

祐介の呟きに、モルガナとグッドストライカーは「文句あつか？」と返す。すると、祐介はモルガナに手を伸ばす。

モルガナ

「おいこら！我輩に気安く触んじや……」

ピンポン

と思つたら、祐介は丁度モルガナの目の前にあつた呼び出しボタンを押した。

祐介

「すまない、黒餡蜜を注文しようと思つてな。」

グッドストライカー

「黒猫から連想したな、コイツ……」

杏

「やっぱり、ちよつと変………」

Act. 18 / 再潜入、斑目大画伯美術館

〽洗星高校 屋上〽

祐介が怪盗団の仲間になった翌日、5月21日 土曜日の昼休み。

祐介は洗星高校の屋上に神童を呼び、話をした。

神童

「そうか、怪盗団の仲間になったんだな。」

祐介

「色々心配をかけてしまった。すまなかつたな、拓人。」

神童

「気にするな。だが祐介、本気なのか？」

祐介

「勿論だ。今まで斑目に苦しめられてきた兄弟子達のためにも、斑目の歪んだ欲望は俺が終わらせる。それが同じ斑目の弟子だった俺の使命であり、曲がりなりにも親だった

男へのせめてもの礼儀だ。」

神童

「そうか……俺に出来る事があれば、何でも言ってくれ。何時でも力になろう。」

祐介

「ありがとう、拓人。」

神童は祐介の覚悟を感じ、二人は固く握手をした。



↳ 渋谷駅 連絡通路（怪盗団アジト）↳

放課後、怪盗団一行が渋谷駅のアジトに集まった。

モルガナ

「全員集まったな？この際だから、一旦全員で基本的な事についておさらいしておこう。祐介や志帆、スタッグに詳しく説明するのも兼ねてな。」

祐介

「ああ、是非頼む。」

志帆

「私もお願い。」

キュイツキュイ

スタツグダイヤルファイターは角を上下に動かし、「お願いします」とアピールした。

モルガナ

「先ず我輩らが怪盗する場所は、パレスって異世界だ。パレスは誰かの認知が形になった世界……その人間が感じてる現実の具現化だ。」

祐介

「そのパレスと言うのは、俺達にもあるのか?」

グッドストライカー

「いや、誰でもって訳じゃねえ。主に歪んだ強い欲望を持ったヤツが持つてる。つつてもほとんどは、この前の鴨志田や今回の斑目みたいな悪投だろうさ。」

モルガナ

「だが逆に、ペルソナ使いにはパレスは無い。いや、生じる訳が無いんだ。」

天馬

「何で？」

モルガナ

「ペルソナ能力は自分の心の本音、つまりシャドウと向き合って制御する力だ。心を制御できてるんだから歪まない、つまりパレスは出来ない。自覚的な個人差は、ただの個性ってもんだ。」

蓮

「なるほど……………」

竜司

「で、そのパレスに行くのに使うのが、スマホのイセカイナビって寸法よ。名前と場所を入れるだけでパレスに入れちゃうんだ。」

祐介

「場所？」

杏

「斑目で言うなら、《あばら家》が《美術館》みたいな感じ。」

祐介

「では、まだ見たことがないパレスに行く場合はどうするんだ？」

竜司

「そこが面倒だよ、若干クイズでさ。今後ちよい厄介になるかも……………」

祐介

「まあ、大体の事は把握できた。今後分からない事があれば、素直に経験者を頼るとしよう。」

祐介達への説明兼おさらいは終わり、一行は本題に移った。

グッドストライカー

「にしても斑目の野郎、まさか告訴なんて言い出すなんてな……………」

祐介

「あんな風に怒りを露にした斑目は初めてだ。本気で訴えるに違いない。だが6月5日の個展最終日までは、向こうも身動きが取れない筈だ。単純に忙しい筈だし、期間中に裁判を起こして自分の肩書きにケチを付ける愚は犯すまい。」

蓮

「なら、それまでに斑目の心を盗めば良い。ヤツが告訴を起こすより先に、俺達がヤツの本性を暴く。」

竜司

「おうよ！ やってやらあ！」



↳ 斑目パレス 美術館 駐車場↳

一行はアジトを離れ、あばら家の前でイセカイナジを起動。怪盗服姿になって斑目のパレスに侵入した。

モルガナ

「そうだ、新入りのコードネーム決めてなかったな。」

杏

「……は《キツネ》でしょ？」

竜司

「違いねえ、インパクトあるしな。」

祐介

「俺の事か？」

祐介は自分の事を言われてると思い振り向いた。

蓮

「こっちでは全員、コードネームで呼び合っているんだ。俺がジョーカーで、ゼファー、スカル、パンサー、レパード、モナ、グッデイだ。」

天馬

「キツネのお面に、キツネの尻尾か……………」

竜司

「よし、《アブラアゲ》だ！」

モルガナ

「プフッ！」

竜司の考えたコードネームがウケたのか、思わず笑ってしまうモルガナ。

祐介

「まあ良かろう。」

志帆

「えっ？ ホントに良いの!？」

そしてそのコードネームを受け入れた祐介に思わず仰天する志帆。

天馬

「キツネ、狐……………《ギーツ》でどうかな？」

グッドストライカー

「ソイツは止めとけ！ 色々不味い気がする……………」

蓮

「ならシンプルに横文字にして、《フォックス》でどうだ？」

杏

「フォックス……………良いんじゃない？」

祐介

「俺は別に構わんぞ?」

モルガナ

「決まりだな。よろしく頼むぞ、フォックス。」

祐介のコードネームは《フォックス》に決定した。すると……

キイイイイン!

突然祐介の手の中に光る玉が現れ、光る玉は両サイドに祐介の仮面と同じ白狐が描かれた、ネイビーのSUV型のアイテムに変化した。

竜司

「また出やがった。」

祐介

「これは何だ?」

天馬

「それはVSビークル。不思議な力を秘めたアイテムだよ。」

天馬は祐介にV S ビークルについて説明した。

祐介

「なるほど、異世界のお宝か。では俺も皆に習って、預かってもらおうとしよう。」

天馬

「ありがとう。」

祐介は自身から出現したV S ビークルを天馬に預けた。

天馬

「よろしくね、《トリガーマシンフォックス》。」

竜司

「んじゃ、行くとしようぜっ。」

—————

く斑目パレス 美術館 中央庭園く

一行は美術館に侵入し、監視の目を掻い潜り中央庭園にやって来た。庭園に張り巡らされていたレーザーは綺麗に消え、宝物殿の大扉も開いたままだった。

竜司

「よゝし、扉は開いたまままだな？」

一行は庭園を通り、大扉から宝物殿に侵入。すると、エントランスにパンフレットを見つけた。

天馬

「またパンフレットだ。でも前とは違うみたい。」

グッドストライカー

「てことは、コイツでお宝の場所が分かったりしねえかな？」

モルガナ

「あるとすれば恐らく、宝物殿の最深部だ。だとすると………この《メインホール》が怪

しいな。」

祐介

「メインホールへ向かうには、ラウンジとギャラクシーを抜けるしか無い。」

蓮

「奥へ行くほど警備も厳しくなる。慎重に行こう。」

一行はパンフレットを頼りに、宝物殿の奥へと向かった。ダイヤルファイターの力でセキユリティを解き、不思議な絵のカラクリを破り、最深部のメインホールを目指す。すると……

竜司

「何だよココ!？」

道中、一行は壁や床、階段等が酷く歪んだ謎の黄金空間にたどり着いた。

モルガナ

「酷く歪んでるな、建物の形を成してないぞ……それに、パンフレットには此処の事は

書いてなかった。」

祐介

「嫌と言うほど奴の歪みを味わったつもりだったが、こんな奇っ怪な光景を生み出すとは……………」

杏

「キンキラ過ぎて目が痛いんですけど……………って言うか、どうやって進むのコレ？」

天馬

「新しいVSビークルを試してみよう。」

天馬は先程祐介から預かったトリガーマシンフォックスを手に取り、VSチェンジャーにセットする。

『フォックス！』

さらにグリップを握り。

『パトライズ！』

銃身を左に90度回しトリガーを引いた。

『ミラクルブースト!』

トリガーを引いた瞬間、トリガーマシンフォックスは光の球となつて放たれ天馬の右腕と合体。天馬は右手に、ネイビー・白・赤の三色で構成された巨大な筆を装備した。

天馬

「これは……筆?」

蓮

「《白狐ノ筆》と言つたところか?」

竜司

「そんなバカでかい筆なんか何に使うんだよ?字でも書けつてか?」

天馬

「試してみる。」

天馬は試しに壁に黒い線を書いてみた。すると……

カコーン！

書いた線が板となって壁から剥がれ落ちた。

天馬

「えっ!?!」

志帆

「線が板に!?!」

祐介

「なるほど、その筆で書いた線は実体化するという事か。」

天馬

「へえ………あ、良いこと思い付いた!」

そう言うと天馬は床に線を引きながらゆっくりと歩く。すると気付けば、天馬は空中に描いた線の上を歩いていた。

天馬

「凄い凄い！何処までも行けるよ！」

蓮

「なるほど、道が無ければ作ってしまえと言うことか。」

一行は天馬を先頭に、線の道を引きながら空間の奥へと進む。

—————

く最深部 メインホールく

謎の空間を進み、一行はメインホールに到着。ホールの中には鴨志田のパレスにもあつた実体化前のお宝と、それを四方から囲む様に張り巡らされた赤外線センサー。そしてシャドウ斑目と警備員シャドウ達の姿があつた。

モルガナ

「あそこか………」

一行は物陰に隠れ、様子を見ることにした。

志帆

「もしかして、あれが例のお宝？」

モルガナ

「今はまだ実体化する前の状態だ。斑目にお宝を盗むって予告して、お宝を『奪われる』と認知させりゃ、お宝が実体化する。」

天馬

「斑目のお宝って、何なんだろう？」

祐介

「うむ、斑目の現実をここまで歪ませた根元だ。相当の代物に違いない。」

竜司

「よし、じゃあ後は斑目に予告してお宝を奪えば、ミッション終了だな！」

モルガナ

「いやまだだ。場所は分かったが、お宝を奪う方法を探らなきゃならん。あのセキユリ

ティと、警備員をどう攻略するかが問題だ。」

蓮

「このフロア内で方法を探るしか無い。慎重に調べよう。」

一行はメインホールを慎重に調べる。すると、制御室に到着した。制御室にはセキユリティシステムの他に、照明等の電気系統のスイッチがある。

蓮

「……………どうやら、ここからメインホールの全システムをコントロールしてる様だな。」

蓮が制御室の機械を調べる。すると……………

天馬

「……………ねえみんな、俺思い付いたんだけど、いいかな？」

竜司

「思い付いたって、何を？」

天馬

「お宝を手に入れる作戦だよ。」

「メインホール　セーフルーム」

一行は近くにあつたセーフルームに移り、天馬は自身が思い付いた作戦を話した。

天馬

「先ず、チームを4つの役に分けるんだ。囮役、伝達役、解除役、盗み役。盗み役はお宝の近くの物陰に隠れてスタンバイ。準備が出来たら伝達役が囮役に合図して、囮役は警備員を制御室から遠ざける。その隙に解除役が制御室に入つて照明とセキュリティを切る。両方が消えた事を確認したら盗み役がお宝を奪つて、後は灯りが点く前に一斉にメインホールから逃げる。こんな感じでどう？」

蓮

「悪くないな。では盗み役は俺とモナで行こう。」

祐介

「なら、伝達役は俺が引き受けよう。」

天馬

「解除役は俺がやる。ダイヤルファイターでセキュリティを解くよ。」

志帆

「私もゼファールと一緒に行く。照明は任せて。」

竜司

「じゃあ俺とパンサーが囃役だな。」

杏

「OK、私もそれで良いよ。多分それ以外に良い作戦無さそうだし。」

祐介

「……………これで、ヤツに引導が渡せるんだな？」

モルガナ

「ああ。だが実行すれば、斑目を元に戻す事は出来ない。斑目はまるで人が変わった様になる。それでも良いんだな？」

祐介

「ヤツは芸術だけでなく、多くの才能を食い物にした。清算無しには、未来など考えられない。それに、冷静に考えて自ら決めた事だ。心配しなくて良い。」

杏

「そこまで覚悟決めてるなら、言うこと無いね。」

モルガナ

「これでお宝までのルートと、奪う手段が決まった。アジトに戻って最後の準備に取り掛かるぞ。」



↳ 渋谷駅 連絡通路（怪盗団アジト）↳

一行は斑目のパレスを離れ、アジトに戻ってきた。

祐介

「確か次は、予告状を出すんだったな？」

グッドストライカー

「ただカッコつけたいだけじゃないぜ？コイツも認知の変化を起こすのに必要な手さ。さつきモルガナも話してたが、相手に自分の欲望が狙われてるお宝だって自覚させて、

実体化させる必要がある。その為に必要なのが予告状だ。」

祐介

「なるほど。しかし、本気にするだろうか？これまででも誹謗中傷の手紙はよく来ていたし、何しろ有名人だからな。」

竜司

「なーに、書かれた罪状がマジかどうかは野郎が一番分かんדר？」

志帆

「そう言えば、前の予告状は竜司君が書いたんだっけ？」

モルガナ

「ああ、ぶっちゃけ微妙だったけどな……………」

竜司

「なら、祐介が書くのはどうだ？俺が考えたマークをベースにして、もつとカッコいい予告状を作ってくれよ。」

祐介

「予告状のデザインか……………面白いかもな。怪盗団にとつても、本物の証明になる。」

竜司

「決まりだな！」

天馬

「そうだ祐介、もう一つ良いかな？」

天馬はそう言うと、手元にあるVSビークル全てとファントムマグナムを祐介に見せた。

天馬

「予告状のマークが完成したら、これとグツディとスタッグにも同じマークを入れてほしいんだ。俺達の仲間の証として。」

祐介

「了解した。しかし、これだけの数全てとなると数日は掛かるな。」

蓮

「なら祐介の作業が終わり次第、予告状を出そう。それまで各自で準備を進めてくれ。」

蓮の意見に一行は賛成し、天馬はVSビークルとファントムマグナムを祐介に預けその日は解散となった。



く斑目展 展示会場く

それから数日が過ぎ、6月3日金曜日。

個展関係者

「すみません、少々宜しいでしょうか？」

斑目

「うむ、何だね？」

個展を見守っていた斑目に、個展関係者が一枚の赤い手紙の様なモノを見せた。

斑目

「赤紙？」

カードには「TAKE YOUR HEART」の文字にシルクハットと仮面のマー

ク。そして裏には予告状が書いてあった。

斑目

『才能が枯渇した虚師の大罪人、斑目一流斎殿。権威を笠に門下生から着想を盗み、盗作すら厭わぬ芸術家。我々は全ての罪を、お前の口から告白させる事にした。その歪んだ欲望を頂戴する。心の怪盗団ザ・フアントムより。』だと!? 誰の仕業だ!？」

予告状を読み終えた途端、斑目は発狂し予告状をクシャクシャに握り潰し個展関係者を怒鳴った。

個展関係者

「わ、分かりません! 同じ様なモノがアチコチに貼られていて……………」

斑目

「防犯カメラは!？」

個展関係者

「犯人らしき人影は何も。ただ猫が一匹映っていただけで……………」

斑目

「とつとと剥がしてこい!!」

個展関係者

「は、ハイッ!あの、その……個展への影響と言いますか、悪戯とは思いますがマスコ
ミ等には……」

斑目

「盗作が事実だと言うのか!？」

個展関係者

「いえ、滅相もございません!」

斑目の豹変に、個展関係者は混乱する。その様子を、怪盗団が少し離れた場所から見ていた。

ジジジジジ……シユン!

すると突然辺りが暗くなり、斑目はシャドウ斑目へと姿を変えた。

シャドウ斑目

「あのガキどもの悪戯か？まあ、どうと言う事は無い。どうせ奴等も、この個展が終わるまでだ………」

シユン！

シヤドウ斑目がそう言うのと、辺りは元の光景に戻り、斑目も元の姿に戻った。斑目の変化を確認した怪盗団は、静かに個展会場を後にした。

祐介

「コレで良いんだな？」

杏

「うん、バツチリ！文章もカッコよかったよ！」

グッドストライカー

「この怪盗団のマークも、中々イカシテるぜ！」

グッドストライカーの左翼には、予告状に描かれたモノと同じ怪盗団のマークが刻まれている。更にジョーカーダイアルファイターとスタッグダイアルファイターの左翼、

トリガーマシンスカルの両サイド、トリガーマシンフォックスのフロント、エックススト
レインモナとエックスストレインパンサーの両サイド、ファントムマグナムの銃口付近に
も同じマークが刻まれていた。

モルガナ

「これで今頃、パレスにはお宝が出現してる筈だ。」

竜司

「なあ、ネット見たか？あの予告状もう話題になってるぜ？」

竜司はスマホを開きネットニュースを見せた。見出しには、「怪盗団の予告状！ター
ゲットは斑目一流齋!」と大きく出ていた。

竜司

「待ってろよ、アツと驚かしてやるぜ！」

モルガナ

「分かってるな？決行は一度きりだ。」

蓮

「ああ、必ず成功させよう！」